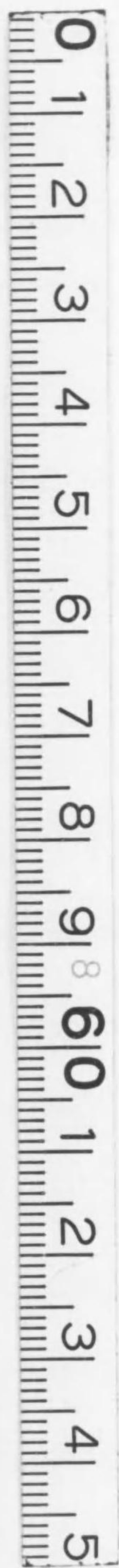


396-197



1200700236763



始



ストリンデルヒ作

結婚生活

永島直昭譯

新潮社出版

序

ストリンドベルヒに就いては言ひたいことは澤山ある。いくら讚美しても讚美し過ぎるといふことはないであらう。けれども此處には甚だ少き讚美の言葉を發表するだけに留めなければならぬ。

自分にとつてはストリンドベルヒは恩人である。いろ／＼な事柄を腹の底まで浸み込むやうに教へてくれた恩師である。自分はストリンドベルヒによつて洗禮を受けた者であることを忘れることは出来ない。自分は多くの忘れ難き人々から洗禮を受けた。しかし自分がストリンドベルヒから受けたものは、その最初のものであり、且つ自分にとつては最も尊きものであつた。若しも自分が最も人間らしい人間になることを欲し、最も生甲斐ある生活を望み、その爲に多少でも努力してゐるとすれば、それは主としてストリンドベルヒのお蔭である。自分はストリンドベルヒによつて、苦しみの偉大なことを知つた。あらゆる境遇の高價なることを知つた。忍従と勤勉との尊いことを知つた。人は自己に與へられた生活を甘受しなければならぬ、そしてそれを生かさなければならぬ、時としてはその爲に苦しまなければならぬ、といふことを知つた。如何なる場合と事情とに支配されてゐても、その場合なりに、その事情なりに、自己を生かすことは出来、又それは必要にして善きことであるといふことを知つた。運命を生むことは出来ても、運命の命ずるところのものに反抗し干渉することは



I 種
W



1200700236763

出来ない、又してはならないといふことを知った。

ストリンドベルヒは、自己が歩むべき道を最も正確にそして最も必然的に歩んで行つた最初の人のやうに自分には思はれる。六十年の生涯中一瞬と雖も無益に過したことはなかつた。彼の作品、殊にその自叙傳からこのことは確かに感じられるのである。眼に觸れ手に觸れるすべての物を彼は見、そして擱んだ。あらゆるものの本體を窮めた。どんなに本當らしく見えることでもそれが本當だといふことを完全に知るまでは、信じておこなふことが出来なかつた。ストリンドベルヒが無神論者であつたことも、又その晩年に於いて立派な基督教信者であつたことも、餘りに自然なことであると自分は思ふ。

藝術家としてのストリンドベルヒは、また驚くべき力の所有者である。天文學、礦物學、化學、植物學、動物學、生物學、心理學、社會學、經濟學、歴史、言語學、哲學、倫理學、美學等に廣汎な趣味を持つてゐた彼は、詩人としても、小説家としても、劇作家としても、いづれも世界に於いて第一流の作家たるを失はないのである。而も彼は、繪畫に於いても非凡の技倆を有し、展覽會を二回も開催してスウェーデン人を驚かしたといふことである。又音楽に於いても立派な鑑識眼を具へてゐたさうである。ストリンドベルヒのスウェーデン版の全集は、約五十卷乃至六十卷を包含し、若し誰かがそれを讀み上げるのに一日に八時間宛讀むとすれば、残らず讀了するには優に二ヶ年以上を要するであらうと言はれてゐる。彼の作品を分類すれば大略次の如くである。脚本五十六篇、小説及び短篇十九

卷、自叙傳物語十一卷、讀文集三卷、歴史上及科學上の作品十六卷、評論及び批評その他の集十七篇。

自分がこゝに譯出したものは、千八百八十四年と千八百八十六年とに出版された「結婚生活」二卷である。その出版に際してスウェーデンでは刑事訴訟が起された。ストリンドベルヒに對してではなく、その出版者に對してであつた。そして所謂「不道德」のためではなく、その題材の取扱方が既成宗教の神聖を冒瀆するものとしてであつた。全國は二つに分裂して新舊兩時代何れが優勝者たるかの争闘となつたが、遂に判事は無罪を宣告したのであつた。その爲ストリンドベルヒは未だ會てスウェーデンの文學者に向つて示されたことのない熱情を以つて稱讚されたといふことである。

兎も角もこの作品のうちには、ストリンドベルヒのいゝ性格が露骨に示されてゐるのを見ることが出来る、眞實を愛する正直な心が漲り溢れてゐるのを見ることが出来る、と自分は思ふ。(事實の紹介は主としてピエルクマン氏「明日の聲」に依る。)

茅ヶ崎にて

永 島 直 昭

結婚生活目次

ア	ス	ラ	三				
戀	愛	と	パン	六一			
強	要	さ	るゝ	者	八五		
賠	償	一三三			
不	和	一三九			
不	自	然	な	る	淘	汰	一六七
改	造	の	試	み	一七七		
自	然	の	妨	害	一八三		
人	形	の	家	二〇〇			
不	死	鳥	二三八			

ロ	ミ	オ	と	ジ	ユ	リ	ヤ	二四八
多	産	二五五
秋	二七四
強	制	結	婚	三〇〇
コ	リ	ン	ナ	三三四
未	婚	と	既	婚	三七八
決	闘	三九二
彼	の	召	使	四二〇
稼	人	四三一

* * *

結婚生活

ストリンドベルヒ作
永島直昭譯

ア
ス
ラ

丁度彼が九十三に成つた時、彼の母は死んだ。彼は、眞實の友を失つたやうな氣がした。何故なら、彼女が病床にあつた十二箇月の間に、彼は、云はゞ親しく母を知り、そして彼等の間には、普通の親達と子供達との間には滅多に無いやうな一種の間柄が生じてゐたから。彼は、伶俐な子供で、且つ早熟であつた。彼は、學校の本の外に非常に多くの本を讀んだ、それといふのも理科大學の植物學教授である父親が、非常に立派な書庫を持つてゐたからであつた。それに反して彼の母は、十分な教育を受けた婦人ではなかつた。彼女はたゞ、夫の家に於ける主婦であり、子供達の乳母であるに過ぎなかつた。澤山の子供を生んだことと無数の徹夜(死ぬまでの十六年間といふもの、彼女は、たゞの一晚も眠り續けに寝たことはなかつた。)とは、彼女の精力を涸らして了つた。そして三十九の歳病床に就いて、最早家事を見ることを得しなくなつて了つてからは、彼女は二番目の息子と親しくなつた。總領息子は或る陸軍の學校にはひつてゐて、一週間の終り毎にしか家にゐなかつたので。

今や家庭の母としての彼女の役はおしまひになり、そして彼女にはたゞ哀れな病身しか残

つてゐなかつたので、親達と子供達との間の溝である、古風な厳格な躰けの親子関係は取去られてしまつた。十三歳の息子は、學校へ行つてゐない時か自習をしてゐない時には殆んどいつでも母の寢床の傍にゐて、本を讀んで聞かせたのであつた。彼女は澤山の質問を發しなければならなかつた、そして彼は澤山の説明をしなければならなかつた。その結果、年齢と位置とによつて打建てられてゐた凡ゆる差別的なしるしが、一つ一つと消えて行つた、若し何れが優者であるかを敢て斷するならば、息子が優者なのであつた。けれども母も、人生といふ學校に於いて課業を學んでゐたので、矢張りいろ／＼のことを教へねばならなかつた。母で、彼等は交互に先生となつたり生徒となつたりした。彼等は、凡ゆる問題を論議した。母なる分別と女性の謙讓とを以つて彼女は、人生の祕密について彼が知らねばならないすべてを息子に語りきかした。彼は、まだ無邪氣ではあつたが、色々の事が、學校で子供達の間で論議されるのを聞いてゐた、それは彼を驚かし、嫌惡を感じさせてゐた。母は、説明し得る限りのすべての事を彼に説明し、青年にとつての最大の危険に就いて彼に警告し、そして、たとひ好奇心からであつても、惡評のある家には、決して行かないといふ約束を彼から強請した、何故ならば、彼女の指摘した通り、さういふ場合に於いては、如何なる男も、自分を信用することは出來ないのであつたから。さうして彼女は、節制生活をし、誘惑に襲はれ

た時にはいつでも、神に心を向けて祈禱するようにと彼に懇願した。

彼の父は、全然科學に奉仕してゐた。科學とは、その妻にとつては密封された書籍であつた。母が既に死に瀕してゐた時、父は、それによつて彼の名を科學界に於いて不滅なものにしようと望んでゐたところの、一發見をなした。彼は、ストックホルムの市外の、ごみ屑の堆積の中で、普通は眞直な毛のはへてゐる蓐に、曲つた毛のはへた一種の新しいアカザを發見した。彼は、ペルリン理科大学と文通してゐた、そしてペルリン理科大学では、當然「フローラ・ジュルマーニカ」の中に、その新しい種類を含ませることを適當だと考へてゐたのであつた。彼は、大學がその植物をケノポデューム・ウェンネルストローエミアニウムと呼んで、自分の名を不滅なものと決定してくれるかうれないかと、毎日待つてゐた。彼の妻の臨終の床に侍してゐる時にも、彼は、上の空であつた、殆んど不深切であつた、何故なら彼は、丁度肯定の答を受けたところであつた。そして彼は、氣むづかしくなつてゐたが、それは、彼も彼の妻もその異常な通知を楽しむことが出來なかつたからであつた。彼女は、たゞ天國のことと彼女の子供達のことばかりを考へてゐた。彼は、今彼女に、曲つた毛の着いた蓐に就いて語ることは、愚の骨頂であるといふことを曉らざるを得なかつた。が併しそれは單に蓐についてゐる毛が、眞直であるとか曲つてゐるとかいふことではなく、科學上の一大發見

を意味するものである。そればかりではなく、彼の未來と子供達の未來とに關する問題である。何故なら子供達の父が著名になるといふことは、彼等のためにはパンを意味するのである。かう彼は自己を辯護した。

次の夕方彼の妻が死んだ時、彼ははげしく泣いた。彼は永年の間涙を流したことはなかつたのであるが。彼は、自分が彼女に爲した最も些細な悪事まで想ひ出して、後悔によつて苦しめられた、要するに彼は模範的な夫であつたから。前日の彼の無關心、上の空は、恥と後悔とを以つて彼を一杯にした、そして穩かな時には彼は、自分が人類を益しつゝあると想像してゐた自分の科學の、凡ゆる氣むづかしさと我儘とを認めた。しかしこれらの情熱は束の間であつた、若しも君が後ろにパネのついてゐるドアを開けたならば、それは再びすぐに閉まつて了ふであらうやうに。次の朝、新聞へ掲載する彼女の死亡通知を書いて了つてから彼は、ベルリン理科大學へ感謝の手紙を書いた。それから彼は、再び仕事を續行した。

晝食に歸つて來た時彼は、自分の成功を語るべき、妻を熱望した、何故なら彼女は、いつも彼の最も眞實な友で、決して嫉んだり美んだりしない唯一の人間だつたから。今彼は、その賛成をば、當然のこととして數へることが出來たところの、この忠實な友を失つたのである。かつて一度も彼女は、彼に反對したことがなかつた。といふのは、彼は自分の研究に就

いてその實際的結果より他には彼女に話したことは無かつたので、そこには論議の餘地がなかつたから。暫し彼の心には息子と友達に成らうといふ考へが起つたが、彼等は殆んど理解し合つてゐないのだつた、彼等の關係は、士官と一兵卒のそれであつた。彼が優越の地位階級にゐるといふことは、彼をして胸襟を開かしめなかつた、而も彼は、息子を疑ひの眼を以つて見てゐた。息子はより、鋭い智力を持ち、彼の知らない新しい本を數多く讀んでゐたので、時とすると教授なる父が、生徒なる息子に對してその無智を明示したことさへあつたから。さういふ場合には、父は、『それらの新しい馬鹿げたこと』に少しばかり輕蔑的なことを言つて議論をやめるとか、又は自習をするやうに生徒に横柄に命令するかしないではゐられなかつた。一二度息子は自衛のために、教科書のどれかを持ち出したことがあつたが、教授は非常に腹を立て、その新しい教科書が地獄に墜ちてしまへと願つた。

で、結局父親は、植物の標本聚集に身を任せ、息子は、彼自身の道を進んで行つた。

彼等は、天文臺の左側の靜かな通りに住んでゐた。小さな二階家で、煉瓦づくりで、その上大きな庭園に圍まれてゐた。その庭園は、かつて園藝協會の所有だつたもので、遺産として教授の手にはひつたのであつた。しかし彼は、圖解植物學を研究してゐたのであつたし、且つ、彼の青年時代にはそれ程知られてゐなかつた科學である、植物の生理學形態學といふ、

より多くの興味ある主題には少しも興味を持つてゐなかつたので、彼は生ける自然に對しては、實際他人なのであつた。彼は、庭園をその多くの美觀と共に荒廢するに任せてゐた。そして遂には、それを、彼と彼の子供達とは或る特權を與へられるといふ條件で、一人の園丁に貸してしまつた。息子は、いつもその庭園を公園として使用し、そしてその美を科學的に試み理解しようなどといふ骨折りはしらずに、あるがまゝにその美を楽しんでゐた。

この子供の性格は、釣合のわるい補整振子と比較され得るものであつた。それは母親の軟質な金屬をとり入れすぎてゐて、父親の硬質の金屬の方は不十分であつた。摩擦と不規則な振動とはその自然の結果であつた。今感傷性に満ちてゐたかと思ふと、今度は堅くなり、懷疑的になるといふやうな有様だつた。母の死は彼を、言葉もそれを現はしがたいほど感動させた。彼は、深く母を悼んだ、そして彼女は、すべての善良で偉大で且つ美しいもの化身として、彼の記憶のうちに常住してゐた。

彼は、母の死に次いで來た夏を、默想と小説耽讀とに過した。悲哀と甚しい怠惰とが、彼のすべての神経系統を震はし、彼の空想を鋭くした。彼の涙は、果樹の上に降りそゞいで早芽を發せしめる、暖かい四月の雨のやうであつた。けれどもあゝ！ 餘りに屢々、それらの花は、その果實の固まる暇のないうちに、五月のある霜の夜に萎み滅びてしまふべく運命づ

けられるものであつた。

彼は、十五歳であつた、つまり文明人が、一人前の男になり、そして新しく來るものに生命を與ふべく成熟してゐる、が家庭を持つことが出來ない爲めにさうすることが出來ないでゐるといふ年齢に達してゐた。従つて彼は、青年が、自然の法則を遂行する境遇になれるに先立つて、すさまじい自然の力との争闘のうちに耐へ忍ぶべく強要せられる、かの「十年の殉教」を始めるところであつた。

それは、聖靈降臨祭頃の或る暖かい午後のことである。林檎の木は、自然がその大まかな手で、その上一面に注ぎかけた眞白な美觀の中に光つてゐた。微風が小冠コウ冠を振り落し、花粉を以つて空中を充たしてゐた、その一部は目的を果して新しい生命を創造し、一部は地に埋もれて滅び去るのであつた。無盡藏なる自然の倉庫の中に在つて、一握りあるかなしの花粉が何であらう！ 實るべくされた花は、そのデリケートな花瓣を投げ棄てる。と、それは地上に散亂して萎んでしまふ。彼等は、再び汁液となつてのぼるべく、雨に打たれて塵となり、そして花と再現する。多分、今度こそは果實になるだらう。が、それはさておき、今や争闘が始まつた。仁慈なる運命によつて日當りのいゝ場所に置かれたものは繁り榮え、胚珠はふく

らみ、そして霜に妨げられない限り、時來れば實を結ぶのである。けれども北に向いてゐるもの、他のものの蔭で生長し、決して太陽を仰ぐことを得ない哀れなものは、萎びて落ちる運命を持つてゐる。園丁はそれをかき集めて、豚小屋へ運んでしまふのだ。

今その林檎の木を見給へ。その枝は、半ば熟した小さな圓い薔薇色の頬をした金色の林檎で、たわよになつてゐる。新しい争闘が始まる。すべてが生存すれば枝はその重みに堪へ得ないで、木は枯れでしまふであらう。強風が枝をゆする。掴まつてゐるには堅固な莖が必要である。虚弱なるものは禍なるかな！ 彼等は破滅の宣告を受けるのである。

新しい危険！ 林檎の蟲が現れる。それも矢張り、生命を保持し、その種族の爲めに義務を果さねばならないのだ。この蟲は、果實から花梗へと蝕壞して行き、そして林檎は地に落ちる。けれども氣むづかしやの甲蟲は、己れの子孫として最も強壯な最も健全なものを選ぶ。さもないとあまりに多くの強者の生存を許され、従つて競争が激甚になりすぎるから。

黄昏の頃、薄暮の凝集する頃、動物の世界では熱烈な本能がよび醒まされる。夜啼鳥は、その友を呼ぶために、新しく掘つた花床の上に蹲まる。熱烈なる雄のうちの何れが賞を得るであらう？ 彼等をしてその問題を決定せしめよ！

滑かな暖い猫は、晩のミルクに爽快な氣持になつて、爐邊の隠家からこつそりと抜け出し、戀人に寄添ふ前にその上衣を露に濡らせて見窄らしい姿になつて了ふことを恐れて、水仙と百合花との間を注意深く歩いて行く。猫は、若いラワンデル(植物の名)を冷笑しながら、聲を立てて呼ぶ。呼聲に應じて、隣りの垣根に、貂のやうに背の廣い、眞黒な牡猫が現れた。が、園丁の三毛猫も牛小屋の方から近寄つて來る、そこで争闘が始まる。一握りぐらゐづつの豊かな黒土が四方八方に飛び散る、そして新しく培養された大根と蓬連草とが、靜かな眠りを醒され、未來の夢から荒々しく呼び起される。二匹のうちの強い方が戰場を占領して残り、牝は満足さうに勝利者の狂氣の抱擁を待つてゐる。征服されたる者は、新しい争闘をしようとして飛んで行く、恐らく今度は、勝利は彼のうへに微笑するだらう。

自然は微笑し、満足してゐる。何故なら自然は、彼女の法則に反する罪以外の何等の罪をも認めないから。彼女は強者の味方である。何故なら彼女の望むところのものは、(取るに足らぬ個の「永遠の我」を殺さなくてはならないとはいへ)、強き子供等である。そして其處には何等の謹慎も何等の躊躇も何等の重大な恐怖も無い。何故なら自然は、彼女のすべての子供等のために豊富な食物を持つてゐるから——人類を除いては。

夕食後に、父が寢室の窓に坐つて、煙草をふかし夕刊新聞を讀んでゐる間、彼は庭へ散歩

に出た。彼は、快い香氣の中に浸りながら小道をぶら／＼歩いてゐた。それらの香氣は満開の時に當つてのみ植物が發散するもので、且つそれは、凝集した形の中にその種族の代表者となるべき運命を持つてゐるそのものの全力を含むところの、最も立派な最も完全なエーテル油の滴取物である。彼は、人の耳に挽歌の如く鳴り渡つてゐる、シナの樹の上に群れてゐる昆蟲の婚姻の歌に耳を傾けた。彼は、夜啼鳥のゴロ／＼いふ呼聲を聞き、生をではなく死が求められてでもゐるやうにひびく、猫の熱烈な鳴聲を聞いた。ダング・ビートル(一種の甲蟲)の唸り聲を、大きな蛾の羽音を、蝙蝠の細々とした啼聲を聞いた。

彼は、水仙類の花床の前に立止り、暫し白い星のやうに輝く花を集めて、顛顛に血が湧き返るのを覚えるまでにその香ひを吸ひ込んだ。彼は、決してこの花を仔細に調べたことはなかつた。けれども彼の學校では最近の學期に、オヴ・ドの「水仙の物語」を読ませた。彼は、その傳説により、深い意味を發見しなかつた。或る青年が、井戸の中に見える自分の像に戀した時に、その報いなき戀のために己自身にその熱情を向けて、その焔によつて焼き盡されたといふこの物語は、一體如何なる意味であつたのだらう？ 彼は、佇んで、無情な咳のため、にその血が最極端の、最微弱な血管の中にはひつて行く時の肺病患者の顔にあらはれるやうな美しい赤い線をもつた、病人の頬のやうに蒼白い、盃型の花弁を、調べながら、一人の學

校友達を、今では海軍士官候補生になつてゐる若い貴族のことを、考へた、彼はちやうど、この花のやうな風車であつた、と思つた。

彼が暫くの間花の香ひを吸ひ込んでゐるうちに、丁字花の強烈な香氣は失くなつて、不愉快な石鹼質の香ひだけが残つた、その香ひは彼を氣持悪くした。

彼は、道が右へ曲つてゐるところまでぶら／＼歩いて行つたが、頭上にアーチのやうな形をなして枝を繁らせてゐる榆の木が兩側に植はつてゐる並木道の中で、その道は遂に失はれてゐた。半ば暗黒の中に、通景の遙かに下の方に、彼は、繩でぶらさげられてゆるやかに前後に揺れてゐる大きな緑色の動くものを見ることが出来た。一人の女の子が、丸太の上に乗つて、頭の上に高く腕をあげて、彼女の側に結ばれてゐる繩にしがみついて、膝を曲げて體を前方へのめらせながら、優しく體を振り動かしてゐた。彼は、その女の子が園丁の娘なのを認めた。彼女はこの前の復活祭に堅信禮を受けて、長いスカートを着け初めたばかりだつた。が、今宵はもとの着物を着てゐたので、僅かに足頸までしか隠してゐなかつた。

青年が現れると彼女は、自分のスカートの短いことを思ひ出して當惑した。しかし彼女はやはりぶらんこから降りなかつた。彼は、進んで行つて、彼女を見た。

「あつちへ行つて頂戴、テオドルさん。」と少女は、ぶらんこに強い推進を與へつゝ、言つた。

「どうして？」と青年は答へた。彼は、波打つ顛顛の上に少女のひらく／＼するスカートのそよぎを感じた。

「でも、行つて貰ひたいんですもの。」と少女は言つた。

「僕も乗つていゝでせう。僕がゆすつてあげよう、ギョッシイ。」テオドルは、丸太の上に飛び上りながら言ひ返した。

今や彼は、彼女と向き合つて、ぶらんこに乗つてゐた。そして、二人が空中に上つた時には彼は、自分の足に彼女のスカートの裾がひらく／＼するのを感じ、二人が下にさがつた時には、彼は、彼女の上に身を屈めて、恐れと喜びとに輝いてゐる彼女の眼に見入つた。彼女の薄い木綿の上衣は、きちんと合つてゐて、その若々しい姿態のすべての線を見せてゐた。彼女の微笑を浮べた唇が、半ば開かれて、健全な二列の白い歯を表はしてゐたが、それは恰も、彼を噛むか接吻するかしようとしてゐるかのやうに見えた。

次第に高くぶらんこは上つて、終ひには、楓の木の頂邊の枝にぶつかつた。少女は叫んで、前のめりになつて、彼の腕の中へはひつた、彼は腰掛の上に押しつけられた。彼の腕のなかにびつたりと抱かれてゐる柔かな暖かい體の戦慄が、彼の全神経系の中へ、電氣のやうな感動を送つた。彼の眼の前には黒い幕が降りて來た、で、若しも彼女の左肩が彼の右腕にぎゆ

つと押しつけられてゐなかつたら、彼は、彼女を落してしまつたであらう。

ぶらんこの速度はゆるくなつた。彼女は、立ちあがつて、彼に面と向つて腰掛に坐つた。かうして彼等は、お互ひに眞面に顔を見合せ得ないで、眼を伏せてゐた。

ぶらんこの止つた時、彼女は腰掛から下り下りして、まるで人に呼ばれでもしたやうに駈け出して行つてしまつた。テオドルは獨り残された。彼は、自分の血管の中で血液が波打つてゐるのを感じた。彼の力は倍加されたやうな氣がした。けれども彼は、出來事の眞相を掴むことは出來なかつた。彼は突然と、起電盤の陽電氣が放電によつて陽電氣と結びついた、その起電盤のやうに自分を考へた。それは、少女とのごく在りふれた、どう見ても純潔な接觸の間に起つたのであつた。彼は、それと同じ情熱を、例へば運動場で學校友達と相撲をとる時には決して感じはしなかつた。女といふ反對の極と接觸して、今や彼は、大人になるといふことは何を意味するかを知つた。何故なら彼は、言ふことをきかないませた子供ではなくて、一個の大人であつた。彼は、強壯な堅固な健全な青年であつた。

彼が園の小道を行つたり來たりしてぶらんこを歩いてゐた時、新しい考へが彼の頭の中に作られた。人生は、より嚴肅な眼で彼を眺めてゐた、彼は、義務觀念を意識した。しかし彼はやつと十五歳なのであつた。彼はまだ、堅信禮を受けてゐなかつた。彼が社會の獨立した一

員と見做され得るまでには、多くの年月が、経過しなくてはならなかつた。自らの生活費を儲け得るまでは、妻や家族を養ふことを考へる要はないのだ。彼は、人生を眞面目に採つた、軽い冒険の考へは、決して彼には起らなかつた。女といふものは、彼にとつては何か神聖なもので、彼の反對極で、彼自身の補充であり完成であつた。今では彼は、肉體的に言つても精神的に言つても、人生の闘場に入つて、自分の道を切りひらいて行く資格のある完成者であつた。彼がさうすることを何が妨げたであらう？ 彼の教育、それは何等の有用なものを彼に教へはしなかつた、彼の社會的立場、それは彼と彼の知り得る職業との間に在つた。教會、それはその司祭に對する彼の忠實さの誓ひをまだ受けてゐなかつた。國家、それはベルナドットとナッソーとに對する彼の服従の誓ひを尙ほも待つてゐた。學校、それは彼を大學へ行くだけに成熟してゐると見做すほど十分には、まだ彼を訓練してゐなかつた。下層階級に反する上層階級の祕密同盟なのであつた。彼及び彼の若き力の上には、巨大なる痴愚の全體が横つてゐる。自身が一人前であることを彼が知つた現在では、教育の全系統は、彼にとつては、肉體と靈魂とを毀損する爲めの設置のやうに思はれた。それは二つながら、成人を危険視してゐる世界といふものの、閨房に入ることを、彼がゆるされ得るに先だつて、毀損されるにちがひない。彼は、その爲めに何等の他の釋辯をも見出すことは出来なかつた。そし

て、かくの如くして彼は、未成なる以前の狀態の中に没落して了つた。彼は、出来るだけ白く柔かにしようとして縛りつけて、植木鉢の下に置いてあるので、日光中で緑色の葉をつけたり、花を開いたり、種子を持つたりすることの出来ないでゐる和蘭陀ミツバに自分を比較した。

こんなことを考へ耽つて彼は、一番近い教會塔の時計が十時を打つまで庭に居た。それから彼は家の方へ引返して行つた、最早就床時間だつたから。しかし正面の戸口は錠が下りてゐた。下女が、寝巻の上へ上衣を羽織つて出て来て彼を入れた。彼女の裸かの肩を一目見ると彼は、忽ちにセンチメンタルな幻想から醒めた。彼は、彼女に腕を捲きつけて接吻しようとした、何故ならその瞬間には彼は彼女の性といふこと以外には何も意識しなかつた。けれども下女は、戸をボタンと閉めて既に向うへ行つて了つてゐた。恥かしさに壓倒されて彼は窓を開き、冷たい水のはひつてゐる盥の中に入れて頭を冷やし、それからランプを點けた。

寢床にはひつた時彼は、母の持つてゐた一冊の本、アルントの「朝の精神的な言葉」といふ本をとり上げた、彼は、朝の時間が短かかつたので毎晩一章づつ安靜を得るために讀んだ。その本を讀んでゐると、彼は母の死ぬ時母に身持をよくすることを約束したことを思ひ出した。そして彼は良心の激痛を感じた。ランプのそばでブン／＼羽を鳴らしたり、寢床のそば

の小さいテーブルの周りを飛び廻つたりしてゐた蠅が、彼の考へを他の路へ向けた。彼は、本を閉じて煙草に火を點けた。彼は、父が下の室で靴を脱ぎ、パイプを煖爐の端で叩き、盃の水をこぼし、それから寢床にはひらうとしてゐるのを聞いた。彼は、父が鰥夫になつて了つてからはどんなに淋しいだらうかと思つた。過去の日には彼は、薄い仕切壁の向うでひそひそと話し合ふ両親の聲を屢々聞いたものだ、陸じく話し合つてゐるその話はいつても互ひに賛成し賛成されてゐるのだつた。けれども最うさうした聲は聞えなかつた、男がひとりで自分の身のまはりの始末をしてゐる反響のない物音、人が、その意味を解し得るまでには先づあの判じ繪の中にあるいろいろの姿のやうに、くつつけ合はしてみなければならぬ物音の他には何も聞えなかつた。

彼は煙草を吸ひ終つて、ランプを吹き消した、そして低聲で神に祈りを上げた、が併し第五の祈禱より先きへは續けられなかつた。そこで彼は、眠りに落ちてしまつた。

彼は、深夜に夢から醒めた。彼は、園丁の娘をその腕に抱いてゐる夢を見たのだつた。彼は、その出来事をよく憶えてゐなかつた、すつかり仰天してゐたので。そして再びすぐに眠りに落ちた。

翌朝彼は、氣が沈んでゐた、そして頭痛がした。彼は、自分の前に脅かすやうにぼんやり

と見えてゐる、そして恐怖で彼を一杯にしてゐる未來のことを思案した。彼は、如何に速かに夏が過ぎ去つて了ふかを知つて悲しんだ。何故なら夏の終ることは、學校生活といふ墮落を意味するのであつたから。彼自身のすべての思想は他人の思想によつて窒息させられねばならなかつた。其處では獨立に考へ得るといふことに何等の勝味もなかつた、人がその目標に達し得る前には一定の數年間が必要なのであつた。それは貨車の旅行のやうなものであつた。機關車は一定の時だけ停車場に止つてゐなければならなかつた、そして蒸汽の壓力が、エネルギーの消費の不足のために強くなり過ぎた時には、蒸汽捨管は開かれなければならぬのであつた。廳では時間表を調製してゐるので、列車は定つた時間にならなければ停車場に着くことを許されなかつた。それが、これに關係のある主要な事なのであつた。

父は、子供の蒼白くなつたことに氣がついた、しかし彼はそれを母の死に對する悲しみに歸してゐた。

秋が來た、そしてそれと同時に學校へ戻つた。テオドルは、夏中小説を耽讀してゐた爲に、且つ、そんな風で、云はゞ、大人及び彼等の問題と争鬭との不斷の接觸に入つたので、己れ自身を、社會上の一人前の一員として見上げることになつた。今では先生達が親しみを以つ

て彼を取扱つた。子供等は、自由を得た、その自由は彼等に親切を返すことを彼に強ひた。そして、彼を高め、社會上の彼の位置を適當に得させたこの教育の制度は、これは彼に何を教へたか？ どういふ風にそれは彼を高めたのか？ 一切のこの綱領は、下級をして長上者を敬はしめるといふ唯一の目的で、上級の支配の下に書かれてゐた。先生達は、屢々生徒の忘恩を責めた。そして、生徒に、彼等が多く、より貧弱なる同胞が常に不足を感じてゐる或る教育を受けて楽しんでゐる利益を、微かながらも認めることに全く無能であることを印象させた。否、實は子供等は、この大なる詭計とその利益とを見通すだけには世間馴れてゐなかつた。

けれども、彼等は、彼等の勉強の主題の中に彼等自身の爲の眞の喜びを、眞の楽しみを、一度でも見出したことがあつたか？ 決して！ それ故先生達は、絶えず生徒の低い感情、野心や自利心や物質的利益などに訴へなくてはならなかつた。

何といふ情けない、虚偽の學校であつたらう！ 如何なる子供も、嫌はれてゐる王の名前と日附とをその適當な順序で繰り返したり、死せる言葉や、公理の證明や、「當り前なこと」の定義や植物學の著者の名を挙げ昆蟲の後足の關節を數へ上げることや、それらのものに就いては結局ラテン語の名前だけを覚えたりすることよりも、何か得になることが有らうとは

信じる者は無かつた。一つの角を三つの相等しい斷片に分つといふやうな、分度器を使ひさへすれば非科學的な(即ち實際的な)手段では一分間でわけなく出来ることに無益な企てをやつて、如何に多くの時間を浪費したことであらう。

如何に彼等は、實際的なるすべてのことを輕視したか！ オルレンドルフの文法書で佛蘭西語を教へられた彼の妹は、二年間の勉強でその語を話せるやうになつた、然るに學校へ通つてゐる子供達は、六年かゝつても一語も喋れるやうにはならなかつた。オルレンドルフとは、彼等が憐憫と輕侮とを以つて宣言した所の名前であつた。それは、凡ゆる馬鹿なことの要素であつた。

しかし、彼の妹が説明を求めて、話す言葉の目的は人間の思想の表現ではないのかと訊ねた時、若い詭辯家は、タレーランから借りて來た或る先生の言葉を拾ひ出して答へた。言葉は人の思想を隠すために發明されたのであると。これは勿論若い娘の眼界以上であつた。(如何によく人はその缺乏を隠すべきかを知つてゐる) しかしその後には彼女は、彼女の兄が素晴らしい學者になるであらうといふことを信じて、彼と議論することを止めた。

そして、見せかけの、誤魔化しの、そしてあらゆるものに借り物の光輝と伴りの美とのヴェールをかぶせてゐる美學の中の一つの悪い誘惑さへ、そこには有りはしなかつたか？ 彼等

は、「光の騎士の逮夜」を歌つた。騎士の逮夜とは何か？ 人々が彼等自身言ふごとく、虚偽の證據、高貴の特權と學生の證書とを有するものである。「光」とは？ 即ち、人々が教會と學校とによつて巧みに助けられてゐる仕事、下級のものを暗黒の中に放置しておくことに最大の興味を持つた上級のものことなのである。「そして、進めよ、進め、光の路を！」物事は、常に誤れる名によつて呼ばれてゐる。そして若しも偶然にも炬火を捧持するものが、下級の中から出て來たならば、すべての者はその炬火を消滅させようと用意し準備してゐるのである。おゝ！ 若々しい健康なる、闘者の軍勢！ 怠惰及び満足されざる欲望と野心とによつて弱められ、大學教育を償ふ手段を持つてゐないすべての者を輕侮する所の彼等、このすべての若き人々は如何に健康であつたらう！ 彼等、上級の中からの詩人は、何といふ嘘つきだつたらう！ 彼等は、欺瞞者か、又は欺かれし者であつたのか？ 青年達の日常の話題は何であつたか？ 彼等の勉強のことか？ 決して！ 稀には彼等も多分證書に就いて話すであらう。否、彼等の會話は、猥褻なる事柄である、女との約束に就いてである、玉突と酒とに就いてである、彼等が兄達の話から聞いた或る病氣に就いてである。彼等は、晝すぎになるとぶらつき廻り、「閱兵式を開く」。彼等のうちで最もよくその道に通曉してゐる者は、その士官の名前を知り、彼の情人が何處に住んでゐるかを人に話

すことまで出來た。

或る時、「光の騎士の逮夜」の仲間が二人動物園の中の高等料理店のテレーヌで、二人の女と一緒に食事をしたことがあつた。この罪で彼等は、學校から放逐された。彼等は、その行爲が悪いと考へられたのではなく、その天真爛漫のために罰せられたのであつた、何故なら一年後には彼等は試験を通過して、かくの如く丸一年間の得をして大學にはひつた、そしてウプサラで課業を卒へた時には彼等は、スウェーデンノールウェ合衆國を代表して歐羅巴の或る都市に在る大使館へ隨行して行つた。

かういふ環境の中でテオドルは、その最もよい青春時代を過した。彼は、詭計を見通した。しかし服従しないではゐられなかつた！ 幾度も幾度も彼は、己自身に質問を與へた、自分は何を爲ることが出来るのか？ 何等の答へも無かつた。そこで彼は、從犯者になつて了つて、沈黙を守ることが學び知つた。

彼の確證は、學校の經驗よりもずつと高いやうに彼には思はれた。或る若い教務師、熱心な敬虔主義者は、彼が神學と經典學と教理論とによく熟達し而も新約聖書を希臘語で讀めるといふ事實には無關心に、四箇月もかゝつて彼にルーテルカテキズムの教理問答を教へるのであつた。それでも尙ほ、思想及び行爲に於いて絶對的の眞を要求する嚴格なる敬虔主義は、彼の上に

大きな感銘を與へずにはおかなかつた。

基督教初學者が初めて集まつた時、テオドルはまるで思ひがけなく、彼が學校でいつも出會つてゐたのとは全く異つた階級の子供達によつて取巻かれたことを知つた。彼がこの會合の室へはひつて行つた時、彼は非常に多くの敵視に見會つたやうに、或る凝視に出會つた。煙草職工や煙突掃除工や凡ゆる商業の徒弟が居た。彼等は仲が悪かつた、そして思ふ存分に罵り合つてゐた、しかし異なる商業と商業との怨恨は表面上のものに過ぎなかつた。彼等は喧嘩をしてはゐたが、それでも合體してゐた。彼は、妙に息詰まるやうな空気を呼吸してゐる氣がした。彼の出會つた嫌悪は、輕侮の念を含んでゐないものではなかつた、或る尊敬か美望かの轉々したものであつた。彼は、自分と似た心持の同じやうな身姿をした友を、仲間を探したが無益であつた。ただの一人も無かつた。その教區は貧しかつた、富者はその子弟を獨逸の教會へ遣つてゐた、それがその當時の流行であつた。彼は、下級の人々の子供等と一緒になつて、その同輩として聖壇に近づかうとした。彼は、自分をこれらの子供等から引き離したものは何であつたかと、自問した。彼等は物質的に彼と同じき天賦のものを授かつてはゐなかつたのか？ 疑ひもないことだ、何故なら彼等の總てはその生活費を儲けてゐた、そして中には兩親を養ふ助けをしてゐる者もあつた。彼等は精神的には少ししか天賦のもの

を持たなかつたか？ 彼は、さうは思はなかつた、何故なら彼等の言葉は、鋭い觀察力を證明してゐたから。若しも彼が自分の立優つた階級を意識しなかつたとしたら、彼は彼等の機智に富んだ多くの言葉を嘲笑したであらう。彼と彼の同輩である馬鹿者達との間には少しも定つた境界線は無かつた。しかし其處には一つの線があつた。その關門を形造つてゐたところのものは、ぼろ／＼な着物や、質朴な顔付や、荒々しい手などであつたらうか？ 半ばさうだと彼は思つた。彼等の質朴さは、特に彼を反撥した。けれども彼等は、質素であつたらと言つて、他の者より悪かつたのか？

彼は、その後劍術を習つてゐた時には、試合刀を持つて歩いてゐた。彼は、注意を惹かないやうにしようとして、それを部屋の隅に置いた。しかしそれは既に見られてゐたのであつた。それは實際どんな種類のものなのかは誰も知らなかつた、がすべての者は或る種の武器だといふことを認めてゐた。最も大膽な幾人かの者は、それを見ようとして、隅の方へ行つて忙しさうに何かしてゐた。彼等は、柄の蔽ひをいぢり、釘のついた留め物を爪で掘つて見、刀身を曲げて見、小さい革製の球をひねくつて見てゐた。彼等は、森の中に置き忘れられた鐵砲を嗅ぎまはしてゐる野兎のやうであつた。彼等は、その用法を理解しなかつたが、それは何か害のある、何か隠された意味を持つたものだといふことを知つた。間もなく、近衛兵

の兄を持つてゐる調革製造者の徒弟がその好奇心の群に加つて、早速問題を解決した。「こりや短剣さ、それが解らないのかい、馬鹿だなア。」と彼は、テオドルの方を見ながら叫んだ。それは敬意ある見方ではあつたが、彼等の間の秘密の理解を暗示してもゐた、それは正しく説明してみればかういふ意味であつた、君と僕とはこの事を理解してゐるのだ！ ところが、嘗つて陸軍々樂隊で喇叭手をしてゐたことのある若い繩作りは、自分に相談しずさういふ判断を下したことを、個人的輕侮と見做して、自分は「若しそれがレーピア(細長い劍の或る物)でないといふなら首を縊つて了はア！」と宣言した。その結果は争ひとなつた、それはその場を、塵の濛々と立ち昇る叫喚と怒號の相反響する争闘場に化して了つた。

扉が開いて、教師が闖の上に現れた。それは非常に瘠せ蒼ざめた若い人であつた、水のやうな碧い眼を有ち、吹出物のために醜い顔をしてゐた。彼は、子供達を怒鳴りつけた。野獸共は、争ふことを止めた。彼は、クリストの貴重な流血と、人間の心の上に及ぼす惡の力とについて語り出した。暫くして彼は、やつとその百人の子供達を腰掛と椅子とに坐らせることが出来た。けれども最早彼は全く喘いでゐた、空氣は塵で濃厚になつてゐた。彼は、窓をちらりと見て、弱々しい聲で言つた。「窓をお開け！」この要求は、やつと半ば納まつたばかりの熱情を再び醒ました。二十五人の子供等が、窓を目がけて突進して、窓の紐にぶら下ら

うとした。

「みんな自分自分の席へすぐ戻れ！」と教師は、その杖の方へ手を伸ばしながら叫んだ。

教師が争ひをさせずに窓を上げさせようとして或る方法を考へようとしてゐた間、一寸の間の沈黙があつた。

「お前が」と彼は、或る内氣な小さな子供に向つて終ひに言つた。「行つて、窓をお開け！」

その小さい子供は、窓のところへ行つて、窓紐をほどかうとした。他の者は、息もつかずに黙つて見てゐた、その時突然に、恰度カール・ヨハン號で歸國したばかりの、水夫の着物を着た大きな若者は堪らなくなつて了つた。

「畜生め、俺がどれ丈けのことが出来るか見せてやらア。」と彼は叫んで、上衣を投げ棄てて窓臺へ飛び上つた。彼の短刀はキラリと閃いた、そして繩は切られた。

「鎖は切れた！」彼は笑つた、がその時教師はヒステリカルな叫び聲をあげて、文字通りに彼をその席へ追ひ遣つた。

「繩は大變纏れてゐたんです、だから切つて了ふより他に仕様が無かつたんです。」と彼は坐りながら教師に保證した。

その教師は、狂暴な人間であつた。彼は同じ州の或る小さな町から來てゐるのであつた、

そしてこんな非常な罪惡、こんな惡德、そしてこんな不徳が有り得るとは考へたことも無かつた。彼は、これまでこんなになせした惡ずれのした子供等とは出會つたことはなかつた。そこで彼は、貴重なるクリストの流血に就いて一生懸命で語つた。

子供等は一人も彼の言つたことを理解しなかつた、何故ならば彼等は少しも間違つてはゐなかつたので、自分達が墮落してゐることを認めなかつたから。子供等は、冷淡と無關心とを以つて彼の言葉を受けた。

教師は、纏りもなくクリストの貴重な傷に就いて話したが、クリストが傷いたといふことがよく解つた者は一人もなかつたので、彼の言葉を心に銘じた者も一人もなかつた。彼は、話題を變へて、惡魔に就いて語つた、しかしそれは、何等の印象をも與へなかつた程彼等にとつては馴れきつた話であつた。たうとう彼は、本當の事に思ひ當つた。彼は、來るべき春に必ずやつて來るであらうと思つた事柄に就いて話し始めた。彼は、その子供等が人生へ出て人々に交つて何かすることが出来るだらうかと心配してゐる彼等の兩親のことに彼等の心に向けさせた。彼が、保證されてゐない子供を雇ふことを拒む雇主のことを話しつゞけてゐた時には、彼の聴き手達は、忽ちに深い興味を持ち始めた、そして一人残らずが目前に迫つてゐる儀式の非常に重大だといふことを理解した。今は彼は眞實であつた、そして幼い人

人は、彼の語りつゝあることを擱んだ、彼等の内の最も騒がしかつた者も靜かになつた。

登録が始まつた。結婚證明書の缺けた者がどれ程あつたらう！ 彼等の兩親が正當に結婚してゐないのに、その子供等がどうしてクリストに近づくことが出來よう？ 彼等の父が牢獄にはひつたりしてゐるのに、彼等がどうして祭壇へ近寄ることが出來よう？ おゝ！ 彼等は何といふ罪人であつたらう！

テオドルは、非常に多くの恥づべきことと不名譽なことを見せられて、深く感動した。彼は、その問題から自分の心を引離して了ふことを熱望した。しかしさうすることは出來なかつた。やがて彼が證明書を持つて行く番となつた、そして教師は読み上げた——息、テオドル、かくくの日に生る、兩親、教授にして騎士……かすかな微笑が、弱々しい日光のやうにその顔にゆらめいた、彼はテオドルに親しげに頷いて、そして訊ねた。「それでお前の愛するお父さんは如何ですな？」しかし彼が母の死んだことを見た時、（そのことにテオドルは全くよく氣がついた。）彼の顔は曇つた、「彼女は神の子だつたのだ。」と彼は、恰も獨り語のやうに、絞り出すやうな同情に充ちた涙聲で言つたが、同時にその言葉は、單に教授であつて騎士であつたに過ぎない「愛する父」に對する或る非難を、傳へてゐた。それからテオドルはその部屋から出て行くことが出來た。

會議室から出て来た時彼は、殆んど有り得べからざる經驗をしたやうな氣がした。あらゆるあの子供等が、彼の友や父や叔父やすべての上級の者が折々なした如く、宣誓を立て、亂暴な言葉を使つた以上、彼等は本當に墮落してゐたのであらうか？ 教師が不徳について語つた時には彼は何を意味してゐたのであらうか？ 彼等は、富に汚れてゐる子供等よりも餘程野蠻であつたが、しかしそれは、彼等がより、以上十分に生々としてゐたからなのであつた。結婚證明書を持つてゐないからと云つて彼等を咎めるのは不公平であつた。實際、彼の父は窃盜を犯したことは決して無かつた、けれども、彼が六千クラウンの收入を持ちそして自ら満足することが出来たとしたら、人間にとつては盗む必要などは全く無いのであつた。さういふ場合には、その行爲は滑稽で、或は變體的であつたであらう。

テオドルは、「教育を受けてゐる」といふことが何を意味するのかを悟つて、學校へ歸つて來た。此處には誰もつまらない過誤で惱まされてゐる者は無かつた。各自の、或は各自の両親の弱さは、殆んど注意されなかつた、人は、平等であつた、そして互ひに理解し合つてゐた。

學校がすむと人は、「閱兵式を開き、」珈琲店にこそくはひり、酒を飲み、そして終ひには圍ひのある部屋にはひつた。彼は、自分を同等のものとして取扱ふ若い士官を見た、柔弱な四肢を持ち、氣持のいゝ様子をして、顔に微笑を蓄へてゐるすべての若い人々を見た。そのすべての者は、家庭では立派な食事に待たれてゐるといふことは確かであつた、そして、彼は二つの世界、上流と下流との二つの世界が存在することを意識するに到つた。彼は、今苦痛をもつて立ち去つて來たばかりの陰氣な會議室とその憐れな會議の様を思ひ出した。あらゆる彼等の創傷と隠れたる缺陷とは、無慈悲に露はされ、擴大鏡で檢べられた、それ故上級の者たちが謙遜を缺いてゐるために彼等の快い弱さを平靜に樂しむことが出来ないでゐるその本當の謙遜を、下級の者たちは、得ることが出来るであらう。さうして始めて或る震動が此の生活の内にはひつて來た。

テオドルは、やつと半分現されたこの世の誘惑と、この世に對して背を向けその心を天上へ向けようとする新しく生じた欲望との間を可成彷徨してはゐたが、彼は母に爲した約束を破りはしなかつた。彼及び他の基督教初學者が教室で教師から受けた宗教的な教へは、彼に十分深い感動を與へたのであつた。彼は屢々陰氣な氣持になり、沈思に耽り、そして、人生はあらねばならぬやうなものでは無かつたことを感じた。彼は次のやうな意見をかすかに持つた——それは、昔、恐ろしい罪惡が犯されて、今では無數の欺きを行ふことによつてそれを隠すことがすべての人々の仕事になつて了つたといふことであつた。彼は、自身を、蜘蛛

の巢に捕へられた蠅に較べた。その蠅は、自由を再び得ようとしてもがけばもがく程、蜘蛛の巣がひつからまるのだ、そして遂には、残忍な糸に絞められて惨たらしく死んで了ふのである。

或る夕——教師は彼の頭のかたい生徒たちの上に効果を齎らす爲めには、どんな術策をめぐらすことも厭ひはしなかつた——彼等は、唱歌室で課業に就いてゐた。それは一月のことであつた。二つの瓦斯の火口は唱歌室を明るくし、祭壇の上の大理石の像を輝かしたり、引歪めたりしてゐた。互ひに十字の形をなして重なり合つてゐる二つの圓天井から成る大きな會堂の全體は、薄明の内に横つてゐる。後ろの方には光つてゐるオルガンの管が、かすかに瓦斯の焰を反射してゐた。その上で、造物主の審判の席の前で眠れる者を呼び醒まさうとして喇叭を吹いてゐる天使達は、たゞ、いまはしい脅かすやうな等身以上の人間の姿のやうに見えてゐた。廻廊は全くの暗黒の中に消えてゐた。

教師は、第七の戒律を説明した。彼は、既婚者間の、また未婚者間の不徳に就いて語つた。彼は、自分が既婚者でありながら、夫と妻との間の不徳が何を意味するかを、生徒に説明することが出来なかつた、がその他のことならば凡ゆる方面の不徳の問題に就いて彼は物識りであつた。彼は、續いて自慰の問題に入つた。彼が、その言葉を發した時、若い人々の列の中

からはざわ／＼といふ響が起つた。彼等は、頬を蒼白くして、空ろな眼をして、恰も彼等の眞中へ幽霊が現れでもしたやうに、教師を見詰めた。彼が地獄の火の苦しみを話しつゞけてゐる間は、彼等は全然無關心でゐたが、彼が本を採り上げて脊柱結核で二十五の歳で死んだ青年の記録を呼んで聞かせた時には、彼等は、その席に崩折れて、まるで彼等の下の床が落ちでもしたかのやうな氣がしてゐたのであつた！ 彼は、十二の歳に養育院に入れられ、主を信仰して平和を見出しつゞ十四歳で死んで行つた或る子供の話を彼等に語つた。彼等は、そのびく／＼してゐる眼の前に、洗はれて經帷衣きやうかたびらを着せられた幾人もの死骸を見た。「この悪を救濟する方法はたつた一つしかない。」と教師はつゞけた。「クリストの貴重なる流血である。」しかし、どうしてこの救濟が性の早熟に對して用ひられるのか、教師はそれを彼等に語らなかつた。彼は、舞踏會へ行かないやうに、劇場と遊戯場を避けるやうに、そして就中女を避けるやうに、即ち全く彼等の傾向に相反する行ひをするやうにと彼等を諭した。この惡徳が、人が二十一歳になるまでは一人前の男ではないといふ社會の斷言に相反しこれを全く滅茶々々にしてゐるといふことは、沈黙の内に看過された。それが早婚によつて防げるかどうかといふことは（少數者のための酒宴の代りにすべての人のための食料を供給する或る方法が見出されるとしても）公然の問題として殘されてゐた。最後に言はれたことは、人はクリ

ストの腕の中に身を投じ、即ち教會へ行き、そして世俗的な事柄に就いての苦勞を上層階級に委して了はねばならないといふことであつた。

かういふ訓戒をしてから教師は、第一の長椅子の最初の五人に、後へ残るよう^三に要求した。彼は、直接に彼等に話さうと欲した。最初の五人は、死刑の宣告を受けでもしたやうな顔をしてゐた。彼等の胸は狭まり、呼吸も苦しくなつた、注意ぶかい觀察者は、彼等の髪の毛が死人のそのやうに根元から一寸も逆立つて頭を蔽つてゐたのを見たであらう。彼等の眼は、鞣皮にはめた二つの圓い硝子玉のやうに白い眼窠から見詰められ、一つ處をちつと見据ゑ、大膽な反抗でその問題に面すべきか、又は厚顔な嘘の蔭に身を隠すべきかを知らないもののやうであつた。

祈禱の後、クリストの流血の頌歌がうたはれた。今夜はそれは、肺病患者の歌のやうに響いた。折々それは全く聞えなくなつたり、又は渴きから死にかゝつてゐる人の咳のやうなかわいた咳で妨げられたりした。それから彼等は、列を作つて出始めた。五人のうちの一人は、こつそり逃げ出さうと企てたが、教師が呼び戻して了つた。

それは、怖ろしい瞬間であつた。第一列に坐つてゐたテオドルは、五人のうちの一人であつた。彼は、不愉快な心持だつた。それは彼が、かの示された罪を犯してゐたからではなく、自分の魂の最も祕密な場所を斯くの如く赤裸々に表はさなくてはならないといふことは人間に對する侮辱であると、彼は内心に考へたからであつた。

他の四人の者は、出来るだけお互ひに離れて坐つてゐた。その内の一人であつた調革製造者の徒弟は、冗談を言はうとした、しかし言葉が出て來なかつた。彼等は、法廷と牢獄と病院とそしてその背景にある養育院との前に立つてゐるやうな氣がして來た。彼等は、何が始まるのか知らなかつたが、しかし或る種の懲戒が彼等を待つてゐるのだといふことを本能的に感じてゐた。この不幸なる状態に於ける彼等の唯一の慰めは、彼テオドルもその内の一人だといふことであつた。何故その事が慰めなのであるかは、彼等自身にも明かではなかつた、けれども、教授の息子には何等の悪いことも起りはしままいといふことを、彼等は直覺的に知つてゐた。

「さア、おいで、ウエンネルストローエム。」と教師は、^{グエストロイ}法服所の中へ瓦斯をつけて了つてから言つた。

ウエンネルストローエムは、はひつて行つた、そして彼のうしろに戸は閉された。四人の者は、その體を氣持よく伸ばせる場所を見出さうと無益に試みながら、自分達の長椅子に残つてゐた。

暫くするとウ・ンネルストローエムは、眼を眞赤にして亢奮にふるへながら歸つて來た。

彼はすぐに廊下を降りて夜の中へ出て行つた。

重々しい雪を被つて黙々としてゐる教會の庭に立つた時彼は、法服所で起つたすべての事柄の要點を繰返してみた。教師は、彼が罪を犯してゐるかどうか？ と彼に訊ねた。否、彼は犯してゐなかつた。彼は夢を見ることがあつたか？ ありました！ 夢は同様に罪深いものだ、何故ならそれは心の惡に充ちてゐることを證據立てるもので、神は心をも見給ふ、と彼は言はれた。「神は心をも試みて、制御されるのだ。そして最後の日に神は、我々すべての者の凡ゆる罪ある思ひを裁かれるのだ、そして夢も思ひである。クリストは言つた、お前の心を私に與へよ、私の息子よ！ 神に行け！ 祈れ、祈れ、祈れ！ 貞潔で、純粹で、心持よいことは何であれ——それは神なのだ。徹頭徹尾生活と幸福だ。肉體を清くせよ、そして強く祈れ。主の名に於いて行け、もう罪は犯すな！」

彼は怒りを感じた、がそれと同時に打碎かれてもゐた。彼はその憂鬱を投げすて、了はうとして争闘したが無益であつた。彼は、このジュスイット式の詭辯に對する武器として用ひるに足るほどの常識を學校で教へられてはゐなかつた。實は彼の心理學の知識は、彼をして夢が思ひであるといふ言葉を改修せしめた、夢は幻影であると彼は默想した、想像の創造物で

ある、しかし神は言葉に對しては無關係である！ 論理學は、彼の早熟な慾望のうちには何か不自然なものがあることを彼に教へた。彼は、十六歳で結婚することは出来なかつた、彼が妻を支へることが出来なかつたから。けれども、彼が一人前の大人であると自ら感じてゐたにも拘らず、どうして妻を支持することが出来得ないのか、それは彼の解き得ない問題であつた。彼が結婚することをどんなに切望したとしても、上層階級によつて作られ銃劍によつて護られてゐる社會の法則が、彼を妨げたであらう。従つて自然は、何らかの方法で罰せられなくてはならないのだ、何故ならば、人間は、その生計を支へることが出来るやうになるよりもずつと前から成熟してゐるのだから。それは墮落であるに違ひない。彼の想像は墮落したに違ひない、祈りと犠牲とによつてそれを純化することは、人間にとつて必要なことなのであつた。

彼が歸宅した時には、父と妹とが夕食に就いてゐた。彼は、卑しくなつてゐたことを感じてゐたので、彼等と一緒に坐るのが恥かしかつた。彼の父は、いつもの通り、堅信禮の日が定つたかどうかを訊ねた。テオドルは知らなかつた。彼は、氣分がよくない風をして食事に手をつけなかつた。彼が全く夕食をとりたいたいと思はなかつたことは本當であつた。彼は、自分の寢室にはひつて、教師が彼に貸してくれたシャルトウの論文を讀んだ。その題目は理性

の虚榮といふことであつた。さうして、はつきりとした理解に到着しようとする彼はあらゆる希望が集中されてゐたその點で、恰度そこで光明が失はれた。いつかは暗黒から光明へ導いてくれるであらうと彼が切望してゐたその理性も、矢張り罪あるものであつた、最も大なる罪惡であつた、何故ならそれは、神の存在そのものを疑ひ、理解されるべきでないものを理解しようと試みてゐたから。何故、それは理解されるべきではなかつたのかそれは説明されなかつた。恐らくは、若し、それが理解されたとしたら虚偽が発見されるのだつたからなのであらう。

彼は、最早反抗しなかつた、そして降服して了つた。ベッドにはひる前に彼は、信條と主の祈りと祝福との記述されてゐるアルントの「朝の言葉」を讀んだ。彼は、彼にとつては自分の敵が苦しんでゐるやうに思はれるところの或る憎惡に満ちた快樂を以つて認めた事實、腹がすいてゐることを感じた。

こんなことを考へながら彼は眠りに落ちた。彼は、眞夜中に眼を覺ました。彼は、女と一緒に夕食をやつてシャンパンを飲んでゐるのを夢みた。そして、あの恐ろしい一夜のことがすつかり彼の記憶に新しく浮び上つて來た。

彼は、一飛びにベッドから跳び出して、シイツと毛布とを床の上に投げて、それから薄い

寢臺布一つで身を蔽つて裸かの蒲團で眠らうとして横になつた。彼は、寒くて且つひもじかつた、しかし彼はこの惡魔に打克たなければならぬのである。再び彼は、主の祈りを繰り返した、彼自身のものを附け加へて。次第々々に彼の考へは、混亂して來た、彼の緊張した表情は、緩るんで來た、微笑が彼の口元の表情を和らげた、愛らしい幾つもの姿が、清く微笑しながら彼の前に現れた、彼は低い聲を聞いた、半ば息詰まる笑ひ聲を聞いた、ワルツの數節を聞いた、輝く盃を見た、つゞみかくしのない眼を持つた快活な樂しげな顔を見た、それは赤い顔もしない彼自身に相對した。突然に幕が中央に下つて分け隔てた、魅惑的な小さな顔が、唇に微笑をたゞへ、くるくると踊る眼をして、赤い絹の懸衣かけぎぬをすかして覗き込んだ。細長い咽喉は裸かであつた、美しい撫肩はまるで抱擁の手に象かたどられたのやうに見える、彼女は腕を伸した、そして彼は、その動悸のする心臓に彼女を引き寄せた。

時計は三時を打つた。再び彼は争鬭に負けたのであつた。勝利を得ようといふ決心をして、彼は蒲團を拾ひ上げてそれをベッドから投げ棄て、了つた。それから彼は、冷たい床の上に跪いて、力を與へ給へと熱心に神に祈つた、何故なら彼は、實際惡魔と角力をとつてゐるのだといふことを感じてゐた。祈り終つた時彼は、何も敷いてない寢臺の上に横はつた、そして繩と帶革とが腕や脛に喰ひ込むのを感じて満足之感を持つた。

朝起きてみると彼は、非常な熱であつた。

彼は、六週間床に就いてゐた。彼が病の床から起き出た時には、彼は以前よりも一層強壯になつた氣がした。休息と滋養と醫藥とが彼の力を増させた、そこで争闘は今度は二倍に困難になつた。けれども彼は、闘ひつゞけた。

堅信禮は、その春に舉行された。上層階級のものがその特權と考へてゐる多くの事柄には決して立入らないといふ誓ひを立て、下層階級のものが約束してゐるその感動的な光景は、いつまでも彼に印象を残したのであつた。千九百年前に殺された、人間としての最も世を動したナザレ人のイエスの血とし肉として、教師が、ヘーグステッド酒店で一ポイント六十五エールで買つた酒と、パン屋のレットストローエムから一ポンド一クラウンで買つたウェーリースとを、彼に差出したことは左程彼を動亂させなかつた。彼は、そんなことに就いては何とも思はなかつた、何故ならばその當時には人は考へるといふことをしなかつた。人は情熱を持つてゐたのであつた。

堅信禮の一年後に彼は、最後の試験を通過した。氣持のいゝ小さな學生帽は、彼には非常な喜の源であつた、それを本當に意識しずには彼は、上層階級の一員として免許狀を得たことを感じた。之等の青年達は、彼等の知識を少なからず誇つてゐた。教師が彼等を「大人」と呼んで

ゐたから。自負せる青年達！ 若しも、少くも彼等が、その自慢してゐた凡ゆる愚かな事柄をさへすつかりマスターしてゐたのだつたら！ 若しも誰かゞ、彼等のために催された饗宴に於ける彼等の會話に耳を傾けたとしたら、それはその人に對する啓示だつたであらう。彼等は、自分達が所有すべき筈であつた知識の五パーセントも獲得してはゐなかつたといふことを公然宣言した、彼等は、耳を傾けるすべての人に、自分達が試験に通過したのは奇蹟であつたと保證してゐた、神祕を知らない者にはその一語も信じられなかつたであらう。そして、或る若い教師などは、生徒と先生との間の境界線が取除かれ、見せかけが最早不必要になつた現在では、半ば酔つてゐるやうな身振りをしながら、學校中で落第をしなかつた教師は一人もないのだと誓言した。正氣の人間は、試験といふものは上層階級と下層階級との間に任意に引くことの出来る一本の線の如きものだといふ結論を引き出さないではゐられなかつた、そこでその人は、この奇蹟の中に巨大な詭計の外何物をも見なかつたのである。

それは或る教師であつた、彼はポンスの盃に唇を浸しながら、人間の腦髓が次のやうな事柄を同時に記憶し得ると思ふのは、白痴のみがなし得ることだと主張した——歴史の内に記載された三千もの日附、世界の各部に存在する五千もの都市の名前、六百の植物と七百の動物との名前、人體の中の骨、地球の外皮を形成してゐる石、凡ゆる神學上の論争、一千の佛

蘭西語、一千の英話、一千の獨逸語、一千の羅典語、一千の希臘語、五十萬の法則とその例外、五百の數學上の物理學上の地理學上の化學上の定理等。彼は、かくの如き技わざを可能ならしむる爲めには脳髓はウブサラの天文臺の圓屋根程の大きさにならなくてはなるまいといふことをはつきりと證據立てたのであつた。彼フンボルトはいつまでも語りつゞけて、終ひにはその會食者たちを忘れて了つた、そしてルントの天文學の教授も六個の數を二に割ることが出来なかつた。

雖つ子のやうな卒業前の學生は、六箇國語を知つてはゐたが、その母國語を成す二萬語のうち多くて五千語以上は知らないのだといふことを考へた。そしてその教授は、學生達が如何に欺いてゐたかを見てはゐなかつたらうか？ おゝ！ 彼は學生達の詭計をすつかり知つてゐた！ 彼は、彼等の指の爪に日附が書かれてゐたことを知つてゐた、彼は、彼等が机の下で本と相談してゐたのを注視してゐた、彼は、彼等が互ひに私語き合つてゐたのを聞いてゐたのだ！ けれども彼は結論を下した、人は何を爲すべきか？ 人がこれらの事柄に眼を閉ぢないとすれば、學生といふものは次第に失くなつて了ふであらう。

夏の間テオドルは家に残つてゐて、多くの時間を庭で過した。彼は、如何なる職業を選ぶ

べきかといふ未來の問題に就いて思案してゐた。彼は、上層階級の名の下に社會を作つてゐるジユスイット教の大團體のやり方をすつかり洞察したので、彼はこの世を不満に思ひ、そして彼自らを絶望から救ふために教會にはひらうと決心した。だが併しこの世の方では彼を招いた。それは、彼の前に美しく輝いて横つてゐた、そして彼の青春に富んだ騒立つ血は生活を慄れた。彼は、争闘に身を任せた、そこで彼の怠惰がその苦惱に附け加へられた。

テオドルの益々多くなつた憂鬱と次第に減退して行く健康とは、彼の父を驚かし始めた。その原因に就いては疑ふところもなかつた、が、彼はさういふデリケートな問題に就いて自分の息子に語らうとする氣にはなれなかつた。

或る日曜の午後に、工兵隊の將校である教授の兄弟がやつて來た。彼等は、庭へ出て珈琲を啜りながら坐つてゐた。

「君は、テオドルの變つたことに氣がついたかね？」と教授は訊ねた。

「さう、時が來たのだ。」と大尉は答へた。

「もう大分前から來てゐるんだと僕は思ふんだ。」

「君があれば話してくれるといふのだがな。私には出來ない。」

「もし僕が獨身だつたら、叔父さんの役を演じてもいいんだがね。」と大尉は言つた。「そん

なわけだから、僕はそれをグスターフに頼まう。あの子は、人生に何物かを見なくてはならない、でなければ彼は悪くなつて了ふ。このウェンネルストローエム家の人々は情熱家なのだらう、どうだらう？」

「さうだ、」と教授は言つた。「私は十五で一人前の男になつた、だが私は、或る學校友達を持つてゐたが、その男は十三で父親だつたのでたうとう堅信禮をやらなかつたよ。」

「グスターフを見給へ！ あれは立派な男ぢやないか？ もしあれが老船長かなんかのやうな廣い背幅をしてゐないとしたら僕は首をくくられたつてかまはんよ！ あれは大ざつばな人間だ！」

「さうだ、」と教授は答へた。「彼は可なり僕にとつちや高くつくよ、だが要するに子供に危険を口させるよりはすつといふのだ。君に頼むが、ちよつとの間テオドルとグスターフと一緒にゐさせてくれ給へ、一寸テオドルの目を醒ましてやるだけでいふんだからね。」

「おゝ！ いふとも！」と大尉は答へた。

そんなやうに事は決定した。

七月の或る夕方、夏に入つたばかりで、春が豊饒にしたすべての花が果實を結んだころ、テオドルは寢室に坐つて待つてゐた。彼は、壁に或る文句をピンで留めてゐた、それは「イ

エスに來れ」といふのであつた、そしてそれは、中尉がほんの二三分間ブラックから折々に歸つて來るのであるが、その時に彼と議論をしてはくれるなといふ彼に對する暗示なのであつた、グスターフは、生々とした氣風だつた、彼の叔父が言つた通り「大ざつばな人間であつた。彼は、片時も思案などはしてゐなかつた。彼は、七時にテオドルを訪問する約束をしてゐた。彼等は、教授の誕生日を祝福する爲の設備をしようとしてゐるのだつた。テオドルの祕密な計畫は、その弟を改宗させようとするにあつた、そしてグスターフの同じく祕密な企圖も、彼の弟をしてより合理的な人生觀を持たしめようとするにあつた。

きつちり七時に馬車が、家の前に止まつた。(中尉は相變らず馬車でやつて來たのだ。)そしてすぐそのあとからテオドルは、階段の上に拍車の鳴る音と劍のガチャ／＼いふ響とを聞いた。

「今晚は、引籠み爺さん、」と兄は、笑ひながら言つた。彼は、快樂と青春との畫像であつた。彼の綺麗に磨かれた長靴は、二本の美しい足をあらはしてゐた、彼の上衣は、車用馬の腰の輪廓を畫いてゐた、彼の彈藥筒入れの金色の負革は、彼の胸を廣く見せ、そして彼の劍帯は、二本の素晴らしい腿を表してゐた。

彼は、壁に貼つた文句をちらりと見て、顔をしかめたが、何も言はなかつた。

「行かう、お爺さん、ベルヴェーへ行かうぢやないか！ 僕らは園丁のところへ行かう、あすこで誕生祝の準備をしようよ。さア、帽子を冠つておいで、お爺さん！」

テオドルは、言譯を考へようとしたが、兄は、彼の腕をつかまへて、帽子を冠つて自分のうしろへ引張りながら、肩の間に巻煙草をくはへて、扉を開いた。テオドルは、水から出た魚のやうな心持がした。しかし彼は兄と一緒に出て行つた。

「ベルヴェーへ！」と中尉は馭者に言つた。「思ひきつてお前の駿馬を飛ばせるんだぞ！」

テオドルは、楽しくならずにはゐられなかつた。そんな馭者のやうな年上の既婚者にそれ程馴々しく話しかけるなどといふことは彼には決して無かつたことであつた。

途中、中尉は太陽の下に在るあらゆる事柄に就いて語つた。そして、行き過ぎるすべての美しい少女を凝視した。

彼等は、葬儀場から歸つて来る葬列に出會つた。

「一番うしろの馬車に素敵な綺麗な女が居たのを見たかい？」とグスターフは訊いた。

テオドルは、その女を見なかつた、そして見たいとも思はないのであつた。

彼等は、酒場女らしい少女の一杯乗つてゐた乗合馬車と行き違つた。中尉は、大通りであるのも無頓着に、立ち上つて、彼等に向つて自分の手に接吻した。彼は實際狂人のやうな行動をした。

動をした。

ベルヴェーでの仕事は、すぐに済んだ。その歸りには馭者は、命令も待たずに「エクレイ」といふ料理店へ彼等を載せて行つた。そこは、グスターフが云ふまでもなくよく知つてゐる家なのであつた。

「行かう、さうして何か食はうぢやないか！」と中尉は、馬車からその弟を押し出しながら言つた。

テオドルは、心を奪はれた。彼は、全く初めてなのであつたが、酒場に入るに當つて全く禁酒家ではなかつた、そして何等の悪をも見なかつた。いくらか不安を感じずにはゐなかつたが、彼はうしろからついて行つた。

彼等は、二人の女によつて客室へ通された。「今晚は、可愛い連中、」と中尉は言つて、その兩方の者の肩に接吻した。「俺の學者の弟を紹介させてくれ。この男は、随分若くて無邪氣だし、まるで俺のやうぢやないんだよ、どうだね、ジョッサー？」

二人の女は、どつちを向いたらいいかわからないでゐるテオドルを恥かしさうに眺めた。彼の兄の言葉は、彼にとつては言ふに言はれぬ厚顔あつかましいことに思はれた。

二階へ行く道で彼等は、眞黒な髪の小娘に出會つた、その女はたしかに泣いてゐた。彼女

は、静かでしとやかに見えた、そしてテオドルに良い印象を與へた。

中尉は、彼女には接吻しなかつたが、ハンカチーフを引張り出して、彼女の眼を拭いてやつた。それから彼は、贅澤な夕飯を命じた。

そこは、鏡が懸つて居り、ピアノが置いてある輝いた、美しい部屋であつた、饗宴には完全な部屋であつた。中尉は、劍でピアノを開けて、テオドルがまご／＼してゐる中に、彼を樂器の前に坐らせて了つた、そして、彼の手は、鍵盤の上に載つてゐた。

「ワルツを演つてくれ、」と中尉は命じた、そこでテオドルはワルツを演奏した。中尉は劍を外して、ジョッサと踊つた。テオドルは、彼の拍車が椅子やテーブルの脚にぶつかるを聞いた。それから彼は、ソファに身を投げかけて、叫んだ。

「さア、此處へ來い、奴隷共、さうして俺を煽いでくれ！」

テオドルは、ゆるやかに演奏し始めた、そして間もなく、グーノーの「ファウスト」に氣をとられてゐた。彼は、振り向かうとは敢へてしなかつた。

「行つて、彼に接吻しておやり。」と兄が叫びた。

しかし少女達は、恥かしがつてゐた。彼等は、殆んど彼と彼の憂鬱な音楽とを恐れてゐた。けれども、一番勇敢なのがピアノの傍へ寄つて行つた。

「フライシヨルツを演つてるのね、さうぢやないの？」と彼女は訊いた。

「いゝえ、」とテオドルは丁寧に言つた。「僕はグーノーの『ファウスト』を弾いてるんです。」

「あなたの弟さんは恐ろしく立派に見えるわね。」とリークと呼ばれた色の黒い少女が言つた。「あの人はあなたとは違ふのね、あなたは悪漢だわ。」

「おゝ！ さうだ、あれは教會へ行つてるんだよ。」と中尉は叫びた。

この言葉は、少女達に非常な感銘を與へた。そこで彼等は、テオドルが向うを向いて了ふや否や中尉に接吻して、テオドルの方を恥かしさうに見た、而も鎖につながれた猛犬を見てゐる家禽のやうに氣遣ひながら。

非常に品數の揃つた夕飯が出た。刺戟物は數に入れないでも、十八も皿が並んだ。

グスターフは酒を注いだ。

「君の健康のために、爺さんの偽善家さん！」と彼は笑つた。

テオドルは、酒を呑みほした。快い暖かみが四肢の中を走り、薄い暖かいヴェールが眼の上に垂れ、彼は餓えた獸のやうにが／＼食べたくなつた。それは何といふ饗宴だつたであらう！ 特殊な風味を持つた新鮮な鮭と麻醉性の香氣のある蒔蘿、咽喉を掻き削つてビールを求めさせるやうな大根、小さなピフテキと甘いポルトガルの洋蔥、それは彼をして踊り子

のことを考へさせた。海の香ひのする海老フライ、和蘭陀ゼリの詰められた鶏肉、それは彼をして園丁のことを考へさせた。それから、毒々しい緑青の臭ひのする第一のガルキン、それは彼の齒の間でカチ／＼と面白い音を立てた。黒ビールは、熱い熔岩ラバの流れのやうに彼の血管の中を流れた。彼等は、苺のあとでシャンパンを飲んだ。給仕女が、コップの中で噴水のやうに泡立つてゐる飲料を持つて來た。彼等は、その女にも注いでやつた。それから彼等は、あらゆる種類の事柄に就いて話した。

テオドルは、樹液の登つてゐる一本の木か何かのやうに坐つてゐた。彼は、良い晚餐を食べて了つた、そして恰も彼の中であらゆる火山が沸騰してゐるかのやうな心持がした。新しい思想が、新しい情熱が、新しい觀念が、新しい意見が、蝶のやうに彼の額のまはりでひらひらしてゐた。彼は、ピアノの處へ行つて演じたが、自分ではそれを知らなかつた。彼の手の下に在る象牙のキイは、彼の精神が生命と旋律メロディとを惹き出してゐる骨の堆積か何かのやうであつた。

彼は、どの位演奏してゐたのか分らなかつたが、彼がうしろを振り向いた時には、彼の兄が部屋にはひらうとしてゐるところだつた。彼は、生命と力とを射出してゐる神のやうに見えた。彼のうしろからは、リークがボンズの瓶を持つて従いて來た、そしてすぐそのあとか

ら女共が皆上つて來た。中尉は、彼等の誰とも別々に飲んでゐた。テオドルは、すべての事があるべきやうに在つたことを見出した、そこで遂にリークの肩に接吻した位にまで大膽になつた。けれども彼女は、惱ましげに見えた、そして彼から離れ去つた、そこで彼は恥かしく感じた。

テオドルが自分の部屋でたつた一人になつた時、彼は全世界が眞逆さまになつたやうな氣がしてゐた。彼は、壁から貼紙を引き裂いて了つた、それは彼が最早イエスを信じなかつたからではなく、壁に貼りつけられてゐるといふことが、一種の自慢のやうに感じられたからであつた。彼は、かの宗教が日曜服と同様にルーズに自分に纏はれてゐたといふことを見出して驚いた、そして彼は、一週間の間日曜服を着て歩きまはるといふことは不都合なことではなからうかと自分自身に問うた。要するに彼は、十分自ら甘んじてゐる普通な凡人に過ぎないのであつた。そして彼が、簡単な飾り氣のない質素な生活を生きたとするならば、それが自ら平和に生きるより、良き方法なのだといふ結論に達したのであつた。

彼は、その夜は夢に亂されることも無く、ぐつぐつと熟睡した。

翌朝、起きて來た時には彼の青白い頬も、ずつと豊かになつたやうに見えた、そして彼の心の中には或る新しい喜びがあつた。

彼は、散歩に出掛けた。そして突然に彼は自分が田舎に来てゐるのを見出した。料理店へ行つて女達を見ようとしてゐるのだといふ考へが、彼を打つた。

彼はかの大きな部屋の中へはひつて行つた。其處で彼は、リークとジョッサとだけが朝着を著て苺を切つてゐるのを見た。自分が何を爲しつゝあつたかも知らずに彼は、テールに、彼女らのそばに坐つて、手助けをしようとして、剪刀を手にとつてゐた。彼等はテオドルの兄のことやあの皆で楽しく過した夜のことを語つた。放埒な話は全く出なかつた。彼等は丁度幸福な家庭のやうだつた。確かに彼は良き仲間に加はつたのだ、彼は友達の内になつたのだ。

苺をすつかり終つた時に彼は、珈琲を命じ、女も招んで飲ませてやつた。後には女主人が出て来て皆に新聞を讀んでくれた。彼は家にでもゐるやうな氣持がした。

彼は、訪問を繰り返して戻り返した。或る午後彼は、リークを探しに二階へ行つた。彼女は着物に縋ぎを當てゝゐた。テオドルは、お邪魔ではないかと訊いたが、「いゝえ、ちつとも。」と彼女は答へた。「まるで反對ですわ。」彼等は、軍隊へ行つて了つてもう二箇月は歸つて來ないことになつてゐる彼の兄のことを語つた。間もなく彼は、ボンスを命じた、そして彼等の親しみは増して行つた。

もう一度は、テオドルは公園で彼女に逢つた。彼女は花を集めてゐた。二人は一緒に草の上に坐つた。彼女は、軽い夏着を着てゐた、その地質は、彼女のほつそりした娘らしい姿をくつきりと見せた程うすいものであつた。彼は、その腕を彼女の腰にまはして、彼女に接吻した。彼女は接吻を返した、そこで彼は、彼女を熱情のこもつた抱擁の中へ引き寄せたが、しかし彼女は身を引き離して、もしも彼が彼らしく振舞はないならば、彼女は二度と彼に逢はないだらうと嚴格に彼に言つた。

彼等は、二箇月間も逢ふことを續けてゐた。テオドルは、彼女を戀して了つた。彼は、最も神聖な人生の義務や愛や宗教やすべての事柄に就いて、彼女と長いそして眞面目な會話をした、そしてその間に時々彼は、自分の熱情に就いて彼女に話した。けれども相變らず彼女は、彼の議論そのもので彼を狼狽へさせた。それから彼は、それ程無邪氣な少女に對して卑しい考へを懷いてゐることを恥かしく感じ、そして終ひには彼の情熱は、誘惑の中に在つて汚されずに自己を持して行く此の哀れな少女を讚美することに變つて行つた。

彼は、教會へはひらうといふ考へを棄てて了つた、彼はドクトルの學位をとらうと決心した、そして——誰が知らう——恐らくはリークと結婚しよう。彼は、彼女が針仕事をしてゐる時、彼女に詩を讀んで聞かせた。彼女は、彼に好きなだけ接吻をさせてゐた、彼女は、

彼に愛撫や抱擁をも許してゐた、しかしそれが限度であつた。

五四

遂に彼の兄が軍隊から歸つて來た。彼は、早速「エクレイ」で酒宴をやつた。テオドルは招かれた。しかし彼は、始終演奏許りさせられてゐた。彼がワルツを弾いてゐて、誰も踊つてゐなかつた時、彼はふとふり返つた、彼はたつた一人であつた。彼は立ち上つて、廊下へ出て、扉をいくつもく通り過ぎて、たうとうある寢室へたどりついた。其處で彼は或る光景を見た、それは彼をして振り向いて帽子をとつて闇黒の中へ消えさせたのであつた。

彼が、たつた一人で、絶望しきつて、人生に對する、戀愛に對する、及び勿論女に對する（何故なら彼にとつては世界中に唯一人の女しか無かつた、そしてそれは「エクレイ」のりークであつた。）信仰を奪はれて、彼自身の寢室に歸つて來た時は、もう夜明であつた。

九月の十五日に彼は、神學を學びにウプサラへ行つて了つた。

*

*

*

*

數年間が経過した。彼の健全な常識は、次第々々に、彼が日々時々その腦髓を充滿させなければならなかつた所の凡ゆる愚劣な事柄によつて、かき消されて行つた。けれども夜になると彼は、反抗する力が無かつた。自然は、その鏈を斷ち切つて、反抗者が自然を拒んだところのものを、暴力によつて取つた。彼は、その健康を失つた、凡ゆる彼の頭蓋骨は、そ

の瘦せこけた顔の中に見えて居た、彼の顔色は青白かつた、そして彼の皮膚は汚らしくじとじとして冷たく見え、まばらな髯の房の間には醜い吹出物が出てゐた。彼の眼は光を失つてゐた、彼の手はその關節が皮膚を通して突き出してゐるかと思はれる程瘦せこけてゐた。彼はまるで、人間の不徳に關する論文の挿畫かなぞのやうだつた、が併し彼は全く純潔な生活を送つてゐた。

或る日、道徳に就いて嚴格な考へを持つた既婚者である基督教倫理學の教授が、彼を訪ねて、彼が良心に疚しい何物かを持つてゐるかどうかと唐突に訊いた。若し持つてゐるならばそれをすつかり打ち開けて了ふやうに彼に忠告した。テオドルは、告白するやうなことはない、けれども自分は不幸だと答へた。そこで教授は、注意し、祈り、強くなるやうにと彼を勵ました。

彼の兄は、或る馬鹿な事柄を餘り多く考へないやうにと望んで、長い手紙を彼に書いた。彼は、女を眞面目に受け入れることは馬鹿げたことだと言つて來た。彼の哲學は、（そして彼はいつもそれが立派に答へてゐると思つてゐたが）被つた負債を支拂つてその上に進め、若い間には遊べといふことであつた。何故ならば、生活の重さは、忽ちにして十分にその重さを感じしめずには置かぬから。結婚は子の保全に對する公然の制度に過ぎないものである。

それまでにはまだ時間が有り餘つてゐるといふのであつた。
テオドルは眞の基督教的感情の満ちた手紙を書いて、或る點までそれに答へた。中尉はそれには答へなかつた。

春の初めの試験をパスした後テオドルは、冷水治法を受ける爲に、スケーフドで夏を過ぎなければならなかつた。秋になつて彼はウブサラに歸つて來た。彼の新しく得た力は、單に火に對する燃料となつたに過ぎなかつた。

事態は益々悪くなつて行つた。彼の髪の毛は、頭の頂邊がはつきり見える位にまで薄くなつて了つた。彼は足を曳きずるやうにして歩いた、そして、學校友達が彼に町で逢ふといつても彼等は、まるで彼が凡ゆる惡の所有者でもあつたかのやうに知らぬふりをして通り過ぎて了ふのであつた。彼は、それに氣がついてゐたので、彼の方でも彼等を避けた。彼は、夕方でなければ部屋を出ることをしなかつた。夜、寢床にはひらうとはしなかつた。彼が夥しく服用した鐵劑は彼の消化を不良にした。そして次の夏には醫者が彼をカルルスバードへ送つた。

秋になつて、彼がウブサラに歸つて來ると、噂が、いやな噂が擴がつてゐた。それは黒雲

のやうに町の上を掩つてゐた。それは恰も下水が開かれたかのやうだつた、そして、人々は、この市が、この素晴らしい文明の創造物が、害毒の海の上に打ち建てられてゐて、而も同時にその鏈を解いて住民を毒することが出来るのを、突然に心に留めたかのやうであつた。テオドル・ウェンネルストローエムは、情熱の發作のため或る友人を襲うたといふ噂が立つた。そして、その噂は嘘ではなかつた。

彼の父は、ウブサラへ出掛けて行つた、そして神學評議員會の會長に面會した。病理學の教授が出席してゐた。何が爲されねばならぬだらうか？ 醫者は沈黙を守つてゐた。人は、彼の意見を強ひた。

「あなた方がお訊ねになる以上は、」と彼は言つた。「私は答へなければならぬ。しかし、あなた方が知つてゐられると同様のことしか知りません、そこには唯だ一つの救濟があるのみです。」

「で、それは？」と神學者が訊ねた。

「お訊きになる必要がありますか？」と醫者は答へた。

「さうだ。」と既婚者なる神學者は言つた。「多分、自然は人間から不徳を要求しはしまい、と仰しやるのでせう？」

父親は、事態を全く理解したと言つた。けれども彼は、その息子が逃げ出すであらうといふ危険のために彼に對して勸告することを恐れると言つた。

「若しも彼が、自分のことを考へ得ないとすれば彼は愚人でなければならぬ。」と醫者は言つた。

會長は、さういふ亂暴な會話は、もつと適當な處でやつてくれるようにと要求した……。彼自身では、それに附け加へて言ふべきことを何も持たなかつた。

これで事件はお終ひになつた。

テオドルが上層階級の一員だつたので、その醜聞は隠匿された。數年後に、彼が最後の試験をパスすると、醫者は彼をスバ(一週 泉地)へ送つた。非常に多くの規那鹽を採つたことが、彼の膝に影響した、そして彼は杖を二本突いて歩いてゐた。スバでは彼は、病人達の間に在つてさへ目立つた程工合が悪さうに見えた。

しかし、三十五になる獨逸人の老嬢が、この不幸な男に同情した。彼女は、公園の淋しい東屋で彼と共に人生の問題を論じなどして、多くの時間を過した。彼女は道德の標準を高めることを目的としてゐた大きな福音教會の一員だつた。彼女は新聞と雑誌にのせる主意書を彼に見せた。それらの主なる使命は、賣淫の撲滅といふことであつた。

「私を御覽なさい、」と彼女は言つた。「私は三十五になりますが、非常な健康を楽しんでゐます！ 不道德は必要な罪惡だなどと言はれてゐるなんて、何といふたはごとでせう。私は注視しました、そしてクリストの爲めに良き戦ひを闘つたのです。」

この若い僧侶は黙つて、彼女のよく發達した姿を、その大きな臀を、彼自身の衰へた肉體と比較してゐた。

「この世に於ける人間と人間との間には何といふ違ひがあるのだらう。」といふのが、彼の口にしない註解であつた。

その秋に、テオドル・ウエンネルストローエム師と老嬢ソフィア・ライドショルツとは婚約して了つた。

「救はれた！」その報知がストックホルムの彼の家に達した時、父は溜息をついた。

「どういふ結果になるんだらうな、」と軍隊に居る兄は考へた。「俺の可哀想なテオドルは、『愛し合ふと同時に死んで了ふあのアストラ』の一人ではあるまいか。」

テオドル・ウエンネルストローエムは結婚した。婚禮の後九箇月すると彼の妻は、尙せむし病の男の子を彼の爲めに生んだ——そのあと十三箇月して、テオドル・ウエンネルストローエムは最後の息を引取つた。

死亡證書を書き上げた醫者は、二十年を大して出てゐない若い夫の骸骨を入れた小さな棺のそばに泣きながら立つてゐる素晴らしく健康な女を見た。

「プラスは大き過ぎたし、マイナスは小さ過ぎた。」と彼は考へた。「そこでプラスがマイナスを喰ひ盡したんだ。」

けれども、日曜日に息子の死の報知を受取つた父は、箴言を讀むために坐つた。讀み終ると彼は、沈黙考に陥つた。

「道德が死で酬いられる世界には何か非常に間違つたことがあるに違ひない。」と彼は考へた。

そして、それからまた二人の夫と八人の子供等とを持つた貞節な寡婦ライドショルツは、人間の過剰と不徳に就いてのパンフレットを書いた。しかし、彼女の義兄は彼女を、夫を殺した呪ふべき女と呼んでゐた。

貞潔以外の何物かである中尉は、結婚してゐて、六人の子供等の父であつた。彼は昇進した、そして生を終るまで幸福に暮した。

戀愛とパン

助手は、少佐の娘の手を求めに彼を訪問するまでは、麥の値段を調べようなどとは思ひもしなかつた。ところが少佐はそれを調べてゐるのだつた。

「私はあの女ひとを愛してゐます。」と助手は言つた。

「君の俸給はいくらだね？」と老人は言つた。

「え、現在では千二百クラウンです。が、私たちは愛し合つてゐるんですから……」

「そんなことはわしにはどうでもいゝのだ。千二百クラウンでは十分ではないな。」

「でそれに、俸給以外に少しは出来ます。で、ルイザは知つてゐますが、私の心は……」

「馬鹿なことを言ひなさるな！ 俸給の外にいくらあるのだね？」

彼は、紙と鉛筆とをとり上げた。

「で、私の感情は……」

「俸給の外にいくらあるのだね？」

で彼は、吸取紙の上に譯の分らない文字を書いた。

「おゝ！ 我々は十分うまくやつて行きます。若しもたゞ……」

「君はわしの質問に答へようとしてゐるのか、かゝるのほかにいくらあるので
す？ 數字だ！ 數字だよ、君！ 事實だ！」

「私は、一枚十クラウンの翻譯をやります。フランス語の教授をやります。校正をやる見込
みもあるんです……」

「見込みは事實でない！ 數字だよ、君！ 數字だ！ いゝかね、さア、書き留めるよ。何
を翻譯してゐるのです？」

「何を翻譯してゐるかつてですか？ そりや直ぐには言へませんね。」

「直ぐには言へんとな？ 君は翻譯をやつてゐると云つたでせう、それが何だかわしに言へ
んのかね？ そんな出鱈目を言ひなさるな！」

「私は、ギゾーの文明史を譯してゐるんですよ、二十五枚です。」

「一枚十クラウンとすると二百五十クラウンになりますな。それから？」

「それからですか？ 前もつてどうお話することが出来ませう？」

「本當に君は、前もつて話すことが出来ないのかね？ だが君は御承知の筈だ。君は、結婚
するといふことは唯だ一緒に生活して楽しむといふだけのことだと思つてゐるやうです

な！ どうして。ねえ君、子供が生れますよ、子供には食はせなけりやならんし、著せなけ
りやならん。」

「すぐに子供が出来する必要はないんです、誰でも我々が愛し合つてゐるやうに愛してゐれ
ば。」

「どんな風に君たちは愛し合つてゐるのだね？」

「我々の愛し合つてゐるやうにです。」彼は、その胴着ちよつきに手を當てた。

「それで、君たちのやうに愛してゐれば誰でも子供は出来ないといふのかね？ 君は氣が違
つてゐるに違ひない！ だが君は禮儀ある尊敬すべき社會の一員だから、わしは許しを與へ
ませう。だが時間を上手にお使ひなさいよ、いゝかね、そして収入を増しなさい、困難な時
がやつて来るからね。麥の値段は暴騰してゐるのだ。」

助手は、その最後の言葉を聞いた時には顔中眞赤にした。がこの老人の承諾を聞いた時の
彼の喜びは、その老人の手をとつてそれに接吻した程に大きかつた。彼が如何に幸福であつ
たかは神が知つてゐたであらう！ 彼が初めてその未來の花嫁に腕をかして町を歩いた時、
彼等二人は光り輝いてゐた。往き來の人々は、ちつと立留つて彼等の勝利の進軍を賀するた
めに道路に整列してゐたやうに彼等には思はれた。そして彼等は、誇らしげな眼つきをして

肩をいからして弾力のある歩調で歩きまはつた。

夕方になると彼は、彼女の家を訪問した。彼等は部屋の真中に坐つて、校正刷を讀んだ。彼女は彼を助けた。「この男はいゝ奴だ。」と老人はにこ／＼してゐた。それが済んで了ふと彼は、彼女を抱いて言つた。「さア、これで我々は三クラウン儲けたのだ。」そして彼は彼女を接吻した。次の晩、彼等は芝居へ出掛けて行つた、そして彼は彼女を馬車で家まで送つた。で、それは十二クラウンかゝつた。

時とすると、彼が晩に教授に出なければならなかつたやうな時にも、彼は（男が愛のためにしない何事があらう？）その課業を止めにして、その代りに彼女を散歩に連れ出した。

だが、結婚の日は近づいた。彼等は、非常に忙がしかつた。彼等は、家具を選ばなければならなかつた。彼等は、最も重要な買物からやり始めた。寢室の道具を買つた時にはルイザは一緒に行きたがらなかつたが、しかしその間際になると彼女は、彼と一緒に行つた。彼等は、二つのベッドを買つた。それは勿論並んで据ゑられるものであつた。家具は胡桃製のものでなければならなかつた。どんな小さな物一つでも本物の胡桃製でなければならなかつた。それから彼等は、赤と白との棒縞のある蓋被のついたパネの蒲團と、羽毛の一杯詰まつた枕と、正確に等しい二つの雁の毳毛わたいひの衾とを買はなければならなかつた。ルイザは、青

いを選びとつた、何故ならば彼女は非常に色白であつたから。

彼等は、最上等の店へ行つた。彼等には、赤い吊ランプも、巴里の石膏で出来たヴィーナスもなければならなかつた。それから彼等は食事道具を買つた、それから六打の異つた形の縁の磨かれた盃、それから、彼等の頭文字を彫りつけたナイフとフォーク。その次には臺所道具！これには母親も一緒に行かなければならなかつた。

そして其他にも、彼の爲なくてはならないことは實に多かつた！拂ひの書附を受取らねばならず、海岸へ旅行もしなくてはならず、商人や大工とも會つておかねばならず、家も見付けなければならず、窓掛も用意しなければならなかつた。彼は、すべての事をひとりやつてのけた。勿論その爲には、彼は自分の仕事を怠らなければならなかつた。しかし、一度結婚して了ひさへすれば、間もなくそれを償ふことが出来ると思つてゐた。

先づ第一に、二つの部屋を借りようとするのが問題であつた、何故なら彼等は、恐ろしく經濟的にやつて行かうとしてゐたから。で彼等はたゞ二つの部屋を借りようとするだけだつたので、その部屋をよく飾り付ける爲に金を費ふことが出来た。彼は、政廳通に在る家の第一階の臺所附きの二室を六百クラウンで借りた。それならば同様に第四階の臺所附きの三室をも五百クラウンで借りることが出来るとルイザが言ひ出した時には、彼は少し當惑した。

けれども、彼等が愛し合つてさへ居るとしたら、そんなことが問題だらうか？ さうだ、勿論ルイザは承知した。しかし、より高い金を拂つて三室に住むと同様に、もつと安い金で四室を借りても、彼等は互ひに相愛することが出来はしなかつたらうか？ さうだ、彼は自分が愚かであつたことを承認した。しかし、彼等が互ひに相愛してゐる限り、そんなことはどんな問題になり得たらう？

部屋は、飾りつけられた。寢室は、小さな寺院のやうに見えた。二つのベッドが、二つの馬車のやうに並んで置かれてゐた。太陽の光線が、青い雁の毳毛の蒲團と、白い白いシートと、老嬢の叔母が彼等の頭文字を組合せて縫ひとりした枕掩ひの上に落ちてゐた。その頭文字は、花を象つた二つの大きな文字で出来てゐて、それが一つに相抱き、そしてその角々で二つが觸れてゐる處では何處でも、其處でも此處でも相接吻してゐた。花嫁は、日本製の屏風で仕切られてゐる彼女自身の小さな寢床を持つた。食堂と書齋と朝の部屋とを兼ねてゐる應接室には、(千二百クラウンもした)彼女のピアノと、鳩小屋の穴のやうな十二の穴のついた書物机と、(どんな些細なものも皆眞物の胡桃製)姿鏡と安樂椅子と、食器棚と食卓。「此處にはまるで貴族でも住んでゐるやうだ。」と彼等は言つた。そして彼等は、そこに在る籐椅子と共にいつも不愉快さうに見えるところの別々な食堂をどうして人々が欲するのか、とい

ふことを理解することが出来なかつた。

結婚式は土曜日に舉行された。日曜日の朝になつた、彼等の結婚生活の最初の日。おゝ！それは何といふ生活だつたらう！ 結婚するといふことは、快きことではなかつたか！ 結婚は素晴らしい制度ではなかつたか！ 人は、すべての事に於いて勝手氣儘に振舞ふことが出来た。その上両親と親族の者とは、彼にその結婚を祝福しにやつて來るのだつた。

朝の九時になつても、彼等の寢室は、なほ暗かつた。彼は、窓掛けを開けて日光を差し込ませようとはしらずに、赤いランプをつけてゐた。そのランプは、青い雁の毳毛の蒲團や、今は少し皺になつてゐる白いシートや、薔薇のやうに赤くなつて恥かしげもなく立つてゐる巴里石膏製のヴァイナスやの上にその魅力ある光を投げかけてゐた。そしてその赤い光は、彼の可愛らしい妻の上にも落ちてゐた。彼女は、心を痛めてゐるやうな様子をして枕に身を埋めてゐたが、それでも今までにそれ程よく眠つたことは生涯に無かつたかのやうにひどく爽快な心持だつた。今日は日曜なので町では商店は皆店を閉めてゐた。そして教會の鐘は、高い熱心な響を以つて朝の勤行に人々を呼び集めてゐた、恰もそれは全世界の人々を教會へ呼び寄せて、男と女とを創造し給ひし神を讚美させようと欲してゐたかのやうであつた。

彼は、起きて朝飯を命じに行くから眼を閉ぢてゐるやうにと彼の可愛い花嫁に私語いた。

彼女は枕に頭を埋めた、その間に彼は上つ被りをひつかけて、屏風のうしろへ着物を着に行つた。

太陽の光線の輝かしい廣い路が、居間の床の上に横つてゐた。彼は、今が春なのか夏なのか、それとも秋なのか冬なのか知らなかつた。彼が知つてゐたのは、日曜だといふことだけであつた！ 彼の獨身生活は、醜い暗い何物かのやうにうしろへ引き退いて了つてゐた。彼の小さなこの家庭を見ることは、幼年時代の家庭のかすかな追憶によつてその心を躍らし、且つそれと同時に未來に對する華かな見込みを展開した。

如何に力強く彼は感じたか！ 未來は、彼にとつては山が向うから彼に逢ひにやつて來るかとも思はれた。彼が一吹き吹けば山は彼の足元に砂かなんぞのやうに倒れもするであらう。彼は、破風や煙突の上を越えて、その小さな花嫁を腕に抱きながら遙かに飛んで行くことも出来るであらう。

彼は、部屋の中に散らかつてゐた着物を寄せ集めた。彼は、自分の白いネクタイが額縁の上にはぶら下つてゐるのを見出した。それは大きな白い蝶のやうに見えた。

彼は臺所へはひつて行つた。新しい銅の器が如何にキラ／＼輝き、新しい錫の釜が如何に光つてゐたらう！ そしてそのすべての物は、彼にそして彼女に屬してゐるのだつた！

彼が召使女を呼ぶと、女はベッティコートのままでその部屋から出て來た。しかし彼は、それにも氣づかず、又彼女の肩が裸かであつたことにも氣づかなかつた。彼にとつては、全世界に、唯一人の女しかなかつた。彼は、娘に父親がその娘に話すやうに口をきいた。彼は、料理店へ行つて、朝飯を、最上等の朝飯を、すぐにいひつけて來るやうにと彼女に言つた。黒ビールとブルガンディ！ 番頭は彼の趣味を知つてゐるのだ。彼女は彼の言葉だけ取次げばよかつたのだ。

彼は、臺所から出て、寢室の戸を叩いた。

「はひつてもいゝかい？」

そこには、稍や驚いた叫び聲が起つた。

「あら、いけませんよ、貴方、一寸待つて！」

彼は、自分で朝飯の食卓の用意をした。朝飯が料理屋から持つて來られた時彼は、それを彼女の新しい朝飯用の食器に移した。彼はすべての禮式に従つてナプキンを疊んだ。彼は、酒用のコップを拭いた、そして最後に彼女の婚禮の時の花束をもつて來て、それを彼女の席の前に在つた花瓶に入れた。

彼女が、刺繍のされた朝衣を着て寢室から出て來て、まばゆい日光の中に歩を運んで來た

時、彼女はほんの少しブーツとするやうな心持がしてゐた。彼は、彼女を安樂椅子の中に助け入れて、酒瓶からリキュールを少し飲ませ、ハララゴのサンドウィッチを食べさせた。

すべてが何といふ面白いことであつたらう！ 人は結婚した時には自ら楽しむことが出来る。もしも母親が、朝のこんな時間にリキュールを飲んでゐる娘を見たとしたら、彼女は何と言つたであらう！

彼は、彼女をまだ許嫁であつたかのやうに世話した。結婚後の最初の朝、彼等は何といふ朝飯を食べてゐたことか！ そして誰も何とも言ふ権利は無かつたのだ。すべての事柄が、全く正當であつた、人は最善なる意識を以つて自ら楽しむことが出来た。そこでそれは全く最も楽しい點であつた。彼がこんな朝飯を食べたことは初めてはなかつた。しかし其時と今との間には何といふ相違があつたらう！ その時には彼は、それは／＼としてゐて、それに不満足だつた。彼は今そのことを考へても堪らない氣がした。そして彼が牡蠣を食べた後、生一本のスウェーデンの黒ビールを一杯飲んだ時には、彼はあらゆる獨身者に對して最も深い輕蔑を感じたのであつた。

「結婚しない人々は何といふ馬鹿者だらう！ 何といふ我慾だ！ さういふ奴等は犬と同様に税をかけてやるがいゝんだ。」

「結婚する資力のない貧乏人は可哀想ですわね、」彼の眞面目な可愛い妻は、親切さうに答へて言つた。「何故つて、さういふ人達も資力さへあればきつと皆結婚して了ふんでせうか
らね。」

或る小さな苦痛が、助手の胸を射通した。一寸の間彼は、自分がいくらか向う見ず過ぎはしなかつたかと氣遣ひ恐れた。あらゆる彼の幸福は、財政問題の解決如何にかゝつてゐた。そして若しも、若しも……馬鹿な！ 一杯のブルガンディだ！ 次に仕事を始めるぞ！ 見てゐるがいゝ！

「ゲームをやらうか？ クランベリイと胡瓜で！」

若い妻は、一寸びつくりした、がそれは實際結構であつた。

「ルイス、貴方、」と彼女は、その震へる小さな手を彼の腕に載せて、「私達にそんなことが出来るでせうか？」

幸ひにも彼女は、「私達」と言つた。

「なアに！ 一度位何でもないさ！ いづれは馬鈴薯と鯉でも食事は出来るんだからね。」

「貴方、馬鈴薯と鯉なんか食べられて？」

「さう思つてゐなくちやならないんだ！」

「體によくない程お酒を飲つて、それに鯉のあとでピフテキを待つおつもり？」

「馬鹿な！ そんなことがあるもんか！ お前の健康のために、戀人よ！ ゲームは素敵だ！ アーチチョークもいゝね！」

「いけませんよ、でも貴方は氣違ひみたやうなことを仰しやるのね、ねえ貴方！ 今時分にアーチチョークだなんて！ 大變な拂ひをとられなきやなりませんわ！」

「拂ひだつて！ あれはいゝぢやないか？ 生きてゐることは光榮だとは思はないかい？」

「おゝ！ 素敵だ、素敵だ！」

午後の六時には、馬車が門前に着いた。若しも柔かなクッションの上に贅澤に凭れてゐることがそれ程快くなかつたとしたら、この若い妻はそれを怒つたかも知れない。その時馬車はデリア公園の方へゆる／＼と走つてゐた。

「まるで長椅子にでも寝てゐるやうだね。」とルイスは私語いた。

彼女は、面白さうに、自分の日傘で彼の指を打つた。お互ひの知り合ひの人達が、歩道から彼等にお辭儀をした。友人達は、かう言つてゐるかのやうに彼に向つて手を振つた。

「おゝい！ 畜生め、君は財産を手に入れたんだな！」

通行人が如何に小さく見えたらう、往來は如何に滑らかだつたらう、パネとクッションの

上に乗つてゐることは如何に快かつたらう！

人生は常にこんな風でなくてはならない。

それは丸一月續いた。舞踏會、訪問、食事、芝居。時には勿論彼等は家の中にはひつてゐることもあつた。そして家に居ることは、他の何處へ行くよりも一層喜ばしかつた。例へば兩親の家で夕食をすまして、「さやうなら」と言はずに妻を連れ出して、馬車へ入れてピシャリと扉を閉ぢて、彼女の兩親達に領いて、「さア、我々は家へ歸ります、我々だけの四壁の中へ！ そして全く我々のしたいと思ふことをするのです！」と言つたりすることは、どんなに楽しいことであらう！

それから、家で軽い晩飯をとつて、食卓に坐つたまゝ明方近くまでも雑談するのだ。

ルイスは、家ではいつも非常に感じ易かつた、少くも理論では。或日彼の妻は、晝飯に、鹽鮭とミルクで煮た馬鈴薯とオートミール・スープとを出して彼を試みた。おゝ！ 如何に彼は喜んだか！ 彼は、念の入つた獻立には食傷してゐたのであつた。

次の金曜日に、彼女が再び晝飯に鹽鮭をほのめかした時、ルイスは二羽の松雞を提げて歸つて來た！ 彼は、鬨のところから彼女に叫びかけた。

「まア、考へて御覽、おい、大變なことが起つたんだぜ！ 大變なことだよ！」

「まア、何です？」

「とても解るまい、僕は一番の松雞を買つたんだよ、自分で市場へ行つて買つて來たんだ、値段は——當て、御覽！」

彼の小さな妻は、珍らしがるよりはむしろ困つてゐるやうだつた。

「考へても御覽よ！ 二羽で一クラウンなんだ！」

「私は番で八ペンスで買つたことがあつてよ、でも——」彼女は、彼の氣持をすつかりひつくり返して了はないようと、可成慰めるやうな調子で付け加へた。「それは、寒中のことでしたけれど。」

「さうかね、だが随分安く買つたと思つてくれなけりやならないよ。」

彼女は、彼の幸福にしてゐるのを見る爲には何とでも思つてやつたに違ひない！

彼女は、食事の時試みに煮たひき割麥を命じて置いた。しかし、ルイスは松雞を食つて了つてから、自分がひき割麥を非常に好んでゐるといふことを彼女に示す爲にそれを食はうとしたのだが、思ふだけに食へることが出来なかつたことを後悔した。彼は、實際ひき割麥が好きなのであつた——ミルクは瘧に襲はれて以來は彼に合はなかつた。彼は、ミルクを採る

ことは出来なかつたが、ひき割麥は毎晩食卓に載せたいのであつた、若しも彼女が腹を立てさへしなかつたら毎晩で一生涯つゞいてもいゝのであつた。

で、ひき割麥は、決して二度と彼のテーブルの上には表はれなかつた。

彼等が結婚してから六週間経つと、若い妻は病氣になつた。彼女は頭痛がして、氣持が悪かつた。それは大したことではなかつた、一寸した感冒であつた。しかしこの氣持の悪さは？ 何かいけない物でも食べたのだらうか？ すべての銅製の器具は新しい錫の被物をつけてはゐなかつたらうか？ 彼は、醫者を呼びにやつた。醫者は微笑して、大變結構だと言つた。

「結構だとは何だ？ おゝ！ 馬鹿な！ そんな筈はない。どうしてそんな事があり得るだらう？ いや、きつと寢臺の壁紙がよくなかつたんだ。あれは砒素を含んでゐるに違ひない。早速あれを少し切りとつて化學者に送つて調べて貰はう。」

「全く砒素は含まれてゐない。」といふ返事が化學者から來た。

「何て不思議なこつた！ 壁紙には砒素が含まれてゐないつて？」

若い妻は、それでもまだ工合が悪かつた。彼は、醫學書と相談した、そして彼女の耳に或る質問を囁いた。「そら御覽！ 暑い湯あみだぜ！」

四週間後には産婆が、すべては「有るべき通り」だと宣言した。

七六

「有るべき通りだつて？ そりや、勿論さ！ それにしても、ちつと早過ぎたな！」
しかし、どうすることも出来なかつたので、彼等は喜んだ。考へて見るが、いゝ、赤ん坊だ！
彼等は、お父さんとお母さんになるのだ！ どんな名をつけることになるだらう？ 勿論、それは男の子だらう。確かにさうだ。

けれども今や彼女は、その夫と眞面目な會話をした！ 結婚以來彼は、翻譯も校正もしなかつた。そして彼の俸給だけでは十分ではなかつた。

「さうだ、彼等は明日のことを全く考へたことはなかつた。しかし、ねえ、若い時は二度と無いんだ！ だが、もう生活を變へよう。」

次の朝助手は古い學校友達の書記を訪ねて借金の保證人に立つてくれと頼んだ。

「ねえ、君、人の父にならうとする時にはどれ程入費がかさんで来るかといふことを考へなくちやならないんだよ。」

「全くさうだ、おやぢさん。」と書記は答へた。「だから僕は結婚することが出来ないでゐるんだ。しかし君は財産があるから幸福だね。」

助手は、自分の要求を持ち出すことを躊躇した。どうして彼は、來るべき事件のための入

費を支給すべく助けて貰ふことをこの貧しい獨身者に頼むだけの圖々しさをもち得たであらう？ 彼自身の家庭を作るだけの金を持つてゐないこの獨身者に？ 彼は、それを言ひ出すことが出来なかつた。

彼が食事に歸つて來ると、彼の妻は二人の紳士が彼に會ひに來たと言つた。

「どんな人達だつたね？ 若い人かい？ 眼鏡をかけてゐたかい？ すると、確かにワックホルムで逢つたことのある舊友の二中尉に違ひない。」

「いゝえ、中尉だなんて筈はありませんわ。二人共年を取り過ぎてゐましたから。」

「ぢやわかつた。ウブサラの古い學友だ。多分講師をやつてるPと、現在では牧師補のOとにちがひない。奴等は、昔の親友が夫としてどんな風になつたかを見に來たんだ。」

「いゝえ、ウブサラからぢやありませんよ。ストックホルムから來たんです。」

下婢が呼び入られて訊問された。下婢の考へでは、その訪問者は見事らしい着物を着て、ステッキを持つてゐた。

「ステッキだつて！ それぢやどんな人間だつたんだか全く解らない。いゝさ、また來ると言つたんなら間もなく解るだらう。だが、話は變るがね、僕は偶然に素晴しく安い室苺を見付けたんだよ。そりや全く馬鹿げた安さなんだ！ まあ考へても御覽よ、一籠で一シルリン

グ六ペンスの室母なんだ！ 而も今時分でだぜ！」

「でも、ねえ貴方、そんなに冗費じつぱくしてゐたらどうなつてくでせう？」

「大丈夫さ。今日こそは翻譯の註文をとつて来たからね。」

「しかし貴方は借金してゐるでしょ、ルイス？」

「下らない！ 何でもないさ！ 早速大借款を起しやいゝんだ。」

「借款！ でもそりや又新しい負債になつて来るんでせう！」

「さうさ！ だが樂になるだらうよ！ 今はそんな用事は話さないでくれ！ この母は旨さうぢやないか？ どうだい？ これでシェリイを一杯飲んだらこの上なしだね。さうは思はないかね？ リーナ、店へ急いで行つてシェリイを一瓶とつて来い、あすこには最上等のがあるから。」

彼が晝寢から醒めた時彼の妻は、眞面目な話を持ち出した。

「怒らないでね、ねえ貴方、貴方怒る？」

「怒るつて？ 僕が！ どうして、そんなことがあるもんか！ それは家政のことかね？」

「えゝ！ 拂ひが溜つてゐるんですよ！ 肉屋は勘定をせいて来るし、馬車屋の男は金を請求するし、それが一番厭なのよ。」

「それだけかい？ 明日は一厘も残らず拂つてやる。どうしてあいつ等は、そんな下らないことでお前を惱ますことが出来るんだらう？ 明日はすつかり拂つてやるが、もう二度と探つてはやらないからいゝ。さア、もうそんな話はおよしね。散歩に出よう。馬車が無い！ よし、デীア公園まで辻馬車を雇はう、あれも氣持のいゝもんだせ。」

彼等は、デীア公園へ行つた。彼等は、料理店にはひつて私室を求めた。すると人々は、彼等をじろく見て私語き合つた。

「奴等は、我々が外で浮かれてゐると思つてゐるんだ、」と彼は笑つた。「何て可笑しな事だ！

何て氣狂ひだらう！」

けれども彼の妻は、それを好まなかつた。

彼等は、莫大な拂ひをとられた。

「もし家に居さへしたらなア！ その金で、我々はすゐぶん澤山買ふことが出来たんだのになア。」

月日は経過した。かの大事件が、次第々々に近づきつゝあつた。搖籃を買はなければならなかつた、産衣も。色々の物が入用であつた。若い夫は、終日外で忙しかつた。麥の値段

は昇つた。困難な時が迫つて來た。彼は翻譯も校正も何の仕事も得ることが出来なかつた。人間は、物質主義者になつた。彼等は本を買ふために金を費しはしなかつた。彼等は食物を買つた。何といふ殺風景な時期に我々は生息してゐたことであらう！理想は次々に解體し、松雞は一番二クラウン以下では買へなくなつた。馬車屋は、無代で馬車を持つて來るやうなことはなくなつた、何故ならば馬車の持主も、他のすべての人々と同じく妻子を養はなければならなかつたから。店々では、物品の代價には正金を拂はなければならなかつた。お！彼等は悉く何といふリアリストだつたであらうか！

大事件の日は遂にやつて來た。それは夕方であつた。彼は、産婆の許へ走らなければならなかつた。そして彼の妻があらゆる生みの苦しみを苦しんでゐた間にも、彼は玄關へ出て債鬼を宥めなければならなかつた。

たうとう彼は、その腕の中に娘を抱いた。彼の涙が赤子の上に落ちた、何故なら今彼は自分の責任を、彼には背負ひきれない程の責任を意識したからであつた。彼は、新しい決心を固めた。しかし彼の神経は、弛緩してゐた。彼は、終り得さうにも思はれない翻譯の仕事をしてゐた。それといふのも彼は、絶えず外出して忙しく働かねばならなかつたから。彼は、喜ばしい報知を齎らして、町に居た義父の許へ走つて行つた。

「可愛い女の子が生まれました！」

「それはよかつた、」と義父は答へた。「子供を養つてゆくことが出来るかね？」

「今のところは駄目なんです、どうか、我々を助けて下さい、お父さん！」

「わしは、君達の目下の困難を乗り切らせてあげたいと思ふが、それ以上のことはわしには出来ない。わしの財産は、やつとわしの家族を支へるだけしかないのだ。」

産婦は、チキンを食はねばならなかつた、それを彼は自ら市場へ買ひに行つた。それから一瓶六クラウンの葡萄酒も、それも最上等のものでなければならなかつた。

産婆は、百クラウンを期待してゐた。

「我々は他の人々より少い禮をやるなんてことがどうして出来やう？あの産婆は、つい此間も大尉のところでは百クラウンの小切手をもらつたといふぢやないか？」

間もなく若い妻は再び、起きられるやうになつた。彼女は、小娘のやうに見え、柳のやうに瘠せかけて、全く、やや青白かつた、が青白いのは彼女には相應しかつた。老人は、その聲を訪ねて、内談をした。

「當分子供を拵へてはいかんね。」と彼は言つた。「でなければ、君は零落して了ふ。」

「お父さんのお言葉としては何といふこつてせう！我々は結婚してゐるんぢやありません

か！我々は愛し合つてはゐないんでせうか？ 我々は家族を持つてはならないんでせうか？

「いけないといふことはないが、君が家族を支へ得るやうになるまではいけない。愛し合ふことは大變結構だが、君には責任があるといふことを忘れてはいかん。」

彼の義父も亦物質主義者になりきつて了つた。おゝ！ 何といふ惨めな世の中であらう！ 理想の無い世界！

家庭は顛覆した、しかし愛は残つた。何故ならば愛は強く、そして若い夫婦の心は柔かだつたから。執達吏は、これに反して、柔かなところではなかつた。差押へは迫つて來た。そして破産に脅かされた。さあ、差押へるなら差押へるがいゝ！

義父は、自分の娘と孫とをつれかへらうとして大きな旅行用の馬車でやつて來た。彼は、その聲に警告して、負債を支拂つて、妻子のために家庭を作ることが出来るやうになるまではもう顔を見せてくれるなど言つた。彼は、その娘には何とも言はなかつたが、彼にとつては、何だか誘拐された少女を家へ連れ戻るといふやうな心持がしてゐた。それは恰も彼が自分の無邪氣な少女を氣まぐれな賞讃者に貸して、今彼女を「汚されて」受取るのだとでもいふやうな具合だつた。彼女はむしろ夫と一緒にゐたいと思つたのであらうが、彼は、彼女に捧

ぐべき家庭さへ持つてはゐなかつた。

そこで、一箇年間の夫は、獨りとり遺されて、自分の家庭（それを家庭と呼び得るならば。何故といつて、彼は全く家賃を拂つてゐなかつた。）を奪はれて行くのを見成らねばならなかつた。眼鏡をかけた二人の男が、ベッドも蒲團も銅製の釜も錫の道具も食器もシャンデリアも燭臺も、何から何まで運んで行つて了つた！

二つの空つぽな見窶らしい部屋の中に彼はたつた一人とり遺された！ もしも唯だ彼女だけでも彼と共に残つたのであつたなら！ とはいへ、彼女は此處で、こんな空つぽな部屋の中で何をする事が出来たであらう？ 否、彼女は、今居る場所に居る方がすつとよく暮らして行けるのだ！ 彼女はよく面倒を見られてゐた。

今や生活に對する争闘は、痛ましい熱をもつて始められた。彼は、校正係として日刊新聞に仕事を見出した。彼は、夜中に社に居なくてはならなかつた、朝の三時に彼の仕事は終るのであつた。彼は、破産の厄を免れたので、地位を失ひはしなかつたが、しかし昇進の機会を全く失つて了つた。

後には彼は、一週に一度だけ妻と子供とに會ひに行くことを許されたが、彼女一人に會ふことはどうしても許されなかつた。彼は、義父の寢室に隣つた小さな部屋で土曜日の夜を過

ごすのであつた。日曜の朝になると彼は町へ歸らなければならぬ、何故なら月曜の朝には新聞が出るのだから……。彼は、やつと庭の門まで一緒に出ることを許されてゐる妻と子供とにさよならを言ふ、彼は、一番遠くの小高いところへ来てから彼女たちに向つてもう一度手を振り、そして彼の零落、彼の不幸、彼の屈辱に従ふのである。而も彼女も、より少く不幸ではないのである。

彼は、負債を拂ふには二十年間かゝるであらうといふことを數へた。で、それから？ 其時でさへ彼は、妻子を支へることは出来ないのだ。では彼の計畫は？ 彼は何も持つてはゐない！ もしも彼の義父が死んだとしたら、彼の妻子は路傍に投げ棄てられるであらう。彼は彼等の唯一の支柱である者の死までを思ふに耐へなかつた。

おゝ！ あらゆる彼女の創造物に糧かてを給する自然が、人の子を獨り饑ゑさせて置くといふのは何たる残酷なことであらう！ おゝ！ 何たる残酷なことだ！ 何たる残酷なことだ！ 人生が、あらゆる人々に與ふべき松雞と苺とを持たないとは！ 何といふ残酷なことだ！ 何といふ残酷なことだ！

強要さるゝ者

或る冬の夕方、きつちり九時半に、彼は料理店のガラス屋根のヴェランダへ出る戸口に現れた。彼は數學的な正確さを以つて、手袋を脱ぎながら、始めは右の方を、それから今度は左の方をそのかすんでゐる眼鏡を透して覗いてみて、誰か自分の知り合ひの者が來てゐるはないかと探すのだ。それから彼は、特別の釘にそのオーパー・コートをかける、それは煖爐の右手の方にあるのだ。彼の昔の教へ子である給仕のグスタフが、テーブルの傍へ飛んで來て、何も云はれない前に、テーブル掛けからパン屑を拂ひ落とし、芥子を攪き立て、鹽入れの鹽を綺麗にし、そして、ナプキンを擴げる。それから彼は、矢張り命令も無いのに、メダムラの瓶を持つて來て、ユニオン・ビールの半瓶をあけて、そして、唯だ體載だけに、料理の書附を教師に手渡しする。

「蟹は如何でございますな？」彼は、何かきかねばならないからといふよりは、むしろ形式として訊ねた。

「牝の蟹を。」と教師は答へる。

「大きな、牝の蟹を、」とグスターフは臺所へ通じてゐる話管の方へ歩いて行つて、繰り返して叫ぶ。「プローム様に大きな牝の蟹、それからデイルを澤山添へて。」

彼は、バターとチーズとを持つて來、それからライ麥のパンを非常に薄く二片に切つて、それらの物を教師のテーブルの上に載せる。教師の方は、その間に、ヴラングで夕刊新聞を探してゐたが、やつと官報を見出したばかりだつた。この馬鹿にうまく行かなかつたことを償ふ爲に彼は、晝飯の時暇がなくて讀み了へずにゐた日刊新聞をとり出して、それから先に開いてゐた官報を再びたたんで彼の左手に在るパン籠の上にのせてから、それを讀むために坐る。彼は、ライ麥のパンに幾何學的な畫文字形にバターをぬりつけ、チーズの一片を短形に切り、酒盃を四分の三だけ充たし、そしてそれを脣に持つてゆく。で、その小さな盃が醫藥を含んででもゐるかのやうに躊躇し、頭を振りながら言ふ——うゝ！

彼は、十二年間もこんなことをしてゐた、そして、死ぬ日までそれをし續けるのであらう。

蟹が、それも六匹彼の前に置かれるや否や彼は、その性に就いて調べる、すると、すべてがその有るべきやうにあるといふことが彼自身に箸を取らせようとしてゐる。彼は、ナプキンの一隅をカラーのうしろへ押込み、皿のそばへ二片の薄いパンとチーズとを置き、それか

らビールを一杯に酒を半分注ぐ。そこで彼は小さいナイフをとつて、仕事を始める。彼はスウェーデンで蟹の食べ方を知つてゐる唯一の人である、そして誰か他の者がその同じことをやつてゐる事を見る時には何時でも、彼はそれをどういふ具合にやるか全く知らないのだ、と言つてゐる。彼は、頭の周圍にすつかり刻み目をつけて、それからその穴に脣を押しあてて吸ひ始める。

「これが、」と彼は言ふ。「この動物ぢうで最もいゝ部分なのだ。」

彼は、下の方の部分から胸部を切りとつてその肉に齒をつけて深く吸つて飲む。彼は、アスパラガスでもあるやうなその小さな脚を吸ひ、少量のデイルを食ひ、そしてビールを飲み、ライ麥のパンを一口食ふ。缺からその外皮を注意深くとり去つて、一番小さい脚までも吸つて了ふと、彼は肉を食ふ。一番終ひには彼は、一番下の部分の肉までも攻撃する。三匹の蟹を食つて了つた時彼は、杯半分程酒を飲み、官報に出てゐる辭令を讀む。

彼は、これを十二年の間爲してゐた。そして死ぬまでそれをつゞけるのであらう。

彼が初めて料理店を最眞にし始めたのは丁度二十歳の時であつた。今彼は三十二である。そしてグスターフは、此の場所に十年間給仕人をしてゐたのだ。その定連の誰ひとり、この教師より長くその料理店を知つてゐたものは無かつた、その店主でさへも。彼は八年前に

それを譲り受けたのであつた。彼は數時代のそこへ出入りして食事する者を見てゐた、或者は一年間來た、或者は二年間、或者は五年間。それから彼等は來なくなつて了つて、他の料理店へ行つたり、町を去つたり、結婚して了つたりした。彼は、たつた三十二であるのに大變年取つて了つたやうな心持がしてゐる！ この料理店は彼の家庭であつた、何故なら彼の家具の備へつけてある部屋は、彼が眠る場所に他ならないのであるから。

十時である。彼は、テーブルから立ち上つて、うしろの部屋にはひつて行く、そこには、彼の火酒が彼を待つてゐる。その時分には丁度書籍商がやつて來る。彼等は、將棊を差したり、本に就いての話をしたりする。十時半になると、ドラマチック劇場の第二ヴァイオリン手が、やつて來る。彼は、千八百六十四年の事件の後にスウェーデンに逃れて來て今ではその以前の道樂によつて生計を立てゝゐる年取つたポーランド人である。ポーランド人と書籍商とは共に、五十を越えてゐる、がまるで教師と同輩であるやうに彼とつき合つてゐる。

店主は、帳場のうしろにいつでも居る。彼は、年取つた船長であるが、今の細君と戀に落ちて結婚した。彼女は、臺所を支配してゐるが、滑り戸はいつも開け放しなので、彼女は、老人が閉店時間までに酒を飲み過ぎはしまいかと始終彼から眼を放さずに居ることが出来る。まだ、瓦斯もつかないうちから、老人は寢床に何時でもはひれる用意をしまつてゐる、若し

ラム酒や水を入れる盃の形をした堅い夜の帽子を冠ることを許されさへすれば入る積りで。

十一時になると若い者共がやつて來出す。彼等は、こそくと帳場に近寄つて、二階の密室のどれかがあいてゐはしないかと店主にひそく訊ねる、それから玄關でサラサラとスカートスカートの音がし、そして聲を竊むやうな足音が二階へと這ひ上つて行く。

「成程。」と突然會話の主題を見出した書籍商が言ふ。「何時君は結婚しようと思つてゐるんだね、ブローム、えゝ？」

「僕には結婚なんかする金はないよ。」と教師は答へる。「君御自身こそ何故細君を貰はうとしないんだい？」

「どんな女だつて私のところなんぞへ來るものかね。私の頭は古い皮を冠つた木の幹みたやうなのだからな。」と書籍商は言ふ。「で、その上に、そら、私にはあの婆のスターフツといふものさへ居るんだからね。」

スターフツといふのは、誰も信じてゐない架空の人物であつた。彼女は、その書籍商の實現されない夢の化身であつた。

「だが君、ポトッキイ君は？」と教師が言ひ出した。

「この人は一ぺん結婚したことがある。もう澤山だ。」と書籍商は答へる。

ポーランド人は、振子のやうに頭をがくりと振つてゐる。

「左様、わしの結婚生活は大變幸福だつた。うゝ！」と彼は、言つて、その火酒を飲み終る。「成程、」と教師はつゞける。「若し女といふ奴があんな馬鹿でなかつたら、誰でもそのことを考へるだらうよ。だが女はたまらない馬鹿者だ。」

ポーランド人は、再び頷いて微笑する。ポーランド人なので、馬鹿といふ言葉がどういふ意味なのかよく解らないのである。

「わしの結婚生活は大變幸福だつた。うゝ！」

「で、それから子供達の騒ぎがあつて、子供達の衣服は始終ストロウのそばで乾かされるし、召使がゐるし、そして、臺所からはしよつちう臭氣がたゞよつて来る。いや、まつびらだよ！ おまけに多分眠られない夜が待つてるといふわけだ。」

「うゝ！」とポーランド人はそれらの言葉を終りに附け加へた。

「ポトッキイ君は、既婚者の不平に耳を傾けてゐる獨身者に怨を含んで『うゝ』といふのだ。」と書籍商が言つた。

「何でそんな？」と鰥夫はびつくりして訊ねる。

「うゝ！」と書籍商は、彼の眞似をして言ふ。そして會話は、皆の苦笑と雲のやうな煙草の

烟とに墮して行く。

もう夜中である。男性と女性との入り交つた聲の合唱を惹起してゐた二階のピアノも沈黙してゐる。給仕は話管からヴェランダへの數へきれない往復を終つた、店主は、二階で命ぜられたシャンパンの最後の數瓶を日記帳に加へる。三人の友達は、椅子から立ち上つて家へ歸る。二人は彼等の「無垢の寢床」へ、そして書籍商は彼のスターフヅの許へ。

教師ブロームが二十歳になつた時、彼はウプサラでの勉強を中絶してストックホルムで助教授の位置を受けることを餘儀なくされた。加之彼は、個人教授をやつてゐたので、全くい収入を得た。彼は、生活に就いて多くを求めなかつた。彼の欲してゐたあらゆるものといつては、平和と清潔とであつた。年とつた或る婦人が彼に家具附の部屋を貸してくれた、そこで彼は、通常獨身者が見出すよりも多くのものを見出した。彼女は、彼を世話してくれ、彼に親切にしてくれた。彼女は、自然が、彼女から生れ出でる子供たちの上に彼女をして與へさせようとしてゐたところのあらゆる優しさを、彼に與へた。彼女は、彼の着物の修繕をしてくれ、そして大抵なことは彼の面倒を見てくれた。彼は、幼ない子供の時分に彼の母を失つてゐた、従つて無報酬の親切には少しも馴れてゐなかつた。それ故、彼は彼女の奉仕

を、自分の自由を干渉するものとして見る傾向があつた、とは云へ彼はその親切を受けてゐた。けれども矢張り、料理店が彼の眞の家庭であつた。其處では彼はすべての物に對して支拂ひをした。そして勘定書を起えるやうなことは少しもなかつた。

彼は、スウェーデンの内地の小都會に生れた。従つて彼はストックホルムには他人であつた。彼は誰も知らなかつた。どんな家庭とも訪問するやうな間柄ではなかつた、そして料理店以外では何處でも見知り越しの人に出逢ふことはなかつた。彼は自由に彼等と話をするが、決して彼等に信頼を與へはしなかつた。實は彼には與ふべき何等の信頼も無かつたのである。學校では彼は、三年生を教へてゐた、そしてこのことは彼に、自分の生長を妨げられてゐるといふ感じを與へてゐた。非常に以前には、彼自身も三年生であつたが、次第に七年生まで昇つた、それから大學で數學期間學んだ。今彼は三年に戻つてゐた、とりも直さず彼は十二年間動かずに其處に居たのだ。彼は、ユークリッドの第二と第三の本を教へてゐた、これが丸一年間に教ふべき課程であつた。彼は、人生の斷片を、始めも終りもない斷片を、第二と第三の本のみを見てゐた。休み時間には彼は、新聞と考古學の本とを讀んだ。考古學は近代の一科學である、これは殆んど時代病と言ふことが出來たであらう。そしてそのうちには危険が在る。何故ならば、それは人間の不品行が常に相似たものだといふことを繰り返

し證據立てる科學だつたから。

政治は、彼にとつては、興味ある將棊の勝負——國王によつて弄ばれるもの——に他ならなかつた、何故といへば彼は他のすべての人と同じ様に育てられてゐたから。——この世の中で起つた何事も個人的には彼に關係ないといふことが、彼には信仰個條であつた。權力ある地位を神に與へられた人々をして政治を見させるが、この物の見方は、平和と安靜とを以つて彼の魂を充たした。彼は誰をも煩はさなかつた、そして何物も彼を煩はさなかつた。彼が、異常な馬鹿げた事件に突きあたつた時には、折々彼は煩はされたこともあつたが、それがどうすることも出來ないでさうなつたのだといふ確信を以て己自身を慰めた。彼の教育は、彼を利己的にしてゐた、そして教理問答は、若しもすべての人々が自己の義務を果したならばすべての事は何事が起らうともよく行くであらうといふことを彼に教へた。彼は、生徒の前に手本を示すやうに自分の義務を果した。彼は、決して遅刻しなかつた、決して病氣にもならなかつた。私生活に於いても彼は、非難されることは全く無かつた。彼は借りは期限の日にきちんと拂つた、料理屋では決して勘定を殖やさなかつた。そして一週に一度だけ遊興のために過ごした。彼の生活は磨き込まれた線路を走る鐵道列車のやうに、色々な停車場を規定の時間に通つて行つた。そして彼は利巧な人間だつたので、衝突を避けるや

ろにうまくやつて居た。彼は未来のことを全く考へなかつた。本當に利己的な人間は決して考へないものだ、それは、自分に屬してゐる未来は、たかだか二十年か三十年位のものだといふ單なる理由によつてである。

そして、かくの如く彼の生活は過ぎて行つた。

眞夏の朝が明けた——眞夏の朝がいつでもさうであるやうに、日の光を浴びて輝いて。教師は、古代エジプトの戦に關する本を読みながらまだ床の中にはひつてゐた。その時アウガスタ嬢が朝飯を持つて彼の部屋にはひつて來た。彼女は、祭日を祝ふために、いく片かのサフラン・パンを彼の盆の上に載せてゐた。そして彼のナプキンの上には接骨木の花をつけた小枝が置いてあつた。前の晩彼女は、唾壺の中に綺麗な砂とクスリップとを入れ、鏡臺の上に君影草を一束載せたりして、白樺の枝で彼の部屋を飾りつけたのであつた。

「今日は遊山にいらつしやいませんか、あなた？」と彼女は、裝飾をちらと見ながら、感謝の言葉が出るか是認の言葉が出るかと氣遣ひながら訪ねた。

けれどもブローム氏は、その裝飾に氣づきもしなかつた、そして彼は素氣なく答へた。

「僕が決して遊山をしないといふことをまだ知らないんですか？　僕は、人混みの中を肘を

つき合ふやうにして歩いたり、子供らの騒ぎに僕の神經をかき亂されたりするのは嫌ひなんです。」

「でも、きつとあなたはこんな氣持のいゝ日には町にはいらつしやらないでせう！　少くもデーア公園へでもいらつしやるでせう？」

「僕が行けばあすこは最後の場所です、殊に今日はね。人の混み合つてゐる今日はね。お、お！　いや、僕は町に居る方がいゝ、そして僕は、この休日の邪魔をしてくれる者が無ければいゝがと思ふ。」

「誰もかも苦しい仕事をしなければならぬ今日では、十分な休日半分もないと言つてゐる人が澤山ありますよ、」と老嬢は、慰めるやうな調子で言つた。「ですが、何か他にお望みがありますか、あなた？　私の妹と私とは蒸気で遊山に出ようとしてゐますの、さうして私たちは、晩の十時ごろにならなければ歸れますまいと思ひますの。」

「十分遊んでいらつしやい、アウガスタさん。僕は何もいりません。それに、自分のことは自分で始末出來ますから。僕が出掛けたら留守番が僕の部屋のことばしてくれませよ。」

アウガスタ嬢は、朝飯を置いて、行つて了つた。彼は、それを食つて了ふと、煙草をついて、「エジプト大戦」を持つて寢床の中にはひつてゐた。開いてある窓が、南風を受けてゆる

やかに震へた。八時になると、最も近い教會の大小いくつもの鐘が鳴り始めた。そして、ストックホルムの他の教會、聖カザリン教會や、聖マリア教會や、聖ヤニブ教會やのもそれに加はつた。それは、リン／＼鳴り、チャ／＼鳴つて、異教徒をして絶望に彼の頭をかきむしらせるに十分であつた。教會の鐘が止んだ時、汽船の甲板の上の陸軍々樂隊が、「弱點」からとつたクッドリイルの一節を演奏し始めた。教師は、シートの中で悶々した、そして若しも時候が大變暑くなかつたら、寢床から起き上つて窓を閉ぢて了つたであらう。次には太鼓の音が聞えて來たが、それは、もう一つの汽船の上でフライシヨルツからとつた「獵人のコーラス」を演じてゐた喇叭の五部曲の旋律によつて妨げられた。けれども呪はれたる太鼓の響きは近づいて來た。彼等は兵營へ行く綫銃兵の一隊の前頭に立つて進軍しつゝあつた。今は、種々雑多な音響に悩まされた——綫銃兵のマーチや、信號喇叭や、鐘や、汽船の上の喇叭隊やに。そしてたうとう終ひには、そのすべての音響と鳴動とが、スクリュウの鼓動の音にかき消された。

十時に彼は、アルコール・ランプをつけて、鬚剃の水を煮立たせた。彼の糊をつけた襯衣は、置棚の上に眞白になつて、そして板のやうに堅くなつて置いてあつた。釘穴から飾釘を押し込むのに十五分間もかゝつた。彼は鬚を剃るのに三十分かゝつた。彼は、最も重大な事

件でもあるかのやうに、髪の毛にブラシをかけた。スポンを着けた時、彼はその下の方が床を引きすつて汚れないやうにと氣にしてゐた。

彼の部屋は、非常に質素にそして小綺麗に單純に飾りつけられてあつた。それは個性のない、特色のない、ホテルの部屋かなんどのやうであつた。而も彼は、その部屋に十二年間といふものをくらして來たのであつた。大抵の人は、かうした長い期間には、例へば贈物とか、餘計物とか、裝飾品だとかいふやうな下らないものを、數限りもなく集めてゐるものだ。しかしかの時に彼の興味に訴へたといふやうな版畫の類も、繪入雜誌の附録といつたやうなものも何一つ壁にぶら下げられてはゐなかつた。油除けも、愛する姉妹の拵へてくれた敷物も、椅子の上には置いてはなかつた。愛する者の寫眞も、書物机の上には置いてなかつた。刺繡のされたペン拭きも、インキ壺のそばには無かつた。すべての物が、その所有者の獨立を妨げるだらうと思はれる所の冗費を、はぶく目的で出来るだけ安く買はれたものばかりだつた。

彼は窓に凭りかゝてゐた。その窓が彼に往來の光景を見せてくれ、そして砲臺を起して港をも見せてくれた。向ひ側の家の中では女が着物を着てゐた。彼は、醜い何物かが彼の眼に入つたか、又は彼の心の平和を亂す何物かが目に入つたかのやうに顔をそむけた。港は、汽

船や帆船の上に旗をひらく／＼させて楽しげであつた、そして水は日光を受けてきら／＼閃いてゐた。祈禱書を手にした二三の老婦人が、彼の窓際を通つて教會へと行つた。引抜いた剣を持つた一人の番兵が、交代兵の来るまでどの位待たねばなるまいかと思つて折々塔の上の時計をつまらなさうにちらりと見ながら、砲兵屯營の前をあつちへ行つたりこつちへ行つたりしてゐた。其他には町は、空つぽで、暑い日光の中に灰色になつて居た。彼の眼は、再び向う側の女の方へさまよつて行つた。彼女は、鏡の前に立つて、手に白粉刷毛を持つて、顰め面をしながら鼻の頭に白粉をつけてゐた、その顰め面が彼女の容貌を猿のやうに見せてゐた。彼は、窓際を離れて、搖椅子に坐つた。

彼は、漠然と孤獨の恐怖を感じたので、この日のプログラムを作つた。日曜以外の日には彼は、學校の子供達に取りまかれてゐた、そして彼はそれらの野獸共に對して少しも愛を持つてゐなかつたが、彼等を訓練すること、否むしろ知らぬ風をする困難な技術に就いて彼等に効果ある獲得をさせることが、彼の一生の仕事なのであつた。それでも彼は、彼等と一緒に居ない時には或る空虚を感じた。現在では此長い夏期休暇中に、彼は休日學校を建てゝゐた、がそれでも彼は、子供達に短い暑中休暇を與へなくてはならなかつた。そこで、彼が書籍商と第二ヴァイオリン手とに常に親むことの出来る食事時間を外にしては、彼は數日の間

たつた獨りなのであつた。

「二時になると番兵が交代する。」と彼は默想した。「そして群集は散つて了ふ。俺は飯を食ひに料理店へ行く。それから本屋をストロームスボルグへ連れて行かう。あすこには今日は一人も人はゐないだらう。俺たちはあすこで珈琲を飲んだりボンスを飲んだりすることが出来る、そして夕方まで居よう。夕方になつたら俺たちは町へ歸つて、レイネルへ行かう。」(レイネルといふのは、ベルゼリウスに在る彼の料理店の名前であつた。)

きつちり二時に彼は帽子をとつて、丁寧に自分でブラッシュをかけて、それから出掛けた。

「今日は、あすこにはパーチのシチウが無いかしら。」と彼は考へた。「そして、夏至だつていふのに、アスパラガスにありつくことは出来ないだらうか。」

彼は、帝國麵麩製造所の高い壁のところをぶら／＼通り過ぎた。ベルゼリウス公園ではいつも金持の家の子守やそのお荷物によつて占められてゐる席には、勞働者の家族が群つてゐた、それは乳母車などを引張つて大勢でやつて來てゐた。彼は、一人の母親が子供に乳を與へてゐるのを見た。彼女は、大きな胸の廣い女で、赤ん坊のふく／＼した手は、その胸の中へ殆んど隠れて了つてゐた。教師は、厭な感じがして、顔をそむけた。彼は、自分の公園の中にこんな他人を見るのが苦しかつた。それは、主人や夫人の留守に應接間を使つてゐる召

使に非常によく似てゐた、その上彼は、彼等の露骨なことをも許すことが出来なかつた。

彼は、ガラスのヴェランダに着いて、もう一度、「パセリイの澤山ついた」パーチのシチュウのことを考へながら扉のハンドルに手をかけた、その時彼の眼は扉の上の注意書の上に落ちた。それは読んでみる必要は無かつた。彼はその意味を知つてゐた。料理店は夏至には休業なのだ、彼はそれを忘れてゐたのであつた。彼は、頭を電柱にぶつつけたやうな心持がした。彼は怒つた、まづ第一には休業をしたといふので店主に對して。それから、料理店が休業だといふことを忘れてゐた自分に對して。彼がこんな重大な事件を忘れ得たといふことは、それを信じ兼ねた程、そして非難すべき誰かを見出す爲に彼の腦を拷問にかけた程、奇怪であつたやうに彼には思はれた。勿論、それは店主の失錯であつた。彼は、脱線し衝突して了つた。彼は駄目になつて了つた。彼は、その場に坐つた、そして殆んど怒りの涙を流さないばかりであつた。

ぶつかつた！ 弾丸が、彼の糊をつけた襯衣の胸部めがけて適中した。腹を立てた地蜂のやうに彼は、その席から立ち上つて、犯罪者を探した。明るい小さな少女の顔が彼の顔を覗き込んで笑つてゐた、夏著を着て麥藁帽を冠つた一人の勞働者が現れて、彼女の手を執り、微笑しながら、子供がお怪俄をさせはしませんでしたかと言つた。兵隊や下女達の笑つてゐ

る群が、彼を見詰めてゐた。彼は、人間としての彼の権利が侵害されたことを感じたので、巡査は居ないかと邊りを見廻した。けれども彼がその子供の母親と親しげに話をしてゐる巡査を見た時、彼はそんな考へを捨て、了つて、眞直に一番近い辻馬車屋へ行つて馬車を雇つて、書籍商のところへ走るやうにと馭者に言つた。彼は、最早一人で居るには堪へられなかつた。

馬車といふ安全な隠れ家の中で彼は、ハンケチをとり出して襯衣の胸から塵を拂つた。

彼は、ゴッテン通で馬車を返して了つた。何故なら彼は、きつと友は家に居るだらうと感じたから。ところが、彼が二階へ上つて行つた時、彼の確信は彼を見捨てた。極局彼が留守だつたらうとは！

彼は留守であつた。借家人の一人が家には居なかつた。彼のノックは、空つぽの家の中を響いた。彼の足音は人氣のない階段に反響した。

再び往來へ出た時彼は、どうしていゝか解らなかつた。彼は、ポトッキイの宿を知らなかつた、それに店といふ店が閉ぢられてゐる日に、何處で宿所帳を見出したらよかつたであらう？

何處へ行かうとしてゐるのかも解らないで彼は、町を歩いて、港を越して、橋を渡つた。

彼は、知つた人には一人も逢はなかつた。上流の人々の留守の間町を我がものにしてゐる群集が彼を惱ました、何故といつて、我々他の者と同様に、彼の受けた教育は、彼を貴族にしてゐたから。

初め腹を立ててゐる間、彼は餓ゑを忘れて了つてゐた。しかし今、再びその所在を確かにして來た。或る新しい恐しい考へが彼に思ひ起されて來た、今まで彼が、單なる臆病から引離すやうにしてゐた或る考へが。「何處で食事をしたらいゝだらう？」といふ考へが。彼は、證書を澤山ポケットに入れて出て來たが、金といつては一クラウンと五十ウールきりしかなかつた。この證書は、レイネルの店で手を冗くために用ひられるものであつた。それに彼は、馬車に乗つて一クラウンを費して了つた。

彼は再びベルゼリウス公園に來てゐた。何處へ行つても彼は、ゆで卵や、蟹や、揚煎餅などを籠に入れて携へて來たのを食べながら來る労働者達とその家族の者に出逢つた。而も巡査はそれに干渉しなかつた。それどころか彼は、巡査が一方の手にサンドウィッチを持ち他方の手にビールの入つたコップを持つてゐるのを見た。けれども他の何事よりも彼を動亂させたのは、彼が輕蔑してゐたこれらの人々が、彼よりも有利な位置にあるといふ事實であつた。だが、どうして彼は、ミルク・ホールへはひつて餓ゑをしのぐことが出来なかつたのか？ さうだ、何故出来なかつたのだらうか？ さう考へることそのことが、彼を身震ひさせた。

暫らく考へた後、彼はデリア公園の方へ行かうと思つて、港へ下りて行つた。彼は、其處で食事をする金を借りること(たまらない考だ!)の出来る知り合ひをさがさうとしてゐた。そして若し借りられたら、第一流の料理店「ハゼルマウント」で食事をしようと思つた。

汽船はひどく混み合つてゐたので、教師はエンチンのそばに立つてゐなければならなかつた。背中の熱さは堪らないものであつた。彼のモーニング・コクトは、彼が、一人の下女の汚ない頭をちつと見据ゑて、そしてその髪油の悪臭を忍んで立つてゐる間に、斑點が出來て了つた。けれども彼は、知つた顔には一人も出逢はなかつた。

デリア公園の料理店にはひつて行つた時彼は、肩を張つて、出来るだけ著名な人に見せかけようと試みた。

料理店の前の廣場は、觀劇席のやうであつた、そしてやはり同じ目的を果すもののやうであつた。云はば、それは誰でも自分の友達に逢つて見得を張る場所なのであつた。ヴェランダは、牛飲馬食のために青い顔をした士官達によつて占められてゐた。彼等のそばには、列

強の大使達が居た。彼等は、水夫等や漁夫等の亂弊の果の喧嘩などに立ち交つてゐた自國民を守護したり、又は祝祭の施行や洗禮施行や結婚式や葬式などの世話をしたりする勤勞のために老い込んで、白髪頭になつて了つてゐた。貴族社會のことはこの位にして置く。その廣場の中央に、ブローム氏は、突然彼の住んでゐる町の煙突掃除人や、小さな飲屋の主人や、化學者の助手や、その他そんな階級の人々を見出した。集つてゐる群に對して何故こんな處に居るのか怪しんでゐるかのやうに輕蔑的な一瞥を投げながら、そこらを歩き廻つてゐる綠色の上着を着て銀色のレースをつけて鍍金された棒を持つてゐる獵獸番を彼は見成つた。教師は、「あいつを見る！ あすこへやつて來た、どうしたら飯が食へるかと思ひ迷つてゐるだ！」と言つてゝもゐるやうなみんなの眼に見詰められてふと我に返つた氣がした。けれども、どうすることも出来ないのであつた。彼は、ヴェランダの方へ行つた、其處では人々が坐つてパーチやアスパラガスを食べ、ソーテルン葡萄酒やシャンパンを飲んでゐた。全く突然に、彼は親しげに肩をつかまれたことを感じた。そして振り向いてみると、給仕グスターフと面と向つて立つてゐた、グスターフは、彼の手をとつて、明らさまな喜びを示して叫んだ。

「本當に貴方でございますな、ブローム様？ 如何でございますな？」

しかし、先生と暫らくのあひだ同等である自己を見出して非常に喜んでゐる給仕グスターフは、暖かい手の中に一本の木ぎれを持つた先生の彼の魂を錐で突くやうな二つの眼に出會つた。而もその同じ手がつい昨日は彼に十クラウン呉れ、そしてその手の持主は彼に六箇月間の役目と注意との禮を言つた、人がその友に言ふやうに禮を言つたのであつた。給仕は、その仲間の方へもどつて行つて、彼等の中へ坐つた、當惑して鼻つばしを折られて。しかし、ブローム氏は苦しげに考へ込みながら、ヴェランダを出て群集の中をわけて行つた。彼は、「奴はたうとう食事にありつくことが出来なかつた！」といふ嘲笑が聞えたやうな氣がした。

彼は、大きな廣場へ行つた。其處では人形芝居があつた、そしてジャスパールが、その妻に打たれるといふ所であつた。一寸離れた處に水夫が、下女や、兵卒や、丁稚達に、運命の車の中に居る彼等の未來の夫や妻を見せてゐた。彼等は皆、既に食事を済してゐて、心樂しくしてゐた。一寸の間彼は、自分が彼等より劣等な者だといふことを信じた。が、一寸の間に過ぎなかつた。やがて彼は、彼等がエジプトの兵營はどんな具合に築城されるかといふことには仄かな觀念さへもつてはゐないのだといふことを思ひ出した。その考へが、彼に自尊心を取り戻してくれた、そして彼は、どうして人々は、こんな子供らしい事柄のうちに快樂を

見出す程墮落し得るのかを怪しんだ。

そのうちに彼は、他の料理店へ行つてみようとする氣持を全く失くしてしまつた。彼は、チボリを通つた、そしてその公園の中へすつと奥の方まではひつて行つた。若い男女が、ヴァイオリンにつれて草の上で踊つてゐた、少し離れた處に、一家族が檜の古木の下で宴を張つてゐた、その家族の長は、膝をついて襯衣の袖をたくし上げて帽子も無しで、片方の手にはビールのを、片方の手にはサンドウィッチを持つてゐた。彼の肥えた、楽しげな、綺麗に剃られた顔は、終日（今日は夏至だから）食つたり飲んだりして楽しく遊ばせるために、客を招待したので喜びと善良さで光り輝いてゐた、その客達といふのは、たしかに、彼の妻、舅姑、兄弟、番頭、及び召使達であつた。そして陽氣なその男は、この一團隊が草の上を腹をかゝへてころげまはつたほどの馴れたことを言つてゐた。揚煎餅が出て、それを摘んで食つて、それからポルト葡萄酒の瓶が廻されてから、一番番頭は、演説をやつたが、忽ちそれは婦人達が一寸の間ハンケチで眼を隠した程、感動的な機智に富んだものとなつた、その間主人は口を噤んでゐたが、次には大聲に笑ひ出し、喝采して辯士を妨げた。教師の氣分は、次第々々にこちれて行つた、しかし行つて了ひはしないで彼は、松の木の下に腰を下ろして、「その動物共」を見成つてゐた。

演説が済み、父と母とが、喝采と、偶々空になつてゐたあらゆるコップや皿のガチャ／＼といふ音で伴奏された手風琴の喇叭の亂奏とによつて健康を祝されてしまふと時には、その團隊は「第三人目」を演すべく立ち上つた。一方母親と姑とは赤ん坊の世話をした。

「まるで、獸が野原にゐるのとそつくりだ。」と教師は、わきを向きながらさう考へた、何故といつて、彼の目には、自然なるすべてのものは、醜惡なのであつた。そして、彼の意見の中で美に對して何等かの權利を要求することの出来るものは、獨り不自然なるものばかりであつた。勿論、帝國博物館内にある「有名な」大畫家達の繪畫は除外例として。

彼は、若い男達がその上衣を脱ぎ、若い女達がそのカフスをはづして、こすももの繁みにそれを懸けるのを見た。それから、彼等は場所に就いて遊戯を始めた。

女達は、そのスカートをたくし上げ、足をあげた。そのために雜貨商が、壘を結び合せるものとして賣るやうな青と赤の打紐で拵へた靴下留がはつきりと見えた、そして相手の男が、彼の相手の女を捉へると何時でも、腕に抱きかゝへて彼女を振り廻すので、彼女のスカートはひらく／＼した。そして若い者も年とつた者も公園中に反響する笑ひ聲を出して叫んでゐた。

「これは無邪氣なのか、墮落なのか？」と教師は怪しんだ。

けれども確かにその群の者は、學者らしい「墮落」といふ言葉がどういふ意味なのか知つてはゐなかつた。そして、彼等がそれ程楽しげであつた理由も實にそこにあつた。

彼等が「第三人目」を遊ぶことにも飽きた時分になると、茶が用意された。教師は、その男共が上品な態度を學んだことがあるかどうか判断に苦しんだ。何故なら彼等は、女達に砂糖や菓子捧げる爲めに四つ這ひになつて這ひまはつてゐた。そして彼等の胴衣の紐は、把手か何ぞのやうに突立つてゐたので。

「雄共は雌共の前で見得を張つてゐるのだ！」と教師は考へた。「奴等は何のために生れて來てゐるのだか知らないのだ。」

如何にその群の主人が、この氣樂さうな奴が、舅と姑と妻と助手と下女達とに氣を遣つてゐるかといふことに、彼は氣がついた。そして、彼等の内の一人が、御自身からお先にとたのむ時には、何時でも決つて彼は、わたしはゆる／＼とお後からと答へるのに、彼は氣がついた。

彼は、舅が小さい子供に笛を作つてやらうとして、柳の枝の皮をむいてゐるのを見た。彼は、姑が下女でもあるかのやうに洗物をしてゐるのを見た。そして彼は、我儘といふものには奇妙な物があるかと考へた、といふのはそれが、恰も誰一人としてを自分が受けたより

以上を與へはしないと見える程、うまく假裝し得てゐたからであつた。何故ならそれは我儘だつたに違ひない、それは他の何物でも有り得なかつたであらう。

彼等は罰金遊びをやつた。そして、接吻を以つて、眞の、純粹な、音のする接吻を以つて、その罪を贖ふのであつた。で、馴れた帳簿方は、檜の古木に接吻させられたが、彼のその動作は、何に比べものないほど馬鹿げきつてゐた。彼は、節くれ立つたその幹が、彼が逢曳した女でもあるかのやうに抱擁したり撫でさすつたりした。すべての者は、爲すべきことを知つてゐたので笑ひながら嘔鳴つてゐた。けれども彼等のうち、誰もそれをやつてゐるところを見られるのを好む者は無かつたにちがひない。

その光景を批評的な目で見成り始めた教師は、次第々々にそのまじなひの中に陥ちて行つた、彼は殆んど自分もその群の一人だと思つてしまふやうになつた。彼は、助手の頓智を見て微笑した、そして、その家庭の主人はといへば、一時間とたゝない内にすつかり彼の同情をひいてしまつたのであつた。誰も、その舅が第一等の喜劇俳優だといふことを拒むことは出来なかつた。彼は、「スキン・ザ・キャット」をやることも出来た。「ウォーク・バックワーズ」をやることも出来た。木の幹の上に「横はる」ことも、銅貨を呑むことも、火を食ふことも、それから凡ゆる鳥の眞似をすることも出来た。そして、彼が或る少女のポケットからサフラン菓

子を引き出して、それを彼の右の耳の中へ隠して了つた時には、教師は空つぽの脇腹が痛くなる程笑つた。

それから今度は、ダンスが始まつた。教師は、ラベの文法書の中で “Nemo saltat sobrius, nisi forte insanit.” (譯者曰。「眞面目な人はひどく氣違ひじみた時でな」といふことを讀んだことがい限りは、身振りをして踊るなどはしない」の意)といふことを讀んだことがあつたが、常に彼はダンスを一種の狂亂と見てゐた。實際彼は、狗ころや犢牛が、ふざけはじめるとダンスするのを見たことがあつた。けれども彼は、シセロの格言が動物の世界にも適用されるといふことを信じはしなかつた。そして彼は、人間と動物との間に鋭い一線を引く習慣がついてゐた。今彼は、全くしらふの、そして餓ゑても居なければ渴いてもゐないこれらの若い人々が、手風琴のゆるやかな調子につれて、ぐる／＼廻つてゐるのを見成りながら坐つてゐる時に、まるで自分の魂が眼と耳とによつて動くことを留められてゐる振子のやうであつたことを感じた、そして、彼の右足が弾力性を持つた芝生の上でゆるやかに拍子をとつてゐることを感じた。

彼は、黙想し注目しながら三時間ばかりを費して、それから立ち上つた。彼は、立ち去ることが殆んど困難なことであつたのを見出した。それは恰も、彼が招待された楽しい小宴から立去るといふやうであつた。しかし彼の氣分は變つてゐた。彼は、幾分かいゝ心持になつてゐた。彼は世界と和合してゐた、そして快く疲れてゐた、恰も自ら楽しんでゐるといふ風だつた。

もう夕景であつた。輕快な馬車が彼のそばを通つた。乗つてゐる婦人達が、後ろの席に凭れかゝつて、その長い白い劇場用の襟卷の中から屍衣の中の死人のやうに眺めてゐた。まるで發掘された人のやうに見えると思ふことは、其時には當世風なのであつた。他の事の方へ空想を走らせてゐた教師は、確かにその婦人達が死ぬ程退屈してゐるのだと思ひ、そして少しも羨ましさを感じなかつた。垢つぽい大道の下方、沖合遙かに、旗や喇叭隊をのせた例の船はその楽しい小旅行から歸りつゝあつた。乾盃の聲や樂の幾高調や、幾擱みかの歌などが、海の微風によつて山脈やディーア公園の方へ漂つて來た。

教師は、此の夕方、動いてゐる群集の中に居た時のやうに淋しく感じたことは、生涯に於いて一度もなかつた。彼は、群集の中を淋しく自分の道を行く時すべての者が同情を以つて自分を見てゐると思つた。そして、殆んど自己憐憫に負けてしまひさうになつた。彼は、その聲を聞くといふたゞそれだけ喜びのために、出逢つた最初の人に話しかけたかつた、何故なら彼は、自分の淋しさの中で、自分がまるで他國人と相並んで歩いてゐるやうな氣がしてゐたからであつた。そして今や彼の良心は彼を責めさいなんだ。彼は、自分に出逢つて喜び

を隠すことの出来なかつた給仕グスタフを思ひ出した。今彼は、若しも誰かが彼に出逢つてその出逢つたといふ事實のために少しでも喜びを示したとしたら、全世界を興へてもいいと思ふくらゐになつてゐた。けれども誰も來なかつた。

さうだ、要するに誰かは來たのであつた。彼が汽船の中にたつた一人坐つてゐた時主人を見失つた一匹のセッターが彼の處へやつて來て、その頭を彼の膝にのせた。教師は、特に犬が好きといふではなかつた。併し彼は、それをその儘にさせて置いた。彼は、犬がその柔かな暖い體を彼の脚にすりつけるのを感じた。彼は、その見捨てられた獸が彼を見ながら無言の訴をしてゐるその眼を見た。恰もそれは主人を探してくれと彼に頼んでゝも居るやうであつた。

けれども、彼等が上陸するや否や、セッターは走り去つた。「もう俺が不必要になつたんだ。」と教師は考へた。そして彼は家へ歩いて歸つて、床にはひつた。

夏至の日のこれらの些細な出來事は、教師からその自信を奪つて了つた。それらの出來事は、この世に在る凡ゆる豫見、凡ゆる警戒、凡ゆる怜愍な豫想が何物をも利することはないので、といふことを彼に教へた。彼は、自己の周圍に或る不安定を感じた。料理店に於いてさへ、彼の家庭に於いてさへ、當てにならないのであつた。いつかは終りがやつて來るの

だ。その上グスタフの方で或る種の遠慮をすることが彼を苦しめた。あの給仕は、前と同じに丁寧であつた。前よりも一層注意深かつた、しかし彼の友情はなくなつてゐた、彼は信用を失つて了つたのだ。それは、教師に考へる材料を供給した。で、堅い肉や餘りに小さいポテトの皿が彼の前に置かれた時にはいつも彼は考へた。

「ははあ！ 奴は意趣返しをしてゐるな！」

その夏は、教師にとつては好ましいものではなかつた。第二ヴァイオリン手は町にはゐなかつたし、そして書籍商は、彼自身の區の小山の上に在る庭園料理店「モオゼスハイト」へよく行くやうになつてゐた。

秋の或夕方、書籍商と第二ヴァイオリン手とは、彼等の馴染のテーブルに坐つて、ポンスの杯を傾けてゐた、その時教師がはひつて來た。彼は、小さな包を腕の下に抱へてゐたが、凡ゆる種類のがらくたを入れる爲に使つてゐた戸棚の中の空の大籠かごに用心深くそれを隠してしまつた。彼は不機嫌で、それにいつになくいらいらしてゐた。

「やア、君。」書籍商は、いつでも言ふやうに始めた。「で君は、いつ結婚しようと思つてゐるのだね？」

「畜生、また『いつ結婚するのか』だ！ まるでそのことより他には人間に苦しみは無いとで

もいふやうだ！ 何で君は、自分で結婚しないんだ？」と教師はうめいた。

「おゝ！ 私には古いストーヴといふ者が居るからさ。」と書籍商が答へた。彼は常に版で押したやうな答へを澤山用意してゐた。

「私の結婚生活は大變幸福だつた。」とポーランド人は言つた。「しかし今では、私の妻は死んで了つてゐる、うゝ！」

「細君がかね？」と教師はその調子を真似て言つた。「そして紳士様の方は寡夫となられたのだね？ その事實を聞いて僕はどうして安心すりやいゝんだらう？」

ポーランド人は頷いた、何故なら彼は、教師の言はうとしたことを少しも理解しなかつたから。

教師は、友達等に飽きてきた。彼等の話題は、いつでも同じであつた。彼は、彼等の返答を誦そとんじてゐた。

間もなく彼は、オーバー・コート of 衣囊の中へ忘れて來た煙草入れをとり、玄關まで一寸行つた。書籍商は、忽ち戸棚を押しあけてあの不思議な小さい包を持つて來た。それは封がしてなかつたのですぐに開いた。その中には美しいアメリカ製の寢巻がはひつてゐた。彼はそれを教師の椅子の背に注意深くぶらさげた。

「うゝ！」とポーランド人は何か不體裁なものを見でもしたやうに顔をしかめて言つた。

悪作わるわざの好きな料理店の主人は、帳場卓の上に身を屈めて、大聲に笑つてゐた。給仕は、その場に根が生えたやうに突立つてゐた、それから料理人の一人は、臺所に通ずる戸口から覗いてゐた。

教師が歸つて來て、いたづらされたのを見ると、彼は怒りの爲に眞青になつた。彼は、すぐに書籍商に疑ひをかけた。しかし、彼の眼が、部屋の隅に笑ひながら立つてゐるグスターフの上に落ちると、彼の古い夢魔が心の中に甦つて來た。「奴が意趣返しをしてゐるんだ！」一言も言はずに彼は、自分の大切な物をとつて、帳場卓に幾錢かの銅貨を投げつけて、料理店を出て行つて了つた。

それからは教師は、レイネルの店を避けてゐた。書籍商は、彼が彼の住んでゐる區の料理店で食事してゐるといふことを聞いた。それは事實であつた。しかし彼は、非常に不満足であつた！ 食物は全くまづいといふほどではなかつた、しかしそれは彼の好みに應じて料理されてはゐなかつた。給仕はぼんやりだつた。彼は、屢々レイネルに店へ歸らうと考へた。しかし彼の誇りが、彼を許さなかつた。彼は、家庭から逐ひ出されてしまつたのだ。數年間縮結されてゐた同盟が五分間のうちに斷たれてしまつたのだ。

暫くして、新しい打撃が彼を打つた。アウガスタ老嬢が田舎に幾らかの財産を相続した、そして、十月の一日にストックホルムを立ち去ることに定まつた。教師は新しい宿を探さねばならなかつた。

けれども彼は、滅茶々になつてゐた、そしてそこには彼を喜ばすものは何にも無かつた。彼は、毎月部屋を變へた。部屋はすこしも悪くはなかつたが、それは以前の部屋のやうではなかつた。彼は或る町々を散歩する習慣がつき、間違ひに氣づかずに居る内に以前の家の前に來て了ふ習慣がついた。彼は、捨子のやうであつた。

その結果彼は、下宿屋に住むやうになつた、即ち彼が常に忌み恐れてゐた結果に陥つてしまつたのだ。そこで、彼の友達は全く彼を見失つて了つた。

或る晩例のポーランド人がたつたひとり、煙草を喫つたり、酒を飲んだり、そして完全な麻痺状態に陥らうとして東方人らしく首をガクリ／＼頷いたりして、火酒に身を入れてゐるところへ、書籍商が大雷雨のやうに飛び込んで來た。そして、テーブルの上に帽子を抛り出して叫んだ。

「あん畜生め！ 今まで誰があんなことを聞いたことがあるだらう？」

ポーランド人は、ブランドーと煙草の涅槃から身を擡げて、眼をぐる／＼動かしてゐた。

「おい、あん畜生め！ 誰がこんなことを聞いたことがあるだらう？ 奴は結婚しようとしてゐるんだぜ！」

「誰が結婚しようとしてゐるのかね！」とポーランド人は、書籍商の激しい強い聲に驚かされて訊ねた。

「教師のプロームさ！」

書籍商は、自分の齎らした珍談と引替へに火酒の一杯を待つてゐた。料理店の主人は、帳場卓を去つて、彼等のテーブルのところへ聽きに來た。

「あの人は金持なのですかね？」と彼は、機敏に訊ねた。

「俺はさうは思はない。」と書籍商は、其の場の己れの強みを意識して、商品の一つ一つと賣るやうにしながら答へた。

「女は別品だらうか？」ポーランド人は訊ねた。「わしの妻は大變別品だつたよ。うゝ！」

「いや、別品といふほどでもないさ。」と書籍商は答へた。「だが、様子のいゝ女だ。」

「あなたは、その女を見て來なすつたのですか？」と主人が訊いた。「年とつてゐるんですね？」彼の眼は、臺所の戸の方へさまよつてゐた。

「いや、若いんだ！」

「ではその女の両親は？」と主人は續けた。

「何でもその父親はオレプロの鑄物師ださうだ。」

「賤しい奴だ！ おゝ、眞平だ！」と主人は言つた。

「いつでも俺はさう言つてるぢやないか？ あの男は生れつきの夫なのさ。」と書籍商は言つた。

「わたし共だつてみんなさうでさあ。」と主人は言つた。「誓つてもよござんすよ。誰でも運命は逃れられませんや！」

こんな哲學じみたことを言つて、その問題をおしまひにして、彼は帳場卓へ歸つて行つて了つた。

彼等は、教師が金の爲めに結婚しはしないといふことを決定して了ふと、今度は「若い人々がどういふ風に生活して行くか」といふ問題を論じた。書籍商は、教師の俸給を推測した、そして「その他に個人教授をして儲ける」分も。

その問題も亦終りとなつた時、主人が、テーブルの處へ再びやつて来て、細かい事柄に就いて訊ねた。

「あの方は何處でその女に逢つたのでせう？ その女は色白なのですか、それとも黒い方で

すか？ その女はあの方と戀に陥ちたんでせうか？」

その最後の質問は、必ずしも目的をはづれてはゐなかつた。書籍商は「彼女は戀したのだと思つてゐた。」何故なら彼は、彼等が二人腕を組み合せてシウ・ウィンドウを覗き込んでゐるところを見たのであつた。

「だが、あの男がさ、あんな頓馬な野郎が、戀なんかに陥る筈はない！ そんなことはとても信じられやしない！」

「で、あの方はどんな夫が出来上るでせうな！」主人は、彼がその食物に就いて恐ろしい氣むづかしやだつたことを知つてゐた。又、人は結婚するのは間違つてゐると自分で言つたことがあつたのをも知つてゐた。

「それにあの人は晩にはボンスを一杯飲むのが好きだ。だがきつと結婚した人は毎晩ボンスを飲むなんてことは出来ない。そしてあの人は子供は嫌ひなんだ！ うまくはいくまいな！」と彼は私語した。「誓つて言ひますがうまくは行きますまいよ。それに、皆さん、まだくほかのことがありますからね。」(彼はその席から立ち上つて、邊りを見廻して私語を續けた)「きつとさうですよ、間違つたら首を縊りませあ、あの老ぼれの偽善者は何か色ごとみたいななものをもつてたんですよ。あれを憶えておいでですかね、皆さん、あの——ひひひ——寝

卷の一件を？ あの方は、離れるともう見つからないつて種類の人ですよ！ 氣をつけなさるがいい、ブローム夫人！ 貴女が何をしようとしてるのかよく氣をつけておいでなさいよ！ わしはそれつきり言ひますまいよ！」

教師が婚約をして、二箇月以來に結婚式が舉行されるといふのは、確かに事實であつた。その後何事が起つたかといふことは、この物語に屬することではない。それにまた沈黙の誓が守られてゐる時に、その家庭生活の祕密の壁のうしろで何事が起つたかを知ることが困難なことである。

教師が結婚後決して再び料理店へ顔を見せなかつたといふのも亦事實であつた。或晩、彼獨りで歩いてゐるのに町で出逢つた書籍商は、結婚生活に關する長い訓戒を聽かなければならなかつた。教師は、あらゆる獨身者に對して罵詈雑言を浴せた。彼は、その人々を、國家で定めてゐる彼等の義務を果すことを拒んでゐるエゴイストだと呼んだ。彼の意見では彼等は重税を課されねばならないのである。何故かといつて、すべての附加税が、最も殘酷に家庭の父の上にかゝつてゐるのだから。彼はそのうへ進んでかう言つた。彼は獨身者たることが、「自然に反する罪惡」として地上の法律によつて罰せられるのを見たいものだ。書籍商は、記憶がよかつた。彼は、人の家庭に一人の馬鹿を連れて來ることの適當である

といふことは永久に不審だと言つた。けれども教師は、自分の妻は、自分がかつて逢つたうちで最も智力のある女であつたと答へた。

結婚の二年後に、ポーランド人は教師とその妻とを劇場で見た。彼は、彼等が幸福らしく見えたと考へた、「うゝ！」

又三年過ぎだ。或る夏至に料理店の主人はマール湖を渡つてマリアフレッドへ楽しい遊山をやつた。其處で、クリプシュルム城の前で、彼は教師が緑の野を乳母車を押して、その空いてゐる方の手には食物のはひつた籠を持つて、そのうしろからは「田舎者らしい」若い男と女との一團がついて行くのを見た。食事のあとでは、教師は歌をうたひ、若い者と一緒になつてでんぐりかへしをやつたりしてゐた。彼は、十歳も若く見え、そして「女好き」のやりさうなことをすつかり知つてゐた。

彼等が食事をしてゐた時、その群のそばに近く行つてゐた主人は、ブローム氏と夫人との間に交はされた一寸した會話を立ち聞きした。若い細君が籠の中から蟹の皿をとり出した時、彼女はアルバートに對して辯解してゐた。何故なら彼女は市場中で一匹も牝の蟹を買ふことが出来なかつたから。すると教師はその腕を彼女に廻して、接吻して、そんなことは少しも構はない、牝だらうが牝だらうが、彼にとつては全く同じことだと言つた。そして、乳母

車の中の赤ん坊の一人が泣き出した時、教師はそれを持ち上げて、黙らせて再び眠らした。

扱て、すべてこれらの事柄は單なるデテールに過ぎない。けれども、獨身であつた時には自分だけでも十分にはいなかに、人々はどうして結婚し、且つ一家族を育てるのかは、私にとつては謎である。それは殆んど、赤ん坊の生れる時は彼等が自分で食物をも持つて來るのかと思はれる位である。それは殆んど、實際さうであつたかのやうに思はれるのである。

賠償

學校時代には彼は、天才と目されてゐた。そして、彼がいつかは著名な人となるだらうといふことを疑ふものは誰もなかつた。しかし試験にパスした後彼は、ストックホルムへ行つて職業を見付けなければならぬことになつた。それを以つてドクトルの學位を得る筈であつた彼の論文は、延期されねばならなかつた。彼は、非常な野心家ではあつたが私有財産を全く持たなかつたので、金と結婚しようといふ決心をした。そこで此の見地から目論見を立て、金持ばかりを訪問した、法律を學んでゐたウブサラに於いても、又その後ストックホルムへ行つてからも。ウブサラでは彼は、新しい人々が來ると、つまり、その人々が貴族社會の一員であつた場合にはきつと彼等と親しくするのであつた。新しく來た人々は、古くから居る者に近寄られるとうれしく感ずるものである。かういふ風にして彼は、多くの有用な關係を作つた。その關係の爲に、彼はいつも夏の間彼等の別荘に招待されたのである。

別荘は、彼の幸福を獵る地盤であつた。彼は、社交術を心得てゐた、彼は歌ひ、演奏し、婦人達を喜ばせることが出來た、でその結果彼は非常に愛される人間であつた。彼は、身分

以上の服装をしてゐた。しかし彼は決してその友達からも貴族の知己からも借金はしなかつた。彼は、無價値の株券を二株ばかり買つて何か機會のある毎に、株主總會に出席しなければならぬなどと言つてゐる風でさへあつた。

二夏の間彼は、多少の財産を持つてゐる年とつた貴婦人に非常な注意を拂つてゐた、そこで彼の前途は一般の人々の話題になつた。その時彼は突然上流社會から姿を隠して、財産といつては一文も持つてゐない桶屋の娘である貧しい少女と婚約して了つた。

彼の友達等は面食つた、そして、彼がどうして自ら自分の光明を遮ることが出来たのか理解することが出来なかつた。彼は、あんなにうまく計畫を立ててゐたのだ、たゞ手を伸ばすことだけで、成功は掴めるのであつた、その一口の食物は確實に彼のフォークに突刺さつてゐた、唯だ必要だつたのは口を開いてそれを呑み込むことだけなのであつた。汽船の上でたつた一度逢つたばかりの小娘の顔が、どうしてあらゆる彼の數年間かゝつて拵へ上げた計畫を覆し得たのかといふことは、彼自身にも解らなかつた。彼は迷はされ、心を奪はれてしまつたのだ。

彼は、その友達に、彼女を美しく思はないかと訊ねた。

正直のところ、彼等は美しいとは思はなかつた。

「だが、彼女はそりや伶俐なんだ！一寸彼女の眼を見給へ！何て表情に富んだ眼を持つてるんだらう！」

彼の友達は何にも見る事が出来なかつた、又聞くことも出来なかつた、何故なら彼女は決してその唇を開かなかつたから。

しかし彼は、その桶屋の家庭で毎晩を過した。たしかに桶屋は甚だ智力ある人間であつた！彼女の前に膝をついて（別荘では屢々このトリックが演習された。）彼は、彼女の羊毛の敷物を持つてゐた、彼女にピアノを弾いてやつたり、歌をうたつて聞かせたり、宗教に就いて又はドラマに就いて話したりした。そして彼は、いつも彼女の眼の中に同意を読みとつた。彼は、彼女に就いての詩を書いた、そして彼女といふ神殿に、自分の月桂冠を、野心ある夢を、加之その論文をさへ犠牲として捧げたのであつた。

それから彼は、彼女と結婚した。

桶屋は、婚禮の晩に飲み過ぎて、一般の少女達に就いて下品な演説をやつた。しかし聲は、その老人を妨げようとはしらずに、彼を勵ました程、非常に碎けた氣持のいい人だと思つてゐた。これらの單純な人々の間にあつては彼は氣安く感じてゐた。彼等と一緒に居て、彼は全く落着きを得てゐることが出来るのであつた。

「それは戀に陥ちてるからだ。」と彼の友は言つた。「戀は驚くべきものだ。」

そしてたうとう彼等は結婚した。一月経ち——二月経つた。彼は、言ふに言はれず幸福であつた。毎晩彼等は一緒に過した、そして彼は「森の薔薇」といふ彼女の好きな歌をうたつて聞かせた。そして彼は、宗教に就いて、又ドラマに就いて色々話した。すると彼女は坐つて熱心に聞いてゐた。しかし彼女は決して意見を發表しなかつた。彼女は黙つて耳を傾けてゐた、そして、彼女の編物をつゞけてゐた。

三月目に彼は、古い習慣になつてゐた晝寝をやり出した。獨りでゐることを厭がつてゐた彼の妻は、彼のそばに坐つてゐたいと主張した。それは彼をいらいらさせた。何故なら彼は、獨りで考へるべき堪らない要求に迫られてゐることを感じてゐたから。

折々彼女は、役所から歸つて来る彼を途中で迎へた。そして彼女の心は、彼が同僚に別れて彼女の方へ道を横ぎつて来る時誇りを以つて波打つた。彼女は、意氣揚々と彼を連れて歸宅した。彼は、彼女の夫だつた！

四月目には、彼は彼女の好きな歌に飽きて了つた。それはもう古臭かつた！ 彼は、本をとつて讀んだ、そして二人共口をきかなかつた。その會合のあとでは酒宴が催されるのであつ

或晩彼は會合に出なければならなかつた、その會合のあとでは酒宴が催されるのであつ

た。彼が家を開けるのはそれが始めてであつた。彼は、彼女と一緒に夕を過す爲に友達を招き、そしてなるべく早く床に就くようにと彼女を説き伏せた。何故なら彼は遅くまで家へ歸れさうにもなかつたから。

友達はやつて來た、そして九時まででゐてくれた。若い妻は、歸りを待つて、應接間に坐つてゐた、彼女は夫が来るまでは床にはひるまいと決心したので。彼女は、ひどく落着がなくなつてゐたので、とても眠れなかつたのである。

彼女は、應接間に獨り坐つてゐた。もつともつと時間を早く経過させるには彼女はどうしたらよかつたであらう？ 下女は寢床にはひつて了つた。祖父の時計が、チク／＼鳴つてゐた。けれども、彼女が編物をしまつた時はまだやつと十時であつた。彼女はせかせかせかしてゐた、家具をあつちへ動かしたりこつちへ動かしたりした、そして稍や神経が弱つて來たことを感じた。

これが、結婚生活といふことなのであつた！ 人は、その昔からの周囲のものから引き裂かれ、そして三つの淋しい部屋に閉ぢ込められて、半分酔つたやうになつて夫の歸るのを、待つてゐなければならぬのであつた——馬鹿なことだ！ 彼は彼女を愛してゐた、そして彼は用事で外出してゐるのだ。それを忘れるとは彼女は何といふ馬鹿であらう。けれども彼

は今でも彼女を愛してゐるのだらうか？ 彼は一二日前に、彼女の愛に羊毛の敷物を持つてゐるのを拒んだではないか？——それは結婚以前には彼のしたがつたことだつたのだ。昨日食事の前に逢つた時、彼はなんだか厭な顔をしはしなかつたか？ そして——要するに——彼が今夜是非共用事の會合へ行かなければならなかつたとしても、その酒宴にまで出る必要は少しも無いのだ。

彼女の黙想が、さういふ點まで達した時には丁度十時半になつてゐた。彼女は、今までどうしてこの事を考へなかつたらうと思つてびつくりした。彼女は暗い心持になつた、そして陰氣な考へが又もや一つ一つと彼女の心をかすめて通つた。けれども、今や援兵がやつて來た、彼は此頃ではもう彼女に話をしてもらへなかつたのだ！ 彼は決して歌つてもくれなかつた、決してピアノも開けなかつた！ 彼が晝寢をしすにはゐられないと言つたのは、嘘をついてゐたのだ。何故ならその間ぢうフランスの小説を讀んでゐたのだつたから。

彼は、彼女に嘘をついてゐたのだ！

それはやつと十一時半であつた。邊りは壓迫するやうな沈黙が支配してゐた。彼女は、窓を開いて、町の方を覗いた。二人の男が、下に立ち止つて一人の女と値段をきめてゐた。あれが男のすることだ！ もし彼があんなことをしたら！ 彼がもしそれをしてたら、彼女は身を投げて了はう。

彼女は、窓をしめて、寢室の吊ランプに火をつけた。「人は、自分が何をしてゐるかといふことを見ることが出来なければならぬ。」と彼はかつて或る機會に彼女に言つたことがあつた——すべてはまだ非常に光明に充ち、新しかつた！ 綠色の寢臺掛けは、芝生のやうに見え、小さい枕は、草の上がちやれてゐる二匹の白い小猫を思ひ出させた。磨かれた化粧臺は光りを反射してゐた。鏡は、まだ水のはねた程の醜い汚點しみも出來てゐなかつた。彼女の髪の毛用のブラッシのうしろについてゐる銀金具や、白粉箱や、齒磨き楊枝や、すべてが、輝き閃いてゐた。寢室用のスリッパは、踵の潰れることなどは想像することも出來なかつた程に新しく且つ綺麗であつた。すべての物が新しく見えた、而もすべてのものが残分かその清淨さを失つてしまつたやうに思はれた。彼女は知つてゐた、あらゆる彼の歌を、あらゆる彼の客間で演ずる曲譜を、あらゆる彼の言葉を、あらゆる彼の思想を。彼女には前以つて解つてゐた、彼が食事に坐る時には何と言ふか、彼等が晩に二人きりでゐる時には彼がどんな話をするか。

彼女は、それらすべてが懐かしく慕しかつた。彼女は彼に戀してゐたのか？ おゝ、さうだ！ 確かに！ だが、それならばこれがすべてであつたらうか？ 彼女は、處女時代のあ

らゆる夢を實現しつゝあつたのだらうか？ 物事は、彼女の死ぬまでこんな風につゞいてゆくのであつたらうか？ さうだ！ しかし——しかし——きつと彼等は子供を持つてであらう！ たとへ現在こそ何の微候も無かつたが、それから彼女は、最早孤獨ではなくなるであらう！ そこで彼は、好きなだけ外出することが出来る。何故なら彼女は、常に一緒に話したり遊んだりする或るものを持つてであらうから。彼女が自分を幸福にしようと欲したところのものは、恐らくは赤ん坊であつたのであらう。恐らく結婚といふものは、實際夫だけの正式の妻といふことより以上に何物かを意味するのであらう。それはさうに違ひない！ けれどもそれならば彼は彼女を愛しなくてはならないであらう、それに彼はそれをしつゝてゐなかつた。で、彼女は泣き出した。

彼女の夫が一時になつて歸つて來た時、彼は全くしらふであつた。けれども彼は、彼女がまだ起きてゐるのを見ると殆んど怒らうとした。

「どうしてお前は床にはひらなかつたんだ？」といふ言葉が、彼の彼女になした挨拶であつた。

「どうして眠れるでせう、私、あなたを待つてゐたんですもの？」

「結構な見張番だ！ 僕をもう決して外出させないつもりなのかい？ それに、きつとお前

は、泣いてゐたんだらう？」

「えゝ、泣いてたんですわ。あなたがもう愛して下さらないなら、どうして——泣かずに——

「僕は用があつて出掛けたのだつたのに、お前を愛しないのだといふのはどういふわけなんだ？」

「宴會は用ぢやありませんわ！」

「おや、おや！ 僕は外出も出来ないのか？ どうして女といふものはさう差出がましいものなんだらう？」

「差出がましいんですつて？ えゝ、私、昨日あなたをお迎へに出た時氣がついたんです。もう決してお迎へになんか出ませんわ。」

「だが、ねえおい、僕は長官と一緒に——」

「フ、フ、フ！」

彼女は泣き出した、彼女の體は痙攣的に震へてゐた。

彼は、下女を呼び起して、お湯の瓶をとりやならなければならなかつた。

彼も亦泣いてゐた。悔悟の涙！ 彼は、彼自身のために泣いた、自分の薄情、自分の邪惡、

すべての事に對する自分のイリュージョンのために泣いた。

確かに彼の彼女に對する愛はイリュージョンではなかつたらうか？ 彼は彼女を愛してゐたのだ！ 愛してはゐなかつたのか？ そして彼女は、彼が彼女の打伏してゐる姿の前に跪いて、その眼に接吻した時、自分も亦彼を愛してゐると言つた。さうだ、彼等はお互ひに愛し合つてゐたのだ！ 今通り過ぎたのはそれは單に、一沫の黒雲に過ぎなかつたのだ。孤獨と寂寞とから生れた、醜い考へなのだ。彼女を、決して、決して、獨りで留守させることはしまい。彼等は、互ひの腕の中で眠りに落ちた、彼女の顔は、微笑で以つて醫が出來てゐた。

しかし彼女は、次の日には彼を迎へには行かなかつた。彼は、食事の時にも別に何も訊かなかつた。彼は色々な話をしたが、彼女を楽しませるといふよりは、話すことそのことの爲めに話してゐたのであつた。それは恰も自分で自分に話してゐるかのやうであつた。

夕方には彼は、スヨースタホルム城の生活を長々と説明して彼女を喜ばせた。男爵に話してゐる若い女の眞似をしたりした、そして伯爵の馬の名前を彼女に話した。そして、其翌日は、自分の論文の話をした。

或る午後、彼は非常に疲れて家に歸つて來た。彼女は、彼を待つて應接間に坐つてゐた。

彼女の毛絲の玉が床の上に落ちてゐた。通りがかりに彼の足は、その毛絲にからみつき、次の一步で彼は、彼女の手から編物を引張つて、それを引きすつて行つた。そこで彼は、腹を立て、それを蹴飛ばした。

彼女は、彼のこの亂暴に泣きわめいた。

彼は、そんな下らないことに係り合つてゐる暇はないのだと答へて、彼女の時間をもつと有益なことに使つたらいいだらうと忠告した。彼は、少くも經歷らしいものをつけようとしたならば、論文のことを考へなくてはならないのだ。そして彼女は、一家の經濟を如何に限定すべきかを考へねばならないのだ。

事は、實際それだけでは收まらなかつた！

翌日、若い妻はその眼を泣き腫らして、夫のために靴下を編んでゐた。彼は、そんなことをするより出來を買つた方が餘程安上りだと言つた。彼女は、聲をあげて泣き出した。彼女は何をすればよかつたのであらう？ 下女は家内のすべての用事をしてゐた、臺所仕事は二人分には足りないのだ。彼女は、いつも部屋々々の掃除ばかりしてゐた。彼は、彼女に下女を出さして了はうと欲してゐたのだらうか？

「いや、さうちやない！」

「そんなら彼はどうしたいのだらう？」

彼は、自分でも知らなかつた、しかし彼は何か悪いことがあるのだといふことは確かに知つてゐた。彼等の費用は多すぎた。それだけのことであつた。彼等は、現在のやうな遣方で生活をつゞけることは出来なかつた。そしてそれに——どうしてか、彼は論文のために仕事を
する時間を見出すことが出来なかつた。

涙と、接吻と、素晴らしい和睦！ しかし今では彼は、一週に數回晩に家をあけるやうになつた、用事があるのだ！ 男といふものは世間へ顯はれなくてはならないのだ！ 彼が家に引込んでゐれば、看過され、忘れられて了ふであらう！

一年経つた。赤ん坊の生れるやうな徴候は少しもなかつた。「昔やつた可愛い情事に何て似てゐるんだらう。」と彼は考へた。「たゞ一つ違ふことがある。今の方は、退屈で而も金が餘計にかゝるんだ。」今では、もう會話もなかつた。彼等は唯だ家庭の用事に就いて話す許りであつた。「こいつは頭の無い女だ、」と彼は考へた。「こいつに話してゐる時でも俺自身が聽いてるやうなもんだ。それに、こいつの眼にひどく深さがあるのは、瞳の大きさに欺かれてゐるんだ——瞳の異常な大きさに——」

彼は、濟んで了つた、そして死んで了つた或事として、彼女に公然と昔の戀の話をした。

だが併し、その話をする時にはいつでも彼は、その心に苦痛を、苛立たしい残忍な苦痛を、決して消えることの出来ない無慈悲な苦痛を感じた。

「地上のすべてのものは枯れしほみ、そして死んで了ふのだ。」と彼は默想した。「どうして彼女の好きな歌ばかりがこれに對する例外となるべきであらう？ それを三百六十五回も聞いてゐれば古臭くなる。當り前なことだ。だが、我々の愛も亦なくなつて了つた、と俺の妻が言ふ、あれが正しいだらうか？ いや、しかし——多分彼女は正しいのだらう。俺達には子供が無いのだから俺達の結婚は、いやしい野合よりいゝことではないんだ。」

或る日彼は、結婚してゐる友とこの事を話し合つてみようかと決心した、何故つて、兩方共「結婚制度」の會員ではないか？

「君は結婚してから何年になるんだい？」

「六年さ。」

「それで結婚生活に退屈してゐるのかい？」

「最初はしたよ。だが、子供が生れてからすべてがすつかりよくなつたよ。」

「さうかね？ 僕達に子供が出来ないのは不思議だ。」

「君の罪ぢやないよ、君！ 醫者へ行つて診て貰ふやうに細君に言ひたまへ。」

彼は、彼女と相談した、そして彼女は出掛けて行つた。

一三六

六週間後には何といふ變化があつたらう！

家の中では何といふ大騒動が持ち上つたらう！ 應接間のテーブルの上は、赤ん坊の産着で散らばつてゐたが、それは誰かが思ひがけなくはひつて來ると早速隠された、がそのはひつて來た人が彼にすぎなかつた時には早速再び擴げられた。名前も考へて置かねばならなかつた。きつと男の子だらう。産婆を呼んだり、醫學書を買つたり、搖籃と赤ん坊の爲の用具を買つたりしなければならなかつた。

子供は生れた、そしてそれは本當に男の子であつた！ そして彼が、その時までには彼の玩具であつた彼女の胸の中に抱き締められてゐる「バタ臭い小さい猿」を見た時、彼は、小さい彼の妻の中に母親なるものを恭々しく發見した。そして、彼女の大きな瞳が、未來の中に覗き込まれてゐるやうに思はれた程はげしく赤ん坊を眺めてゐるのを見た時、彼は要するに彼女の眼には深みがあることを知つた。彼があらゆる彼のドラマに對して、又宗教に對して計ることが出来る以上の深みがあるといふことを。そして今やあらゆる彼の昔の愛、なつかしい昔の愛が、焰となつて燃え上つた、そしてそれには、彼がぼんやりと判じてはゐたが、はつきりそれは知つてはゐなかつた新しい或物が附け加はつてゐた。

彼女が再び家事に忙しく立働いてゐた時にはどんなに、彼女は美しかつたことであらう！
そして、赤ん坊に關するあらゆる事柄に於いて如何に利發であつたらう！

彼自身に就いて言へば、彼は一人前の男になつたやうに感じた。男爵の馬と伯爵のクリックットの試合に就いて話すかはりに、彼は今では、あまりに多くと言つていゝ位に、彼の息子に就いて話した。

そして、折々晩に家をあげなければならなかつたとき、彼は常に自分の家の爐端を戀しがつてゐた。それは細君が、憎々しい良心のやうにそこに坐つて彼の歸るのを待つてゐる爲めではなく、彼女が獨りではないといふことを知つてゐたからであつた。そして、彼が歸宅した時には、母も子供も共に眠つてゐるのであつた。彼は、赤ん坊に對して嫉しいばかりであつた。何故ならば、彼が外出した間彼の歸るのを熱心に待つて家で獨り坐つてゐる者があるといふ考への中には、或る種の魅惑があつた。

今では彼は、晝寢をすることも許された。そして、彼が町へ歸つて來るや否や、ピアノが開かれて、愛らしい歌「森の薔薇」が歌はれた。何故ならそれは、ハロルドには全然新しいものであつたから。そして、あんなに久しい間それを聞かなかつた可哀想な小さいラウラにとつて、すべてのその新鮮さをとり戻した。

彼女は、もう編物をする時間が無かつた。しかし家庭内には澤山の油除けがあつた。彼の方でも、論文のために時間を浪費することは出来なかつた。

「ハロルドに書かせよう。」と父は言つた。何故なら今彼は、彼の生命は自分が死んでも終りはしないといふことを知つてゐたから。

毎晩のやうに彼等は、以前同様一緒に坐つて、雑談した、しかし、今は彼女も何を語り合つてゐるのかといふことを理解してゐたので、二人は平等に話してゐるのであつた。

彼女は、宗教に就いても、ドラマに就いても何も知らない愚かな少女であつたことを自白した。けれども彼女は、いつも彼にさう言つてはゐたのだが彼がそれを信じることを拒んでゐたのだと言つた。

併し彼は、以前よりも一層それを信じなかつた。

彼等は、好きな昔の歌をうたつた。するとハロルドは叫び聲を發した。彼等は、音楽に合せて、踊つたり、赤ん坊の搖籃をゆすつたりした。而も、その歌は、常にその新鮮さと魅力とを保つてゐた。

不和

彼の眼は、開かれてゐた。彼は、この世の邪道であることを認めた。けれども彼は、暗黒を貫きそしてその邪惡の原因を見出すべき力を缺いてゐた。それ故彼は、絶望に身を任せて幻滅を感じたる人となつた。その時、彼が戀に陥ちた少女が他の誰かと結婚して了つた。彼は、彼女の行爲に就いて男性や女性の友達に不平を洩した。しかし彼等は、唯だ彼を嘲笑するばかりであつた。暫らくの間彼は、自分の淋しい道を獨り歩いてゐた、そして思ひ違ひをしてゐた。彼は、「社會」なるものに屬してゐた、そしてその社會のつとめに仲間入りしてゐた、何故なればそれが彼の氣をまぎらしてくれたから。が、心の底では彼は、その快樂に對しては嘲笑以外に何物をも持つてはゐなかつた。彼は、そのことを隠すことで苦しみはしなかつた。

或る晩彼は、或る舞踏會に出席した。彼は異常な美しさと活氣とを持つた若い婦人と踊つた。音楽が演奏隊を止めた時、彼はそのまま彼女のそばに立つてゐた。彼は、彼女に何か話さなければならぬことを知つてゐたが何を話したらいいか知らなかつた。暫くの後その少

女が沈黙を破つた。

「あなたはダンスがお好き、男爵さん？」と彼女は、冷たい微笑を浮べて言った。

「いゝえ、いゝえ！　ちつとも。」と彼は答へた。「貴女は？」

「馬鹿なことだと思ふばかりですわ。」と彼女は答へた。

彼は、好きな人間に、といふよりは好きな女に出逢つたのであつた。

「そんなら、何故踊るんです？」と彼は、訊ねた。

「あなたと同じ理由ですわ。」

「僕の心が解るんですか？」

「わけなく解りますわ。二人の人間が同じことを考へてゐる時には、その内の一人はいつでも知つてゐるものですわ。」

「ふむ！　貴女は妙なひとですねえ！　貴女はラヴといふことを信じますか？」

「いゝえ！」

「僕もです！　貴女と僕とは結婚しなくちやならない。」

「私もさう考へ始めてみましたの。」

「貴女は僕と結婚してくれませんか？」

「何故いけないんでせう？　少なくとも、私達は、喧嘩しやしませんわね。」

「素敵な考へだ！　だがどうして貴女にはそんなに確かに解つてゐるんです？」

「でも私たちは同じことを考へるんですもの。」

「さうですね、がそれでは單調になるにきまつてますよ。我々は何にも話すことがなくなつてしまふでせう。何故つて、いつも一人がもう一人の考へてゐることを知つてゐるんですね。」

「本當に、でももしか私達がこのまゝ結婚しないで誤解してゐたとしたら、一層單調になりはしないでせうか？」

「そりや本當です！　貴女はそのことをよく考へてみて下さいますか？」

「えゝ、四班舞踏まではね。」

「それつきりですか？」

「その上どうして考へるんでせう？」

彼は、彼女を應接間に連れ戻し、そこで彼女から離れて、シャンパンを數杯傾けて、それから彼女が夕食をするのを注視してゐた。彼女は、二人の若い外交團の會員に、彼女のそばにゐることを許した、が彼等を始終からかつて、まるで下僕かなんぞのやうに取扱つてゐた。

四班舞踏が始まるや否や、彼は彼女のところへ出掛けて行つて、花束を捧げた。

「貴女は僕の申込みを受けてくれますか？」と彼は訊ねた。

「ええ。」と彼女は答へた。

そこで彼等は婚約した。

それはすばらしい結婚だ、と世間は言つた。彼等は、互ひに都合よくし合つた。彼等は、社會上の地位と金との關する限りでは平等であつた。彼等は、人生に對して同様な遊びに疲れた見解を持つてゐた。此の世に遊び疲れてゐるといふことは、彼等がダンスや、劇場や、パザールや、及びその他のそれらの遊戯なしには人生は、實に生きてゐる價値がないといふやうな高尚な遊戯に僅かばかりも注意を拂はないといふことなのだ。

彼等は、よく拭かれた正確に相等しい双子の石板のやうであつた。けれども、人生がその二つの石板の上に同じ傳説を書くかどうか推測することは全く不可能であつた。彼等は、その婚約の楽しい間には、一度も、相手が自分を愛するかといふことを互ひに決して訊ね合はなかつた。彼等は、それは不可能だといふことをよく知つてゐた、何故なら彼等は、戀愛を信じてゐなかつたのだから。彼等は、餘り話し合はなかつた、しかし彼等は、完全に理解し合つてゐた。

そして彼等は、結婚した。

彼は、常に注意深く、常に丁寧であつた、そして、彼等二人は、善い友達同志であつた。

赤ん坊が生れた時、それは彼等の關係にたつた一つの効果をもたらした。即ち、今では何事か相談しなければならぬのであつた。

次第々に夫は或る種のエネルギーを示しはじめた。彼は、義務感を持つた、そしてその上、怠けてゐることがいやになつた。彼は、個人的な収入を持つてゐた、が政治或は政府とは何等關係してゐなかつた。今や彼は、自分の生活の空虚を埋めるべき職業をさがし廻つた。彼は、覺醒しつゝある人々の第一聲を聞いた。そして、人間の不幸の原因を探究する偉大な仕事の自分の分前を行ふことが、自分の義務だと感じた。彼は、澤山読み、政治學を細心に學び、そしてその結果に、一つの論文を書いて新聞へ送つた。その結果彼は、教育評議員に選ばれた。このことは、なほ將來多くの書籍を讀まなくてはならぬやうにした。何故ならすべて問題は、完全に打殺されねばならなかつたから。

男爵夫人は、ソープに凭れて、シャトウブリアンとミラセとを讀んだ。彼女は人間の改造に對して何等の信仰をも持つてはゐなかつた。多くの世紀が人間の制度の上に沈澱させたこの塵埃をかき立てることは、彼女を苛立たせた。しかし彼女は、自分が夫と同じ速力で進ん

でないといふことに気がついてゐた。彼等は競争場の二頭の馬のやうなものであつた。彼等は、出發の前に目方を計られた、そして同じ重量であることが解つてゐたのだ。彼等は、走つてゐる間相並んでゐようと約束をしたのだ。すべての事柄が、彼等をして競争を終つて同時にその路をさらしめるやうに計畫されてゐたのだ。けれども既に夫は、一步だけ勝を占めてゐた。彼女は、急がないとうしろに取り残されようとしてゐたのであつた。

そして、さういふことが偶然實際に起つた。その翌年、彼は豫算案の取締になつた。彼は、二箇月を外出してゐた。彼が留守になつたことは、男爵夫人をして、彼女が彼を戀してゐたことを知らしめた。この事實は、彼を失ふ恐怖が彼女に持つて來たのであつた。

彼が歸宅した時には、彼女はすつかり待ち遠しがつてゐたのであつた、しかし彼の心は外で見たり聞いたりして來た物で一杯になつてゐた。彼は、二人の生活がその進路の岐れるところへ來たことを知つた。けれども彼は、若し出来るならば、それを引伸し妨げようと欲したのであつた。彼は、國家といふ素晴しく大きな機械の作用を、そのまゝの大きさの繪にひろげて、彼女に示した、彼は車輪や、雑多な傳送法や、自動調整装置と引留装置や、信すべからざる振子や、驚くべき保安辨やの作用を彼女に説明しようとして試みた。

彼女は、最初は興味を持つてゐたが、暫らくすると、その興味は力を失つて了つた。彼女

は、自分の精神的に劣つてゐること、自分の取るにも足らぬ者であることに気がつく、全然赤ん坊に身を捧げて了つて、自分が尙ほ模範的な母として價值を持つてゐるといふことを示して、夫に示威しようとしたのであつた。けれども夫は、この價值を會得しなかつた。彼は、友達となる爲に彼女と結婚したのであつたが、彼は彼女のうちに子供の爲めの立派な乳母を見出したのであつた。しかしながら、今更それをどうしたらいいのであらうか？ 誰がかういふことを豫見することが出來たであらうか？

家庭は、常に議員で一杯になつてゐた、そして政治が、食事時の會話の主題であつた。主婦は、料理に少しも過ちが見出されないやうにと注意するだけに過ぎなかつた。男爵は、客のうちに、彼の妻に向つて音楽とドラマに就いて話すことの出来る者を一人二人連れて來ることを決して忘れなかつた。けれども男爵夫人は、育兒室と小兒養育のことより他何にも話すことを欲しないのであつた。デザートが濟んで、主婦の健康のために乾盃がすんで了ふと、まもなく人々は喫煙室に逃げ込んで、政治的話をつゞけるのであつた。男爵夫人は客達に別れて了ふと、心に苦しみを感しながら育兒室へはひつて行つた。彼女は、自分の夫が、二度と再び歩調をそろへて歩まうといふ希望を持つことが出来ない程彼女から遠ざかつて了つたといふことを知つた。

彼は、夜も家で澤山仕事をした。明方近くまで机に向つて忙しくしてゐることも屢々あつた。しかしいつも錠を下ろした室の中であつた。折々あつたことだが、後になつて彼がその妻の赤い眼をしてうろくしてゐたことに氣づいた時、彼は心に痛みを覚えるのであつた。けれども彼等は、話し合ふやうなことを何も持たなかつた。

けれども時々、彼の仕事があまく行かなかつたり、彼の内部生活が次第々々に貧しくなつて行くことに氣がついたりした時、彼は自分の中に或る空虚を感じた。暖かみとか、睦じい或物だとか、彼がずつと以前に、その青年時代に、夢みてゐた或物だとか、さういふ物に對する熱望を感じたのであつた。けれども、さういふ種類のすべての感情を、彼は妻に對する不信として忽ち抑壓して了つた、何故ならば彼は、夫の義務といふことに就いて非常に高尚な考へを持つてゐたから。

妻の日常生活に僅かの複雑さをでも與へようとして、或日彼は彼女が始終話してゐる、しかし彼は一度も會つたことのない従妹を招んで、町で冬を過すことにしたらどうかとほのめかした。

これは、いつも男爵夫人が非常に望んでゐたところのものであつた、けれどもさうすることとは今は彼女の權力内に在つたので、彼女は自分の心を變へてゐた。彼女は、今では少しも従妹を欲してゐなかつた。夫は、その理由をしつこく訊いたが、彼女は説明しようとしなかつた。それは彼の好奇心を惹起させた、そして遂に彼女は、自分が従妹を恐れてゐること、その従妹が彼の心を占領し、彼が従妹と戀に陥ちて了ひはしないかといふことを恐れてゐることを白狀した。

「その人は面白い女にちがひない。我々は本當にその人を呼ばなくちやいけない！」
男爵夫人は泣いた、そして警告した。しかし男爵は笑つてゐた、そして従妹はやつて來た。或る午後男爵は、いつもの通り疲れて歸つて來た。彼は、従妹のことはすつかり忘れてゐた、その女に對する好奇心も忘れてゐた。彼等は、食事に坐つた。男爵は、従妹に芝居は好きかと訊いた。彼女は、好かないと答へた。彼女は、虚相よりも現實を好んだ。家庭では彼女は、黒奴のために學校を建て、やつたり、出獄した囚人の世話をする會を起したりしてゐた。實際であつた！ 男爵は、監獄の管理法に非常に興味を持つてゐた。従妹は、彼に多くの報告をすることが出來た。そして食事の後には、會話は殆んど監獄のことで終始してゐた。終ひには従妹は、男爵が讀んで居りまた關係してゐる新聞紙上にその問題の全體を取扱つてみようと約束した。

男爵夫人が豫見したところの事は起つた。男爵は、従妹と精神的の婚約をしてしまつた。

そして彼の妻は、冷淡に棄て置かれた。しかし、従妹は美しくもあつた、そして、彼女が書物机に坐つてゐる男爵に凭れてゐた時、そして彼が、自分の肩の上に彼女の柔かな腕を感じ自分の頬に彼女の暖かな息を感じた時、彼は無上の幸福の感を抑へることが出来なかつた。言ふまでもないことだが、彼等の會話は、いつも監獄のことばかりではなかつた。彼等は、戀に就いても話し合つた。彼女は、人と人との間の戀を信じてゐた。そして彼女は、戀愛なしの結婚は賣淫だといふことを出来るだけ平たく説明した。男爵は、戀愛に就いての近代思想の發達に大して興味を持つてはゐなかつた。そして、この問題に對する彼女の見解は固過ぎる位であることを知つたが、要するに彼女の言ふことは、恐らくは全く正しかつたのである。けれども従妹は、他の性質をも持つてゐた、即ち、眞の精神的結婚に對する非常に貴い資格を持つてゐた。彼女は、例へば喫煙に全く反對しなかつた、實は彼女自身も紙卷煙草は非常に好きなのであつた。それ故、彼女が食後に男たちと共に喫煙室にはひつて、政治を論議してはならないといふことの理由は何一つなかつたのである。そして、さういふ場合、彼女は可愛らしかつた。

男爵は、いくらか良心の痛みに苦しんで、折々喫煙室から姿を隠しては、育兒室へはひつて妻と赤ん坊とに接吻し、妻に具合はどうかと訊ねたりしてゐた。男爵夫人は、感謝しはし

たが、幸福ではなかつた。一寸出てゐてから男爵は、いつでも最もいゝ心持になつて友達のところへ戻つて行くのであつた。それ故、彼が神聖なる義務を忠實に果したものと人々は思つたかも知れない。又時とすると彼の妻が、彼の妻として喫煙室の群に加はらなかつたことが、彼を苛立たせ懊惱させるやうなこともあつた。この考へは、彼の上に全く重々しくのかゝつてゐる重荷であつた。

従妹は、春になつても家へは歸らないばかりか、却つて男爵夫婦を海水浴場へ連れて行つた。其處で彼女は、貧しい人の爲に一寸した芝居を興行した。その芝居の中で彼女と男爵とは、戀人同志の役を演じた。このことが、火が燃えあがるといふ避けがたい結果を誘致した。けれどもその焔は、單に精神的の焔、即ち趣味の一致とか見解の相似とか、そして恐らくは、同様の性向に過ぎないものであつた。

男爵夫人は、自分の立場を考へるに足る十分の時間があつた。彼女が夫に向つて、二人の間のすべては終つたのであるから、爲すべき唯一の正しい事は分れることだ、と言ふ日が到着した。けれどもそれは、彼が期待してゐたより以上のものであつた、彼は不幸であつた、従妹はその兩親の下に歸つた方がよかつたのだ、そして彼は、自分が名譽ある男子であることをその妻に證明したかつたのである。

従妹は去つた。彼女と男爵との間には、通信が始まつた。彼は、男爵夫人がどんなに厭がつつても、それらの手紙を悉く彼女に讀ませた。けれども、暫らくすると彼は、降参して了つて、それを妻には見せず讀むやうになつた。

遂に従妹は戻つて來た。そこで事件は危機に瀕した。男爵は、彼女なしでは生きて行けないことを發見した。

彼等はどうしたらよかつたのであらう？ 別れるのか？ それは死ぬことだつたであらう。今のまゝをつゞけるのか？ 不可能なことだ！ 男爵が合法の賣淫と見做しはじめた所のこの結婚を廢止して、彼の愛する者と結婚するのか？ どんなに苦しいからうが、それは唯一の正しいとるべき途であつた。

けれどもそれは、従妹の希望には反してゐた。彼女は、他の女の夫を盗んだと噂されたくなかつた。すると醜聞！ 醜聞だ！

——だがね、事をすつかり細君に話さないなんて、宣しくないよ。事を成行くがまゝにまかせるのは正しくないことだ。事がどう成行くか誰も決して云ふ事は出來ないのだから。

——あの男はどんなつもりなのだらう？ どんな結果に成るだらう？

——誰にだつて分りやしないさ！

——おゝ！ あの男はなんてことをし出來したのだらう！ あの女をどう思つてたのだらう？

——あの女が女だと思つてたのさ！

そして彼は、膝をついて、彼女を崇拜した。彼は、監獄の制度や黒奴の學校がどうならうと何とも思つてはゐないと言つた。彼は、彼女がどんな風な女かといふことを知らなかつた。彼が知つてゐたのは、彼が彼女を愛してゐるといふことだけであつた。

彼女は彼に對しては輕蔑以外に何も持つてはゐなかつたのだと答へた、そして、あわてゝ巴里へと行つて了つた。彼は、彼女の後に跟いて行つた。ハンブルグで彼は、妻に手紙を出して、二人は間違つてゐた、そしてこれを改めないでゐるのは不徳なことだと書いた。彼は離婚してくれと彼女に求めた。

そして彼女は、彼と離婚した。

この出來事の後一年経つて、男爵と従妹とは結婚してゐた。彼等の間には子供が出來た。しかしこのことは、彼等の幸福を何等障がない事柄だつた。全く反對である！ 何といふ澤山の新しい考へが、我から追放されてゐる間の彼等の心のうちに發生したことか！ 此處に吹く風は如何に強かつたか！

彼は、彼女を勵まして、「若き罪人」を取扱つた本を書かした。新聞がそれを滅茶々にたたいた。彼女は、氣違ひのやうになつた。そして、もう決して本は書かないと誓つた。彼は、そんならお前は賞讃のために書いたのか、それとも野心で書いたのか？ と訊ねた。——彼女は、あなたはどんな理由で書いてゐたんです？ といふ質問で答へた——小さな喧嘩が起つた。彼は、常に彼自身のものに似てゐない彼女の特別な見解を聴くことは氣が清々すると言つた。常に彼自身のものとは？ 彼はどういふことを言ふつもりだつたのだらうか？ 彼女は、彼女自身の見解を持たなかつたとしても言ふのだらうか？ それ以來彼女は、あらゆる機會に、自分が自分だけの見解を作ることが出来るといふことを彼の前に證明することを仕事にしてゐた。そして、彼の方の過誤を妨げる爲に、彼女は人々は彼の見解とはいつも違つてゐるといふことによく注意してゐた。彼は、彼女が自分を愛してゐてくれる限り、どんな見解を持つても構はないと言つた。——愛とは？ それは何だといふのだ？ 彼は、他の男より善いことは少しもなかつた、そしてその上彼は彼女を裏切つてゐた。彼は、彼女の魂を愛してゐたのではなかつた。肉體を愛してゐたのだ——否、彼は兩方を愛してゐた、彼は彼女を愛してゐたのだ、彼の凡ゆる點を！——おゝ！ 如何に彼は欺瞞に充ちてゐたらう！——否、彼は欺瞞に充ちてはゐなかつた。彼は、自分が彼女の精神のみを愛

してゐると信じてゐた時、單に己自身を欺いてゐたに過ぎないのであつた。

彼等は、並木路をぶらつくことに飽きると、珈琲店に坐つた。彼女は、紙巻煙卓に火をつけた。給仕人が、彼女に喫煙はいけなさと可成ぶしつけに要求した。男爵は説明を求めた、すると給仕人は、この珈琲店は第一流の建物なので、支配人は、かういふ女達にまで給仕をしてやることによつて、尊敬すべき人々を追ひ出すことになつてはならないと心配してゐるのだ、と言つた。彼等は、その席から立ち上つて金を拂つて、出て了つた。男爵は腹を立てゝゐた、若い男爵夫人は眼に涙をためてゐた。

——彼處で彼等は、偏見の力の示威運動をやつたのだ。喫煙は、男がそれをやつてゐる限りは、たゞ馬鹿な行爲に過ぎないが、女にあつては、それは罪惡であつた！ さうすることの出来る者をしてこの偏見を破壊せしめよ！ 然らずんば、我々をして言はしむれば、さうすることを欲する者をして破壊せしめよ！ 男爵は、自分の妻がその最初の犠牲とならねばならないといふことを少しも欲しなかつた。縱令それが、偏見といふものを投げ棄てるといふ曖昧な名譽を彼女の爲に贏ち得ることであつたとしても。何故ならそれは、その他の何事でもなかつた。露西亞に於いては、上流社會の女は、食事中にそのテーブルで煙草を喫かすのであつた。習慣は、その緯度につれて異つてゐる。而も、それらの些事もなほ、重大なこ

とでないといふわけではなかつた。それといふのも、人生は些事で出来上つてゐるからである。若し男と女とが、悪しき習慣を分け持つてゐたならば、彼等の間の交渉は、もつと固苦しくもなく、形式的でもなくなるであらう。彼等は、もつとわけなく友達となり、お互に歩調をそろへて歩むであらう。若しも彼等が、同じ教育を受けてゐたならば、彼等は、同じ興味を持つてゐたであらう。そして彼等の生涯を通じてもつと密接に結びついてゐたであらう。

男爵は、何か馬鹿なことを言ひでもしたやうに黙つて了つた。しかし彼女は、彼の言ふことに耳を傾けてはゐなかつた、彼女の思想はすつと遠い處へ飛んでゐた。

——彼女は、給仕人に侮辱され、尊敬すべき人々と交る資格がないと言はれたのだ。そこには、表面にあらはれてゐる事以上に、裏があつた。彼女はそれを知つてゐたのだ、さうだ、それにちがひない、そして彼女がそれに氣がついたのは、それが始めてはなかつた。

——何に彼女は氣がついたのか？

——彼女が料理店で、全く尊敬されずにゐたことに。人々は、明かに二人が結婚してゐる者だとは思つてゐなかつた。何故なら二人は互ひに愛し合ひ、そして禮儀正しかつたから。彼女は、長いあひだ黙つてそれを胸の中へたんでゐた、がもう彼女は進退谷まつてしまつ

たのであつた。それでもこれは、彼等が家で話してゐたところのものに比べれば何でもなかつた！

——では、何を彼等は話してゐたのか？　そして何故彼女は、以前にはそれに就いて何事も彼に話さなかつたのであらう？

——おゝ！　恐ろしい事だ！　手紙を彼女は受取つたのであつた！　匿名の手紙を打ちやつて置くことは、全く何でもないことである。

——そこで、彼はどうしたであらう？　彼は、罪人だといふ風に取扱はれてはゐなかつたか？　しかし彼は罪を犯しはしなかつたのだ！　彼は、あらゆる法律上の要求に従つて行動してゐた、彼は、その結婚の誓ひを破りはしなかつた。彼は、法律の指圖に應じてその國を去つた、高僧會は、離婚に對する彼の訴へを是認したのだ、僧侶は、聖教會は、スタンプを押した紙に書かれた彼の最初の結婚の羈絆から彼を釋放したのだ、それ故彼は法律破りはしなかつたのだ！　一國が征服された時には、その全國民は、その君主への忠節の誓ひを解かれるのだつた。然るに何故社會は、或る約束から釋放されることに疑ひを懐くのだ？　結婚を取消すことは高僧會に權力を授けることではなかつたか？　今裁判官の地位を得たかと思ふと、もうそれ自身の法律を責めるといふやうなことがどうして出来たか？　社會は、

それ自身と戦つてゐるのであつた！ 彼は、罪人のやうに取扱はれてゐた！ 彼が自身の名刺と妻のとを置いて來たその舊友、大使館の祕書官は、單に一枚の名刺を返すことによつて、彼等を認めたのではなかつたか？ そして彼は、あらゆる公の會合に於いて看過されてゐはしなかつたらうか？

——おい！ 彼女は、多くのよくない事柄を忍ばねばならなかつた！ 巴里に居た彼女の友達の一人は、彼女に對して、その扉を閉ぢた、そして往來では幾人かの人々が、彼女を見ても知らない振りをした。

——深靴を履いてゐる者のみが、その窮屈な所（譯者曰。心配な點、といふ意）を知つてゐるのだ。

彼等が現在履いてゐた深靴は、本當のスペイン靴であつた、そして彼等は、社會と戦つてゐたのだ。上流社會は、彼等を見て見ぬ振りした。上流社會！ 犬のやうに祕密に生活し、而も、公けの醜聞が少しもない限り、即ち、人が一つの契約を正直に取消さないで、そして、それが過ぎ去つて了ふまで新しく勝ち得た自由を利用するのを待つてゐる限りに於いては、互ひに尊敬を示し合つてゐる此の半愚人の社會！ そしてこれら邪惡なる上流社會は、正直が零（ゼロ）より遙か下方に盛られてゐる秤によつて社會的位置とか尊敬とかを審く審判官であつたのだ。社會は、虚偽の織物に過ぎなかつた！ このことが遠い以前から發見されてゐなかつたのだ。

たといふことは、解しがたいことだ！ この立派な建物を検査し、そしてその礎の状態を探究するには今こそ絶好の時であつたのだ。——

彼等は、家へ歸るとこの數年來にもかつてなかつた程親しい仲となつた。男爵夫人は、赤ん坊と一緒に家に在つた、そしてまもなく生れる第二の子供を期待してゐた。時勢に對するこの争鬭は、彼女には辛過ぎた。そして彼女は、もうそれに飽き始めてゐた。彼女は、すべての事柄に飽き果てた！ 優雅に飾られ、適度に温められた部屋の中で、出獄人の問題に關する著述をなし、程よく離れてすつかり手袋をはめた手を彼等に差出すことは、新社會の一部が認めてゐることであつた。けれども、法律上の離婚をした男と結婚してゐる女に對して、友情の手を差出すことは、全く別問題であつた。何故さうでなくてはならないのであらう？ 答へを見出すことは困難であつた。

男爵は、戰鬭酬なる中に在つて戦つてゐた。彼は、下院を訪問し、會合に出席し、そして到る處で彼は、社會に對する熱烈な酷評には耳を傾けてゐた。彼は、新聞雜誌を讀み、文學にも鋭い眼を向けて、その問題を深く研究した。彼の妻は、最初の妻が被つたと同様の運命によつて脅かされた、後に残されるといふ！ 不思議なことであつた。彼女には、彼の研究の細目を悉く取り容れることは出來ないやうに思はれた。彼女は、その多くの新しい主張を

否認した。けれども彼女は、彼が正當であつて且つ善い原因から闘つてゐたのだといふことを感じてゐた。彼は、自分が彼女の決して弱らない同情を常に數へ上げ得てゐるといふことを知つてゐた。彼は常に自分のために立たうとしてゐる一人の友を家庭に持つてゐるのだといふことを知つてゐた。彼等に共通な運命は、彼等を驅つて來らんとする嵐の前に脅かされてゐる小鳥のやうに互ひの腕の中に凭らしめた。彼女の内にある凡ゆる女らしさ——それは現代では殆ど尊重されてゐないものであるが、要するに、女の天から授かつてゐるものである自然の力、即ち大なる母の記憶に過ぎないものである——が生じた。それは黄昏の火の暖かい火照のやうに子供達の上に落ちた。それは、夫の上に太陽の光線のやうに落ちた。それは、家庭に平和を持つて來た。彼は、自分が凡てのことに就いて議論する習慣になつてゐた古い友を見損はなかつたのはどうしてだらうと屢々怪しんだ。彼は、自分の思想が、それを懐き始めるや否やすぐに流出させて了ふことを罷めて以來、力と勇氣とを得たことを發見した。彼は、沈黙せる賛同、親切なる是認、逡巡せざる同情によつて一層利益を得てゐるやうな氣がしてゐた。彼は、力が増し、見解が外界から支配されることが少くなつたことを感じた。彼は今淋しい人であつた、しかし過去に於いてあつたよりは淋しくない人であつた。何故なら彼は最早、單に彼の胸を疑念で以つて充たすのみであつたところの反駁に絶えず出會すやうなことはなかつたから。

巴里に於けるクリスマス前夜のことであつた。レーヌの流^{はとろ}れの邊に在る彼等の小さな別荘の中にはサン・ゼルメンの森からとつてきた大きなクリスマス・ツリーが立つてゐた。彼等は朝飯後に子供達にクリスマスの贈物を買つてやる爲に外へ出て行つた。男爵は、上の空であつた、何故なら彼は、恰度「上流階級は社會を組織せるや？」といふ題の小さなパンフレットを出版したばかりだつたから。彼等は、居心地のいゝ食堂で朝飯に坐つてゐた。そして、育児室へ導かれてゐる戸は、廣く開け放されてゐた。彼等は、乳母が子供たちを遊ばせてゐるのに耳を傾けてゐた。男爵夫人は、満足と幸福とを以つて微笑してゐた。彼女は非常に優しくなり、そして彼女の幸福は、靜かなものであつた。子供の一人が突然泣き出した、そこで彼女は、何事が起つたのかを見る爲にテーブルから立ち上つた。それと同時に、下僕が朝の新聞を持つて食堂にはひつて來た。男爵は、二包みの印刷物を開いた。第一のものは、「大なる權威ある」新聞であつた。彼はそれを開いた、そして、彼の眼は、太字で「冒瀆漢！」と書かれた見出しの上に落ちた。

彼は、読み始めた。「復たクリスマスは近づけり。純潔なる全人に親しみ深きこの祭日、全

基督教國民にとりて神聖なるこの祭日、そは凡ゆる人々に對して平和と善意との使命を齎し、殺人者をしてすらそのナイフを納めしめ、盜賊をして神聖なる財産の法律を尊敬せしむるものなり。この祭日、そは甚だ古へにその起源を有するのみならず、又北方の國々に於いては特に、有力なる歴史的聯想を以つて圍繞さるゝものなり。云々、云々。而も此時、下水より生ずる惡臭の如く、一人物は、突如として吾人に敵對して立ち、最も神聖なる羈絆を切斷せんとして憚らず、あらゆる尊重すべき社會の上に、最劣等なる復讐の下に刺戟せられたる惡意を吐出し……」彼は、その新聞を再びたゞんで、寢衣のポケットに突込んだ。それから彼は、第二の包を開いた。その中には、彼自身と彼の妻とのカリカチュアがはいつてゐた。それも亦、最初のと同様に處置した、しかし彼は急いでやらなければならなかつた、彼の妻は、再び食堂にはいつて來ようとしてゐたから。彼は、朝飯が済むと出掛ける用意をしに寢室にはいつた。彼等は一緒に家を出た。

日光は、シャンゼリゼエの霜の下りた篠懸の木の上に落ちてゐた、そして石の多い荒地の眞中にはコンコードの町が大きな緑地のやうに開けてゐた。彼は、自分の腕の上に彼女の腕が凭れてゐるのを感じた。それでも彼は、彼女の方が自分を支へてくれてゐるのだといふ感じを持つてゐた。彼女は、今一人で子供等の爲に買ひに行かうとしてゐる贈物に就いて話し

た。そこで彼は、その問題に興味を向けようと無理に努力した。けれども忽ちに彼は、彼女の話を遮つて、唐突に彼女に訊ねた。

「復讐と刑罰との差異を知つてゐるかい？」

「いゝえ、私そんなことを考へたこともありませんわ。」

「それはかうぢやないんだらうか？——匿名の新聞記者が復讐する時、それは罰なのだ。ところが新聞業者でない有名な著述家が公然の假面と闘つて、罰を定めると、それは復讐なのだ！ 新しい豫言者の仲間入りをしようか！」

彼女は、折角のクリスマススを、新聞の話なぞして汚さないやうにと頼んだ。

「この祭日」と彼は呟いた。「そは平和と善意との……」

彼等は、リュウ・ド・リヴァリの覆道を通つて、廣小路に曲り、そして買物をした。彼等は、グランド・ホテルで食事をした。彼女は輝かしい心持だつた、そして彼の氣分を引立たせようと試みた。しかし彼は、矢張り他事に心をとられたまゝであつた。突然彼は訊ねた。

「人が正しく行動してゐる時、悪い良心を持ち得るなんてことがどうして有り得るんだらう？」

彼女には、解らなかつた。

「それは、我々が上流社會に反對しようとする時にはいつでも我々の良心が苦しめられるやうに、彼等が我々を仕込んでゐるからではなからうか？ 多分さうだらう。非道に傷けられた者は、何故不正を攻撃する権利を持つてはいけないのだ？ それはたゞ、傷けられた者は、攻撃しようとするのだが、上流社會は攻撃されるのが厭だからなんだ。俺が昔上流社會の中に居た時、何故俺は彼等をやつつけなかつたのだらう？ 勿論、あの時には俺はあいつ等を知らなかつたからだ。人が繪を見てその正しい視點を見出さうとするならば、離れて見なければならぬのだ！」

「人は、クリスマス・イヴにはそんな話をしないものですわ。」

「まつたくだ、クリスマスだ。この祭日……」

彼等は、家へ歸つた。彼等は、クリスマス・ツリーの上の蠟燭に火をつけた。それは、平和と幸福とに輝いた。けれどもその黒い枝は、葬送の臭がし、ちやうど男爵の顔のやうに毒々しく見えた。乳母が、小さい者達を連れてはひつて來た。彼の顔は明るくなつた。何故ならば、彼等が成長した時には彼等は、我々が涙と共に蒔いたところのものを、喜びを以つて刈り入れるだらう、その時には彼等の良心は、自然に相反する罪を犯した時にのみ彼等を苦しめるのだらう、彼等は、學校に於いて我々を打ち、牧師の手をかりて我々を叩くところの、

上流社會の利益のために彼等自身によつて案出された氣まぐれに苦しめられねばならぬといふやうなことはないであらう、と考へたからであつた。

下女や下僕たちがはひつて來ると、男爵夫人は、ピアノに坐つた。彼女は、北方の人々の心にとつてはなつかしいものである憂鬱な古い踊の曲を演奏した。それにつれて召使たちは、子供等と一緒に嚴かに踊つた。それは、禮拜式の悔罪の部分によく似てゐた。

そのあとで、贈物が子供たちの間に分け與へられた。そして召使たちも、その贈物を受けた。それから子供たちは寢床にはひつた。

男爵夫人は、應接間にはひつて、安樂椅子に坐つた。男爵は、彼女の足元の足置臺に身を投げかけた。彼は、彼女の膝にその頭を凭せた。それは非常に重かつた——非常に重かつた。彼女は、黙つて彼の額を撫でてゐた。

——まあ！ この人は泣いてゐるのね？

——さうだ！

彼女は、これまでに男が泣くのを見たことはなかつた。それは恐ろしい光景であつた。彼の大きな強壯な身體が震へてゐた、しかし彼は少しも聲は立てなかつた。

——何故泣いてゐるのであらう？

——彼は不幸だからだ。

——彼女と共に居ることが不幸なのか？

——否、否、彼女と共に居るからではない。だが併し不幸である。

——何人かが彼を悪く取扱つたのか？

——さうだ！

——彼は、それに就いてすつかり彼女に話すことが出来なかつたのか？

——否、たゞ彼は、彼女の足元に坐りたかつたのだ。ずつと以前に、彼の母の膝にいつも凭れてゐたやうに。——

彼女は、子供に話すやうに彼に話した。彼女は、彼の眼に接吻し、そして彼女のハンケチで彼の顔を拭いてやつた。彼女は、非常に誇らしく、非常に強く感じた、彼女の眼には少しも涙は無かつた。その彼女を見ることは、彼を新しい勇氣で勵ましたのであつた。

——彼は如何に弱かつたことだらう！ それで彼は、忍ぶには餘りに辛い彼の反對者の機械で拵へたやうな攻撃を見出さねばならないのだ！ 彼の敵は、本當に彼等の言つたことを信じてゐたのであらうか？

——恐ろしい考へだ！ 彼等は多分信じたのだ。石が松の木の中へ固着してゐるのが、屢

屢見出されるが、多くの意見も、それと同様に脳髓の中へ固着してないことがどうしてないものか？ しかしながら、彼女は彼を信じてゐた。彼女は、彼がいゝ原因から戦つてゐたのだといふことを知つてゐるのではなかつたか？

——さうだ、彼女はそれを信じてゐた！ しかし——彼は彼女がこんな質問をするからと云つて彼女に腹を立てゝはならない——しかし——彼は自分の子供を、あの最初の子供を忘れはしなかつたか？

——さうだ、確かに。しかしそれはどうすることも出来なかつたのだ。少くも今までは出来なかつた！ 併しながら又、彼及び未來の爲に働いてゐた他の者は、そのための救済法を講じなければならなかつたであらう。彼は、その救済が如何なる形をとるものであるか今までは知らないのであるが、彼よりも、より力強い者が、そして多勢が一緒になることによつて、現在では解きがたいと思はれてゐるところのこの問題をいつかは確かに解いて了ふであらう。

——さうだ、彼女はさうなることを望んでゐたのだ。

——併し彼等の結婚は？ 彼が自分の苦しみを彼女に語り得なかつたところから見れば、それは、言葉の眞の意味に於ける結婚だつたらうか？ それも矢張り例の賣……？

——否、それは眞の結婚であつた。何故なら彼等は、互ひに相愛してゐたから。彼と彼の最初の妻との間には少しも愛は無かつた。しかし、彼と彼女とは、互ひに愛し合つてゐるのだ、彼女はそれを拒むことが出来たらうか？

——彼女には出来なかつた、彼は、彼女のいとしい愛人なのであつた。——
そこで彼等の結婚は、神及び自然に向つて恥づるところのない眞の結婚であつた。

不自然なる淘汰 (或は、民族の起源)

男爵は、「生の奴隷」の中で、下層階級の子供等からその母親の乳を取り去るに非ずんば貴族の子供は亡びんとしてゐる、といふ記事を憎悪と憤怒とを以つて讀んだ。彼は、ダルヴィンを讀んだことがあつた。そして、彼の説く所の要點は、淘汰の結果、貴族の子供は、「人間」といふ種族のより高く發達した代表者たるべきものだといふことを信じてゐた。然るに、遺傳の説く所は、彼をして乳母の使用を嫌惡を以つて見るやうにさせた。何故かといふと、下層階級の血を以つてしては、正しい思想、觀念、及び慾望を貴族の幼兒に導入し、且つ殖やすことが出来ないのではあるまいか？ 彼はそこで、自分の妻が彼女自身で幼兒を養育しなければならぬと定めた。又若しも彼女がさうする能力を持たないことが分れば幼兒は、牛乳罐を以つて育てられねばならないといふのであつた。彼は、牝牛の乳に對しては或る權利を持つてゐた。何故なら彼等は彼の與へる乾草で養はれてゐた、それなしには彼等は飢ゑるか、或は全く存在し得る筈がなかつたからである。

赤ん坊は生れた。それは男の子であつた！ 父は、その妻の肥立ちが確かなものとなるま

では稍や心配してゐた。それといふのも、彼は個人的には貧乏人であつて、彼の妻は、その反對に非常な金持だつたけれども、彼等の連結が、法律上の（相續法第何條第何章に依る）嗣子に依つて祝福されたものとならなくては、彼女の財産に對しては、何等の權利をも持つてゐなかつたからである。彼の喜びは、それゆゑ非常なものであり、偽らざるものであつた。赤ん坊は透明な小さな元氣なもので、蠟のやうな皮膚を通して青い脈が輝いてゐた。とは云へ血の氣は薄かつた。天使のやうな姿の持主であつた彼の母は、厚い毛皮で天候の凡ゆる不調から守られて、選ばれたる食物で育てられ、そして高貴な家柄の婦人たることを表示する貴族的な青白さを持つてゐた。

赤ん坊を彼女は、自分で養育した。その結果、この地球上に生を樂しむ特權のためには百姓女のお蔭を蒙る必要は全くなかつた。彼がそれについて讀みとつたところのすべてはお伽噺以外の何物でもなかつた！ 赤ん坊は乳を吸つた、そして二週間も泣いた。だが赤ん坊は皆泣くものである。それは何でもない。ところが、今度は瘡せて來た。恐ろしく憔悴して了つた。醫者が迎へられた。醫者は、父と私かに話をした。その時醫者は、男爵夫人は第一餘りに神経過敏で、第二には子を養ふべきものを何も持つてゐないから、若しも續けて彼女が育てるならば赤ん坊は死んで了ふであらう、と宣言した。彼は、乳の定量分析をする面倒

を取へてして、養育の方法を變へなければその赤ん坊は、餓死して了ふであらうといふことを（方程式によつて）證明した。

何が爲さるべきであつたか？ どうしても赤ん坊は死なしてはならない。牛乳壘か乳母か？ 乳母は問題にならなかつた。牛乳壘をやつてみよう！ けれども醫者は、乳母の方を指定した。

その地方で金盃を取つたことのある、最上の和蘭陀産の牝牛が、隔離されて、乾草で飼養された、極上の質のいゝ乾草で。醫者がその乳を分析した、何もかも上等だつた。その方法は如何に單純だつたらう！ 今までそれに就いて二人共考へなかつたといふのは、不思議なわけだ！ 要するに人は、その前で機嫌を取つてやらなければならぬ暴君の、肥らしてやらなければならぬごろつき女の乳母なぞといふものを雇ふ必要はないのだ、その女が傳染性の病氣を持つてゐるかも知れないといふことは言はずもがなだ。

けれどもその赤ん坊が、瘦せることも泣くことも従前通りにつゞいた。夜となく晝となく泣いた。疝痛のために苦しんでゐるのだといふことは疑ひもなかつた。新しい牛が採用され、そして又もや分析が行はれた。その乳は、カル、スバッド水の混じた純粹のスプルーデルであつた。ところが赤ん坊は矢張り泣くことを止めなかつた。

「乳母を雇ふより外に救ふ方法はない。」と醫者は言つた。

「おゝ！ 何かないでせうか！ 誰でも他人の子供のものを盗むことは欲しいものです。それは自然に反することです。それに、遺傳といふ方から云つたらどうでせう？」

男爵が自然なものと不自然なことを語り出した時に、醫者は、若しも自然が彼女の思ふ通りの事をしたならばあらゆる高貴なる家族が消え去り、そして彼等の地所は主權者に歸して了ふのである、と彼に説明した。これが自然の智慧である。そして人類の文明は、自然との愚かなる争闘に他ならないのである。自然界の中に在つては人類は壓倒される運命をもつてゐるのだ。男爵家の子孫は、咒はれてゐるのだ。それは、その妻が彼女の子供を養ふことが出来ず、生きんがためには、彼等は他の女の乳を買ふか盗むかしなければならぬといふ事實によつて證明されてゐるのだつた。従つてその一家は、最も些細なる點に至るまで竊盜で食つてゐるのであつた。

——乳を買ふことは竊盜と呼ばれるだらうか？ それを買ふことが？

——さうだ。何故ならそれを買ふ金は、労働によつて生じたものだから。誰の労働？ 人民の！ 何故なら貴族は働かなかつたから。

——それでは醫者は社會主義者だつたのだ！

——否、ダルヴィンの學徒だ。しかし彼はもし社會主義者と呼ばれるとしても少しも意に介しはしなかつた。それは彼にとつて何等の相違も全くないのだ。

——だが、多分買ふことは盗むことではない！ それは餘りに言葉が強すぎる！

——だが、自分が儲けたものでない金で支拂ふとしたら！

——といふのは、手でする働きで儲けたものといふことか？

——さうだ！

——そんならば、醫者も亦盜賊だ！

——全くさうだ！ それかと云つて彼は、そんな眞理にはたじろがないだらう！ 男爵

は、さういふ眞の言葉を吐いた後悔した盜賊の話覚えてゐなかつたのか？

會話は中絶した。男爵は有名な博士を呼びに遣つた。

彼は、男爵を正眞正銘の人殺しだと言つた。何故なら彼はすつと以前に乳母を雇はなかつたから。

男爵は、妻を説服しなければならなかつた。彼は、あらゆる以前の議論を引籠めて了つて、ただ一つの事實、即ち、(相續法によつて取締られてゐる)幼兒に對する愛といふことを力説しなければならなかつた。

けれども何處から乳母は連れて來たらいいのであらう？ 町ではすべての人々が腐敗してゐるのだから、町でそれを探さうとは思ふのさへ無用なことであつた。さうだ、それは田舎娘でなければならぬ。けれども、男爵夫人は田舎娘には反對した。何故なら彼女は、赤ん坊を持つ娘は不徳な人間であり、そして自分の子供は、その遺傳的性情に染まるであらうといふ議論を持つてゐた。

醫者は、これに應じて、すべての乳母は未婚の女であつて、そして若しも小さい男爵がその女から異性に對する擇り好みの性質を繼承したとしたならば、彼はいゝ人間に成るであらう、さういふ種類の性情は助長されねばならないのだ、と言つた。どんな百姓の妻でもそんな役目を承知するやうなことは有りさうにもなかつた。何故なら土地を持つてゐる百姓は必ず、その妻子をそばに置かうとしたに違ひないから。

——では、彼等が或る娘を百姓と結婚させたらどうだらう？

——それは九箇月の遅延になつてしまふではないか。

——では、彼等が赤ん坊を持つてゐる娘に夫を見つけてやつたらどうだらう？

——それはまづい考へぢやない！

男爵は、三月になる赤ん坊を持つ或る娘を知つてゐた。彼は、彼女を知り過ぎる程知つて

ゐた。それといふのは彼が三年間も關係してゐたのだから、そして「醫者の命令」によつて彼の許嫁に忠實でなかつたから。彼は、自分で彼女の許へ出掛けて行つて話を持ちかけた。彼女は、若しも農夫のアンダースと結婚することに同意し、そして小さい男爵の乳母として男爵の所有地へ出かけて行けば、畑を一つ與へられるのだ。さうだ、彼女が自分の不名譽を獨りで忍ぶ代りに、差し出された話を受け入れることは不思議なことだつたらうか？ 次の日曜日に第一第二第三回の結婚豫告が讀まれるといふこと、そして、アンダースは二箇月間彼の村へ歸つてゐなければならぬといふことが即座に定まつた。

男爵は、不思議な美望の感を以つて彼女の赤ん坊を見た。それは大きくて強壯な男の子であつた。その子供は、美しくはなかつたが、多くの子孫の次いで來るべきことの保證の引受人のやうに見えた。その子供は、生くべく生れたのであつたが、彼の使命を果すことはその子供の運命ではないのであつた。

アンナは、その子供が育児院へ連れて行かれた時には泣いた。しかし男爵の所有地へ行つてからの美味い食事が（彼女の食事は食堂から運ばれ、而も葡萄酒でも酒でも望み次第であつた）彼女を慰めた。彼女は、馭者のそばに一人の下僕まで連れて、大きな馬車を驅つて外出することも許された。そこで彼女は、千一夜物語を讀んだ。彼女は、その生涯に決してこ

れ程いい暮らしをしたことはなかつた。

二箇月の留守の後、アンダースが歸つて來た。彼は、食ふことゝ飲むことゝ寝ることゝより外何もしなかつた。彼は、畑を所有した。が彼はアンナをも欲した。彼女は折々は彼に會ひに行つてはいけないのだらうか？ さうだ、男爵夫人は拒絶した。そんな下らないことは斷じて許されない！

アンナは、肉が減り、小さい男爵は泣きつづけた。醫者が相談を受けた。

「この女を亭主の處へ會ひに行かせなさい。」と彼は言つた。

「でも、若しか子供の爲によくなかつたら？」

「そんなことはありません！」

けれども先づアンダースが「分析」されねばならない。アンダースは拒絶した。アンダースは、數頭の羊の贈物を受けて、やつと「分析」された。

小さい男爵は、泣くことを止めた。

ところが今度は、アンナの子供がチフテリアで死んだといふ報知が育児院から來た。

アンナは瘠せた、そして小さい男爵は前よりも一層大きな聲で泣いた。彼女は解雇されてアンダースの許へ返され、そして新しい乳母が雇はれた。

アンダースは、たうとう自分の妻が歸つて來たことを喜んだ。しかし彼女は、贅澤な習慣に染まつてゐた。例へば彼女は、ブラジルの珈琲を飲むことが出来なかつた、それはジャバでなければならなかつた。そして彼女の健康は、彼女に一週に六回も魚を食ふなどといふことを許さなかつた、又彼女は野へ出て働くことも出来なかつた。畑で食事することは稀になつた。

アンダースは、十二箇月後には畑を棄てなければならぬやうになつた。しかし男爵は彼に對してやさしい情を持つてゐたので、借地人としてそこに止まつてゐることを彼に許した。

アンナは、男爵の所有地で毎日働いてゐた、そして小さい男爵を屢々見た。しかし小さい男爵は彼女を見分けなかつた、そして彼が見分けなかつたことは丁度いゝことであつた。それでも彼は、彼女の胸に抱かれてゐたことがあつたのだ！ そして彼女は、自身の子供の生命を犠牲にして彼の生命を救つたのであつた。しかし彼女は多産的だつたので、數人の男の子を持つた、その子供たちは成長して、勞働者になつたり、驛夫になつたりしてゐた、そのうちの一人は懲役人になつてゐた。

併しながら老男爵は、いよく自分の息子が結婚して子供が出来る日を、心配しながら待

つてゐた。彼は強壯には見えなかつた！ 彼は、若しも他の小さい男爵、即ち、育兒院で死んだ者がその財産の後継者だつたとしたら、遙かに安心してゐられたであらうに。そして、彼が再び「生の奴隷」を読んだ時、彼は上層階級が下層階級のお蔭で生きてゐるのだといふことを承認しないではゐられなかつた。そして彼が再びダルヴィンを読んだ時、我々の時代では、自然淘汰は、自然的であるより以外の何事かであるといふことを拒むことが出来なかつた。けれどもよしあらゆる醫者と社會主義者とが反駁しようとも、事實は事實であり、そして不易なるものとして残るのだ。

改造の試み

彼女は、娘といふものが全然未來の夫の家政婦となるやうに育てられてゐるのを憤りを以て認めてゐた。それ故彼女は、將來如何なる境遇に際しても自らを支へて行くことの出来るやうな職業を學んだ。彼女は造花をやつた。

彼は、娘といふものが單に彼等を扶養してくれる夫に侍するのみであることを遺憾の目を以て見てゐた。彼は、自ら生計を立て、行くことの出来る自由な獨立した女と結婚しようと決心した。さういふ女は、家政婦といふやうなものではなく、彼と同等であり、生涯の友であらう。

運命は、この二人が出逢ふやうに命じた。彼は、美術家で、彼女は、既に言つた如く、花を造るのであつた。彼等は二人共、さういふ考を懐いてゐた當時は巴里に住んでゐた。

彼等の結婚生活には一風變つた様式があつた。彼等は、パッシイに於いて三箇の部屋を借りた。中央が書齋で、その右が彼の部屋、その左が彼女の部屋であつた。この事實が、自然界には何等相似たものすらなく、そして非常に多くの放埒と不徳との責を負つてゐるところ

の憎むべき共通の寢室とダブルベッドとを廢止したのであつた。それは、その上に同一の室内で着物を着たり脱いだりする不便をも廢止した。彼等が各自別々に一室を持ち、書齋は中立の共通の會合所にする、といふことは遙かによいことであつた。

彼等には、召使は要らなかつた。彼等は、自ら料理をし、そして朝と晩とに年取つた掃除女を雇はうと思つてゐた。すべてが非常にうまく考へられたもので、理論上では素晴らしいものであつた。

「だが、もしか君たちに子供が出来たら？」と懷疑家達は訊ねた。

「馬鹿を言ひ給へ、子供なんか出来るもんか！」

素晴しくうまくいつた。彼は、朝になると市場へ出かけて行つて、食物の調達をした。それから彼は珈琲を造つた。彼女は、ベッドを拵へ部屋を整頓した。それから彼等は坐つて仕事をした。

仕事に飽きた時には彼等は、雑談をしたり、互ひに善き忠告を與へ合つたり、笑つたりして甚だ楽しかつた。

十二時になると彼は、臺所の火を點じ、彼女は野菜の用意をした。彼は、肉の料理をした、その間に彼女は町を走つて雜貨店へ行つた。それから彼女はテーブルを据ゑ、彼は食物を皿

に盛るのだつた。

勿論彼等は、世間の夫婦通り、互ひに愛し合つてゐた。彼等は、おやすみを言ひ合つて各自の室に退いた。尤も、彼が彼女の部屋の戸を叩いた時に彼を入らせないやうな錠が下りてはゐなかつた。しかし一緒に居る間は短かつた、そして朝になれば二人共各自の部屋に居た。それから彼は壁を叩いた。

「お早う、お嬢さん、今日はどうだい？」

「大變工合がいゝのよ、あなた。あなたの方は？」

朝飯の時の彼等の會合は、いつも新しい、決して氣が抜けることのない經驗のやうであつた。

彼等は、夕方には屢々一緒に外出し、そして屢々同郷の人々に出逢つた。彼女は、煙草の香を決して拒まなかつた、そして決して邪魔をしなかつた。それは理想的な結婚だと誰でも言つてゐた。誰も、これ以上に幸福な夫婦をかつて知らなかつた。

けれども、遠く離れて住んでゐた若い細君の両親は、いつも手紙を寄越して様々な粗野な質問をして來た。彼等は、孫の顔が見たくて堪らないのであつた。結婚制度といふものは、両親のためにはなく、子供等のために存在するのだといふことをルイザに想はせようとし

た。ルイザは、それを昔風の意見だと思つてゐた。母親は、その新思想の結果は人類の完全なる絶滅だとは思はないか、と彼女に訊ねて来た。ルイザは、そんな風な見方をしたことは一度もなかつた。そのうへ質問そのものが、彼女を喜ばさなかつた。彼女も夫も共に幸福であつた。遂にはこの幸福なる夫婦生活の美観は世に現はされ、そして世の人々は羨しがつてゐた。

人生は、甚だ愉快であつた。彼等のどちらも主人ではなかつた、そして彼等は、費用を分擔してゐた。彼が餘計に稼ぐこともあれば彼女が餘計のこともあつた。けれども結局彼等の共通の基金への出資額は、同一であつた。

やがて彼女の誕生日が来た！ 彼女はその朝、掃除女が花束とそれから一杯花の繪をかけた一本の手紙とを持つてはひつて来たので眼を覺ました。そしてその手紙には次のやうなことが書かれてゐた。

「拙き畫工より花の蕾の夫人へ。私は、幸ある今日の日の幾度もめぐり來ることを望み、併せて、可愛い素晴らしい朝飯に侍するの光榮を與へられんことを希ふ——早速に。」

彼女は、彼の戸を叩いた——おはひり！

そして彼等は、ベッド——彼のベッドの上に坐つて朝飯を食べた。そして掃除女は、すべて

の用事をするために終日居残つた。それは愛らしい誕生日であつた！

彼等の幸福は、色が褪めなかつた。それは二年間つゞいた。すべての豫言者の豫言したことは當らなかつた。

それは模範的な結婚であつた。

しかし、二年経つと、若い細君は病氣になつた。彼女は、それを壁紙の中に何か毒が含まれてゐたのだと思つた。彼は、或る種類の胚種であらうと思つた。さうだ、確かに胚種だつた、だが、何かが悪かつたのだ。何か在るべからざることがあつたのだ。彼女は風邪でもひいたに違ひない。やがて彼女は丈夫になつた。彼女は腫物でも出來て苦しんでゐたのだらうか？ さうだ、彼等は、さうではないかと心配してゐた。

彼女は醫者に診て貰ひに行つた——そして泣きながら歸つて來た。それは生長物であつた、しかもいつかは日の目を見るべきもので、花となり實を結ぶべきものであつた。

夫は、泣くどころではなかつた。彼は、その中に或るものを見出した。そこでこの哀れな奴は俱樂部へ出掛けて、友達にそれを誇り散らした。しかし細君はまだ泣いてゐた。彼女の位置は今後どうなるのであらう？ 彼女はまもなく自分の仕事で金を儲けることが出來なくなるのだ。そして其時には彼女は、彼の力に依つて生きねばならないであらう。そして彼

等は、召使を雇はなければならぬであらう！　おー！　召使共！
あらゆる彼等の思慮、彼等の注意、彼等の用心は、不可避の岩にぶつかつて碎けたのであつた。

しかし義母は、熱情のこもつた手紙を寄越して、結婚といふものは、子供等の守護の爲に神様の定められたもので、両親の快樂などは殆んど勘定にはひつてはゐないのだ、といふことを幾度も幾度も繰り返して來た。

ユーゴーは、未來に於いて何物かを儲けることが出来なくなるといふ事實を忘れよと彼女に頼んだ。彼女は、赤ん坊を産むことによつて、十分仕事の分前を負擔するのではなかつたか？　それは金と同様に善いものではなかつたか？　金は、正當に解せられたる所によれば、仕事以外の何物でもないのである。それ故彼女は、十分に彼女の分前を拂つてゐることになるのだ。

彼女が彼女を養はなくてはならないのだといふ事實を了解するまでには、長い時間がかゝつた。けれども赤ん坊が生れた時、彼女はそれをすっかり忘れて了つた。彼女は、彼の子供の母たる以上に、猶ほ従前通り彼の妻であり、且つ友であつた。そして彼は、これが他の何事よりも一層價值あることなのだといふことを發見した。

自然の妨害

彼女の父は、彼女が、坐つてゐて夫を待つといふ若い女に共通な運命を免れることの出来るやうに、彼女に簿記を學べと言ひ張つた。

彼女は今、鐵道省の貨物課に簿記掛として雇はれてゐた。そして、甚だ才能のある若い女として一般に見上げられてゐた。彼女は人とうまく交際して行く方法を心得てゐたので、彼女の先途は有望であつた。

その後彼女は、林學校出の若い林學者に逢つて、彼と結婚した。彼等は、子供を拵へまいと決心した。彼等の結婚は眞の精神的なものでなくてはならない、且つ世の人々をして、婦人も亦魂を所有するものであつて單に性のみではないといふことを知らしめなくてはならない、といふのであつた。

夫と妻とは、夕方食事の時に顔を合はした。それは、全く眞實な結婚、二つの魂の結合であつた。勿論それは、二つの肉體の結合でもあつたが、そのことは、人の是非すべき問題ではない。

或日妻は歸宅して、自分の方の役所の時間が變つたと夫に言つた。役所の理事等が、マルメーへ新しい夜行列車を出すことに決定したので、今後彼女は、夜の六時から九時まで役所へ行つてゐなくてはならないといふのであつた。彼は六時前には歸宅することが出来なかつたので、これは厄介なことであつた。それは全く不可能なことであつた。

それ以來彼等は、別々に食事をしなければならなかつた。そして、やつと夜になつて逢へるだけであつた。彼は不満であつた。彼は、夕方の長いのを憎んだ。

彼は、彼女を訪問することが習慣になつて了つた。しかし彼は、貨物課の椅子に坐つて、驛夫たちに衝當られたりするのは退屈になつて來た。彼は、いつでも邪魔になつてゐた。そして、彼が、ペンを耳に挿んで机に坐つてゐる彼女に話しかけようとする、彼女は氣短かに彼を遮るのだつた。

「あゝ！ 仕事の済むまで靜かにしてゐて下さいよ！」

すると、驛夫たちは顔をそむけた。そして彼等が笑つてゐるのだといふことは、その背中の様子で彼には解つた。

時には、二三の彼女の同僚が、彼のやつて來たことを知らせて、

「旦那様が待つていらしつてよ、奥さん。」などと言ふことがあつた。

「旦那様！」この言葉を口にする彼等の口調には何だか嘲るやうなものが籠つてゐた。

けれども、何よりも一層彼を苛々させたのは、彼女に最も近い机が、ある若者によつて占められてゐて、その男がいつも彼女の眼を覗き込み、そして絶えず原簿の相談をしながら彼女の肩の上へ身を屈めて、殆んどその顎を彼女に觸れさうにしたりしてゐることであつた。そして彼等は、積荷證書だとか、證明書だとか、又は彼の知つてゐた限りでは何かを意味してゐるいろ／＼の事柄だとかに就いて話してゐた。そして彼等は、書類や數字を比較したりして、お互ひに夫婦の間柄よりもつと親密な關係に在るかのやうであつた。而もそれは全く自然なことであつた。何故なら彼女は、自分の夫の顔を見るより餘計にその若者を見てゐたのだから。彼等の結婚は要するに眞の精神的な結婚ではない、と彼はふと考へた。その爲には、彼も亦貨物課に雇はなければならないのだ。ところが不幸にも彼は、林學校へ出てゐたのであつた。

或日、といふよりは或晩、彼女は、次の土曜日に夕食を共にする鐵道従業員の會合が開かれるので、彼女も出席しなければならぬ、と彼に語つた。彼女の夫は、一寸壓迫を感じたやうな風で、その知らせを聞いた。

「お前は行きたいのかい？」と彼は、かざり氣なく訊ねた。

「勿論、行きたいわ！」

「だが、あんなに多勢の男の中で女はお前一人といふ譯だらう。さうして、男たちが酒を飲み過ぎると、誰でも粗暴になるものだよ。」

「あなたも私が行かないのに林学校の會合に出てゐるのぢやなくつて？」

「そりや出るさ。だが多勢の女の中で男は僕一人といふわけぢやない。」

——男と女とは同等な筈であつた。彼女は、平素女の解放といふことを説いてゐた彼が、彼女の會合に出席することに反對し得たことを驚いたのであつた。

——彼は、自分の方にこそ偏見があるのだといふことを承認した。彼は、彼女が正しく、自分が間違つてゐるといふことを承認した。それにも拘らず彼は、行つてくれるなど彼女に懇願した。彼は、そのことを考へるさへ厭なのであつた。彼には、さういふ事實を超越してしまふことが出来なかつた。

——彼は、矛盾してゐた。

——彼は、自分が矛盾してゐるといふことを承認した。尤も新らしい状態に慣れるには、十代位は経なければなるまい。

——然らば彼も會合には出席してはならないのであらうか？

——彼の會合には男だけしか出席しないのであつたから、それは全く別問題であつた。彼は、自分が一緒でなしに彼女が出て行くといふことは構はないのであつた。彼が好まなかつたのは、彼女がたつた一人で多くの男の中に行くといふことなのであつた。

——彼女はたつた一人ではないのだ。會計係の妻も出席する筈であつた、……として。

——何として？

——會計係夫人としてです。

——では、彼も彼女の夫として出席してはならないのだらうか？

——何故彼は、他の邪魔などをして、安價に見られたいのであらう？

——彼は安價に見られることなどは意に介してゐなかつた。

——彼は嫉妬してゐるのか？

——さうだ！ 何故それがいけないのだ？ 何事かが彼等二人の間にはひつて來ることを彼は恐れてゐたのだ。

——嫉妬するとは何たる恥づべきことであらう！ 何たる侮辱だ！ 何たる不信だ！

彼は、彼女を何と思つてゐたのだ？

——彼女は完全だと思つてゐたのだ。彼はそれを證明するであらう。彼女は一人で行つて

もよいのだ!

——本當によいのか? 何といふ謙遜なことであらう!

彼女が行つた。彼女は、明方になるまで歸つて來なかつた。彼女は、夫を起して、すべてが如何に具合よくいつたかを彼に話した。彼は、それを聞いて喜んだ。誰かゞ彼女に就いて演説をした、彼等は四部合奏を歌つた。そして舞踏でお終ひになつたといふのであつた。

——そして、如何にして彼女は歸つて來たのだつたか?

——あの若者が、戸口まで一緒について來てくれたのであつた。

——若しも誰か彼等を知つてゐる者が、明方の三時にあの若い男と一緒にゐる彼女を見たとしたら?

——そこで、その時にはどうだといふのか? 彼女は、尊敬すべき婦人なのだ。

——さうだ、しかし彼女は、わけもなくその名聲を失つて了ふであらう。

——あゝ! 彼は嫉妬をしてゐたのだ。それに、尙ほ悪いことは、彼が羨しがつてゐたといふことだつた。彼は、彼女にほんの一寸した氣晴らしを許すのも厭だつた。結婚するといふことはかういふことを意味するのである! 若しも外出して、一寸した楽しみをしたりすれば、もう叱られる! 結婚とは何といふ馬鹿げた制度であらう! だが彼等の結合は眞

の結婚だつたのであらうか? 彼等は、他の夫婦の如く夜中に逢つた。男といふものは全く

同じであつた。彼等が結婚するまでの間は實に禮儀正しかつたものだが、結婚後には、お

お! 結婚後には……彼女の夫は、他の男共に比べて少しもいゝ事はなかつた。彼は、彼女を自分の所有物と見做した。彼は、彼女に命令する権利を持つてゐるものと心得てゐた。

——それは事實であつた。二人が互ひに相手の所有だと彼が思つてゐた時であつたが、彼は誤つてゐたのだつた。彼は、その主人に屬する犬の如く彼女に屬してゐたのだ。彼は彼女を家まで送るために、夜彼女に呼ばれた従僕以外の何者であつたらう? 彼は、「彼女の夫」であつた。けれども彼女は、「彼の妻」たることを欲したか? 彼等は同等であつたか?

——彼女は、彼と喧嘩するために家に歸つて來たのではなかつた。彼女は、彼の妻たる以外に何事をも欲しなかつたのだ。そして彼女は、彼が自分の夫たる以外の何者かであることをも欲しなかつたのだ。——

シャンパンのせゐだ、と彼は思つた。そして壁の方を向いて了つた。

彼女は泣いた、そして非道であることはよしてくれるように願つた。しかし——自分を許してくれるようにと。

彼は、耳まで毛布を被つて了つた。

彼女は、彼が——彼が最早自分を妻とすることを欲しないのか、と再び訊いた。

——否、勿論彼は、彼女を欲したのであつた！ けれども彼は、其晩中恐ろしく退屈してゐたのだつた、もう一晩もそんな風にしてゐれば彼は生きてはゐられなかつた。

——然らば、彼等はそんな事をすっかり忘れて了ふがよい！

そこで、彼等はそれに就いてはすっかり忘れて了つた。そして、互ひに愛しつゞけて行つた。

その翌晩、この若い林學者が妻を尋ねて行つた時、彼女は貯蔵庫へ行つてゐると言はれた。彼は、たつた一人會計室にはひつて、椅子に腰かけてゐた。そこへ硝子戸が開いてあの若者が頸を突込んだ。

「貴女は此處に居るんですか、アンニイ？」

否、それは彼女の夫だけであつた！

彼は、立ち上つて出て行つた。あの若者は彼の妻をアンニイと呼んだ。そして、明かに彼女と非常に親密な間柄になつてゐたのだ。それはもう、到底彼の忍べることではなかつた。

彼女が歸宅した時、彼等は夫婦喧嘩をやつた。彼女は、彼が婦人の解放に就いて眞面目な意見を持つてゐないのだ、さうでないならば、彼女が同僚の書記と親密な間柄に在るといふ

ことを苦しむ筈はない、と言つて彼を非難した。彼は、彼の意見は眞面目にとらるべきものではないといふことを承認したので事を一層悪くして了つた。

——多分彼の口にしてゐることを意味したのではなかつたのであらう！ 彼の心は變つたのだらうか？ どうして變り得やう！

——さうだ、彼の心は變つたのだ。人は、殆んど毎日その意見を變更せざるを得ないのだ。何となれば人は、常に變じつゝある生活條件に己れを適合して行かねばならないから。そして、若しも彼が過去に於いては精神的結婚を信仰してゐたのであつたとしたら、彼は現在では、如何なる種類の結婚に對しても信仰を失つて了つたのだ。それは、急進論の方向へ向いた進歩であつた。そして、精神的といへば、彼女はその夫とよりはむしろあの若者と精神的に結婚をしてゐたのだ。何故かといへば、彼等は毎日毎時貨物課の處理に就いて意見を交換してゐたのに、彼女は殖林には少しも興味を持たなかつたのだから。彼等の結婚には何か精神的なものがあつたらうか？ 何かあつたらうか？

——否、最早ないのだ！ 彼女の愛は滅びてゐた！ 彼がそれを滅ぼしたのだ、彼が婦人の解放——といふ素晴らしい信條を棄てた時に。

事態は、次第々々に堪へ難いものになつて行つた。若い林學者は、彼の同僚たちの方へ友

情の眼を向け始め、そして、彼が全く理解しなかつたところの貨物課やその執務方法や、さうした色々な事柄に就いて考へることを止めて了つた。

「あなたは私を理解していらつしやらない。」と彼女は、繰り返し繰り返し言ひつゞけてゐた。

「いや、僕は貨物課なるものを理解しないのだ。」と彼は言つた。

・或晩、といふよりは或朝、彼は女生徒と一緒に殖を付けに出掛けるのだと彼女に話した。彼は、或る女學校で植物を教へてゐたのであつた。

「おゝ！ 本當か！ どうして彼は今まで黙つてゐたのだらう？ 大きな娘達だらうか？」

「おゝ！ 甚だ大きな娘達だ。十六から二十歳までの。」

「ふむ！ それは今朝なのか？」

「否！ 午後だ！ 而も彼等は、僻遠の小さな村で晩飯を共にするのだ。」

「晩飯を共にする？ 校長の女教師は勿論行くのであらう？」

「おゝ！ 否、彼女は彼を全く信任してゐるのだ。彼は既婚者であつたから。結婚してゐるといふことも、時によると便利なものである。——」

その翌日彼女は病氣になつた。

「確かに彼は、彼女を置いて行く心は持たなかつたであらう！」

「彼は、何よりも先づ仕事のことを考へねばならぬのだ。彼女は非常に悪いのだらうか？」

「おゝ！ 大變悪いのだ！」

彼女が反對するにも拘らず、彼は醫者を呼びにやつた。醫者は、大したことではないと明言した。夫が家に居る必要は少しもないのであつた。

若い林學者は、朝になつて歸つて來た。彼は、上機嫌だつた。彼は非常に楽しかつたのだつた！ 彼は、随分暫らくこんな愉快な日を持たなかつたのであつた。

暴風雨は起つた。ヒュウ、ヒュウ、ヒュウ！ 此の争鬭は、彼女にとつては餘りに激し過ぎた！ 彼は、彼女以外の女を、決して、決して！ 愛さないといふ嚴かな誓ひを、立てねばならなかつた。

彼女は、癡癡を起した。彼は、氣附を買ひに走つて行かねばならなかつた。彼は、非常に寛大だつたので、女生徒たちとの晩飯に就いて細かな事まで説明した。けれども彼は、犬と所有權とに關する以前用ゐた比喩を言ひ出して快感を感じることを慎むこと

は出来なかつた。そこで、彼はこの機会によつて、所有權の觀念なしには愛は——何れの側にあつても——考へられぬことだといふ事實に對して彼女の注意をひいたのであつた。彼女を泣かせたのは何であつたらう？　彼女が二十人の人々と一緒に外出した時、彼をして誓はしめたと同一の事だ。彼を失ふことの恐怖！　けれども、人は所有するが故に失ふことも出来るのである！　所有するが故である！

かくして、破綻は繕はれた。しかしながら貨物課と女學校とは、その骨の折れた修繕をいつ滅茶々々にしてふとも知れぬ剪刀のやうなものだつた。

調和が亂された。

妻は病氣になつた。

彼女は、自分には重過ぎる箱を高く持ち上げたことで自分を傷けたのに相違なかつた。彼女は、驛員たちがその側に立つてぼんやりしてゐるのを待つてゐられない程、自分の仕事に敏感なのであつた。彼女は、手を出さずにはゐられなかつたのだ。今彼女は、自己を破滅させねばならなかつた。

さうだ、實際、そこには或る事柄があつたのである！

彼女はどれ程怒つたか！　彼女の夫に腹を立てた、その夫こそは非難さるべき唯一のもの

であつた。彼等は、赤ん坊をどうしたらいいのであらう？　里にやつて了つた方がいゝだらう！　ルッソウはさうした。彼は、愚人であるが此の點に限つて彼は正當だつたことは全くだ。

彼女は、幻想と空想とで一杯だつた。林學者は、早速女學校の課業を辭任しなければならなかつた。

彼女は、腹立たしくいらくしてゐた。何故なら彼女は、最早貯藏庫に行くことが出来ないので、終日會計室の中にはひつて、記入をやつてゐなくてはならなかつたから。しかし彼女の身にふりかゝつて來た最もはげしい打撃は、彼女の引いた時にその代りをしようとする祕密な使命を帯びた助手がはひつて來たことであつた。

彼女の同僚たちの態度も變つた。驛員たちは含み笑ひをしてゐた。彼女は、恥かしくて身を隠したくて堪らなかつた。此處に坐つて皆から見られてゐるよりは、家に居て夫の食事の料理でもしてゐた方が、いくらいゝか知れないと思つた。おゝ！　人間の欺瞞に満ちた心の中には、何たる偏見の暗黒なる罅隙が隠されてゐることであらう！

臨月になると彼女は、家に留つてゐた。何故ならば、一日に四回も役所に行つたり來たりすることは、彼女にははげし過ぎたからである。それに彼女は、いつも非常に空腹だつた！

彼女は、朝つばらからサンドウィッチを取りに遣らなければならぬのであつた。それに折氣が遠くなつて、休まないではゐられなかつた。何といふ人生であらう！ 女の運命は、誠に惨めなものであつた。

赤ん坊は生れた。

「里にやらなくちやなるまいか？」と父は訊いた。

——彼は、無情だつたのだらうか？

——おゝ！ 否、勿論彼は情を持つてゐたのだ。

そして赤ん坊は家庭に置かれた。

すると、若い母の健康を尋ねた甚だ鄭重な手紙が、役所から來た。

——彼女は、甚だ具合がよかつた、明後日から彼女は役所へ出る事が出来ると思つた。

彼女は、まだ少し弱つてゐたので、馬車に乗つて行かねばならなかつた。けれども彼女はまもなく力を回復した。けれども、今度は或る新しい困難が現れた。彼女は、絶えず赤ん坊の状態を知らせて貰はなければならなかつた。家からは使ひの子供が家へやられた。初めは一日に二回であつたが、終ひには二時間おきになつた。そして、彼女は、赤ん坊が泣いてゐたと言はれると、帽子をとつて、早速家へ駆け出して行つた。けれども、彼女の代りをし

ようとしてゐる助手がゐた。そのうへ、上役の人が大變物の分つた人だつたので、かれこれ云ひはしなかつた。

或日、若い母は、乳母が赤ん坊に乳をやる事が出来ないのに、彼女の地位を失ふことを恐れてその事實を隠してゐたのを、偶然發見した。彼女は、新しい乳母を見出すために丸一日を潰さなければならなかつた。けれども彼等は皆同じやうなものであつた、彼等は一人として残忍なエゴイストでない者はなく、他人の子供に興味を持つてゐる者はなかつた。誰も彼等のやうなものを頼りにすることは出来なかつた。

「駄目だとも」と夫はそれに一致した。「かういふことは、誰でも自分でやるより外はないんだ。」

「あなたは、私が仕事を罷めなきやならないつて仰しやるつもりなの？」

「おゝ！ そのことは、お前の好きなやうにしなければならぬさ！」

「さうして、あなたの奴隷になるの！」

「いや、僕はまるでそんなつもりで言つたんぢやない！」

小さい者は、全く具合がよくはなかつた。子供といふものは皆折々は病氣をするものである。赤ん坊は、齒が生えかけてゐた！ 間一日おいては生えるといふ風だつた！ 可哀想

な赤ん坊は、齒痛で苦んだ。彼女は、夜は赤ん坊を慰め、晝は役所で働かねばならなかつたので、眠くて、疲れきつて、心配でもあり、又一日休んで了つた。

若い林學者は、ベストをつくした、そして半夜の間は腕に赤ん坊を抱いてゐた。けれども、貨物課に於ける妻の仕事に就いては一言も決して言はなかつた。

それでも彼女は、彼がそれを考へてゐるといふことを知つてゐた。彼は、彼女が降参するのを待つてゐた。が、彼が欺き上手だつたので、何とも言はないのであつた！ 男といふものは何といふ陰險なものだらう！ 彼女は彼を憎んだ、彼女は、仕事を見棄て、「彼の奴隷になる」位なら自殺した方がいゝと思つた。

林學者は、如何なる女にとつても、自然の法則から解放されるといふことは不可能だといふことを今は全くはつきり見てとつた。が、現在の状態の下に於いてはといふことを附加へる程十分彼は抜け目がなかつた。

赤ん坊が出来てから五月経つ頃には、かうしたすべて事柄は、やがて間もなく繰返されるであらうといふことが、はつきりと分つてゐた。

何といふカタストロフだ！

けれども、さういふ事が復たも始まると……。

林學者は、その収入を増す爲に女學校の課業を再びやらなくてはならなかつた。さうして、今こそ——彼女は降参した。

「私はもうあなたの奴隷になりますよ。」解職辭令を持つて歸つて來た時彼女は、呻くやうに言つた。

とはいへ彼女は、一家の長である。そして彼は、その儲けて來る金を一厘残さず彼女に渡すのだ。葉巻一本買ひたい時にも、彼は金を請求するまへに長い演説をやるのである。彼女は、彼に對して決してそれを拒んだことはないが、いづれにしても、彼はそれを請求することに不快を感じてゐた。彼は、會合に出ることは許されてゐるが、食事はしない。そして女生徒と殖ゑ付けをすることは全く嚴禁されてゐた。彼は、それを左程惜しいとも思つてゐない。何故なら自分の子供と遊ぶ方が彼にはいゝからだ。

彼の同僚は、彼のことを女房孝行と言つてゐる。けれども彼は微笑して彼等に言ふ、自分はそれにも拘らず幸福である、それは自分の妻が氣持のいゝそして利巧な友だからだと。

彼女の方では、彼が反對をいくら言つても、自分は彼の奴隷に過ぎないのだと、頑固に主張してゐる。それが、彼女の唯一の慰安なのだ、哀れな小さい女！

人形の家

二〇〇

彼等は、結婚してから六年にもなるのであつたが、まだ夫婦といふよりはむしろ戀人同志といつた方がいゝ位であつた。彼は、海軍少佐であつた、そして毎年夏期には、數箇月間彼女のそばを離れなければならなかつた。又二回も彼は、長い航海で留守にしたことがあつた。けれども彼の留守が短い時それは、不幸のやうに見える幸福であつた。何故ならば、彼等の間柄が冬の間はやゝ氣が抜けたやうになつてゐたとしても、夏の小旅行は、相變らず以前の新鮮さと愉快さを取り戻してくれたからである。

最初の夏の間には、彼は彼女に本式のラヴ・レターを書いた。そして、「手紙を持つて行つてくれるか？」といふ信號をしずし帆前船を遣り過すことは決してなかつた。そしてストックホルム群島の陸標が見える處まで來た時には、彼はどうしたら一番早く彼女に會へるか分らなかつた。けれども彼女が、或る方法を見出してくれた。彼女はダラレーで會はうと、ランドソートへ彼に電報を打つた。彼は、船が錨を下ろした時、ホテルのヴェランダの上で小さな青いスカーフがひら／＼してゐるのを見た。そこで彼は、それが彼女のだといふことを知

つた。併しながら船の中には非常に用事が多かつたので上陸することが出来るやうになつたのは夜に入つてゐた。彼は、首撓手さきかたが、衝突を防ぐためにそのオールを差出した時、埠頭に着いたボートから彼女を見た。彼女は、彼が別れた時分と全く同じく何處から何處まで、若若しくて、美しく、強壯であつた。それはまるきり、彼等の戀の最初の春頃を又もや生き返してゐるのと全く同じやうであつた。彼女が借りておいた二つの小さな部屋の中では、美味な可愛い晚餐が彼を待つてゐた。彼等は、何といふ澤山の事柄に就いて語り合はねばならなかつたらうか！ 航海、子供等、未來！ 酒は、盃の中で閃いてゐた、そして彼の接吻は彼女の頬に血に染めさせた。

歸船太鼓が船の上で叩かれた。けれども彼は、それに注意しようとしなかつた。何故なら彼は、一時までは彼女のそばを去らうとは思つてゐなかつたから。

——何だ？ 彼は行くのであつたか？

——さうだ。彼は船へ戻らなければならぬのだ。しかし朝の點呼の時行つてゐさへすればいゝのだ。

——朝の點呼は何時に始まるのであつたか？
——五時だ。

——おゝ！……そんなに早く！

——けれども彼女はその夜を何處に泊らうとしてゐたのであらう？

——それは彼女のことだ！

彼は、それを推察した。そして彼女の部屋を見たがつた。しかし彼女は、闔の上にしつかりと立ちふさがつてゐた。彼は、彼女の顔を接吻で蔽ひ、彼女を赤ん坊のやうに抱き上げて、戸を開いた。

「何て大きいベッドだらう！　まるで長いポットみたやうだ。一體何處から持つて来たんだらう？」

彼女は、眞赤になつた。

——勿論彼女は、二人が一緒にホテルに泊るであらうといふことを、彼の手紙で知つてゐたのだ。

さうだ、そして、彼が朝の點呼までには船に戻るのであるにも拘らず、彼等はさうするであらう。下らない朝の祈りなどを彼は何で氣にかけようぞ！

——どうして彼は、そんなことを言ふことが出来たのであらう！

——彼等は、煖爐のそばで珈琲を飲む方がよくはなかつたか？　シーツは濕氣が感じられ

た！　彼の泊ることまで用意しておくとは、彼女は何といふ利巧な可愛い奴なのだらう！

彼女がこんなに利巧だと誰が考へるだらう？　彼女はそれを何處から持つて来たのであつたか？

——彼女は、何處から持つて来たのでもなかつた！

——何處からでもない？　それなら彼は知つてゐたのであらう！　彼はすべてのことを

知つてゐたのであらう！

——おゝ！　だが彼は非常に愚かであつた！

——本當だ、彼は愚かであつた、確かに愚かだつたのだらう？

そして彼は、腕をすべらして彼女の腰に巻きつけた。

——だが彼は、己を善く處してゐなければならぬ！

——己を善く處す？　口に言ふのは容易いことだ！

——女といふものは森林と共に來るものである！

二時が打ち、東方の海と島々とが燃え始めた時、彼等は開け放した窓の處に坐つてゐた。

——彼等は尙ほも戀人同志だつた、さうではなかつたらうか？　だが最早彼は行かねばならない。けれども彼は十時には朝飯のために歸つて來られる。それから彼等は船に乗つて遊

ぶのだ。

二〇四

彼は、彼女のアルコールランプで珈琲を拵へた、そして彼等はそれを飲んだ。その間に太陽は昇り、海鷗が啼いた。軍艦は、遠い外海に横つてゐた、そして折々彼は、日の光に閃いてゐる點呼の群の短剣を見た。別れるのは辛かつた、しかしまた數時間で確に逢へるといふことを頼みにして辛抱した。彼は、彼女に最後の接吻をして、劍を帯びて、彼女に別れた。

彼が橋の處に着いて、「おーい、ボート！」と叫んだ時、彼女は恰も見られることが恥かしいかのやうに、窓掛けのうしろに隠れた。彼は、水夫がボートを持つてやつて来るまで彼女に向つて接吻を投げてゐた。それから、最後に、「よく眠つて僕の夢を見ておいで。」と言つた、そしてボートは出て行つた。彼は、望遠鏡で彼女を見成つてゐた、そして長い間彼は、黒い髪の毛の小さい姿を見分けてゐることが出来た。日光が、彼女の寢巻と裸かの咽喉の上に落ちた、そして彼女を人魚のやうに見せてゐた。

起床喇叭が鳴り響いた。長く引かれた喇叭の音は、閃く水の上の緑色の島の間をころがつて、松林のうしろから歸つて來た。甲板の上には全船員が集まり、そして主の祈りと「イエスよ、この日の始めに於いて、」とが讀まれた。ダラレーの小さな教會の塔は、これに應じて鐘をかすかに鳴らしてゐた、何故ならそれは日曜だつたから。カッターが朝風の中を近づ

いて來た、旗はひらめき、射撃は反響し、橋の上には輕やかな夏着が閃いた、そのうしろへ眞紅の途をつけてゐる蒸汽船は、走り寄つた、漁夫等は網を引いてゐた、そして太陽は、青い大浪の立つ水や、緑の島の上に輝いた。

十時には、十二名の者が軍艦から岸へとボートを漕いで來た。彼等は、再び一緒になつた。そして、大きな食堂に朝飯で坐つた時、ホテルの客達は、注目して私語き合つた、「あれは細君だらうか？」彼は、彼女に戀人ででもあるやうに低聲で話した、そして彼女は、眼を伏せて微笑してゐた。さうかと思ふと、彼女のナブキンで彼の指をぶつたりした。

ボートが、橋に横付けになつてゐた。彼女は舵に坐り、彼は帆を調べた。けれども彼は、輕やかな夏着を着た彼女の美しい姿から、彼女のキリッとした小さな顔と誇らしげな眼から眼を放すことは出来なかつた。其時彼女は、風上の方を向いて坐つて、その強い革の手袋をはめた小さな手は、帆繩を掴んでゐた。彼は、彼女と話がしたかつたので、態と不器用な方向變換をやつた。すると彼女は、彼を従僕のやうに叱つた。それが非常に彼を喜ばせた。

「どうしてお前は赤ん坊を連れて來なかつたんだね？」と彼は、からかつて彼女に訊いた。「何處へ寝かしたらいゝんでせう？」

「勿論、長いボートの中だらう？」

彼女は、彼に向つて微笑した。その微笑は彼の心を幸福を以つて満した。

「だが、お内房かみむらさんは今朝何と言つたね？」

「何て言はなければいけないの？」

「あれは昨夜よく眠れたらうかな？」

「何故よく眠れてはいけないの？」

「僕は知らない。あれは、鼠で眠れなかつたかも知れない、それとも窓の音で眠れなかつたかも知れない。年取つた一人の女の優しい眠りを妨げるものが無かつたかどうか誰にも分りやしないんだ！」

「まだそんな馬鹿なことを仰しやるんなら、私帆繩をギューと引張つて、あなたを海の底へ落してあげてよ。」

彼等は、小島に上つて、バスケットの中へ入れて持つて来たおやつを食べた。それが済むと彼等は、連發拳銃リボルバー的を射た。それから彼等は、釣竿で釣りする真似をした、しかし彼等は、何も捕へはしなかつた。そして雁の居る外海へ再び漕いで行つて、海峡を通つた。そこでは彼等は、藻に戯れてゐるカープ（魚の名）を見た。彼は、彼女を眺めたり、話したり、接吻したりすることに決して退屈しはしなかつた。

こんな風にして彼等は、六夏を過した。そして彼等は、以前と同様に、常に全く若々しく、全く氣違ひのやうで、それに全く幸福であつた。彼等は、ストックホルムの冬をば彼等の小さな寢室で過した。彼は、自分の小さい子供達のためにボートに船具を着けてみたり、彼等に、支那や南洋の諸島へ行つた時の冒険談を話したりした。その間彼の妻は、彼のそばに坐つて、耳を傾け、彼の可笑しな話を聞いて笑つた。それは全世界を探しても同一のものは決して見附からないであらうやうな氣持のいゝ部屋であつた。その中には、日本の日傘と甲冑だの、印度からとつて来た小形の金貨だの、アウストラリアの弓と槍だの、黒人の太鼓だの、乾した飛魚だの、甘蔗（かんさつ）だの、阿片のパイプだのが、一杯あつた。もう頭の頂邊あたりでは毛も薄くなつた父親は、その自分の部屋以外では甚だ幸福に感じるやうなことはなくなつた。折々彼は、その友の會計検査官と碁を打つた、又その二人はボストンのゲームをやつて、火酒を飲んだりすることもあつた。最初は、彼の妻もゲームに加はつたが、四人の子供を持つてからは、非常に忙しかつた。それにも拘らず彼女は、一寸の間でも遊んでゐる人々のそばに坐つてカルタを見てゐるのが好きであつた。そして、彼女が父親の椅子のそばを通ると、彼は彼女の腰を捕へて自分の手は喜んでいゝと思ふかどうかと訊くのであつた。

今度は、コルベット（一種の軍艦）は六箇月間出掛けることになつた。少佐はその事を氣樂に思

つてはゐなかつた。何故なら子供達は大きくなつてゐたので、母親にとつては餘りに大き過ぎる大きな世帯の責任があつたから。少佐自身は、以前のやうに全く若くもなかつたし勇敢でもなかつた、けれども——それはどうすることも出来なかつた、そこで彼は行つて了つた。

彼は、クロンボルグに到着するや否や、彼女に手紙を出した。

「我が親愛なる帆柱よ、」とそれは始まつてゐた。

「風平穩、南南東微東十度、六點の時鐘、下方常直にて。私は、お前に逢ふことの出来ないこの航海上で、どんなことを感じてゐるか言葉で説明することは出来ない。我々の船が動き出した時（北東北から強風の吹いて來た午後の六時に）私は出し抜けに胸の中へ留針を差込まれたやうな氣がした、そして本當に私は、自分の耳の錨鎖管から鎖が引き抜かれたやうな感じを持つたのだ。船乗は不幸に近づくことを直感する、と人は言ふ。これは本當かどうか、私は知らない。しかし私はお前から手紙を受取るまでは不安でたまらない。船中では何事も起らない。それは何事も起つてはならないからといふに過ぎない。お前達は皆家ではどうしてゐる？ ポップには、新しい靴を買つてやつたか？ そしてそれはよく合つたか？ お前の知つてゐる通り私は手紙がまづい、だからもうこれで止す。こゝに大きく接吻する。」

お前の年取つたポール。

追伸。お前は友達を見出さねばならない。（勿論女の。）そして私の歸るまで例の長いポートを注意してもらふやうに、ダラレーのお女房かみさんに頼むことを忘れてはならない。風が吹き出した。今夜は北風だらう。」

ポーツマス沖で、少佐は彼の妻から次のやうな手紙を受取つた。

「親愛なるお爺さんのポールよ、

貴方がいらつしやらないでは此處は恐ろしい、本當に。小さいアリスが新しい齒が生えたので、私もいろ／＼厄介がふえました。お醫者様はそれは異常に早いと言つてゐました。それは或る徴候でした。（しかし私はこんなことを書く筈ではなかつたのです。）ポップの靴は、大變よく合つてゐます。さうして、皆に自慢してゐます。

お手紙で女の友達をさがせといふことでしたが、本當に私は友達を見つけました。と申すよりむしろそのひとが私を見つけたのです。彼女の名前は、オッティリア・サンデグレンとい

ふのです。そして彼女は、神學校で教育を受けたひとです。彼女は、むしろ厳格な方で、人生を非常に眞面目に見てゐます。ですから貴方は、貴方の帆柱が誘惑されるといふやうな心配はなさる必要はありません。その上彼女は宗教的なのです。私たちは、私たちは二人共、宗教をもつと眞面目に見なければいけませんわね。彼女は驚くべき婦人です。彼女は到着したばかりです、貴方によろしくと言つてゐます。

貴方のガリーイ。」

少佐は、此の手紙を読んで喜び過ぎはしなかつた。それは餘りに短かつた。そして、いつもの彼女の手紙に比べては、半分も輝いた點がなかつた。神學校、宗教、嚴肅、オツティリア、二度もオツティリア、それからガリーイだ！ 何故もと通りギューラではないのだ？ ふむ！ 一週間後に彼は、第二の手紙をポルドウで受取つた。手紙と一緒に本が一冊送られて來たが、それは別封になつてゐた。

「親愛なるウィリアム！（ふむ、ウィリアムだつて！ もうポールぢやないのか！）人生は争闘です。（彼女は何て馬鹿なことを言つてゐるんだらう？ 一體それが俺たちに何だといふんだらう？）徹頭徹尾さうです、ケドロンの河のやうになだらかに（ケドロんだと！ 彼女はバ

イブルを引用してゐる！）私たちの生活は這つて來ました。夢遊病者のやうに私達は、絶壁の端を氣もつかずに歩いてゐました。（神學校だ、おゝ！ 神學校だ！）突然私たちは倫理に面と向つてゐたのでございます。（倫理だつて？ 勝手にしろだ！）その高い權力を示してゐる倫理！（權力だつて？）私は、長い眠りから眼覺めましたので、自分にかう質問しました——私達の結婚は、字義通りの眞の結婚といはれるべきものでせうか？ と。私は、さうではないといふことを、恥かしさと後悔とを以つて承認しなければなりません。何故なら愛といふものは、神聖な源から出るものですから。（馬太傳第十一章、二十二、二十四）」

少佐は、その先きを讀みつゞける氣になるまでには、どうしてもラムと水とをチャンポンに飲らなければならなかつた。

「私達の愛は、何といふ地上のもの、何といふ物質的なものであつたでせう！ 私達の魂はプラトリーの言ふ調和の中に生きてゐましたでせうか？（Phaidon第六卷、第二章、第九節）私達の答は、その否定にならざるを得ません。私は貴方にとつて何だつたのでせう？ 家政婦でした、そしておゝ！ 不名譽なことです！ 貴方の情婦でした！ 私達の魂は互ひに理解

し合つてゐましたでせうか？ 再び私達は、「否」と答へないではゐられないのでございませう。(あらゆるオ、ティリアと神學校と共に地獄へ墮ちよ！ 彼女は俺の家政婦だつたのだからか？ 彼女は俺の妻だつた、そして俺の子供達の母だつた！) 私のお送りします本をお読みになつて下さい！ それは、すべての貴方の御質問に答へてくれますでせう。それは、數世紀間女といふ女の、心の底に隠されてゐたものを叫ぶでせう！ これを読んで下さい。それから、貴方が若しも私達の結合が眞の結婚であるとお思ひになりましたら話して下さい。貴方のガリーイ。」

何か不吉なことがあるといふ彼の豫見は、彼を欺きはしなかつた。少佐は、氣違ひのやうになつて了つた。自分の妻には何事が起つたのであるか、理解することが出来なかつた。それは、宗教的偽善よりも尙ほ悪いものであつた。

彼は、包みを破つて、被ひの紙に書いてある本の表題を読んだ。イブセンの人形の家？ だが、それが——？ 彼の家庭は氣持のいゝ人形の家であつた、彼の妻は彼の小さな人形であつた、そして彼は彼女の大きな人形であつた。彼等は、人生といふ石ころ道を踊りながらやつて來のだ、そして、幸福だつたのだ。それ以上に何を欲したか？ 何がいけなかつたのか？

彼は、早速その本を読んで、それを發見しなければならぬ。

彼は、それを三時間で讀んで了つた。彼の頭は眩暈がした。それが、彼と彼の妻とにどういふ關係があつたか？ 彼等は勘定書を贋造したであらうか？ 否！ 彼等は互ひに愛し合つてはゐなかつたらうか？ 勿論、彼等は愛し合つてゐた。

彼は、自分の船室に錠を下ろしてはひつて、再びそれを讀んだ。彼は、色々の文句に赤と青とで線を引張つた。そして、夜が明けた時、彼はペンと紙とをとつて、彼の妻へ書いた。

「戯曲『人形の家』に於ける、少部分の善意の削除が、ポルドウ沖太西洋上(緯、四十五度、經、十六度)のブナデイ船中に在る年取つたボールによつて書かれた。

一、彼女は彼と結婚した、それは彼が彼女と戀に陥ち、そしてそれが爲すべき非常に利巧なことだつたからだ。何故ならば、彼女の方が誰かと戀に陥ちるまで待つてゐたとしても、その誰かの方では、彼女と戀に陥ちはしないといふやうなことになつたであらう。そこで誰が悪いのか分らないといふことになる。二人の双方共が等しく戀に陥ちるといふことは、甚だ稀にしか起らないことだから。

二、彼女は勘定書を贋造する。それは愚かなことだが、それが夫の爲めばかりになされた

といふのは眞實ではない。何故なら、彼女は決して彼を愛してゐなかつたのだから。若しも彼女がそれは夫と自分と子供等との爲になされたのだと言つたならば、本當であらう。それは明かなことではないか？

三、舞踏會のあとで彼が彼女を抱擁しようとするのは、彼女に對する彼の愛の證據に他ならない。そしてその内にはいけないことは少しもない。けれどもそれは、舞臺の上ではしてはいけない。佛蘭人の言ふ如く、*"Il y a des choses qui se font mais que ne se disent point"*、その上あの詩人が若しも公平だつたとしたら、その反對の場合をも示したであらう。*"La petite chienne veut, mais le grand chien ne veut pas."* とオルレンドルフは言つてゐる。(ダラレーの長いポートを見よ。)

四、彼女の夫が愚かであること(及び彼が発覺してないといふ理由によつて彼女の罪を許さうと言ひ出す時彼が愚かであること)を彼女が発見する時、彼女が『彼女自身が子供達を養育する價值ある者ではないと思つて』その子供達を棄てようと決心するのは、甚だうまいコケットリイの手管ではない。若しも彼等が二人共愚かなのだつたとしたら(そして確かに、勘定書を質造することが正しいなどは神學校で教へてはゐない)彼等は、未來に於いても二重の装具を以つてよく一緒に結びついて行かねばならかつたであらう。

兎も角も彼女は、その子供達の教育を、彼女が輕蔑してゐるその父親の手に任せておくことを少しも證據立てゝはゐないのである。

五、従つてノラは、その夫の愚なることを發見した時、子供達と共に留るべきあらゆる理由を持つてゐるのである。

六、彼女を十分に評價し得なかつたからと言つてもそれは夫の罪ではない。何故なら、彼女は、あの騒動の後まで彼女の眞の性格を表はしてゐないのであるから。

七、ノラは疑ひもなく馬鹿だつたのだ。彼女自身も、否定してはゐない。

八、そこには彼等が未來に於いて一層幸福に協力して行くあらゆる保證がある。彼は悔悟し、生活方針を新たにすることを保證した。彼女もさうした。結構である！ 私の手をとるが、再び最初から始めようではないか。類を以て集るものだ。何も失はれたものはないのだ、我々は二人共馬鹿だつたのだ！ 小さなノラのお前は、悪く育てられた。私、年取つた悪者は、より善いことを知らなかつた。我々は二人共憐れまるべき者だ。腐れ玉子を持つて來た教師を打て、だが私の頭だけは殴つてくれるな。私は、一個の男子だが、お前同様に全く無邪氣なのだ！ 恐らくお前よりもつと無邪氣なのかも知れない、何故なら私は愛のために、お前は家庭のために結婚したのだから。そこで我々は友達にならう。そして我々が

人生の學校で學んで來た貴い課業を我々の子供達に教へよう。

はつきりと分つたらう！ それならそれでよろしい！

これは、艦長ポールによつてその堅い指と遲鈍な頭とで書かれたものだ！

さあ、我が親愛なる人形よ、私はお前の本を讀んだ、そして私の意見を書いた。だが、我はそれにどんな關係があるのだ？ 我々は互に、愛し合つてはゐなかつたのだらうか？

我々は、我々の窮境をすり抜けるために、互ひに教育し合ひ、互ひに助け合つたのではなかつたのか！ 最初の頃我々が小さな衝突を度々したことをきつとお前は憶えてゐるだらう！

お前の移り氣はなんといふことだらう？ あらゆるオッティリアと神學校とに呪ひあれ！

お前が送つて寄越した本は、奇妙な本である。それは、いつでも坐洲させようと待ちかまへてゐる、不十分に浮を置いた水路のやうなものである。しかし私は、海圖を選んで、靜かな水を見出した。たゞ、もう一度とそれをする事が出來ないだけだ。人がその外殻を割らうとしてゐる時、惡魔は内側の腐れてゐるこれらの果實を碎き易いものである。私は、お前の平和と幸福と、それから健全なる常識をお前がとり戻すことを祈る。

小さい者達はどうかね？ 彼等のことを書くことをお前は忘れてゐた。恐らくお前は、ノラの不幸なる（さういふ種類の戯曲にのみ存する）子供たちのことを餘りに考へ過ぎてゐた

のであらう。私の男の子は泣いてゐるか？ 私の鶯は歌つてゐるか？ 私の人形は踊つてゐるか？ 彼女は、もしもその年取つたポールを幸福にしようと思ふならば、常にそれをしなければならぬのだ。今や神様は、お前を恵まれ、且つ我々の間に悪い思想が起るのを防がれるであらう。私の心がどれ程悲しんでゐるか、口には言ふことが出來ない。而も私は、坐つて戯曲の批評なんぞを書かされたのだ。お前と赤ん坊たちとに祝福あれ。お前の忠實な老ポールのために彼等の薔薇色の頬に接吻してやつてくれ。」

少佐は、手紙を出して了ふと、彼は士官達の會食の席へ行つて、ボンスを飲んだ。ドクトルもそこに居た。

「君には、黒つぼくなつた古股引の臭ひが氣づきませんか？」と彼は訊ねた。「僕は自分を滑車のあたりまで曳きすり上げてみたいんですよ。そしていつもの善い北西北の風をまつすぐに體の中に吹き廻らせたんです。」

けれども、ドクトルには彼が何を言つてゐるのか解らなかつた。

「オッティリア、オッティリア！……彼女の欲することは木槌の趣味だ。その魔女を後甲板へ遣るがよい、そして閉めきつて了つた昇降口のかかけで、彼女のために第二の會食でも始めるが

いゝ。年取つた女には何が善いかといふことが解るだらう。」

「どうしたんです、え君？」とドクトルが訊ねた。

「プラトリーだ！ プラトリーだ！ プラトリーの畜生め！ 海へ六箇月も出てゐると、プラトリー病に罹つて了ふんだ。それが倫理なんぞを教へるんだ！ 倫理だつて？ そりや大きな施條銃に索針を賭けたつてかまはんよ、若しオッティリアだつて結婚したら、プラトリーのことなんか言はなくなるよ。確かに。」

「一體全體何事なんです？」

「何でもないんだ。わかりますかい？ 君はドクトルだ。さういふ女たちはどうしたといふんでせう？ 結婚しずにあるといふことは、さういふ女たちにとつては悪いことぢやないでせうか？ そのために彼等は……？ 何です？」

ドクトルは、彼の率直な意見を言つて、そして、彼女等に行きわたるだけ男が居ないことは残念だ、と付け加へた。

「自然の或る状態に於いては、男性は大抵一夫多妻です。大抵な場合これには何等の障害もありません、子孫達に對して食物は澤山あるのですからね。(肉食獸は別として。) 配偶者の無い女性のやうな變態は、自然のうちには存在しないのですからね。尤も、人間がパンを十

分に儲けさへすれば幸福であり得るといふ文明國では、それは普通な出來事です。女性が偏重されてゐる場合には特に。人は、未婚婦人を、深切を以つて取扱はねばなりません。何故なら彼等の運命は、憂鬱なものですからね。」

「深切を以つて！ それは大變結構です。が若しも彼等が彼等自身に深切でない時にはどうでせう！」

そして彼は、すべてのことをドクトルに話した。彼が戯曲の批評を書いたことまで白狀した。

「おゝ！ 成程、馬鹿なことは限りもなく書けますよ。」とドクトルは、ポンスのはひつてゐる壺の蓋の上に手を置きながら言つた。「結局は、科學があらゆる大問題を決定するのです。科學です、そしてその他の何物でもない。」

六箇月が過ぎ去り、甚だ愉快なものではなかつたが、その妻と絶えず文通してゐた(彼女は彼の批評を鋭く批評した。) 少佐が、遂にダラレーに上陸した時、彼は、妻とすべての子供等と二人の召使とオッティリアとによつて出迎へられた。彼の妻は、深切ではあつたが、心からではなかつた。彼女は、接吻させる爲に顔をあげた。オッティリアは、支繩のやうに丈が高かつた、そして髪の毛は短くしてゐた。うしろから見ると、彼女は柄雑巾のやうであつた。

晩飯は退屈であつた。彼等はたゞ、茶を飲んだ丈けだつた。長いボートには、子供達が積み込まれてゐた、そして少佐は、屋根部屋へ寝なければならなかつた。何といふ變りやうだらう！ 哀れな年取つたポールは、老人になつてしまつたやうに見えた、そして當惑を感じてゐた。

「結婚してゐて、而も妻を持つてゐないのだ。」と彼は考へた。「とても堪らない！」

翌朝彼は、妻を船遊びに連れて行かうと思つた。ところが、オッティリアが海は嫌ひだつた。彼女は船に酔ふのであつた。而もその日は日曜だつた。日曜？ それがどうしたのだ！ では、散歩に出よう。彼等は、色々話さなければならぬことがあつた。勿論、彼等は互ひに話し合ふべきことが澤山あつた。だがオッティリアと一緒に來る必要はなかつた！

彼等は、腕を組み合せて出掛けて行つた。しかし彼等は、餘り話をしなかつた。そして彼等が話したことは、變化した思想の爲めといふよりは、彼等の思想を隠す爲めに發せられた言葉であつた。

彼等は、小さなコレラ死亡者埋葬所のそばを通つた、そして、スウィス・パレーへ行く途をとつた。微風は松の木の間を揺つて過ぎ、そして枝々の間からは青い海がちらちらと閃いて見えてゐた。

彼等は、石の上に坐つた。彼は、彼女の足元の芝生の上にごろりと横になつた。今嵐は起らうとしてゐる、と彼は考へた。そしてそれは起つた。

「私たちの結婚に就いて何もお考へにならなかつて？」と彼女は始めた。

「いや、」と彼は十分にその事を考へてゐたらしい様子で答へた。「僕はたゞそれについてはかう感じてゐた丈けなのだ。僕の考へでは愛は感情だ。人は目標によつて舵をとり、そして港に入るのだ。羅針盤をとり海圖を取り去つて見給へ、きつと沈没するだらう。」

「えゝ、ですけれど、私達の家庭は人形の家に過ぎなかつたのですわ。」

「御免よ、だがそれは全く本當のことではない。お前は、勘定書を贋造しやしなかつた。お前は、お前が祕密で抵當を入れて金を借りようとした梅毒醫に對して踝を示しはしなかつたのだ。お前は、妻が無智のために犯した、従つてそれは、原告もないのだから、罪ではない、罪を身に引受けるのを待つ程、ロマンチックな馬鹿ではなかつたのだ。それにお前は決して私に嘘をついてゐはしなかつた。ヘルマーが彼女を十分に信任し、銀行業務に口出しすることを許し、従業者を雇つたつもりで、彼女の干渉を忍んだ時に彼がその妻を取扱つたと、全く同じやうに正直に僕はお前を取扱つてゐたのだ。我々はそれ故、舊式のにも新式のにもどんな意見にも従つた夫婦だつたらう。」

「さうです、しかし私はあなたの家政婦だったので！」

「許してくれ、お前は間違つてゐる。お前は決して臺所で食事をしたことはなかつた、お前は決して賃銀を受け取つたことはなかつた、お前は決して入費の勘定をしなければならぬといふやうなことはなかつたのだ。私は、何かのことで自分の氣に入らないからといつてお前を叱つたことはなかつた。それで、計算をしたり帆索を引締めたり、それを伸ばしたり、「捧げ銃！」の號令をかけたたり、鯉の數をかぞへたり、ラムを量つたり、豌豆の目方をかけたたり、麥粉を調べたりするやうな僕の仕事を、召使の世話をしたり、家で賄ひをしたり、子供達を育てたりするやうなお前の仕事よりも名譽あるものだと思ふのかい？」

「さうではありませんわ。しかしあなたは、御自分の仕事に對して支拂はれていらつしやいます！ あなたは、御自分の主人です！ あなたは男です！」

「僕の可愛い子供よ、お前は、僕がお前に賃銀を與へるやうにでもして貰ひたいといふのかね？ お前は本氣に、僕の家政婦になりたいのかね？ 僕が男に生れたといふことは偶然なことだ。僕は殆んどそれを憐むべきことだと言ふことも出来るんだ。何故なら、今日では男であるといふことは殆んど全く一個の罪なのだから。しかし、それは僕の罪ではない。人類の二個の半分をお互ひに敵對させるやうに煽動する男に呪われ！ 男は、それに對して大部

分責任を負はねばならない。僕は主人だらうか？ 我々は二人共支配してはゐないのだらうか？ 僕はかつてお前の助言を求めずに重要な事を決定して了つたことがあつたらうか？

何だつて？ だがお前は——お前はお前の好み通りに子供達を育ててゐるんだ！ 酔ふだらうから彼等をゆすぶつて眠らせるのはよしてくれと僕が言つたことを、お前は憶えてゐるかね？ しかしお前は、お前のしたいやうにしたぢやなかつたか！ 或時は僕のしたいやうにしたこともある、だがその次にはお前はまたお前の好きにしたのだ。そこには何等際どいことはあり得なかつた、何故なら、ゆすぶることとゆすぶらないこととの間では進むべき何等の中間の途もなかつたからだ。我々は今までは随分仲よくやつて來た。ところがお前は、オッティリアのために僕を抛り出したのだ！」

「いつでも、オッティリア、オッティリアつて仰しやるのね！ あの人を私のところへ寄越したのはあなたぢやありませんか？」

「いや、特にあの人ぢやない！ だが今のところ支配する者は彼女だといふことは疑ひもないことだ。」

「あなたは、すべての私の好きなことから私を引き離さうとなさるのね！」

「オッティリアがお前の好きなすべてなのか？ まるきりそんな風に見えるね！」

「でも私は、娘達に教育學とラテン語とを教へて貰ふために雇つたあの人を、今更追ひ出すことは出来ませんわ。」

「ラテン語だつて！ 偉大なスコットだ！ 娘達は墮落させられるのか？」

「娘達は、男の知るだけのことをすつかり知らなくてはならないんです。時が來た時本當の結婚が出来るやうに。」

「だが、お前、すべて夫といふものはラテン語なんぞ知らないものだよ！ 僕だつてたつた一語つきり知りやしない、そしてそれは「除去する」といふ言葉だ。だが我々はそれにも拘らず幸福だつた。而も、男の子達の教育法からも、餘分な技能として、ラテン語を廢止しようとする運動さへあるのだ。これでもお前は色々なことを教へられはしないのか？ 女までが墮落しなくつたつて、男が墮落するだけでもう澤山ぢやないか？ オッティリア、オッティリア、お前は、僕をこんな風に取扱ふなんて、一體僕はお前にどんなことをしたといふのだ？」

「私達がその問題をそのまゝにして置いたとして御覽なさい——ねえ、ウィリアム、それはどういふことに成るのでせう？ それは肉慾です！」

「だがね、お前、それが無かつたら、どうして私達は子供を持つことが出来たらう？ 而もそれは肉慾だけぢやないんだ。」

「一つの物が、黒かつたり白かつたりし得るでせうか？ わけを話して下さい！」

「勿論、それは有り得ることだ。例へばそこにお前の日傘がある。それは、外側は黒で、内側は白だ。」

「詭辯だわ！」

「よくお聞き、愛する者よ、お前の心に在る考へをお前流に話して御覽、オッティリアの本にあるやうな具合に言はないで。お前はお前の頭にお前を持ち追げさして了つてはいけない、も一度お前自身に戻つてくれ、愛する者よ、愛する妻よ。」

「あなたのものです、あなたの財産です、あなたの勞働でお買ひになつた。」

「私がお前の財産であるのと同じだ。眼玉を失くしたくないならば他の女には見ることを許されないお前の夫、お前にその身を賜物をしたといふよりは寧ろお前と交換にお前に身を譲り渡したお前の夫なのだ。我々はもう支拂濟ではないのだらうか？」

「でも私たちは、私たちの生命を浪費してゐるのです！ 私たちはより高い趣味を持つたことがありはしないでせうか、ウィリアム？」

「さうだ、最高のものをね、ガリーイ。我々はいつも遊んでばかりゐたのではない、我々には嚴肅な時があつたのだ。我々は、來るべき時代の人間を造りはしなかつたか？ 我々は二

人共、一人前の男及び女に成人しようとしてゐる小さい者たちのために、眞面目に働き、努力しはしなかつたか？ お前は、彼等のために四回までも死に面しはしなかつたか？ お前は、彼等の搖籃をゆすめるためにお前の夜の安息を奪はれ、彼等の世話をするために晝の快樂を奪はれはしなかつたか？ 我々は、若しも子供達の爲といふのでなかつたならば、大通りに大きな六つも室のある家を借りて、戸を開く下僕まで持つといふやうなことをしたらうか？ お前は絹の着物や眞珠を身に着けることが出来はしなかつたらうか？ そして僕は、お前の年取つたポールは、若しも子供達の爲でなかつたなら、檣上見張所なんぞを膝にはしなかつたであらう。我々は、本當に人形以上の善いものではないのだらうか？ 我々は、何の取柄もないので男に拒絶された老嬢共が言ふやうに、我儘なのだらうか？ 何故さういふ澤山の女達は結婚しないでゐるんだらう？ 彼等は皆申込みを自慢する、それなのに彼等は殉教者のやうな態度を示してゐるんだ！ 高い趣味！ ラテン語！ いろいろの慈善事業のために襟の低い着物を着て、子供達を家へ置き放しにしてうつちやらかして置くのだ！ 私は、確かに自分の方がオッティリアの趣味よりは高いと思つてゐる。我々の失敗したことを成し就げてくれる強い健康な子供達を欲する時にはね。だがラテン語は、彼等を救ひはしない！ さよなら、ガリーイ！ 僕は船へ歸らなけりやならないんだ。お前は行くかい？

しかし彼女は、石の上に坐つたまゝで、返事もしなかつた。彼は、重々しい、甚だ重々しい足音をさせて行つた。その内に、碧い海は暗くなり、太陽は輝くことを止めた。

「ポールよ、ポールよ、どういふことに成るのだらうか？」と彼は、埋葬地の垣を跨いだ時溜息ついて言つた。「俺は此處へ横はりたい、この木々の根と根との間へ、俺の墓所の印として木製の十字架をおいて。しかしきつと俺は、彼女なしにこゝに眠るなら安息することは出来ないだらう！ おゝ！ ガリーイ！ ガリーイ！」

「何もかもすつかり悪くなつてしまひました、お母さん。」と少佐は、或る冷たい秋の日に、義母を訊ねた時、さう言つた。

「どうしたんです、ウイリイ、えゝ？」

「昨日は、私たちの家で皆逢ひました。一昨日は公爵夫人の家で。小さいアリスが突然病氣になりました。勿論それは不幸なことです。しかし私は、ガリーイがわざと私が彼女を苦しませるやうにしたのだと思ふといけなと思つて、彼女を呼びにやらうとはしなかつたんです！ おゝ！ もしも人が一度信仰を失つた時には……。僕は昨日海軍省で逢つた友達に、煙草の烟で自分の妻の友達を殺すといふことはスエーデンでは合法なことかどうかと、訊いてみました。私は、それは合法でないと言はれたのです。そして云ふには、いゝ事をするの

でなく害をするのだからもし合法だとしてもしない方がいい。若しもそれが賞讃を博さんためにのみせられるのならば！ 私は彼の襟頸を捉へて窓から抛り出して了ひたかつたです。私はどうしたらいいんでせう？」

「それは難かしい問題ですね。ウィリイ、ねえ、しかし私たちは、それから脱する方法を考へることがきつと出来ます。あなたは、獨身者のやうにして暮すことは出来ないでせうね。」

「どうして、勿論出来ません。」

「私は、二三日前に非常に率直に彼女に話しましたの。もしお前が遺方を變へないならあの方を失ふだらうつて言つたのです。」

「さうしたら、彼女は何と言ひました？」

「あなたにはあなたの體をあなたが思ひのまゝにする権利があるなんて言つてましたよ。」

「本當だ！ そして彼女にも矢張でせう？ 立派な理論だ！ 私の髪の毛は、もう白くなりかゝつてゐるんですよ、お母さん！」

「妻に嫉妬を起させるといふことは、昔からの善い計畫ですわ。それは大抵は、殺すか癒すかするものです。何故なら少しでも愛が残つてゐるならば、それは出て來ますからね。」

「残つてますよ、私は知つてゐます、残つてますとも！」

「勿論、残つてますね。愛はさう急に減びるものぢやありません。多分永年の間に使ひへらされたんでせう。オッティリアと一寸巫山戯て御覽なさい。きつと効目がありますよ！」

「オッティリアと巫山戯るんですつて！ オッティリアと？」

「やつて御覽なさい。あなたは何か彼女が興味をもつてゐることに通じていらつしやるでせう？」

「えゝ、勿論ですとも！ 奴等は今統計學に凝つてゐるんです。墮落した女たち、傳染病に罹つてゐるんだ。若しか奴等の話題を私が數學上の問題に誘ひ込むことが出来たら！ 私は數學に通曉してゐるんですからね！」

「それごらんなさい！ 數學でお始めなさい——だん／＼に彼女の肩のまはりヘシヨールを附けたり、オーバー・シューズにボタンをかけてやつたりするんです。晩には彼女を家まで送つておやりなさい。ガリーイがきつと見てゐると思ふ處で、彼女の健康のために飲んだり、接吻したりするんですよ。必要なら、一寸位出過ぎてもいいでせうよ。彼女は、きつと怒りはしませんよ。さうして、數學といふ大きな丸藥をやるんです、ガリーイが坐つて靜かに聽いてるより他になすべきことがないといふやうな大きな。來週の今日またいらつしやい、そして結果を話して下さい。」

少佐は、家に歸つて不徳に關する最近刊のパンフレットを讀んだ。そして早速彼の計畫の實行に取りかゝつた。

一週間後に彼は、澄みきつた顔に微笑を浮べて義母を訪問した。彼はシェリイでいゝ心持になつてゐた。彼は上機嫌だつた。

「さあ、すつかり話して下さい。」と老婦人は額の上に眼鏡を押し上げながら言つた。

「始めは難かしい仕事でしたよ。」と彼は言ひ出した。「彼女は私を信じてゐないんですからね。彼女は、私が馬鹿にしてゐると思つてたんです。それから私は、公算がアメリカに於ける道徳上の統計に、用ひられたその結果に就いて話しました。それは全然エボック・メイキングのことだと彼女に話しました。彼女はそれに就いては少しも知りませんでした。その問題は彼女を惹きつけたのです。私は、幾パーセントの女が墮落するかといふ一定の公算の總額を計上することが可能だといふことを、例を上げて數字によつて證明してやつたのです。

彼女はびつくりしました。私は、彼女が好奇心を起し、そして次に逢つた時には自分でトラップを持つて來た程熱心になつてゐたのを見ました。ガーリイは、オッティリアと私とが友達になつたことを喜んでゐました。そして私の計畫をそれ以上に發展さすのに骨折つてくれました。彼女は、オッティリアを私の部屋へ押込んで戸を閉ぢました。其處で我々は午後中坐つ

て計算をやつてゐました。この年とつた魔女は幸福でした。何故と云つて彼女は、彼女が私を巧みに繰つてゐると感じたのですから。そして三時間の後、私たちは離れられない友達となつたのです。夕飯の時にはもう、私の妻はオッティリアと私とがお互に名で呼び合つてゐた程舊友か何かのやうに親しくなつてゐるのを見たのです。これを祝福するために私は、古い善いシェリイを持出しました。それから私は彼女の唇に接吻しました。神よ、私の罪をお許し下さい！ ガーリイはやゝ狼狽へたやうでしたが、氣にしてゐるやうには見えませんでした。彼女は、幸福を以つて輝いてゐました。シェリイは強く、オッティリアは弱うございました。私は彼女に外套を被せて、彼女の家まで連れて行きました。私は優しく彼女の腕をしめつけ、彼女に星の名前を教へてやりました。彼女は熱狂して了ひました！ 彼女はいつも星が好きだつたのですが、その名前を憶えることが今まで出来なかつたのです。哀れなる女共は、何等知識を得ることを許されてゐないのです。彼女の熱情は劇くなり、そして我々は、お互に誤解のために非常に長い長い間離れてゐた最も親しい友人のやうに別れました。

「翌日も又數學で、夕飯時までつゞけてゐました。ガーリイは、一度か二度はひつて來て勵ますやうな領きを與へて行きました。晩飯の時には我々は、星と數學のことより他何も話しませんでした。そしてガーリイは、黙つて、我々の言ふことに耳を傾けて坐つてゐまし

た。再び私は彼女を家まで送つて行きました。歸り途に私は友人に逢つて、一緒にグラ
ド・ホテルへ行つて、ポンスを飲みました。私在家へ歸つたのは一時でした。ガリーイはま
だ私を待つて起きてゐました。

「こんな時刻まで何處にいらしたの、ウィリアム？」と彼女が訊きました。

「その時私の心の中へ悪魔がはひり込んで來たので、私はかう答へました。

「僕らは時間のことを忘れて了つた程話すことが澤山あつたんだよ。」

「その打撃は中心を衝いたんです。」

「若い女と半夜も駆けまはつてゐるなんて立派なことだとは思はれませんか。」と彼女は言ひ
ました。

「私は、まご／＼して口吃るやうに見せかけました。」

「人が話すことを澤山持つてゐる時には、どうかすると、何が立派なことか何がさうでない
かといふやうなことは忘れて了ふものだよ。」

「一體あなた方はどんな話をなされたの？」とガリーイは口を尖らせて訊きました。

「僕は全く憶えてゐない。」

「あなたはうまくおやりなされたね。」と老婦人は言つた。「それから！」

三日目には、と少佐はつゞけた。「ガリーイは、針仕事を持つてはひつて來て、數學の課業
がすむまで部屋の中に居ました。晩飯は、全くいつものやうに楽しいものではありませんで
した。しかし、一方では非常に星學的でした。私は、あの魔女にオーバー・シュースの手傳ひ
をしてやりました。そのことはガリーイに大變な感銘を與へました。オッティリアがさやうな
らと言つた時彼女は、やつとその頬に接吻させた丈けでした。途中では私は彼女の腕をしつ
かり支へて、靈魂の同情に就いて語り、靈魂の家庭としての星に就いて語りました。私は、
グランド・ホテルへ行つて、ポンスを飲つて二時になつて歸宅したんです。ガリーイはまだ
起きてゐました。私はそれを見ましたが、自分の部屋へ眞直に行つて了ひました。まるで獨
身者のやうにね。するとガリーイも、私についてきて私に質問を浴せる氣にはならなかつた
んです。

「その翌日私はオッティリアに天文学の講義をしました。ガリーイは、自分も非常に興味を持
つてゐるから出席したいと宣言しました。ところが、オッティリアは、我々はもうずつと進ん
でゐるから、自分がいづれ後から手ほどきを教へようと言ひました。これがガリーイを苦し
めました。そして彼女は行つて了ひました。我々は晩にはシェリイを随分飲りました。オッ
ティリアが、お蔭様でいゝ晩を過したと私に禮を言つた時、私は彼女の腰に腕を巻いて接吻

しました。ガリーイは眞青になりました。私が彼女のオーバー・シューズのボタンをかけてやつた時、私は……私は……」

「御心配はいりませんよ。」と老婦人は言つた。「私はお婆さんですからね。」

彼は笑つた。「やつぱり、お母さん、彼女も却々悪くはないんです、本當に。しかし私がオーバー・コートを着て出掛けようとした時、オッティリアを家へ送らうとして廣間で召使の女が待つてゐた時には私もびつくりしましたよ。ガリーイは、私のために言譯をしました。私は前の晩に風邪をひいたので夜氣に當つては悪いだらうと恐れてゐるのだと言ひました。オッティリアは、自信ありげな様子をして、彼女には接吻もしずに行つて了ひました。」

「私は、その翌日の十二時に大學にある天文学の或る機械をオッティリアに見せる約束をしてゐました。彼女は、約束通りに來ましたが、大變元氣がありませんでした。彼女は、自分を非常に不深切に取扱ふガリーイを見なければならなかつたんです。と彼女は自分でさう言ひました。晝飯時に歸宅した時、私はガリーイの非常な變り様を見ました。彼女は魚のやうに冷淡で黙つてゐました。彼女が苦しんでゐたのだといふことを、私は見る事が出來ました。最早、ナイフを用ふべき時でした。」

「『お前はオッティリアに何と言つたんだね?』と私は始めました。『彼女は大變いやな顔をしてゐたよ。』

「『私があの人に何を言つたでせう? え、私はあの人に浮氣者だと言つたんです。私はさう言つたんですよ。』

「『どうしてお前はそんなことを言ふことが出来るんだ?』と私は答へました。『きつと、お前は嫉妬してゐやしまいね!』

「『私が! 彼女に嫉妬を起してますつて!』彼女はさう言つて笑ひ出しました。」

「『さうさ、そんな風ぢや僕が困るよ。何故なら僕は、オッティリアのやうな智慧のある利巧な人が他人の夫に對してたくらみを持つやうなことは決して有り得ないと信じてるんだ!』

「『さうでせう。』(彼女はいざと言ふ處へ來たんです。『ですが、他人の夫は彼女に對してたくらみを持つかも知れません。』

「『ふ、ふ、ふ!』彼女は、全力をつくして私を取戻さうと努力してゐたのです。私はオッティリアのかたをかちました。ガリーイは、彼女を老嬢と呼びました。私は彼女を飽くまで擁護してゐました。その午後にはオッティリアは來ませんでした。彼女は冷たい手紙を寄越して、謝つて、それから自分の欲しないことを見るやうになつたと言つて結んでありました。私はきつと行つて彼女を捉へて來ると、斷言し、ほのめかしました。そのことはガリーイを狂氣

にさせました！ 彼女は、私がオッティリアを戀してゐて自分のことなぞは何とも思つてゐないのだと堅く思ひ込んでゐたんです。彼女は、自分がつまらない愚かな女で、何も知らず、是といつて取柄もなく、それに——ふ、ふ、ふ！——數學も全然知らないといふことを辨へてゐたんです。私は櫓を呼んで、それから私たちは遊びに出掛けました。海を見晴らすホテルで私たちは爛をした酒を飲み、素晴らしい軽い晚餐をとりました。それは、まるで再び結婚式が繰り返されたかのやうでした。それから我々は家へ櫓に乗つて歸つて來ました。」

「で、それから——？」と老婦人は、眼鏡越しに彼を見ながら訊ねた。

「それから？ ふむ！ 神よ私の罪をお許し下さい！ 私は、自分の可愛い妻を口説き落したんです。さあ、どうですね、お祖母さん？」

「あなたは、大變うまくやりましたね。で、それから？」

「それからですか？ それからはずべてがうまく行つてます。そして今では我々は、子供達の教育のこと及び、迷信とか老嬢を通すこととかから女を開放することや、憂鬱性や悪魔やその誘惑から女を解放することなどに就いて論じ合つてゐるんです。しかし我々二人だけでゐるときの話ですよ。そしてそれは、互ひの誤解を避ける最良の手段なんです。さうは思ひませんか、御老人？」

「さうですよ、ウィリイ、ぢや私もあなたの方のところへ訪問に出掛けませうね。」

「いらつしやい！ すれば、人形の踊り、雲雀や啄木鳥の歌や啼聲、そんなものを御覽に入れます。貴女は、屋根の上まで幸福で一杯になつた家庭を御覽なさるでせう。なぜなら其處には、お伽噺に於いてのみ起るやうな奇蹟を待つてゐる者は一人もないんですからね。貴女は、本當の人形の家を御覽なさるでせう。」

不死鳥

二三八

彼が彼女に牧師館で始めて會つた頃には、野苺の實が熟しかけてゐた。彼は、かつて幾人もの女に出逢つてゐた、けれども彼が彼女を見た時、彼は、これこそ彼女だ！ といふことを知つたのである。しかし彼は、彼女にさうとは敢て話さなかつた。そして彼女は、彼がまだ學生だったので彼を苛めるだけだつた。

彼が彼女に二度目に會つた時には、彼は大學生であつた。そして、彼が彼女にその腕を巻きつけて接吻した時、彼は雨のやうに降る狼煙を見、鈴や喇叭の音を聞き、彼の足元の地面がゆらぐやうな氣がした。

彼女は、十四で既に一人前の女であつた。彼女の若々しい胸は、ひもじげな小さな口と熱烈な赤ん坊の拳固とを待つてゐるやうに見えた。そのしつかりとした、弾力性のある歩調、その丸みを持つた肥つた腰から見ても、彼女はその心臓の下にいつ何時でも赤ん坊が持つてさうに見えた。彼女の髪の毛は、透明な蜂蜜のやうに青味を帯びた黄金色で、後光のやうに彼女の顔を取巻いてゐた。彼女の眼は二つの焰、彼女の皮膚は手袋のやうに柔かであつた。

彼等は、婚約した、そして庭のシナの樹の下にゐる小鳥のやうに森の中で接吻し合ひさゝやき合つた。人生は、まだ大鎌の觸れない日當りよい牧場のやうに彼等の前に展けてゐた。けれども彼は、先づ探掘の試験をパスしなければならなかつた。そしてそれは——外國の旅行をも含めて——十年かゝるのであつた。十年！

彼は大學へ歸つた。夏になると彼は牧師館に戻つて來た、彼女は何處から何處まで美しくあつた。三夏彼は來た——四回目には彼女は青さめてゐた。彼女の鼻のわきには小さな赤い線が出来、彼女の肩はやゝ垂れ下つてゐた。六回目の夏がまはつて來た時、彼女は鐵劑を用ひてゐた。七回目には彼女は、湯治場へ行つた。八回目には彼女は齒痛に悩まされ、彼女の神経は亂れてゐた。彼女の、髪の毛は光澤を失ひ、聲は鋭くなり、鼻は、小さな黒い汚點が一杯だつた。彼女は、昔の面影を失つて了つた、足はびつこを引き、頬はこけて了つた。その冬には彼女は神経病に襲はれ、そして彼女の髪の毛は切りとられねばならなかつた。それが再び生えた時には、鈍い褐色であつた。彼は、十四歳の金髪の少女に戀したのだつた——淺黒い女は彼を惹きつけはしなかつた——そして彼は、鈍い褐色の髪の毛をして咽喉のところに開いた着物を着ることを拒む二十四歳の女と結婚したのであつた。

しかし、それにも拘らず彼は、彼女を愛した。彼の愛は以前のやうに情熱的ではなかつた。

その愛は静かで、しつかりとしたものであつた。そして、その小さな鑛山町には、彼等の幸福を妨げるやうなものは何もなかつた。

彼女は、一人の男の子を産んだ。しかし彼は、いつも女の子を欲しがつてゐた。その内にたうとう明色の髪をした赤ん坊が生れた。

その赤ん坊は、彼の寵愛物であつた。そして成長するにつれて彼女は、次第々々にその母親に似て來た。彼女が八つになつた時、それは全く昔の母の姿と少しも違はない位だつた。そして父は、自分の閑な時間を悉くこの小さな娘に捧げた。

家の仕事は、母親の手を荒くした。彼女の鼻は、その形を失ひ、その髪はこけ落ちた。始終臺所道具の上に屈んでゐる結果、彼女はやゝ猫脊になつて了つた。父と母とは食事の時と夜とに逢ふだけだつた。彼等は不平を言ひはしなかつたが、昔の様はなかつた。

けれども娘は、父の喜びであつた。殆んど彼は恰も彼女に戀してゐたかのやうだつた。彼は、彼女のうちに、眼がちらくする程美しいその母親の化身を見た、その母親の最初の印象を見た。彼は、殆んど自分が彼女の伴侶であると自ら思つてゐた。そして彼女が着物を着てゐる間は決して彼女の部屋へはひつて行かなかつた。彼は娘を崇拜してゐた。

ところが或朝、娘はいつまでも床にはひつてゐて、起きたくないと言つた。母親は、それ

を忘れてゐるものとしてゐたが、父親は、醫者を呼びにやつた。死の使の影が家中に擴がつてゐた。娘はチフテリアに罹つたのであつた。父か母かが他の子供達を他へ連れて行かねばならなかつた。父親は拒んだ。母親は彼等を郊外の或る小さな家へ連れて行つた。そして父親は病人を看護する爲に家に残つた。彼女は寝てゐる！家の中は硫黄で消毒された。それが鍍金した額縁を黒くし、テーブルの上の銀製の器具を曇らせた。彼は、黙々たる苦惱を懷いて空つぽな部屋の中を歩いた。そして夜になれば大きな寢床の中にたつた一人であつて、まるで鰥夫のやうに感じたのであつた。彼は、娘のために玩具を買つてやつた、そして、パンチとジュナイ(滑稽人形)の見せものを見せて彼女を喜ばせようとして彼がベッドの端に坐ると、彼女は彼を見て微笑んだ。そして、母や兄達はどうしたのかと訊ねた。

父親は、郊外の家へ行つてその前の途に立たねばならなかつた。そして、窓から彼の方を見てゐる妻に頷いてみせ、子供達に接吻を授けた。すると妻は、青や赤の紙で彼に信號を送るのだつた。

けれども、小さな娘がもう滑稽人形をも喜ばなくなり、微笑むことも罷め、話すことも罷めて了ふ日が來た。死が、その長い骨張つた手を差し伸べて彼女を窒息せしめたからである。それは苦しい争闘であつた。

そこで母親は、小さな娘を打棄て、置いたことを全く後悔しながら、歸つて來た。家の中には非常な不幸があつた、非常な悲しみがあつた。醫者が死體を解剖しようとした時父親はそれを拒絶した。彼女は彼にとつては死んではゐなかつたので、ナイフなどは全く彼女に觸れてはならないのであつた。併し乍ら彼の抵抗は打負かされた。すると彼は、かつとなつて醫者を蹴飛ばしたり咬みついたりしようとした。

彼女が地下に埋められた時、彼はその墓の上に記念碑を立てた、そして丸一年も彼は毎日そこを訪問した。二年目には彼は、そんなに繁々は行かなくなつた。彼の仕事は多く、そして暇な時と云つては無かつた。彼は齡の重荷を感じ始めてゐた。彼の歩調には、弾力性が乏しくなり、彼の傷は癒えかゝつてゐた。時々彼は、時のたつにつれて彼女に對する悲しみの次第々に薄らいで行くことを知つて、恥かしく思つた。そのうちにたうとうそれに就いてはすつかり忘れて了つた。

又二人の女の子が生れた。けれども、それは同じことではなかつた。過ぎて行つた者によつて作られた空處は、決して滿され得はしなかつた。

人生は、困難なる争闘であつた。かつては——かつては凡そ地上の他の女には似てもゐなかつた若い妻は、次第に彼女の魔力を失つて了つた。かつては非常に輝かしく美しかつたそ

の家からは鍍金が剥げて了つた。子供達は、母の結婚の時の贈物を打壊しいびつにし、ベッドを汚し、家具の足を傷だらけにした。ソファ、の詰物はそこゝに見え、ピアノは何年間も開かれなでゐた。子供達のやる騒ぎは、音楽を臺なしにし、聲は鋭くなつてゐた。愛撫の言葉は赤子の着物と共に投げ棄てられ、抱擁はマッサージのやうなものに下落して了つた。彼等は年を取り、疲れ果てゝゐた。父親は、もう母親の前に跪くやうなことはなく、見窄しい安樂椅子に坐つて、パイプに火を點けようとする時には、彼女にマッチを求めるといふ風だつた。さうだ、彼等は年取りつゝあつたのだ。

父親が五十になつた時、母親は死んだ。その時過去が眼覺めて、彼の心を打つた。最後の苦惱が僅かに残つてゐた魅力を全く奪ひ去つて了つた彼女の破れた肉體が、墓の中に埋められた時、彼の十四歳の戀人の繪像が、彼の記憶の中に浮び上つたのであつた。彼が今悲しんでゐるのは、あれ程長い以前に失つた彼女のことであつた。そして彼女に對する追慕の思ひは後悔をもたらした。けれども彼は年老いた母親に不深切であつたのでは決してなかつた。その前に膝をついて崇拜したが、祭壇へは決して連れて行かなかつたところの彼は、十四歳の牧師の娘に忠實であつたのだ。何故なら彼は、二十四になる血色の悪い若い女と結婚したのであつたから。若しも彼が全く正直であつたならば、彼が悲しんだのは、その彼女だつた

と白状したかも知れない。彼が、老いた母親の善い料理と間斷なき注意とを失つてしまったことも亦事實であつた。しかしそれは自ら別問題である。

彼は、今は子供達と一層親しくなつた。彼等の或者はその古巢を立ち去つて了つたが、まだ家の中に残つてゐたものもあつた。

彼が丁度丸一年の間、死んだ妻の話をして友達を退屈させた時、或る異常な事件が起つた。彼は、美しい髪の毛の、十四歳の時の先妻に生寫しの十八になる若い娘に出逢つた。彼は、この暗合のうちに、たうとう最初の者即ちかの戀人を彼に恵まれようとする寛仁なる神の御手を見たのであつた。彼は、最初の者と似てゐるといふ理由で、彼女を戀するに到つた。彼は彼女と結婚した。彼は、遂に彼女を得たのであつた。

併しながら、彼の子供達、特に娘達は、彼の第二の結婚を憤つた。彼等は、父と繼母との關係を不當なものだと見た。彼等の意見では、彼は以前の母に對して不信だといふのであつた。そして彼等は、彼の家を去つて、世の中へ出て行つて了つた。

彼は幸福であつた！　そして、若い妻を持つた誇りは、その幸福以上でさへあつた。

「二番作に過ぎない！」と彼の古い友達は、言つた。

一年経つと、若い妻は、赤ん坊を産んだ。父親は、勿論最早赤ん坊の泣聲には馴れてゐな

かつた。そして彼は、夜の安息を欲した。彼は、妻が泣くのも構はず自分だけ別の寢室にはひると言張つた。實際、時には女は厄介なものである。而も彼女は、先妻を嫉妬してゐたのだ。それといふのは、彼が愚かにも二人の間の著しい類似に就いて話して聞かせたり、先妻のラヴ・レターを讀ましたりしたからであつた。彼が彼女を疎んずるやうになつたのを、彼女はこの事に歸したのであつた。彼女は、自分が先妻の愛稱のすべてを受け嗣いだといふに過ぎないのであつて、自分はいはゞたゞ彼女の代役なのだといふことを知つた。そのことが彼女を混亂させた。そして彼を自分のものにしようとする企ては、あらゆる種類の惡戯の中へ彼女を導いて行つた。而も彼女は、たゞ彼を退屈させたに過ぎなかつた。そして二人の女を靜かに比べると彼の意見は、全く先妻に有利になるのであつた。先妻は、第二の妻が彼を怒らせれば、それ丈け一層優しく思はれた。彼が家から逐ひ出した子供達の戀しさは彼の後悔を増し、そして彼の眠りは、彼が先妻に不信であつたといふ思ひに狩り立てられてゐたために、惡夢によつて妨げられた。

彼の家庭は、最早幸福なものではなかつた。彼は、爲さずに置く方がよかつたことを、して了つたのであつた。

彼は、可なりの時間を俱樂部で過すやうになつた。しかし最早彼の妻は狂的になつてゐた。

彼は、その妻を欺いた。彼は老人だったので、一層よく監視してゐればよかつたのに！ 老人が若い妻をそんな風に一人残しておくことは、或る種の危険を冒してゐることなのだ。彼は、いつかそれを後悔しなければなるまい！

——老人？ 彼女は彼を老人と呼んだのか？ 彼は彼女に老人でないことを示すであらう！

彼等は再び室を同じうするやうになつた。しかし、今では事は七倍も悪くなつてゐた。彼は、夜赤ん坊に煩さはれたくなかつた。赤ん坊の爲に適當な部屋は育兒室だ。否！ 彼は、先妻の場合にはさうは思つてゐなかつたのだ。

彼は、その苦しみに服従しなければならなかつた。

彼の十四歳の愛人の灰の中から出て来る不死鳥フェニックスの奇蹟を二度までも彼は信じた。始めはその娘に於いて。二度目にはその第二の妻に於いて。けれども彼の記憶の中には、野苺の實の熟してゐた頃出逢つて、森の中のシナの下で接吻して、而も彼はその子とは結婚しなかつた牧師館の小さな者、最初の者だけが残つてゐた。

けれども今、彼の太陽が沈み、彼の日が短くなつた時、彼はその暗黒な時間の中に、彼とその子供達とに深切だつた、小言一つ言はなかつた、質素だつた、食事を料理したり男の子

の股引や女の子のスカートを繕つたりしたあの年取つた母親の姿を見たのみであつた。彼の勝利の閃きは終りを告げて、彼は事實をはつきりと見ることが出来た。十四歳の樂園の小鳥の灰の中から、靜かに美しく浮んで来て、卵を生み、幼き者の巢を作るために胸の毛を引抜いて、死ぬまでその生命の血を以つて彼等を養ふといふ本當の不死鳥であつたのは、要するにあの年取つた母親ではなかつたらうかと彼は怪しんだのであつた。

彼は怪しんだ……しかし遂に彼がその疲れた體を枕に横へて決して再び立ち上らなかつた時、彼は、それがさうだといふことを確信したのであつた。

(譯者曰) 不死鳥フェニックスとは、唯一無二の鳥でアラビヤ沙漠で六百年生活する毎に埃及國ヘリポリス市に

来て自ら身を焼いて祭壇の灰とし、再びその灰の中から若い美しい姿で蘇り更に六百年生き、かくして輪廻轉生極まりないと言はれてゐるものである。

ロミオとジュリア

二四八

或夕暮、夫はその腕に楽譜の巻いたのを抱へて歸つて来て、その妻に言った。

「夕飯のあとで二部合奏をやらうぢやないか！」

「何が有りましたの？」と妻は訊ねた。

「ピアノの爲に整調されたロミオとジュリアだ。知つてるかい？」

「え、勿論知つてるわ。」と彼女は答へた。「でも一ぺんも舞臺で観たことはないと思えてますわ。」

「お、これは素的だよ！ 俺にとつては若い時分の夢のやうな氣がする。が俺もたつた一度聴いたことがあるだけなんだ。それも二十年も前のことだ。」

夕飯が済んで、子供等が床に就いて了つて、家の中が靜かになつた時、夫はピアノの上の蠟燭をつけた。彼は、石版刷にされた見出しを見て、それを讀んだ——ロミオとジュリア。

「これは、グノーの最も美しい曲だ。」と彼は言った。「しかしこれが我々には難かし過ぎるだらうなんてことは、俺は信じない。」

いつもの通り彼の妻は、ソプラノをやることを引受けた。そして彼等は始めた。ニ調長音、四分ノ二拍子、急調。

「美しいな、えさうちやないか？」と夫は、序曲の済んだ時訊いた。

「さう——ね。」と妻は、澁々同意した。

「さあ、戦争曲になるんだ。」と夫は言った。「これがまた特別に素的なものだよ。俺は、王立劇場でやつた素晴らしい合唱を憶えてゐる。」

彼等は、マーチを演つた。

「どうだい、本當だらう？」と夫は、自分が「ロミオとジュリア」を作曲したのででもあるやうに勝誇つて訊ねた。

「解らないわ。どつちかと言ふと、何だか樂隊屋みたやうだわ。」と妻は答へた。

夫の名譽と、善い趣味とは、危くなつた。彼は、四幕物の月光曲をさがした。暫らくさがしてゐる内に彼は、ソプラノ曲をさがし當てた。これがさうに違ひない。

そこで彼は再び始めた。

トラム——トラム、トラム。トラム——トラム、トラム。バスが響いた。それは非常に演じ易いものであつた。

「ねえ、貴方」と妻は、それが済んだ時言つた。「それは大變いゝとは思へませんね。」

夫は、全く失望して、これは筒琴を思ひ出させるといふことを承認した。

「私も始めからさう思つてたのよ。」と妻は白狀した。

「俺もこれは古くさいと思つたよ。グノーももう時勢遅れだとは驚くね。」と彼は元氣なく附加へた。「お前はもつと演奏した方がいゝかい？ カヴァティーナとトリオを演つてみようか。」

俺はソプラノをはつきり憶えてゐるよ。あれは神々しいものだつた。」

彼等が演奏を止めた時、夫はすつかり落膽しきつて、音楽をよして了つた、まるで過去の扉を閉ぢようと思つてゐたかのやうに。

「ビールを一杯飲らう。」と彼は言つた。彼等はテーブルに坐つてビールを飲んだ。

「恐ろしいものだね。」と彼は、暫らくして言ひ出した。「俺は、我々が年を取つたといふことを今までちつとも知らなかつた。何故なら我々は、速かに年取らねばならぬ者として、本當に「ロミオとジュリア」と競はなければならぬんだ。俺が始めてオペラといふものを聴いてからもう二十年になる。あの時には俺は、新しく羽毛をはやしたばかりの大學生だつた、俺は友達を澤山持つてゐた、そして未來は俺に向つて微笑してゐた。俺は、上層の上に生えてゐる産毛と、小さな學校帽とを無暗と自慢したものだ。そして、まるで今日のことのやうに

憶えてゐるが、あの晩にはフリッツとフィルと俺とでこのオペラを聴きに行つたんだ。我々はその二三年前に「ファウスト」を聴いてゐた。そして、グノーの天才の大なる讚美者だつた。ところがロミオは、あらゆる我々の期待を打つた。あの音楽は我々に最も野蠻な情熱を起させたのだ。今ではあの友達は二人共死んで了つた。フリッツ、あいつは野心家だつたが死ぬ時には秘書官になつてゐた。フィルは醫學生だつた。宰相の地位を熱望してゐた俺は、聯隊附の法官で満足しなければならぬことになつてゐる。年月は、速かに、眼にも留らないやうに過ぎて了つた。勿論俺は、眼の下の皺が深くなり、鬢の毛は灰色になつて了つたといふことには氣がついてゐたさ。しかし俺は、我々が墓の方に向つてこんなにまで遠く旅行して來たとは思つてゐなかつたんだ。」

「さうねえ、私たちは年取つたわ。私達の子供がそれを教へてくれますよ。それに、貴方は何とも仰しやらないけれど、私が年をとつたのもおわかりでせう。」

「どうしてお前はそんなことを言ふんだ！」

「おゝ！ 私はよく知つてゐるんです。ねえ貴方」と妻は、悲しげにつゞけた。「私は、自分が美しさを失ひかけてゐることも、髪の毛がうすくなつて來たことも、前齒がちきになくなつて了ふだらうといふことも知つてゐるんです……」

「まあ、考へて御覽、何もかも實に速かに過ぎて行つて了ふ。」——夫は彼女の言葉を遮つて言つた。「人は、前よりも此頃の方が餘計速かに年を取るやうな氣が俺はするんだ。ハイドゥンやモツアルトは、俺の親父が生れるよりずっと前に死んでるんだが、親父の家では彼等が盛んに演ぜられたものだ。ところが今では——今では、グノーがもう古風になつて了つたんだ！　こんなに變つた境遇の下で、再び自分の青春の理想を思ひ出すなんていふのは何といふ不幸なことだらう！　それに、老年の近づきつゝあることを感ずるのは、何といふ恐ろしいことだらう！」

彼は、立ち上つて、再びピアノの前に坐つた。彼は樂譜をとつて、その頁を繰つた、テーブルの抽斗にはひつてゐる髪の房とか、乾かした花とか、又はリボンの端とか云つた形見の品をさがしてでもゐるやうに。彼の眼は、眞黒な音譜の上に釘づけにされた。それは、針金の垣根を、小鳥共が上つたり下りたりしてでもゐるやうに見えた。しかし、春の歌、情熱の宣言、初戀の美しい日の歡喜せる言葉などが、何處にあつたのであらう？　その音譜は見知らぬ人の如く、彼を見詰め返した。恰も人生の青春の記憶が、雜草の下に埋れてしまつたかのやうに。

さうだ、それであつた。絃は、塵にまみれ、傳響盤は干涸び、フェルトは磨りきれて了つ

てゐた。

重々しい、がらんだ胸の中から出て來たやうな重々しい溜息が部屋を反響しわたつた。それから沈黙が落ちた。

「だが、兎も角も不思議だ、」と夫は、突然言つた。「あの立派な序曲がこの整調から脱けてゐるなんて。俺ははつきり憶えてゐるんだが、ハーブの伴奏と合唱とのついた序曲があつたよ。何でもこんな風にやるのだつた。」

彼は、柔かにその一節を鳴らした、それは山嶽の岩間の流れのやうに泡立つた、音は音にづいた、彼の顔は訝々とし、彼の唇は微笑し、皺は消え失せ、指は鍵盤にふれた。そしてそこから、力強い、抱きしめるやうな、永遠の青春に充ち満ちたメロディが起つて來た。それにつれて彼は、強い鳴り響く聲で低音部を歌つてゐた。

彼の妻は、その憂鬱な默想から眼覺めて、眼に涙を湛へて耳を傾けてゐた。

「貴方がうたつてらつしやるのは何？」と彼女は、びつくりしきつて訊いた。

「ロミオとジュリアだ！　我々のロミオと我々のジュリアだ！」

彼は、樂器のところから飛び上つて、驚いてゐる妻の方へその音譜を押しつけた。

「御覽！　これは、我々の叔父と叔母のロミオだつたのだ。これは——讀んで御覽——ベル

リニだよ！ おー！ 我々は年取つてやしないんだ、何と云つても！」

妻は、夫の厚い光澤のある髪の毛と、滑かな額と、輝く眼とを眺めた。

「貴方はまるで二十五位のひとに見えるわ！」と彼女は、喜びに赤くなつて笑つた。

「でお前は？ お前は、まるで娘みたやうだ。古いベルリニに我々をからかはせて置いてやれ。俺は、何か間違ひがあつたがやうな気がするよ。」

「いゝえ、ねえ貴方、私はずつと前からさう思つてたのよ。」

「さうだらうねえ。そりや俺よりお前の方が若いんだから。」

「いゝえ、貴方の方が……」

そして夫婦は、二人のうちどつちが年とつてゐるかといふ問題で、子供のやうに笑ひながら言ひ争つた。そして、有る筈もない皺や白髪をどうして発見したのであつたか、彼等には解することが出来なかつた。

多 産

彼は、商務院の客員で、千二百クラウンの俸給をとつてゐた。彼は、一文無しの若い娘と結婚した。といふのは、彼自身の言ふところでは、戀愛が彼をして、彼の友達がやつてゐるやうに、もう舞踏會へ行つたり、町を駈廻つたりすることを必要とさせなくなつたのであつた。けれども、それはさうとして、新しく結婚したこの二人の生活は、始まりからして、十分に幸福であつた。

「既婚者の生活といふものは何て安價ですむものなのだらう。」彼は、結婚式がもう過去となつて了つた或日言つた。獨身者の缺乏を全く十分に満すだけと同額で、今では夫婦のため澤山だつた。本當に、結婚といふものは、素晴らしい制度であつた。人は、自分の家の中だけであらゆる必要な物を得ることが出来る。俱樂部でも、カフェーでも、何でもかでも。食費の勘定も、チップも要らないし、朝になつて妻と一緒に出掛ける時も、探るやうな門番が番をしてゐる譯でもないのだ。

人生は、彼に向つて微笑してゐた。彼の勢力は増進した、そして彼は、二人のために働い

た。生涯に於いて彼は、一度もこんなにエネルギーが溢れるほど充ち満ちたのを感じたことはなかつた。彼は、朝眼を覺ますや否や快活に上機嫌にベッドから飛び起きた。そして彼は若返つたやうだつた。

二箇月経ち、彼の新しい境遇がその味を失ひ始めるにはまだ長い間のあるころ、妻は彼の耳元へ或る報告を私語いた。新しい喜！新しい心遣ひ！しかし堪ふべく甚だ愉快な心遣ひ！けれども、この未知の、世界の市民をば、彼の尊嚴にふさはしい方法で迎へる爲に、早速収入を増すことが必要であつた。彼は、翻譯の註文をとることにした。

家具の上には何處にも此處にも赤ん坊の着物が取散らされ、廣間には搖籃が待ちもうけるやうに置かれてゐた、そしてたうとう、素晴らしい男の子が、この悲しみの世界へやつて來た。父は喜んだ。それでも彼は、未來のことを考へると、ほんやりとした不安の感をどうすることも出来なかつた。収入と費用とは釣合がとれなかつた。彼の被服費を減するより他には何も無かつた。

彼のフロック・コートは、縫目の糸が見えはじめ、彼のシャツのすゝめは、大きな襟飾の下に隠され、ズボンは擦り切れてゐた。役所の門番が彼の姿の見窄しい爲めに彼を見下すのも否み難い事實であつた。

これに加ふるに彼は、働く時限を長くしなければならなかつた。

「これは、最初にして最後の子供でなくてはならない。」と彼は言つた。しかし、どうしてそんなことが出来たらう？

彼は、それを知らなかつた。

三箇月の後には彼の妻は、彼の父たる喜びがまもなく二重になるであらう、と注意深く選ばれた言葉で覺悟させた。彼がその報告を非常に喜んだとは本當は言へなかつたであらう。しかし、今ではどうにも變へやうはなかつた。たとひ、結婚生活が安價なものどころではなまいといふことが證明されなければならぬとしても、彼は自分の選んだ途を旅せねばならないのである。

「それは本當だ、」と彼は、顔を輝かしながら考へた。「今度の子供は、兄の産衣を受嗣ぐだらう。これは、澤山な費用を救つてくれる。そして彼等には食物は澤山あるんだ——俺はみんなと全く同様に彼等を養ふことが出来るだらう。」

そして、第二の赤ん坊が生れた。

「君は勇敢にやるね。」と友が言つた。その友自身も既婚者だつたが、たつた一人の子供の父

であつた。

「どうすればいゝんだい？」

「常識を働かせ給へ。」

「常識を働かせろ？ だつて、ねえ君、人はあれする爲めに結婚するんぢやないか。つまり、その、さう許りでもないが、それは矢張りその爲めだ。そこで、それはそれとして、我々は結婚してゐるんだ。だから、是れは既定の事實なんだ。」

「どうしてどうして。話さうか、えゝ君。若し君が昇進しようと思つても思つてゐるならだね、綺麗な下着や、裾の擦り切れてゐないズボンや、赤く焼けてゐない帽子を着けることが絶對に必要なんだよ。」

そしてその利巧な男は、彼の耳に利巧な言葉を私語いた。その結果、憐れなる夫は、豊富にある中から乏しい食物をとつた。

しかし、今度は彼の苦しみが始まつた。

第一に彼の神経が滅茶々になつて了つた。彼は、不眠症に罹り、仕事が碌に出来なかつた。彼は醫者に診て貰つた。處方を貰ふのに三クラウンかゝつた。而も何といふ處方だらう！ 彼に仕事を止めると言ふのであつた。彼は餘りに働き過ぎたといふのだつた。彼の腦は過剰

に仕事を課せられてゐたのだつた。仕事を止めることは、彼等のすべてにとつて餓死を意味するのだ。而も働くことも亦死を意味する！

彼は、働くことをつゞけた。

或る日、彼が無限な數字の列の上へ屈み込んで机に坐つてゐた時、彼は氣が遠くなつて、椅子から立つて落ちたのであつた。

専門家へ行つて診て貰つた——十八クラウンかゝつた。新しい處方。それによると彼は役所へは病氣缺勤の届を出して、毎朝馬に乗つて運動をして、朝飯には、焼肉と一杯の葡萄酒をとらねばならないといふのであつた。

乗馬と葡萄酒！

けれども、すべての事のうちに最もいけない點は、彼の胸に浮んで來たところの妻に對する疎遠の感であつた。——それがいつ起つたのか彼は知らなかつた。彼は、妻の近くへ行くことを恐れた。そして同時に彼女がそばへ來ることを熱望したのであつた。彼は、彼女を愛してゐた、今でも彼女を愛してゐた、しかし彼の愛には或る苦さが交つてゐた。

「君はだん／＼瘠せるねえ。」と友は言つた。

「あゝ、自分でも瘠せたと思つてるよ。」と憐れな夫は言つた。

「君は際どい藝當をやつてゐるね、えゝ君！」

「僕には君の言ふことが解らないよ！」

「半分死にかゝつてゐる結婚者さ！ 氣を付け給へ！」

「どういふ譯だか全く僕には解らない。」

「幾時間かは風に逆つて進むことが出来るものだ。帆をすつかりかけて走り給へ、君、さうすると何もかもよくなつて来るよ。僕を信じ給へ。僕の言つてゐることに、斷じて間違ひはないよ。どうだ。君にも解つたらう！」

彼は、暫くの間、人の収入は、その家庭に釣合つて増加しないものだといふことをよく知つても居り、それと同時に彼は最早自分の病氣の原因に就いても少しも疑はなかつたので、その忠告を少しも注意しなかつた。

再び夏が來た。家族は田舎へ行つた。或美しい夕暮に夫婦は、峻しい海岸の、若やかな緑に輝く榛の樹蔭を散歩してゐた。彼等は黙々として打沈んで芝生の上に腰を下ろした。

彼は、氣むづかしく、元氣がなかつた。彼のうづき痛む頭の奥には陰氣な考へが渦巻いてゐた。人生は、彼の愛するすべてのものを引き入れ呑み込んで了はうとして開いてゐる大きな罅隙のやうに思はれた。

人々は、恐らくは彼が地位をやがて失ふだらうといふことを話し合つた。彼の長官は、彼が二度目の病氣缺勤を訴へた時には困つてゐた。彼は、同僚の行爲についても不平をこぼしてゐた。彼は、すべての人に棄てられたやうな氣がしてゐた。けれども何事よりも一層彼を傷けた事實は、彼女も亦、彼に飽きて來たといふことを知つたことであつた。

——おゝ！ しかし彼女は飽きたのではなかつた！ 彼女は、彼等が最初婚約したあの幸福な當時と全く同様に彼を愛してゐたのだ。どうして彼はそれを疑ふことが出來たらう？

——否、彼は疑つたのではなかつた。けれども彼は非常に苦しんでゐたので、自分で自分の思想をさへ左右することが出來ないのだ。

彼は、その燃えるやうな頬を彼女の頬につけて、彼女を抱き寄せ、そして、彼女の眼を熱烈な接吻で掩うた。

澤山の蚊が、彼等の恍惚が數千の若い者共を生産するであらうなどといふことはまるで考へもしずに、樺の木の上で婚姻の舞踏を踊つてゐた。鯉は、幾百萬のその種族に生を與へるかといふことを注意せずに、葦の繁みに卵を生みつけてゐた。燕は、彼等の不規則な逢曳の結果を少しも恐れずに、白晝公然と戀をしてゐた。

忽ちに彼は、惡夢に驅られてゐた長い眠りから覺めた人のやうに飛び上つて伸びをした。

そして彼は、芳ばしい空気を深く深く吸ひ込んだ。

「どうしたの？」彼の妻は、顔中眞赤にして私語いた。
解らない。僕に解つてゐることは、僕が生きてゐるといふことだ、再び呼吸してゐるといふことだ。」

そして、晴れやかになり、笑ひ顔をし、眼を輝かして、彼は彼女の方へ腕を伸ばし、赤ん坊でもあるかのやうに彼女を抱き上げて、その額に唇を押しあてた。彼の兩脚の筋肉は、古代の神の脚の筋肉と見えるまでも膨れあがつた。彼は、力と幸福とに酔つて、若木のやうにすつくと身を伸ばして、その愛する重荷を、遙かに歩道まで持つて行き、そこへ彼女を下ろした。

「あなた、草臥れるばかりですよ、あなた。」と彼女は、彼の廻された腕の中から逃れようとして無益な努力をしながら言つた。

「草臥れるものか、ねえお前！ 僕は、お前を地球の端まででも持つて行けるよ。さうして僕は、本當にお前を、お前達すべてを持つて行くだらうよ。どんなに多からうとも、又この先どんなに多くならうとも。」

そして彼等は、腕を組み合せて歸つて來た。彼等の心は喜びに歌つてゐた。

「事が悪くなるだけ悪くなつてくると、ねえ、人は、肉體と精神とを引離してゐる深淵を飛び越えるのはわけもないことだと思ふに違ひないよ！」

「何てことを仰しやるの！」

「もつと前にこのことを知りさへしたら、僕はこんなに不幸になりやしなかつたんだ。お前！ あの理想主義者め！」

そして彼等は、家の中へはひつた。

其合のよかつた昔が戻つて來た。そして、明かにそれが續きさうであつた。夫は以前の通りに役所へ行つて仕事をした。彼等は、再び愛の春日を送つた。醫者も要らなかつた。そして彼の活氣も失はれなかつた。

けれども、第三の洗禮が濟んでから、彼は、事が重大になり、またも避け難い結果即ち醫者、缺勤、乗馬、葡萄酒！ に對する昔のゲームをやり出すやうな結果に立ち到つた。しかし、どんな苦痛を忍んでも、これに終りをつけなければならぬ。損益計算ではいつも缺損を示してゐた。

けれども、遂に彼の全神経系統が亂れて了つた時、彼は成るがまゝに任せた。忽ちに費用は騰り、彼は困窮を以つて取圍まれたのであつた。

彼が貧乏人でなかつたことは事實である。しかし一方彼は、餘りに多くのこの世の富を以つて恵まれてはゐなかつた。

「打ちあけて云ふとね、おい。」と彼は、妻に言つた。「昔と同じことを又もや繰り返しさうだぜ。」

「私にもそんなに思はれますよ、貴方。」憐れな女は答へた。彼女は、母としての義務のその上に、今は一家のすべての仕事をしなければならぬのだつた。

四番目の子供が出来てからは、仕事は彼女にとつては辛過ぎたので、乳母が雇はれねばならなかつた。

「もうお終ひにしなけりやならない。」と不満なる夫は明言した。「これが最後のものでなくてはならない。」

貧乏が戸口を覗き込んだ。その上に家の建てられてゐる土臺がぐらつき出した。

かくして、三十歳といふ人生の初期に於いて、若い夫婦は、獨り暮しをしなければならぬことになつた。彼は、氣まぐれになつた。彼の顔色は蒼白くなり、その眼は光を失つて了つた。彼女の豊かな美は消えて了ひ、その美しい恰好も見られなくなり、そして彼女は、貧困と檻穽との中で育つて行く子供達を見てゐる母の悲しみといふ悲しみを、すつかり味つた。

のであつた。

或日、彼女が臺所で鯉のフライを拵へてゐた時、近所の者がお喋りにやつて來た。

「如何ですな？」と彼女は始めた。

「有りがたう、ちつとも面白いことはないんですよ。あなたでは？」

「おゝ！ 矢張り少しも善いことはないんですよ。いつも番をされてゐなければならぬんだとすると、結婚生活つて何といふ不幸なものでせう。」

「あなた丈けだと思ひなの？」

「といふと？」

「私の夫がいつかかう言つたのを知つてらしつて？ 人は曳牛でも大切にしなくちやならないんですつて！ で、私はその位に苦しんでるんですよ。本當に。どうして。結婚なんてちつとも幸福なことはありませんわね。夫か妻かが苦しむんですわ。何方かがね！」

「ことによると両方共ね！」

「でも、お上の入費で肥つてゐる先生達はどうでせう？」

「その方達は、考へることが澤山あるんでせう。それにそんな問題を書くのは不穩當なんだわ。その方達は公然と議論しちやならないんですよ。」

「でも、これが一番大事なことでありませんか！」

そしてこの二人の女は、各自の苦しい経験を論ずるに到つた。

次の夏は、彼等は町に留つてゐなければならなかつた。彼等は、下水の見える地下室に住んでゐた。下水の臭ひは、窓を開けておくことが出来なかつた程堪らなかつた。

妻は、子供たちの遊んでゐると同じ室で、針仕事をし、その身姿みなりの著しい見窄らしさの爲に役を失つてゐた夫は、次の室で子供たちの騒ぎをぶつ／＼こぼしながら、或る筆耕をやつてゐた。荒々しい言葉が、開いてゐる戸から投げられた。

それは、聖霊降臨祭の頃であつた。午後に夫は、ボロ／＼になつた革のソファに寄りかかつて、窓から道の向う側を眺めてゐた。晩になつて徘徊する爲に着物を着替へてゐた一人の淫賣婦を彼は見詰めてゐた。ライラックの枝と二つのオレンジとが、彼女の姿身のそばに置いてあつた。

彼女は、彼のさぐるやうな目には少しも氣つかずに自分の着物を見てゐた。

「あの女は困つてはゐないんだな。」獨身者は突然に燃えるやうな情熱を感じながら冥想した。「人はこの世では一度しか生きられないんだ。だから、何がどうならうと思ひ通りに生きなけりやならないんだ！」

彼の妻がはひつて来て、彼の凝視の対象を見た。彼女の眼は燃えた。彼女の死んだ愛の最後の弱々しい閃きが灰の下で赤くなり、一時嫉妬の閃きとなつて現れた。

「動物園へ子供を連れてつた方がよくはないでせうか？」と彼女は訊ねた。

「我々の不幸を人様に見せにかい？ いや、どうも有りがたう！」

「でも此處は餘り暑過ぎるわ。日除を下ろしませう。」

「窓を開けた方がいゝ！」

彼は、妻の考へを見通して、自分でさうしようとして立ち上つた。外では、敷石の端の處に彼の小さな子供が四人下水管のそばに坐つてゐた。彼等の脚は、乾いた下水の中へ突込まれてゐた。そして彼等は、道の塵溜の中からさがし出して來た橙の皮を持つて遊んでゐた。その光景は、彼を刺した、そして彼は咽喉に塊がつかへたやうな氣がした。けれども貧乏は、窓に立つて腕を組んでゐられた程、彼の感情を鈍くしてゐたのであつた。

忽ちに二つの穢い流れが下水管から迸り出て、下水に溢れて、子供達の脚を浸した、子供達は叫びをあげ臭氣で半ば息詰つてゐた。

「出来るだけ早く子供達に支度をさせろ。」彼は、その惨めな光景を見るに忍びないで、さう怒鳴つた。

父親は、赤ん坊を入れた乳母俵を押した。他の子供達は、母の手やスカートにまっはりついてゐた。

彼等は、いつでもその隠家としてゐる葉の繁つたシナの樹のある墓地に來た。此處では樹は、埋められてゐる死屍によつて土地が豊饒になつたかのやうに、繁茂してゐた。

鐘が、夕の祈禱のために鳴つた。貧しい家の人々は、教會へ集つて來て、裕福な物持連の去つたあとの空席へ腰かけるのであつた、その物持連は、晝間の勤行に出て、その時分になるとローヤル・ディア公園へと馬車を驅つてゐるのであつた。

子供達は、低い墓石に登つて遊んだ。それらの墓石は大抵、紋章や碑文で飾られてゐた。

夫婦は、そこへ坐つて、塚の中から乳を吸つてゐる赤ん坊のはひつた乳母俵をそばへ置いた。二匹の狗ころが、すぐそばの半ば高い草で隠された墓のあたりで遊んでゐた。

或る若い善い身姿をした夫婦が、絹と天鵝絨で着飾つた小さな女の子の手を引いて、彼等の坐つてゐたそばを通つて行つた。貧しい寫字生が眼をあげて見ると、その若い洒落者は、商務院の以前の同僚だつたことが解つた。しかし彼の方では氣がつかないやうであつた。或る苦々しい羨望の感がはげしく彼を捉へた。それは、自分の憐れな有様よりも、この「卑しい感情」によつてより以上に屈辱を感じた程はげしいものであつた。彼は彼自身で望んだ地

位を他人が得てゐるので、腹を立てゝゐたのであらうか？ 確かにさうではなかつた。けれども、確かに彼の羨望は、正義の精神とは反對なものだつたであらう。そして彼の苦しみは、一入深かつたであらう。何故ならば、その苦しみは相續權を剝奪された者の全階級が分ち持つてゐるものだつたから。彼は、公共慈善事業といふ輓の下につながれてゐる貧しき家の人が、彼の妻を羨んでゐることを信じてゐた。又、今彼を取巻いてゐる墓穴で、それぞれ紋章の下で眠つてゐる貴族達の多くが、若しその財産をつぐべき嗣子なしに死ぬべき運命を持つてゐたのだつたとしたら、彼等は子供を持つてゐる彼を羨んだであらうといふことは全く確信したのであつた。確かに、日の下には完全な幸福を楽しんでゐる者は一人もないのである。けれども、何故既に榮華を極めてゐる多くの人々の上に、大きな財産が、いつも落ちて行くのであらうか？ そして、何故賞品はその福引を拵へる者の手にいつも落ちるのであらうか？ 相續權を奪はれた者は、夕の祈禱に於いてなさるゝ彌撒で満足しなければならぬのであつた。彼等の分前としては、他の人々が輕視してゐる徳と貞操とが落ちて來るのである。而も他の人々はそれを少しも必要としないのであつた。何故かといへば、天國の門は、彼等の富に對しては十分速かに開かれてゐたからである。しかしながら、かく不平等にその施與を行ふ善にして正なる神とは何であらうか？ 實は、この不正なる神なしに

自分の生活を生きて行く方がいゝのであらう、而もその神は、「風はその欲するがまゝに吹くのだ。」といふことを明白に承認してゐたのである。その神は、人間の事柄に干渉しないといふことを、これらの言葉で自ら告白してはゐなかつたか？ けれども、教會を外にしては、我々は何處に慰安を求むべきであらう？ 而も、何故慰安を求むべきなのであらうか？ 慰安が全く不必要である制度を作るために努力する方が、遙かにいゝのではあるまいか？ さうではないだらうか？

彼の冥想は、總領娘によつて妨げられた。彼女は、人形の日傘にしようとしてシナの樹の葉をとつてくれと言ふのであつた。彼は、その席に立ち上つて、小さな枝を折らうとして手を伸ばしたが、その時巡査が出て来て、樹木に手を觸れてはならないと荒々しく命令した。新しい屈辱。同時に、巡査は、墓のそばで遊ぶことは規則に反するからして子供をそこで遊ばせてはならぬと要求した。

「家へ歸つた方がいゝ。」と不幸な父親は言つた。「奴等は、何て周到に死人の利益を護つてゐるのだらう、それに生きてゐる者の利益には何て無關心なんだらう。」
そして彼等は、歸宅した。

彼は坐つて、仕事を始めた。彼は、人口過剰に關するアカデミックな論文を寫さなければ

ならなかつた。

その題目は彼には興味があつたので、その本の内容をすつかり讀んで了つた。

倫理學派と呼べるゝものに屬してゐるその若い作家は、不徳に關して説いてゐた。

「不徳とは何ぞや？」と寫字生は冥想した。「我々の存在に對して責任あるところのものとは何ぞや？ 『生めよ、殖えよ、地に充てよ。』と牧師が言ふの時、あらゆる結婚式場に於て吾人が一身を任すべく命ぜらるゝものは何ぞや？」

原稿にはかう書かれてゐた。神聖なる結婚によらざる増殖は、極惡の不徳である。如何となれば、正當なる注意と養育とを受けざる子供等の運命は悲しむべきものなればなり。他方に於いて、結婚せる夫婦の場合に在りては彼等の欲求に耽ることは神聖なる義務なり。これ明らかに、その他の種々の事件と同じく女性の卵巢も亦法律によつて守護せらるるといふ事實によりて證明されるればなり。而もそは正しきことならざるを得ず。

「従つて、」と寫字生は考へた。「正當な子供のためには天恵があり、私生兒にはそれが無いのだ。おゝ！ 此の若い哲學者！ そして、婦人の卵巢を守る法律！ それならば、月の變化する毎に、排出さるゝかの顯微鏡的物體は抑も何の必要があるのであらう？ それがかくまで神聖なものであるなら、最も周到的な注意をもつて官憲に守られねばなるまい！」

こんな無益な事柄を彼は、その最上なる筆跡を以つて寫さねばならないのであつた。

その中には道德が有り餘つてゐたが、啓蒙的なことは一語も含まれてゐなかつた。

その議論全體の道德的な、いやむしろ不徳なる要點はかうであつた。婚姻によつて生れたるあらゆる子供等を着せ養つてゐる所の一人の神といふものがある。恐らくその神は天に在るのであらう。が、地上に於いてはどうだ？ 確かに、神は一度はこの地上に降られて、混沌たる人事に、秩序のやうな何事かを建てようと徒らに試みたのち、遂に十字架にかけられたのだ、神は成功しなかつたのであつた、と言はれてゐる。

哲學者は、麥の豊富なる供給は人口過剰の問題の存在し得ないといふ辯駁の餘地ない證據であるといふこと、及び、マルサスの意見は有害なるのみならず社會的且つ道德的の犯罪であるといふことを、その聴衆に確信せしめんとして聲を枯して叫ぶことによつて結んでゐた。

そして、數年間麥製のパンを味はなかつた家庭のこの貧しき父は、その原稿を片付けて、ライ麥粉と青くなつた乳とで拵へた粥を詰め込むやうに、小さい者たちに勧めた。その御馳走は、彼等の食慾を満足させることはさせたが、滋養分を少しも含んではゐなかつた。

彼は惨めさを感じた。それは彼が水粥をいやだと思つたからではなく、眞黒なライ麥を黄

金色の麥に變へ得る魔術師、即ち貴いユーモアを失つたからであつた。即ち、貧家の空に來て豊饒角コルナヒウスをあけてくれる全能の愛は姿を消してしまつたのである。(セウスの神、幼時クリイト王の娘に山羊の乳をもつて養はれしを以て、謝恩のために山羊の一角を折りて娘に與へ、それを有つ) 子供等は重荷となり、かつては愛せられた妻も、彼を厭つた、そして今も厭うてゐる密かな敵となつたのである。

そして、あらゆるこの不幸の原因は？ パンの缺乏！ 而も新しき世界の大倉庫は、過剰に供給さるゝ麥の重量で壞れようとしてゐるのである。何たる矛盾の世の中であらう！ パンの分配法が、誤つてゐるに違ひない。

宗教にとつて代つた科學も、答ふべき言葉を知らないのである。科學は單に事實を述べるのみであつて、子供等をして餓死せしめ、その兩親をして渴死するに任せてゐるのである。

秋

二七四

彼等が結婚してから十年経つた。幸福だつたか？ さう、事情の許す限り幸福だつた。謹しみ深く自分の分前のしごとをしてゐる同等の力を持つた若い二頭の牡牛のやうに、彼等は二頭立となつて走つてゐたのだ。

結婚の第一年目には、彼等は數多のイリュージョンを埋めてしまひ、結婚といふものが完全な幸福ではないことを知つた。第二年目には、赤ん坊が生れ始めたので、日々の仕事、彼等に考へる時間を與へない位となつた。

彼は、非常に家庭的になつた、恐らくなりすぎた位であつた。彼の家庭は彼の世界であり、彼はその中心で、且つ樞軸であつた。子供等は半徑であつた。彼の妻も亦、中心たらんと企てたが、それは彼によつて獨占されてゐたので、圓の中心には決してなれなかつた。それ故その半徑は、中央部で互ひに重なり合つたかと思ふと、もうずつと離れてゐるといふ風で、彼等の生活は調和を缺いた。

結婚後十年目に彼は、監獄省の秘書官の地位を得た。そしてその資格で彼は、國內を旅行

しなければならなかつた。このことは、彼の日課にひどく影響した。まる一月も自分の世界から離れるのだといふことを考へると、頭が滅茶々になつて了つた。彼は、妻と子供等と、どつちが餘計に惜しいだらうかと思つた。そして、兩方共だといふことを確かめ得た。

出發の前夜には、彼はソーフアの隅に坐つて旅行鞆が詰められるのを見てゐた。彼の妻は、下着を小さく積み重ねたそばに、床に膝をついてゐた。彼女は、彼の黒い服にブラッをかけ、それを出來るだけ場所をとらないやうにしようとして注意深くたゝんだ。彼は、かういふものをどうしたらいいのか、まるで考へがなかつた。

彼女は、自分では決して彼の家政婦だとは思つてゐなかつた。殆んど彼の妻だとも思はなかつた。何よりも先づ彼女は母、子供たちに對する母、彼に對する母であつた。彼女は、賤しくなつたといふ感じなぞ少しも有たないで、彼の靴下を繕つた。そして有難いと思つて貰はうとも全然思はなかつた。彼女は、それが爲めに彼が自分の世話になつてゐるのだといふ風には決して考へもしなかつた。それといふのも必要な時にはいつでも彼は、彼女にでも子供たちにも、新しい靴下やその他色々のものを與へはしなかつたか？ 若し彼がゐないとすれば、彼女は自分の生計を儲けるために出掛けて行き、子供等は終日家に残されねばならなかつたから。

秋

二七五

彼は、ソリーフの片隅に腰かけて、彼女に眺め入つた。別れがさし迫つてゐたので、彼は今や戀しさに對するかす／＼の小さい苦痛の豫感を感じ始めた。彼は、彼女の姿を見詰めた。彼女の肩はやゝ丸くなつてゐた。搖籃へ度々屈んだり、火熨斗板へうつむいたり、臺所で腰をまげたりすることが、彼女の眞直な姿勢を奪つたのであつた。彼も矢張り、机に向つて仕事を終る結果、少し屈み加減になつてゐた。それに彼は、眼鏡をかけなければならなくなつてゐた。しかしその瞬間には彼は、實際には自分のことなど考へてゐはしなかつたのだ。彼は、彼女の毛が薄くなり、その髪の上にそれとしもなく銀色らしいものがほの見えて來たことに氣がついた。彼女は、その美しさを、彼の、彼一人の犠牲にしてしまつたのだらうか？否、確かに彼に對してではなく、彼等が形作つたところの小さな社會に對してである、要するに彼女は、彼女自身のためにも働いたのだから。彼の髪も亦、彼等みんなに食物を供給する苦闘の爲めに、薄くなつてゐた。若しも糊すべき口がこんなに多くなかつたなら、若しも獨身生活を續けてゐたとしたなら、彼はもう少し長く青春を留めてゐたに相違ない。しかし彼は、唯の一分間でも、この彼の結婚を悔いてゐはしなかつた。

「一寸お出掛けなさるのも貴方には却つていゝでせう。」と彼の妻は言つた。「あなたはあんまり家にいらつしやりすぎますからね。」

「お前は俺から逃れるのがうれしいんだらう。」と彼は、やゝ苦々しげに答へた。「だが俺は——俺は、お前に別れるのが随分辛いんだよ。」

「あなたは、猫みたいに、氣持のいゝ火のそばを離れるのが辛いんでせう、私にぢやないでせう。さうぢやないつてことは御自分でも知つてらつしやるくせに。」

「だが、子供たちは？」

「あゝ、さうね！　子供たちと一緒にをれば小言ばかり言つてゐても、別れるとなればやつぱり辛いよね、さうでせう、いゝえ、いゝえ、あなたが子供たちに不深切だつて私言ふのはありませんよ。でもあなたは小言は随分仰しやるわ！　私の言ふことも間違ひぢやないでせう、わたしあなたが子供たちを愛してらつしやることは知つてますわ。」

彼は、夕飯の時には非常に疲れてゐて、氣が沈んでゐた。彼は夕刊も讀まなかつた。彼は、妻と話がしたかつた。けれども彼女は、彼のことにひどく氣をくばる暇のなかつた程忙しかつた。彼女には無駄に過す時間は少しもなかつた。その上、臺所と育児室とに於ける彼女の十年間の苦闘が、彼女に自己を支配することを教へてゐたのであつた。

彼は、現はしてもかまはないと思つたよりも更らにセンチメンタルになつてゐた。そして室内の混雜は彼をいら／＼させてゐた。彼の日常生活の斷片が、椅子のうへにも机の抽斗に

も、どこにも散らかつてゐた。彼の黒い旅行鞆は、棺かなにかのやうにかつと大口を開いて欠伸してゐた。彼の白い下着は黒服の一番上に注意深く載せられてゐたが、その黒服は膝や肘の邊に、著古されてきれかゝつたのが仄かに見えてゐた。その有様は、まるで彼自身がするめ、のついたワイシャツを着て、そこに横つてゐるやうに思はれた。まもなく人々は、棺の蓋をして、それを運んで行つてしまふのだ。

その翌朝——それは八月だつた——彼は、早く起きて急いで着物を着た。彼の神経は弛緩してゐた。彼は、子供部屋へ行つて、眠い眼で彼を見詰めてゐる子供たちに接吻した。それから彼は、妻に接吻して、馬車に乗り込み、ステーションへ行くやうにと馭者に命じた。

彼が役所の仲間と一緒にしたその旅行は、彼に善い効果をもたらした。その溝のやうな家から出ることは彼には本當にいゝことであつた。家庭は息苦しい寢室のやうに、彼のうしろに横つてゐる。そして、汽車がリンケーパーピングに着いた時には、彼は上機嫌であつた。

最上等のホテルでは、素晴らしい御馳走が出された。そしてその日はもうそれを食つて過すより他に用もなかつた。彼等は、長官代理の健康を祝して飲んだ。誰一人この旅行の目的である囚人のことなど思ふ者はなかつた。

食事の済んだ後彼は、自分の淋しい部屋で淋しい晩に面と向はねばならなかつた。一個の

ベッド、二脚の椅子、一脚のテーブル、一個の洗面器、及び飾りのない四壁に暗い光りを投げてゐる一本の蠟燭。彼は、神經過敏な敏感を制へることが出来なかつた。彼は、あらゆる彼の小さな慰安——スリッパ、寢衣、パイプ架、書物机、——日常生活に於いて重要な役を演じてゐたあらゆる小さな物を失つてゐた。そして子供達は？　そして妻は？　彼等は、何をしてゐるであらう？　彼等は具合はいゝのだらうか？　彼は落着きがなくなり、氣が沈んだ。時計を巻かうとすると、彼はその時計の鍵を家へ忘れて來たことを知つた。それは、妻がまだ結婚前に彼にくれた時計置の上に提げてあるのだ。彼は、ベッドにはひつて、葉巻に火をつけた。すると彼は、旅行鞆の中から本を出したくなつたので、再び立ち上らねばならなかつた。何もかもが非常に綺麗に詰め込まれてゐるので、それを亂すことは憐れな氣がした。本をさがしてゐる内に、彼はスリッパを見附けた。彼女は、何にも忘れはしなかつたのだ。やがて彼は、本をさがし當てた。けれども彼は、讀むことは出来なかつた。やがて彼は、本をさがし當てた。けれども彼は、讀むことは出来なかつた。やがて彼は、ベッドに横になつて過去のことを考へた。十年前の妻のことを考へた。彼は、その當時の彼女を眼の前に浮べた。現在の彼女の姿は、雨もりのしみのある天井へ輪をなして昇つて行く青白い煙の中に消えて了つた。彼は、無限の憧れを感じた。彼が彼女に向つて放つたあらゆる荒々しい言葉は、今彼の耳許で鳴りきしんだ。彼は彼女を苦しませたその時々を悔み考へてゐた。

たうとう彼は、眠りに落ちて了つた。

翌日になると、澤山に仕事が出て来た。そしてまた監獄署長の健康を祝する宴會があつた——囚人のことはなほも思ひ出されなかつた。晩が来ると、孤獨、空虚、寒氣だ。彼は、彼女と話をする必要を痛切に感じた。彼は、紙をとり出して、手紙を書かうとして坐つた。しかし彼は書き出しからして困難にぶつかつた。どう彼女に呼びかけたらよいのだらう？ 今まで彼が家へ食事には戻らないといふ數行を書いて遣る時には、いつでも、「愛する母へ」と書いてゐたのだつた。しかし今は彼は、母なる者に對して書かうとするのではなく、許嫁の女に、戀しきひとに對して書かうとしてゐたのであつた。遂に彼は決心して、昔彼がやつたやうに「我が愛するリリイよ」といふ書出しで、手紙を書き始めた。初めのうちは彼は、却々書けないのでゆるゆると書いてゐた。何故なら、多くの美しい言葉や句が、日常生活の無味乾燥な言葉のために消えて了つたやうに思はれたからであつた。けれども、彼がその仕事に熱中して来た頃には、それらの言葉や句が、忘れられたメロディや、消えてゐた音調や、詩の斷片や、接骨木の花や、燕や、鏡のやうな海の日没や、さういふものの如くに彼の記憶に眼覺めて来たのであつた。青春時代の彼のあらゆる記憶は、絲遊の雲にのつて踊り狂ひながらやつて来て、彼女を押し包んだ。彼は、戀人同志がするやうに、頁の下端に十字を描いて、そ

のそばに、「此處に接吻せよ。」といふ言葉を書きつけた。

手紙を書き終へてそれを讀み返して見た時彼の頬は燃えた、そして彼はそれを知つた。しかし彼は、その理由を説明することは出来なかつた。

併しながら、彼は自分の詐りなき魂を他人の前に示したやうな心地が何となくした。

こんな氣持がしたにも拘らず、彼はその手紙を出して了つた。

彼が返事を受取るまでには二三日かゝつた。それを待つてゐる間の彼は、殆んど子供のやうな恥かしさと困惑との餌食であつた。

たうとう返事が来た。彼の規ひは、外れはしなかつた。子供部屋の騒擾と臺所の香氣との中から、初戀のやうに、澄んだ、美しい、優しい、そして純な歌が出て来たのだ。

そこでラヴ・レターの交換が始まつた。彼は毎晩彼女に手紙を書いた。晝の間にもハガキを出すことがあつた。彼の同僚たちは、彼をどう思つたらいいのか解らなかつた。彼は、ラヴ・アップニアでもあるのではないかと疑はれた程、その着物の點でも外見の點でも擇り好みをした。そして彼は戀をしてゐたのだ——再び戀をしてゐたのであつた。彼は、彼女に眼鏡をかけてゐない寫眞を送つた。彼女は、彼にその髪の毛を一房切つて送つた。彼等の使ふ言葉は、子供のやうに單純だつた、そして彼は、小さな鳩で飾られた色紙へ手紙を書いた。

彼等がさうしていけないことがあらうか？ 生存に對する争闘が、彼等をして年老いた感を懐かしめたとしても、彼等はまだ四十にはなかく、であつた。彼は、この十二ヶ月の間は、殆んど彼女のことを忘れてゐたが、それは無關心からではなくて、尊敬からであつた——彼は常に、彼女の中に子供達の母親を見出してゐたのであつた。

視察旅行は、そろ／＼終りに近づいた。彼は、細君に逢ふことを考へると、或る不安な感じを覺えた。彼は、戀人と通信してゐたのであつた。彼はその戀人を、母親と世話女房とに見出さねばならないのであらうか？ 彼は、失望するであらうことを恐れた。彼は、その手に雑巾を持つたり、そのスカートに子供がまつわりついたりしてゐる彼女を見出すことを考へると、ぞつとした。彼等の初めての會合は何處か他の場所でなくてはならない。そして彼等だけで逢ふのでなくてはならない。彼等が婚約當時いつも幸福な時間を過したあの、ストックホルム群島のワクスホルムのホテルで、逢ふやうに出て来いと要求したものだらうか？ 素的なことを思ひついたものだ！ あすこならば、彼等は、丸二日間でも、あの飛び去つて了つて二度と歸つて来ない美しい青春時代の記憶の中に、再び生きることが出来るのだ。

彼は坐つて、情熱のこもつたラヴ・レターの中に、そのことを暗示すべく書いた。彼女は、その申出に同意するといふ返事を寄越して、彼等が二人とも同じ考へを持つたことを幸

福だと言つて來た。

二日の後彼は、ワクスホルムに到着して、ホテルに部屋を借りた。それは、九月の美しい日であつた。彼は、大きな食堂で一人で食事をして、一杯の葡萄酒を飲んで、若返つたやうな氣になつた。すべてが非常に輝き、美しく見えた。外には眞青な海があつた。海岸にある榛の木々がいつしか色を變へてゐるばかりだつた。庭園には、ダーリアがまだ今を盛りに咲きさかつてゐるし、木犀草の香は花床のあたりからにほつて來た。まだ幾匹かの蜂が、羨みかかつた花瓣を訪れては、失望してまたその巢へ戻つて行くのであつた。漁船は、あるかなきかの微風をうけて、海峡の方へと駛つて行つた。そして、船の針路を轉ずる度毎に、帆ははた／＼と鳴り帆繩はゆれた。びつくりした海鷗が叫び聲をあげながら、空高く舞ひ上り、ポートの上で鯉を釣つてゐる漁夫のまはりに輪を描いて飛んだ。

彼は、ヴェランダで珈琲を飲んだ。そして六時に着く筈の汽船をさがし始めた。

彼は、汽船が視界に入るや否や、すぐそれを見つけ出さうとして、ストックホルムの在る方の側の峡港や海峡を心配さうに見詰めながら、休みなく氣遣はしげにヴェランダの上を歩いてゐた。

遂に、一抹の煙が、地平線上に黒點となつて現れた。彼の心臓は動悸して肋骨を叩いた。すると彼は酒を飲んで、それから海岸へ下りて行つた。

今彼は、海峡の中央に眞直な煙突を見ることが出来た。かと思ふうち、まもなく彼は、前檣の第一接檣に掲げた旗を目にした……。彼女は本當にあの汽船の上にあるのだらうか、それとも約束の會合を果すことを妨げられたであらうか？ それには、子供の一人が病氣にでもなつたらそれで十分なのだ。さうすれば彼女は、あすこにはゐないであらう。そして彼はホテルで淋しい夜を過ぎねばならないであらう。この數週間の間、うしろの方へ引込んでゐた子供といふものが、今は彼女と彼との間へはひつて來た。彼等は、あらゆる目撃者と邪魔者とから逃れようと氣を揉んでゐたかのやうに、最近の手紙では子供のことは殆んど少しも書かなかつたのであつた。

彼は、ギシ／＼鳴る棧橋を渡つて、近づくに連れてだん／＼に大きくなる汽船を、ちつと見詰めながら、繫船柱の側に身動きもせず立ちどまつてゐた。船跡には黄金を溶かしたやうな河が流れつゞいて、それは青々としたかすかな漣の立つてゐる渺茫たる海へと擴がつてゐるのだつた。

今彼は、上甲板の人々、動いてゐる群集や繩を持つて何かしてゐる水夫など、を見分けるこ

とが出来た。今度は舵取室の近くにチラ／＼する白い點を認めた。棧橋の上には、彼のそばに誰もゐなかつたので、その動いてゐる白い點は、彼にとつてのみ意味されたものだつたのである。そして又彼女でなければ、誰も彼に向つてハンケチを振りしなかつたであらう。彼は、自分のハンケチを取り出して彼女の挨拶に應じた。そして、それを振つてゐるうちに彼は、自分のハンケチが白くはなかつたことに氣がついた。彼は、經濟のためにこの數年間の色のついたハンケチを使つてゐたのであつた。

汽船は、汽笛を鳴らし、合圖をし、エンジンに留つた。汽船は横づけになつた。そして今や彼は、彼女を認めた。彼等の眼は出逢つて、互ひに挨拶した。その距離は、まだ言葉を交はすには遠かつた。そして彼は、小さな橋を群集に押されてゆるやかにやつて來る彼女の姿を見る事が出来た。それは彼女ではあつたが、それでも彼女ではなかつた。

彼女と、彼の心の中に描いてゐた彼女の姿との間には、十年の日子がはさまつてゐたのである。流行は變つた、着物の仕立も異つてゐた。十年前には、彼女のオリーブ色の優しい顔は、その當時流行つた額を裸體にして見せてゐる帽子で圍まれてゐた。現在の彼女の額は、山高帽^{マカ}、^{マカ}がひの、醜いもので隠されてゐた。十年前には、彼女の姿の美しい線は、悪戯でもするやうに今隠れたと思ふうち今度は肩の線を強く見せ、今度は又腕の運動を示すといふ風

な藝術的な織物の外套に包まれてはつきり見えてゐたのだが、現在の彼女の姿は、長い乗馬用の外套で全く變装してゐて、その外套は彼女の着物の線を追つてはゐたがその姿を完全に隠してゐた。彼女が棧橋から歩み出た時、彼は、自分が戀に陥ちたことのある彼女の小さな足を見た。その當時にはそれは、ボタン附の靴の中に納められて、いかにも自然な線を畫いてゐたが、現在の彼女がはいてゐる短靴は、支那のスリッパみたやうな尖つた物で、あの彼を魅した踊りの時のやうなリズムで足を動かすことを許しはしなかつた。

それは彼女ではあつたが、それでも彼女ではなかつた！ 彼は彼女を抱擁し接吻した。彼女は彼の健康を訊いた、そして彼は子供達のことを訊いた。それから彼等は濱邊を歩いた。

言葉は、ゆるやかに發せられ、そして乾ききつた、強ひられてゐるやうな響があつた。何といふ不思議なことであらう！ 彼等は、互ひにその前では、はにかんでゐるといつてゐた。そして彼等は二人とも手紙のことは口にしなかつた。

遂に彼は、やさしい心になつて訊いた。

「日暮前に散歩に出たくはないかい？」

「ようござんすわね。」と彼女は、彼の腕をとりながら答へた。

彼等は、小さな町の方へと大通りを歩いて行つた。別荘といふ別荘の戸は皆閉ぢられてゐ

た。庭は荒れてゐた。そここゝに、木の葉隠れに林檎が、まだその木にぶら下つてゐるのが見えた。しかし、花壇には花は一つもなかつた。日除を取外したヴェランダは、骸骨のやうに見えた。かつては輝かしい眼があり、楽しげな笑聲があつたこのところを、今は沈黙が領してゐるのだつた。

「まあ、秋らしいこと！」と彼女は言つた。

「さうだ、見棄てられた別荘は恐ろしい様子だな。」

彼等は、歩きつゞけた。

「私たちが住んでた家へ行つて見ませうか。」

「おゝ、行つてみよう！ 面白いだらう。」

彼等は、浴場のそばを通つた。

その向うには、水先案内と園丁との小屋の間に挟まれて、赤い垣根とヴェランダと小さな庭のついた小さい家が立つてゐた。

過去の記憶が眼覺めて來た。そこには、彼等の最初の子供が生れた寢臺があつた。何といふ楽しさ！ 何といふ笑聲！ おゝ！ 青春と快樂！ 彼等が植ゑた薔薇の木はまだそこに生えてゐた。そして、彼等の拵へた薔烟は——否、それは最早存在しなかつた、その上に

は草が生ひ茂つてゐた。小林の中に彼等の拵へたぶらんこの跡はまだ見られたが、ぶらんこそのものはなかつた。

「澤山に、美しい手紙を下すつて有難う。」と彼女は、彼の腕を優しく掴みながら言つた。

彼は赤くなり、そして返事をしなかつた。

それから彼等は、ホテルに歸つた。そして彼は、旅行についての話を彼女に聞かせた。

彼は、大きな食堂の、以前に二人が坐ることを常とした席で、食事をするやうに、命じて置いた。彼等は、祈禱もしずに坐つた。

それは、面と向つての食事であつた。彼はパン籠をとつて彼女にパンを勧めた。彼女は微笑した。彼がさういふことに気がついたのは、餘程前のことであつた。けれども、海岸のホテルでの晚餐は、快い變化だつた、そして彼等は、早速快活な會話で夢中になつてしまつた。それは、一つは過ぎ去つた日を讚美し、他の一つは「ありし昔」の記憶を呼び戻すところの二部合奏であつた。彼等は、再び過去の生活を生き返してゐたのであつた。彼等の眼は輝き、彼等の顔の小さな皺は、消えた。おゝ！ 黄金時代よ！ おゝ！ 來るものとしてもたつた一度しか來ない薔薇色の時代、而も、我々の多くの者には——多くの者には拒まれてゐる薔薇色の時代。

デザートの時彼は、給仕女の耳に數語を私語いた。彼女は出て行つたが、二三分間後にはシャンパンの瓶を持つて歸つて來た。

「愛するアクセル、あなたはまあ何を考へてらつしやるの？」

「俺は、過ぎ去つた、だがまたやつて來る春のことを考へてゐるのだ。」

しかし彼は、全くそんなことばかりを考へてゐたのではなかつた。何故ならば、妻の詰るやうな言葉を聞いた時、その部屋の中へ、猫のやうに、子供部屋と粥の椀との幻影がすべり込んで來たからであつた。

けれども——再び空氣は澄んだ。黄金色の酒は彼等の記憶をゆり動した。そして再び彼等は、過去の陶醉の中へ自らを失つてしまつた。

彼は、テーブルの上に肘を凭せて、恰もこの現在といふものを——畢竟彼自身求めてゐたものだつたこの現在といふものを、隠してしまはうと決心したかのやうに、手で自分の眼を隠したのであつた。

時は過ぎて行つた。彼等は、食堂を去つて、誇らしげにピアノの控へてゐる客間にはひり、そこへ珈琲を持つて來るやうに命じた。

「子供達はどうしてゐるでせう？」と彼女は、實生活の辛い事實に眼覺めて言つた。

「坐れ、さうして歌つてくれ。」と彼は、樂器をあげながら答へた。

「何を歌へと仰しやるの？　もうすつと幾日も、何にも歌つたことなんかないのは、御存知ぢやありませんか。」

彼は、それをよく知つてゐた。けれども彼は歌を欲したのであつた。

彼女は、ピアノの前に坐つて演奏し始めた。それは、弛んでゐる齒がガヂ／＼いふの思ひ出させるやうな、キイ／＼鳴るピアノであつた。

「何を歌ふんです？」と彼女は、樂器から振向いて訊いた。

「お前知つてるぢやないか、え。」彼は、彼女の眼に出逢はないやうにしながら答へた。

「あなたの歌ね！　いゝわ、もし憶えてゐたら。」そして彼女は歌つた。「我が愛人の住み給ふ、恵まれし國はそも何處ぞ？」

けれども、あゝ！　彼女の聲は、細く、鋭く、そしてその感情は、歌を調子はづれなものにした。折々それは、晝が過ぎて夕の近づくことを感じてゐる人の心の底から、出て來る叫び聲のやうな響を立てるのだつた。荒い仕事をした指が、間違つた鍵盤の上にさまよふのだつた。樂器も亦、すでに黄金時代に逢つてしまつたのであらう。琴槌の上の布はすり切れてゐた。それは恰も、パネが裸の木に觸れるやうな音を立てるのであつた。

歌を終つた時、彼女は、恰も彼がやつて來て話しかけるといふ期待を持つてゐるものやうに、振向きもしず一寸の間坐つてゐた。けれども彼は、身動き一つしなかつた。深い沈黙を破る音一つすらもしなかつた。遂に彼女が振向いてみた時、彼はソーフアに坐つて、頬を涙に濡らしてゐるのであつた。彼女は、飛び上つて、昔したやうに彼の頭を両手にはさんで接吻してやりたいやうな強い衝動を感じた。しかし彼女は、そのまゝ動きもしず、眼を伏せて、留つてゐた。

彼は、親指と人差指との間に葉巻を持つてゐたが、歌が終るとそのはしを切つて、マッチを擦つた。

「ありがたう、リライ。」と彼は、葉巻をふかしながら言つた。「さあ、珈琲を飲まないか？」
 彼等は、珈琲を飲んで、夏の休みのことをいろ／＼と話し合ひ、そして、次の夏に過す二三の場所を考へたりした。けれども彼等の會話ははすまなかつた、そして彼等は、同じことばかり繰り返してゐた。

たうとう彼はおほびらに欠伸をして言つた。「もう床にはひるよ。」

「私もまゐります。」と彼女は立ち上りながら言つた。「ですが、その前にバルコンで新鮮な空氣を呼吸しませうよ。」

彼は、寢室にはひつて行つた。彼女は暫く食堂でぐづぐづしてゐたが、それから半時間ばかり、春葱や羊毛の胴着に就いて内儀さんと話をしてゐた。

内儀さんが彼女のそばを去つた時、彼女は寢室へ行つて、戸のところまで二三分間立ち留つて耳を傾けてゐた。何の物音も中からは聞えて來なかつた。彼の靴は、廊下の隅に置いてあつた。彼女は靜かに戸を開けて中にはひつて行つた。彼は眠つてゐた。

彼は眠つてゐた！

翌朝の食事時には、彼は頭痛がした。そして彼女はいら／＼してゐた。

「何て恐ろしい珈琲だらう。」と彼は、顔をしかめて言つた。

「ブラジル製ですよ。」と彼女は、簡単に答へた。

「今日はどうしたらいゝだらう？」と彼は、時計を見ながら訊いた。

「珈琲のことなんかぐづぐづ仰しやらないで、パンでも食つた方がよかありませんか？」と彼女は言つた。

「さうしようかね。」と彼は答へた。「それから、ついだに酒を少し飲まう。昨晚のあのシャンパン、うゝ！」

彼は、パンとバタと酒とを言ひつけた。そして彼の心持はよくなつた。

「パイロット・ヒルへ行つて景色をながめようぢやないか。」

彼等は、朝飯のテーブルから立ち上つて、出掛けて行つた。

天氣は素晴しかつた、そして散歩は彼等をいゝ心持にした。しかし彼等は、ゆる／＼と歩いた。彼女はハア／＼言つてゐた。そして彼は膝が硬く硬ばつてゐた。彼等は、最早昔の眞似をやらうとはしなかつた。

彼等は、畑を横ぎつて歩いて行つた。草は餘程以前に刈られ、何處を見ても花一つなかつた。彼等は、大きな石の上に腰を下ろした。

彼は、監獄省と彼の役目とに就いて話した。彼女は、子供達のことを話した。

それから彼等は、黙つて歩いて行つた。彼は時計を見た。

「お晝までまだ三時間ある。」と彼は言つた。そして彼は、明日はどうして時間を過したらよからうかと思つた。

彼等は、ホテルに歸つた。彼は、新聞をとり寄せた。彼女は、微笑を含んで彼のそばに坐つてゐた。

彼等は、晝飯のときには殆んど話をしなかつた。食後には彼女は、召使達のことを言ひ出

した。

「どうか、召使達のごことは勘辨してくれ！」と彼は叫んだ。

「私達は喧嘩をしに此處へ来たんぢやありませんわ！」

「俺が喧嘩してるといふのかい？」

「ええ、私だつて喧嘩なんかしてるのぢやありませんわ！」

ぶざまな沈黙がつゞいた。彼は、誰か来て呉れ、ばい、がと思つた。子供達！ さうだ！ 差し向ひは彼を當惑させた。しかし彼は、昨日の晴々しい時間のことを思つた時、心の中に痛みを感じた。

「オーク・ヒルへ行きませう。」と彼女は言つた。「そして野苺でもさがしませうよ。」

「こんな時分に野苺なんかあるものか、もう秋だ。」

「何でもいゝから行きませう。」

そして彼等は出かけた。しかし會話は捗々しくなかつた。彼の眼は、話の種になるやうなものはないかと、路傍をさがしてゐた。しかしそこらには何にもなかつた。そこらにあつた物は皆彼等が話題として使ひ古してしまつたものばかりであつた。彼女は、すべての物事に關する彼の見解を、悉く知つてゐた、そして大抵なことには彼女は不同意であつた。彼

女は、家へ歸りたかつた、子供等のところへ、彼女自身の爐邊へ、行きたかつた。彼女は、こんなところに居て、自分を見世物にしたり始終夫と喧嘩せんばかりになつてゐることは、馬鹿げたことだとさつた。

暫くすると彼等は、疲れたので、立止つた。彼は、坐つてステッキで砂に字を書きはじめた。彼は、彼女が喧嘩をおこしてくれ、ばい、がと望んでゐた。

「何を考へてらつしやるの？」彼女は、たうとう訊ねた。

「俺かい？」と彼は、肩から重荷を下ろしたやうに感じながら答へた。「俺たちが年を取つたといふことを考へてゐたのさ、お母さん。俺たちの活動はもうお終ひだ。俺たちは、今までにやつて來たことで満足しなければならぬんだ。もしお前も同じ考へなら、今夜の船で歸らうよ。」

「私は、しよつちうさう思つてたんですよ、お爺さん。しかし私はあなたを悦ばせてあげようとしてゐたのです。」

「では行かう、家へ歸らう。もう夏ではない、秋が來てゐる。」

彼等は、ほつとしてホテルへ歸つた。

彼は、この事件が散文的な結末をつけることに、やゝ困惑してゐた。そして、哲學的見地

からそれを辯解しようとする、避け難い熱望を感じた。

「ねえ、お母さん。」と彼は言つた。「お前に對する俺の戀——ふむ。」(この言葉は強過ぎた。)
「お前に對する俺の愛情は、時の經つに連れて變化を受けたのだ。それは發達し、擴大された。始めにはそれは個人に集注されてゐたのだが、此頃では全體としての家族に集注されてゐるのだ。俺が愛するのは、今では個人としてのお前をではない、又子供達をでもない、全體だ……さうだ、叔父がいつも言つてるやうに、子供等といふものは避雷針なのだ！」

この哲學的説明の後彼は、再び以前の自分に歸つた。フロツク・コート脱ぎ去ることは愉快なことであつた。彼は、恰も寢巻を着ようとしてゐる時のやうな心持がした。

彼等がホテルへはひつた時、彼女は早速荷作りを始めた。この中に於てこそ始めて彼女は己れの雰圍氣の中であつたのである。

彼等は、船中の人となるや否や早速、廣間へ降りて行つた。けれども體裁をつくらふ爲めに彼は、夕日を眺めたくはないかと、彼女に訊ねた。しかし彼女は辭退した。

夕食の時には、彼は先づ第一に自分のことをした。そして彼女は、黒パンの代價を給仕女に訊いた。

夕食を済すと彼は、食卓を離れないで、いつまでも一杯のポルターに引つかゝつてゐた。

暫くの間彼を楽しませた或る考へが、最早抑壓せられなくなつてしまつた。

「おい馬鹿、どうだい？」彼は、杯を擧げながら、そしてその時ふと彼を見た細君に向つて微笑しながら言つた。

彼女は、彼の微笑に應じなかつた、ぞつとするやうな、そして一瞬間閃いたその眼は、威嚴の表情を示したので、彼はがっかりした。

呪文は破られた。彼の昔の愛の最後の痕跡は消え失せた。彼は、子供達の母親と相對して坐つてゐるのであつた。彼は弱小な氣がした。

「もう私を見下げる必要はありませんよ。私は一寸の間、自分を馬鹿にしてゐただけなんですから。」と彼女は眞面目に言つた。「でも、男の愛にはいつでも可成り侮蔑が含まれてますのね。不思議なことですわ。」

「では、女の愛には？」

「それ以上ですわ、ほんとにさうですわ！ 併しそれにはそれ／＼原因があるのですわ。」

「同じことさ——差異があつたつて。多分兩方とも間違つてるんだらう。到達することが困難だといふ理由で、人が高く見積り過ぎたものは、それを得た時には容易に見くびられるものだよ。」

「何故人は高く見積り過ぎたりするのでせう？」

「そりや到達することがひどく困難だからぢやないか？」

彼等の頭上で鳴った汽笛の音が、會話を妨げた。

彼等は上陸した。

彼等が家に着いて、彼が彼女を子供達の間に見た時、彼は、彼女に対する自分の愛が變化を受けたこと、及び彼に對する彼女の愛情が變じてあらゆる小さな者達の間に分けられてしまつたことを知つた。恐らく彼に對する彼女の愛は、單に目的に達すべき手段に過ぎなかつたのであらう。彼の役は短期間だつた。そして、彼は棄てられたやうな氣がした。若しも彼が、パンとバターとを儲ける爲めに必要でなかつたのなら、多分ずつと以前に抛り出されてゐたことであらう。

彼は、書齋にはひり、寢巻を着、スリッパを履き、パイプに火をつけた、そして打ちくつろいだ氣持になつた。

外では、風が窓硝子に雨を叩きつけ、そして煙突の中で鳴つてゐた。

子供達が床にはひつた時、彼の妻はやつて来て、彼のそばに坐つた。

「もう野苺をとりに行く天氣ではありませんね。」と彼女は言つた。

「さうだねえ、夏は終つた、もう秋が来てゐるんだ。」

「さう、秋ですわね。」と彼女は答へた。「でもまだ冬にはなりませんね。そこに慰めがあるのね。」

「我々がたつた一度きりしか生きられないものだとしたら、すゐぶん哀れな慰めだよ。」

「子供が出来れば二度、孫の顔が見られれば三度ですわ。」

「だが、そのあとはお終ひだ。」

「死後の生活があるのでなかつたらね。」

「我々にはそれを確信することは出来ない！ 誰が知らう？ 俺は信じる、が俺の信仰には證據はない。」

「でも、それを信じることはいゝことですわ。信仰を持たうぢやありませんか！ 春はまたやつて来るのだといふことを信じようぢやありませんか！ 信じようぢやありませんか！」

「さうだ、信じよう！」と彼は、その胸に彼女を抱きしめながらさう言つた。

強制結婚

三〇〇

小さい時分に彼の父は死んだので、その時以來彼は、一人の母と二人の姉妹と數人の叔母達との手に任された。彼は兄弟を一人も持つてゐなかつた。彼等は、スウェーデンのセーデルマンランド州に在る邸で生活してゐた。そして、友達關係に在り得る隣人は一人もゐなかつた。彼が七つになつた時、彼とその姉妹とを教へる爲めに女の家庭教師が雇はれ、そしてそれと同時に一人の従妹が來て彼等と一緒に住んだ。

彼は、姉妹の寢室と一緒に寢、彼等と遊び事をし、一緒に湯にはひつたりした。誰も、彼を異性として見る者はなかつた。やがて彼の姉妹は、彼をその手中に入れて、彼の教師になり、暴君になつた。

彼は、最初には強壯な子供であつた。しかしそれ程多くの女達に溺愛された結果次第に心細いモリイ・コッドル(女らしい男)となつてしまつた。

かつて彼は、自己解放の試みをやつて、長屋の子供等と遊びに行つた。彼等は、樹にのぼつたり、小鳥の巢を盗んだり、栗鼠に石をぶつけたりして、森の中で、日を暮した。フリチ

オフは、放免された囚人のやうに幸福であつた、そして晝飯時にも家に歸つて來なかつた。子供等は、こけももを集めたり、湖で浴びたりした。それは、彼の生涯で最初の本當に楽しい日であつた。

夕方になつて彼が歸つて來た時、家中が大騒ぎをしてゐたところだつた。彼の母は、心配して動顛してゐた、そして彼が歸つて來たのを見るとその喜びを隠すことが出来なかつた。けれどもアガータ伯母は非常に怒つてゐた、彼女は老嬢で、彼の母の一番の姉で、一家を支配してゐるのだつた。彼女は、彼を罰しないことは、明らかに罪惡だと言つてきかなかつた。フリチオフは、何故それが罪惡なのか解らなかつた。しかしその伯母は、服従しないことは罪惡だと彼に言つた。彼は、長屋の子供等と遊んではならないなどと言はれたことは一度もないと言ひ張つた。彼女は、それを承認したが、そんなことをすれば勿論いけないに極つてゐると言つた。そして彼女は、頑固にそれを言ひ張つた。そして彼の母の訴へるやうな眼には眼もくれずに、自分の部屋で咎打つために彼を連れ去つた。彼は、八つになつてゐた、そして年の割には可成り大きかつた。

伯母が彼の股引のボタンをはづさうとして、腰帶に觸つた時、彼の背には冷たい震へが走り過ぎた。彼は喘いだ、そして彼の心臓は動悸して肋骨を打つた。彼は、音も立てずに、恐

怖に打たれて、かい撫でんばかりのやさしさで、服従するように反抗しないようにと要求してゐるその老婦人を、見詰めてゐた。けれども彼女が、彼の襯衣に手を觸れた時には、彼は恥しさと怒りとのために熱してきた。彼は、伯母が押しつけたソファの中から飛び出して左右に拳固をふりまはした。この女からは、何か不潔な暗い厭はしいものが發散するやうな氣がした。そして、彼の性に對する恥かしさが、兇行者にでも對した時のやうに、彼のうちに起つたのであつた。

けれども伯母は、熱狂して彼を取抑へ、椅子の上に投げ倒して彼を打つた。彼は、憤怒の爲めに叫んだ、彼は苦痛などは感じなかつた。そして痙攣的に空を蹴つて、身を自由にしようと試みた。が、彼は忽ちに靜かになつてしまつた。そして沈黙してしまつた。

老婦人が彼を放した時にも、彼はそのままの位置にゐて、身動きもしなかつた。

「お立ち！」と彼女は、しはがれ聲で言つた。

彼は、立ち上つて彼女を見た。彼女の頬の一方は蒼ざめ、他方は赤くなつてゐた。彼女の眼は異様に輝き、體ぢう震へてゐた。彼は、野獸をでも檢べるかのやうに、もの珍らしげに彼女を見しらべた。そして出し抜けに、驕傲な微笑が彼の上唇に浮んだ。その微笑が彼女に對する優越を彼に與へたかのやうに彼には思はれた。「女惡魔！」彼は、長屋の子供等から

新たに仕入れて來たこの言葉を、無遠慮に又輕蔑するやうに彼女の顔に叩きつけ、自分の着物をとつて、食堂に坐つて泣いてゐた母のところへ、階段を下りて行つた。

彼は、その心を母に打明けて、伯母の取扱ひ方に不平をこぼしたいとは思つてゐたが、彼女は彼を慰める勇氣を持つてゐなかつた。それ故彼は臺所へ行つた。そこでは下女達が、一掴みの乾葡萄で彼を宥めてくれた。

その日から彼は、最早子供部屋で姉妹と一緒に眠ることを許されなかつた。彼の母が、自分の寢室へ彼のベッドを移した。母の部屋は息詰るやうだつた、そしてこの新しい様式は退屈だつた。彼女は、彼が夜具をよく掛けてゐるかどうかを見るために、夜中に起きて、彼のベッドのところへやつて來るので、彼は屢々眠りを妨げられた。そこで彼は、腹を立て、彼女の質問には、すねて答へるのだつた。

彼は誰かに注意ぶかく身を包まれませんには外出することを決して許されなかつた。そして彼は、どれを着けたらいいか分らなかつた程澤山の襟卷を持つてゐた。彼がこつそり家を出ようとするといつても、誰かが窓からちやんと見てゐて、彼を引戻して外套を着せるのであつた。次第にその姉妹の遊戯が、彼にはつまらなくなり出した。彼の強壯な腕は、最早羽子板や羽根などを持つて遊ぶことを欲しなかつた、それは石でも投げることを熱望した。筋肉も頭

脳も要らないクロケットの遊びなどで争ふことは彼を苛々させた。

女の家庭教師は、彼の試煉の他の一つであつた。彼女は、いつも彼にフランス語で話しかけたが、彼は相變らずスウェーデン語で彼女に答へてゐた。彼の全生活とその周囲とに對する漠然とした嫌惡が、彼のうちに動き始めた。

すべての者が彼の面前で振舞つたところの自由な氣輕な態度は、彼を氣持悪くさせた。そして彼は、自分の接觸するあらゆる人々に心から嫌惡のしかへしをした。彼の母は、或る程度まで彼の感情を思ひ遣つてくれる唯一の人であつた。彼女は、彼のベッドの周圍に大きな屏風を立て廻してくれた。

最後には、臺所と女中部屋とが彼の隱家となつた。そこでは、彼の爲す凡ての事が承認された。勿論、時とするとその處では子供の好奇心を惹き起すやうな事件が論じられたが、彼は何等の祕密もないのであつた。例へば、或時彼は偶然女中達の浴室にやつて來た。一緒に居た家庭教師は、叫び聲をあげたが、彼は何故だか解らずに、平氣で立止つて風呂の中で立つたり坐つたりしてゐる娘達と話をした。彼等の裸體は、彼に何の印象も與へはしなかつた。

彼は、青年になつた。彼に耕作を教へる爲めに監督が雇はれた。何故なら彼は、勿論、或る時が來れば所有地の管理を承継がなければならぬのであつた。正教上の信仰を持つてゐ

る老人が選ばれた。その老人と一緒にゐることは、青年の腦髓を刺戟するとは、確かに考へられてゐなかつたのであつた。しかしそれは、古い状態の一つの發達であつた。それは、彼に對して新しい見解を開き見せ、彼を活動の世界に呼び醒ました。けれどもその監督は、毎日毎時婦人達から非常に多くの指揮を受けてゐたので、彼は殆んど彼等の代辯人に過ぎないことになつてゐた。

十五の年にフリチオフは、堅信禮を施されて、金時計の贈物を受け、そして馬に乗つて外出することを許された。しかし彼は、彼の最も大きな野心、即ち銃獵に出掛けたいといふ野心を實行することは許されなかつた。實は彼は、最早主敵から苔刑を受ける恐れは全くなかつたのであるが、彼は母の涙を恐れてゐた。彼は常に子供であつた。そして、他人の判斷に道を譲るといふ習慣を棄て、了はうとは決してしなかつた。

年月は經つた。彼は二十歳に達した。或日彼は、臺所に立つて、忙しさうに鱸の鱗を落してゐる料理人を見成つてゐた。彼女は、デリケートな膚色を持つた美しい若い女であつた。彼は、彼女をからかつてゐたが、終ひには、彼女をその手で撫でおろした。

「もう御冗談はよして下さいまし。フリチオフさん。」と娘は言つた。

「冗談なんかしてやしないよ。」と彼は、ますく馴々しくしながら答へた。

「奥様が御覽になつたら！」

「うむ、お母さんが見たら？」

此の瞬間に彼の母が、開け放してあつた臺所の戸の前を通つた。彼女はすぐさま顔を背向けて、庭を横切つて歩いて行つた。

フリチオフは、具合が悪かつたので、寢室へ逃げ歸つた。

新しい園丁が雇はれた。婦人達は、智慧を働かして、女中達との面倒を避ける爲めに、既婚者を選んだ。ところが、不幸にも、その園丁は、非常に美しい若い娘の父であつた程十分、以前から結婚してゐたのであつた。

フリチオフは、花園中の他の薔薇にまじつて咲いてゐる、その美しい花を、忽ちのうちに發見した。そして彼の心臓のうちに貯へられてゐたあらゆる好意を、この自分の屬してゐない他性の人間である若い娘の上に注いだ。彼女は、どつちかといふと善く發育した、又餘り無教育でもない女であつた。

彼は、大抵いつも庭で時を過した。そして彼女が花壇で働いてゐたり、花を切つてゐたりするのを見ると、いつも立ち止つて彼女に話しかけるのであつた。彼女は、彼の近づきに應じはしなかつた。しかしこのことは、彼の熱情を刺戟する結果となるのみであつた。

或日彼は森を馬で乗り歩いてゐたが、いつもの通り、愛らしい彼女の幻像に襲はれてゐた。それは、彼の意見によると、實に完全の頂點まで達してゐる姿であつた。彼は、監視人の不快を惹き起す恐れから全く自由に、たつた一人である彼女に會ひたいと熱望しぬいてゐた。彼の熱烈な空想の中で、彼女に近づきたいといふ望みは、彼が彼女なしに生きることが不可能だと感じた程大きなものとなつてゐた。

彼は、その手に手綱をゆるやかに持つてゐたので、馬は、その背に物思ひに沈んだ人を乗せたまゝぶら／＼と勝手に道を拾つて行つた。と、出し抜けに、木と木の間に何か光る物が現れた。そして園丁の娘が叢の蔭から歩道の上に出て來た。

フリチオフは、馬かりおりて帽子をとつた。彼等は、並んで話しながら歩いて行つた。彼はその間、馬をうしろに引きつれてゐた。彼は、彼女に對する自分の戀をそれとない言葉で話した。しかし彼女は、あらゆる彼の申出を拒絶した。

「どうして私たちはそんな出來ないことを話し會はなければならぬのでせう？」と彼女は訊ねた。

「何が出來ないんです？」と彼は叫んだ。

「あなたのやうなお金持の紳士が、私のやうな貧乏人の娘と結婚なさらうなんて。」

彼女の言ふことが適切だといふことは、拒むよすがもなかつた。そしてフリチオフは自分の方が破られたといふことを感じた。彼女に對する彼の戀は無限なものではあつたが、家と家族とを守つてゐる一群の狼の中を、この野兎を連れて安全に通ることは到底出来ないことだといふことを知つた。彼等は、彼女を滅茶々に引裂いてしまふであらう。

この會話のち彼は、絶望に身を任せて、沈黙してしまつた。

秋になると園丁もこれに氣づいて、理由も示さずにこの邸宅を去つてしまつた。六週間といふものフリチオフは、諦めがつかないでゐた。何故なら彼は、自分の最初の、そして唯一の戀を失つたのだから。彼は二度と戀は出来ないだらう。

こんな風にして秋はしづかに過ぎて行き、冬が戸の前に立つた。クリスマス頃、新たに醫者が近所に越して來た。彼は、成熟した子供達を持つてゐた。伯母達は始終體が悪かつたので、この二家族の間には、たちまちに親しい關係が結ばれた。その醫者の子供達のうちには若い娘が居た、そしてまもなくフリチオフは彼女にぞつこんほれ込んで了つた。彼は、最初のうちは初戀人に對する不信を恥ぢてゐたが、またくまに彼は、戀とは非人格的な何物かであるといふ結論に達した。何故なら、人が、その愛の對象を變へるのは可能なことであり、それは殆んど、所持したることを證明した委任狀のやうなものであつたから。

彼の保護者達が、この新しい戀を探知するや否や、母はその息子に祕密の會見を求めた。

「お前ももう妻をさがし始める年頃になつたね。」と彼女は始めた。

「もう探しましたよ、お母さん。」と彼は答へた。

「ちつと急ぎ過ぎやしませんか。」と彼女は言つた。「お前の考へてゐる娘さんは教育ある男が要求する道義心を持つてゐないやうに思ひますがね。」

「何ですつて？ アミーの道義心ですつて！ 誰かそのことにとやかくと口を挿むだけの材料をもつてゐるんですか？」

「私はね、あの子のことでは一語も言はうとはしやしないよ。だがあの子のお父さんは、お前も知つてゐる通り、自由思想家だからね。」

「僕は、物質的利益などは考へずに自由にものを考へることの出来る人と縁を結ぶことを誇りにします。」

「さうかい、ぢやあ、あの人のことなどはどうだつていゝとしてだね、お前はお忘れだね、えゝフリチオフ、お前には他にもう極つた人があるつてことを。」

「何ですつて？ ぢや、お母さんは……」

「さうさ、お前はルイザの心を弄んだんだね。」

「お母さんは従妹のルイザのことを言つてゐるんですか？」

「さうさ。小さい子供の時分から許嫁として自分でも許してゐたのぢやないか？ あの子はお前に對してあらゆる忠實と信用とを置いてゐるといふことに氣がつかないのかい？」

「僕らを弄んで、一緒になるやうにしたのは貴方です。僕ぢやありません！」と息子は答へた。

「お前の年取つた母さんのことを考へておくれ、お前の姉さん達のことを考へておくれ。フリチオフ。お前は、いつも私たちの家庭だつたこの家の中へ、他人を連れて来て、私たちに命令する権利を與へようとするのかい？」

「あゝ、解つた。ルイザは選ばれた奥さんでせうよ！」

「選ばれた奥さんといふこともないがね、母親といふものは、いつでも息子の未來の妻を選ぶ権利を持つてゐるものですよ。誰だつて、こんな仕事には母親以上に向く者はないのだからね。お前は私のこの忠實を疑ふのかい？ まあお前は、私を、この母を、お前を害はうとのぞんでゐるなんて疑ふことが出来るのかい？」

「いゝえ、いゝえ！ しかし、僕は——僕はルイザを愛してゐません。僕はあれを妹としては好きですけど、しかし……」

「愛だつて？ 世の中に愛ほど變り易いものはありませんよ！」

愛に手頼るなんて馬鹿なことです。それは呼吸のやうに過ぎ去つてしまふものです。しかし、友情とか、意見や習慣の一致とか、等しい趣味とか、長い間の交情とか、さういふものは幸福な結婚の一番確實な保證なんです。ルイザは、家庭的な、規律正しい、役に立つ娘です。彼女は、お前の家庭を、お前の望み通りに幸福にするでせうよ。」

フリチオフの逃れる唯一の方法は、その事を熟考する時間を與へて貰ふことであつた。

とかくするうちに、家中の婦人達が残らず健康を恢復してしまつた。従つて醫者は最早要らなかつた。それでも彼は或日尋ねて來たが、國の様子を探りに來た盗人でもあるやうな待遇を受けた。彼は敏感な男だつたので、事件がどういふ状態にあるかといふことを忽ちに見てとつた。フリチオフは、その訪問を返したが、彼は冷淡に取扱はれた。これが、この二家族の親しい關係の終りであつた。

フリチオフは、青年となつた。

今や強襲によつて砲臺を占領するといふ狂暴な企が行はれた。伯母達は、新しい主人の前にへつらひ、そして彼を子供のやうに取扱つて、自分達が不必要なものでは有り得ないとい

ふことを彼に證據立てようと試みた。彼の姉達は、前よりも一層彼を可愛がった。そしてルイズは、着物に多大の注意を拂ひ始めた。彼女は、堅くその胴を締めたり、頭の毛をちぢらせたりした。彼女は、決して十人並の女ではなかつたが、冷たい眼と鋭い舌とを持つてゐた。

フリチオフは、無關心のまゝであつた。彼にとつては、彼女は性のない者であつた。彼は、彼女を男の眼で見たことは一度もなかつた。けれども、今では、母との會話の後では、彼は彼女の前では、特に彼女が彼の交情を求めてゐる時には、或る困惑の感を持たずにはゐられなかつた。彼は、あらゆる場所で彼女に逢つた。階段で、庭で。既でさへも出逢つたことがあつた。或朝、彼がまだベッドの中にゐた時、彼女はピンを借りに彼の部屋にはひつて來た。彼女は寢巻を着てゐた、そして非常に恥かしさうな風をした。

彼は、彼女が厭だつた。それでも彼女のことは、いつも彼の心の中に在つた。とかくするうちに、母親は、その息子と度々話し合つた。そして、伯母や姉妹は、豫期せられた結婚式のことをほのめかすことを決して止めなかつた。

彼にとつては、人生は重荷となつた。彼は自分の捕へられてゐる網から逃れる術を知らなかつた。ルイズは、最早彼の妹でも友人でもなかつた。たとひ妹とか友人とかいふものだとしても彼は彼女を好まなかつたのではあるが。彼が、彼女と結婚するのだといふことを絶え

ず考へつめてゐたことは、彼をして、彼女が女であるといふことを、不深切な女、それは事實だが、しかしそれでも、女ではあるといふことを知らしめる結果となつたのであつた。彼の結婚は、彼の立場の變化を意味するであらう。そして、恐らくは束縛から自由になることになるであらう。近所には、娘らしい娘は一人もゐなかつた。そして、要するに彼女は恐らく、他の若い女と同様にいゝ女だつたであらう。

そこで彼は、或日母のところへ行つて、決心した旨を母に告げた。彼は、この邸の離れに彼自身の住居を持ち、彼自身のテーブルを持つといふ條件で、ルイズと結婚しようと思つた。又彼は、母が自分の代りに申込みをして呉れるようにと言ひ張つた。何故なら彼は自分でさうする氣にはなれなかつたからである。

妥協は承認された。そしてルイズは、フリチオフの抱擁とおどくした接吻とを受けるために呼び入れられた。彼等二人は、どちらも理解し得ない理由で泣いた。彼等は、其日一日恥かしい氣がしてゐた。その後は、すべての事が前の通りに進行していつた。しかし伯母達と姉妹との母親氣取は、際限を知らなかつた。彼等は、離れの道具を備へ、室々を整頓し、何から何まできちんとした。フリチオフは、それらの事に少しも相談されなかつた。

結婚式の用意は、完全になつた。地方に埋れてゐる多くの古い友人達は、驅り集められて、

儀式に出席するやうに招待された。

結婚式は舉行された。

その翌朝、フリチオフは早く起きた。彼は畑へ行かねばならぬ用があるやうな風をして、出来るだけ速かに寢室を去つた。ルイザは、まだ眠かつたが反對しなかつた。けれども彼が出かけて行く時彼女は、彼のうしろから呼びかけた。

「十一時の朝御飯を忘れちゃいけませんよ！」

それは命令のやうに響いた。

彼は、自分の私室にはひつて、狩獵服を着け防水靴を履いて、衣服戸棚に隠して置いた銃を取り出した。それから彼は、森へ出かけて行つた。

それは、美しく晴れた十月の朝であつた。すべてのものが白い霜で掩はれてゐた。彼は、恰も後ろから呼び戻されるのを恐れるか、又は何物かから逃れようとしてでもゐるかのやうに急いで歩いて行つた。新鮮な空氣は、入浴したあとのやうな氣持にした。彼は、やつと自由な人間となつたやうな氣がした。そして彼は、銃を持つて朝の散歩をすることにその自由を恣にするのであつた。けれどもこの肉體上の自由の快活な感情は、まもなく消え去つてしまつた。その時までには、少くも彼は自分の寢室を持つてゐた。彼は、晝の間は自分の思想の、

そして夜は、自分の夢の主人であつた。それがなくなつて了つた。共通な寢室に就いて考へることが、彼を悩ました。それに就いては、けがららしい何物かがあつた。恥は假面の如くに投げ棄さられた、あらゆるデリケートな感情はなくなつて了つた、人間が「高等な起源」を有するものだといふあらゆる幻影は、破られて了つた。人間のうちの野獸そのものとの斯くの如き密接なる接觸は彼にとつてはとても堪らなかつた。何故なら彼は、理想主義者によつて育てられたからであつた。彼は、男女間の交渉に於いて現された偽善の絶大なることに眼を眩まされるやうな氣がした。名狀し難き婦徳なるものの内奥の本質は、結果に對する恐怖に他ならないといふことを知つたことは、彼にとつては一つの啓示であつた。けれども、もし彼があゝの醫者の娘か、或はあゝの園丁の少女と結婚してゐたのであつたとしたら？ 現在の妻と差向ひでゐることは鬱々とした厭なことだつたが、彼女と一人だけならば、幸福だつたにちがひない。その時には、好奇心と欲求とを満足させようとする野卑な望みも、肉慾的に非ざる精神的有頂天と變じたであらう。

彼は、目的もなく、何かを射撃しようといふ考へもなく、森の中をさまよつて行つた。彼は、射撃の響を耳にし何者かを殺したいといふ漠然とした望みを感じたのみであつた。しかし彼の銃の前には何者も現れなかつた。小鳥は既に移住して了つてゐた。僅かに栗鼠が、松

の木の枝に登つてその輝いた眼で彼を見つめたばかりであつた。彼は、銃を取上げて、引金を引いた。しかしこの敏捷な小動物は、弾丸が樹にあつた時には、既に幹の他の側に移つてゐた。けれどもその響は彼の神経に愉快な感銘を與へた。

彼は、歩道棄て、藪の中へとひつて行つた。行く手に生えてゐるあらゆる菌類を彼は踏みにじつた。彼は、破壊的な氣分になつてゐた。彼は、踏みにじるか、射撃で殺すかしようとして、蛇をさがした。

突然彼は、家へ歸らねばならないことと、それが結婚の翌朝なのだといふことを思ひ出した。人々の好奇の眼に己れをさらさなければならぬといふことを考へただけでも、彼は採るべき態度に反する、そして而も自然に反する罪を犯した爲めに面の皮を引剥がれ曝し物にされようとしてゐる罪人のやうな心持がして來るのであつた。おゝ！此世界をうしろにして去ることが出來たなら！けれどもどうしてそんなことが出來るだらう？

彼の思ひは、遂に、同じ問題をぐるぐる廻りめぐつてゐることのために疲れ果てた。そして彼は、食物に對する熱望を感じた。彼は、家に歸つて朝飯を食べようと決心した。

庭への入口になつてゐる門をはひると、彼は家中の者が玄關の前に立つてゐるのを見た。彼等は、彼を認める否や、喜び騒ぎ始めた。彼は、不確かな歩調で庭を横切つて行つた。そ

して、彼の健康に對する偽善的な質問を、隠しきれない混亂を以つて聞いた。それから彼は、接吻しに來てくれるのを待ちながら群の中にまじつて立つてゐた妻には、まるで氣もつかずに、曲つて、家の中へはひつて行つた。

朝飯の食卓に就いた時には、彼は苦しみを受けた。その苦しみは、生涯彼の記憶の中に焼きつけられるであらうといふことを彼は知つた。客達の思はせぶりは彼を立腹させ、妻の愛撫は彼を苦しめた。彼の喜びの日は、彼の生涯の中で最も惨めな日であつた。

數箇月の間に、彼の若い妻は、伯母達や姉達の助けをかりて、家の中にその支配權を打ち建て、了つた。フリチオフは、今まで通り、その家の中の最も若い最も無感覺な一員として残つてゐた。時とすると彼の忠告が求められることもあつたが、決してそれが實行に移されたことは無かつた。彼は、まるでまだ子供でもあるやうに見られてゐた。彼の妻は、まもなく、彼と差向ひで食事をするのは堪らないことだといふことを知つた、何故なら彼は食事中頑固に黙り返つてゐたから。ルイザは、それを忍び得なかつた。彼女は、避雷針を持たねばならないのであつた。そこで、姉達のうちから一人が彼等の離れへ引移つて來た。

フリチオフは、自分を解放しようとする企てを、一度ならず試みた。しかし彼の企ては、い

つも敵によつて挫かれてしまつた。多勢に無勢であつた。そして、彼等は話したり教へたりするので、終ひには彼は森へ逃れて行つてしまふのであつた。

夜は、彼にとつては恐怖を持つてゐた。彼は寢室を嫌つた。そして、刑場へでも行くやうにそこへ行つた。彼は、氣むづかしくなり、すべての人を避けるやうになつた。

彼等が結婚してからもう一年間たつたが、まだ子供の出来さうな氣配もなかつた。彼の母は、或日彼を側へ寄んで話した。

「お前、子供を持ちたいとは思はないのかい？」と彼女は訊ねた。

「勿論、僕は思つてはゐますよ。」と彼は答へた。

「お前は、妻をあんまり深切に取扱つてはおいでではないねえ。」と母は、出来るだけ優しく言つた。

彼は、腹を立ててしまつた。

「何ですつて？ 何てことを仰しやるんです？ お母さんは僕の過ちをさがしてゐるんですか？ 僕に終日労働をさせたいんですか？ ふむ！ 貴方はルイザを知らないんです！ だがそれは僕でなくて誰の務めでせう？ お母さんは僕に要求があるなら、僕がそれに應じられるやうな要求を持つて来て下さい！」

しかし母は、さうすることを好まなかつた。

淋しさと詰らなさから、彼は酒とカルタとに感溺した若い監督と友達になつた。彼は、その男の友達になる爲めに、夜は彼の部屋へ行つて過した。彼は、遅く、出来るだけ遅く、床に就いた。

或晩家に歸つて來ると、彼は、妻がまだ起きてゐて、彼を待つてゐるのを見た。

「何處へ行つてらしたの？」彼女は鋭く訊いた。

「何處へ行つてたつていゝぢやないか。」と彼は答へた。

「結婚して夫を持たないといふことは、愉快なことでもなんでもありませんわ。」と彼女は言ひ返した。「せめて子供でもあつたら！」

「子供が無いのは俺のせゐぢやない！」

「私のせゐでもないわ！」

それは誰の罪かといふことで喧嘩は始まつた。そしてその喧嘩は二年間つゞいた。

二人共頑固に醫藥の助けをかりなかつたので、有り勝ちな事が起つた。夫は物笑ひの種になるやうなことをした。妻は悲劇的なものとなつた。子無き女は神聖なものである、それは何等かの理由で「神の」呪が彼女の上に置かれてゐるからだ、といふことを彼は聞いた。その

「神」は降つて来て、男をも呪ふことが出来るのかどうかは、女の理解し得ないところであつた。

けれども、フリチオフは確かに自分の上にも呪が置かれてゐると思つてゐた。何故なら彼の生活は、恐るべきもので、且つ不健康なものであつた。自然は、或は友であり或は敵となる二個の性を作つたのである。彼は、敵に出逢つた、征服し難き敵に出逢つたのだ。

「ケーボン(去勢鶏)て何のこと？」彼は或日その姉妹の一人に訊かれた。彼女は、針仕事を忙しさうにしてゐた時、唐突にさう訊いたのであつた。

彼は、疑はしげに彼女を見た。否、彼女はその語の意義を知らないのであつた。彼女は多分何かの話で、その語を耳にして、好奇心を起したのであらう。

しかし、冷たいものが彼の心の中にはひつて来た。彼は嘲笑されてゐるのだ。彼は疑ひ深くなつた。彼の見るもの聞くものすべてが、さういふ事柄と結びついてゐるのであつた。憤怒のあまり自制力を失つて、彼は召使女の一人を迷はした。

彼の行爲は、希望通りの結果を來した。とかくするうちに彼は父親となつたのである。

今やルイザは、殉教者として見られ、彼は悪漢として見られた。彼は、それらの罵詈雑言には平然としてゐた。何故なら彼は自分の名譽を擁護した——若しもそれが名譽であるとすれば、

ば、そして缺陷なく生れたといふ單なる僥倖でないとするれば。

しかし、この事件はルイザの嫉妬心を惹起した。そして——不思議なことだが——彼女の心中に夫に對する或る種の愛を目覺めしめたのであつた。それは、彼を苛立たさせる愛であつた。それは、間斷なき監視と神經過敏な干渉とのうちに、又時とすると涯を知らざる慈母のやうな優しさと憂慮とのうちにさへ現はされたから。彼女は、彼の銃を調べ、それが装填されてゐるかどうかを見ようとしたり、彼が外出する時外套を着て行くようにと膝をついて彼に懇願したりした。……彼女は、細心の注意を拂つて家事を取りしまり、終日掃除してゐた。土曜日土曜日には部屋中のものをひつくり返して、敷物を叩いたり、彼の着物に風を當てたりした。彼は平和にしてゐられる時が無かつた。而も彼は、いつ部屋を掃除する爲めに追ひ出されるか分らなかつた。

晝の間は、自分でこれといつてするやうなことは何もなかつた。女達がすべての事に世話をやいてゐたから。彼は、農事を勉強して、その路に練達しようとして試みたが、あらゆる彼の努力は挫かれてしまつた。彼は、自分の家に在りながら主人ではなかつた。

遂に彼は、絶望してしまつた。何を言つても反對せられたので、彼は寡黙になつてしまつた。氣心の適ふ仲間や同病相憐れむものが無かつた結果、次第に彼の腦髓は鈍つて行つた。

彼の神経は、めちや／＼になつて了つた。彼は、身姿などは構なくなり酒に親みはじめた。

彼は、もう家にゐることとは殆んど無かつた。屢々彼は、料理店や農夫達の小屋の中に、亂酔してゐるのが見うけられた。彼は、誰とでも、そして終日でも飲んでゐた。彼は、談話のうちに慰藉を見出す爲めに、アルコールを以て自分の脳髓を刺戟するのだつた。彼は、自分に反對しない誰かと語らうが爲めに飲んでゐたのか、又は酔ふ爲めに飲んでゐたのか、それは知ることが困難であつた。

現金は女達に握られてゐたので、金を得るために彼は、権利や農作物を小舎住みの百姓達に賣り飛ばした。遂には彼は、己自身の金庫を盗み出して、中みを盗んだ。

邸内には今では正教徒で、教會へ通つてゐる監督がゐた。以前の者は放縱な習慣のために解雇されたのであつた。料理店の主人は遂に牧師の爲めにその鑑札を失つたので、フリチオフは自分の農労働者達と飲むに到つた。醜聞に醜聞がつゞいた。

彼は、アルコールの臭をさせてゐないと癲癇の發作が起るといふくらゐの非常な大酒飲みとなつてしまつた。

彼は、たうとう慈善病院に入れられて、其處に不治の患者としていつまでも居た。

正氣の時には、自分の生活に就いて考へることも出來たが、さういふ場合には、彼の心は

愛なくして結婚を強ひられたすべての女達に對する同情で、充たされたのであつた。彼自身が自然の法則を破つたがための呪を體驗し苦しんだのであるからして、彼の同情は一層深いものであつた。それでも彼は、矢張り一個の人間なのであつた。

彼は、家庭内に於ける自分の不幸の原因を見た——子供に適當な時が來ても獨立した一個の人間となることを許さない、一個の社會組織としての家庭内に於ける自分の不幸の原因を見たのである。

彼は、妻に對しては全く何等の不平を持たなかつた。何故なら彼女も同じく不幸なわけではなかつたか？ 法律といふ神聖なる名の下に敬はるゝ同じく不幸な境遇の犠牲者ではなかつたか？

彼女の父は將軍であつた。彼女の母は彼女がまだ赤ん坊の時、死んで了つた。母の死後數人の婦人達がその家を訪問した。が訪問者は大抵男であつた。そして彼女の父は、自分の手で彼女を教育した。

彼女は、彼と共に馬に乗つて外出し、機動演習に行つたり、體操に興味を持つたり、豫備隊の點呼に出席したりした。

彼女の父が、その友達の群の中で最高の階級にある時には、すべての者が、同階級等の者には恐らく示されることのないほどの、非常な尊敬を以つて彼を扱つた。そして彼女は將軍の娘だつたので、矢張り同様の取扱ひを受けた。彼女は、將軍といふ階級を持つてゐたのだ、そしてそのことを知つてゐた。

入口にはいつも從卒が立つてゐた。そして彼女が出たりはひつたりする度毎にカチャ／＼と物々しく鐵の音をさせて立ち上つては、不動の姿勢をとるのだつた。舞踏會の時には少佐より他には、彼女にダンスを求める者は一人もなかつた。彼女は大尉を下級者の代表として

見、中尉を碗白小僧ぐらゐに見てゐた。

彼女は、人々を全くその階級に従つて評價する習慣に陥つた。彼女は、あらゆる文官を「魚共」と呼び、穢い着物を着てゐる人々を「賤民」と呼び、そして非常に貧しい者を「下層民」と呼んでゐた。

けれども婦人達は、全くこの尺度以外にあつた。すべての人々より上の位置を占め、外出する時にはいつも敬々しく挨拶される彼女の父は、いつでも婦人の前では立止つて、その年齢などには構はずに、見知り越しの者の手には接吻するのであつた。そしてすべての美しい婦人達の言ひなりになつてゐた。この結果、彼女はその生涯に於いて非常に早く自分の性の優越を甚だ確實に悟り、そして、男を低き者として見下すに慣れてしまつたのである。

彼女が馬に乗つて出かけて行く時にはいつでも、彼女のうしろには馬丁がついて行つた。彼女が、景色を嘆賞すべく立止ると、彼も亦立止つた。彼は、彼女の影であつた。しかし彼女は、彼がどんな風な男かとか、彼が若いかな年取つてゐるかとか、そんなことは一向に考へたこともなかつた。若しも彼女が彼の性は何かと訊かれたとしても、どう答へたらいいか知らなかつたであらう。影にも性があるなどといふことは、彼女の心には決して浮んで來なかつた。馬に乗らうとして、その小さな乗馬靴を彼の手に置く時にも、彼女は全く無關心であ

つた。そして時とすると、そばに誰もゐないかのやうに、その乗馬服をはしより上げることさへあつた。

三二六

かくの如く天性階級といふものを特に重大に考へてゐたことは、彼女の全生活に影響を與へた。彼女は、少佐や大尉の娘と友達になることは不可能だといふことを知つた。何故ならば、彼等の父は、彼女の父よりも社會的に低いものであつたから。一度、ある中尉が彼女にダンスを求めたことがあつた。その厚顔を罰する爲めに、彼女は舞踏の合間にも彼と話をすることを拒絶した。けれども後になつて、その相手が王子の一人だといふことを聞いた時、彼女は慰め難い心となつた。彼女は凡ゆる士官の凡ゆる位階と稱號と階級とを知つてゐたが、王子を見分けることに失敗したのであつた！ それは餘りに恐ろしいことであつた！

彼女は、美しかつたが、しかし高慢さが、その姿に、彼女の賞讃者等を追ひ拂つて了ふところの或る硬い感じを與へた。彼女は、結婚に就いて考へたことは一度もなかつた。若い人は、十分な資格を持たなかつたし、社會上の地位に就いて何等の妨げもないやうな人々は、皆老人であつた。若しも、將軍の娘たる彼女が、大尉と結婚したならば、その時には少佐の妻は彼女よりも上になつて了ふであらう。かくの如き屈辱は彼女を殺すに足るのであつた。その上、彼女は一人の男の動産となつたり、彼の應接間の裝飾となつたりすることを全然欲

しなかつた。彼女は、命令することに馴れ、服従されることに馴れてゐた。彼女は、如何なる男にも服従することは出来なかつた。彼女の心に訴ふるものは、男の生活の自由と獨立とであつた。それは、彼女のうちに、女らしいあらゆる仕事を嫌ふ心を養つた。

彼女の性的本能は、遅く目覺めた。彼女は父方の血統では、魂なき軍國主義、飲酒と遊蕩との中にその力を浪費して了ひ、又母方のそれでは、財産の分割を妨げる爲めに生産力を抑制してゐた、さういふ或る古い家庭に屬してゐたので、自然は、危機一髪の時に當つて、彼女の性について遲疑してゐるがやうに思はれた。といふよりは、恐らくはその血統を存続するといふことの如何に就いて、決定を下すべき力を缺いてゐたのであつたかも知れない。彼女の姿は、自然が彼女の任務に對して要求してゐる本質的な女性的な性格を少しも持つてゐなかつた。そして彼女は、その缺陷を技巧的な手段で隠す氣にもならないのであつた。

彼女の持つてゐた少數の女の友達は、性の問題に關聯したすべての事柄に對して彼女が冷淡であり無關心であるのを曉つた。彼女は、それを輕侮の念を以つて取扱つてゐた。兩性間の關係を厭ふべきものと思つてゐた。そして、女が男にその一身を捧げるなどといふことがどうして出来るのか理解することが出来なかつた。彼女の意見では、自然は不淨なものであり、清潔な下着や、糊のきいたペティコートや、穴のあいてない靴下を着けることは道德的

であることであり、貧しいといふことは單に、不潔と不徳といふ言葉の他語に過ぎないのであつた。

彼女は、毎夏を父と共に田舎の邸宅で暮した。

彼女は、その田舎を非常に愛してゐるわけではなかつた。自然は、彼女の感情を小さく造つたのであつた。彼女は森林を不愉快なものを見た。湖水は彼女を戦慄せしめ、又丈高い牧草の中には、危険が隠されてあるやうな氣がした。彼女は、百姓達を狡猾な汚はしい野獸と見做した。彼等は、非常に多くの子供達を持つてゐたが、彼女はその子供達を男であれ女であれ邪惡に充たされたものだと思つてゐた。それにも拘らず彼等は、夏至には、そして將軍の誕生日には、この地主の邸に招かれて、大オペラの合唱團に加つて、その役を演ずるのである。とりも直さず拍手したり、踊つたりするのであつた、そして其時には繪さながらの姿と見えるのであつた。

春であつた。ヘレナは、彼女の良種の牝馬に跨つて遠く片田舎まで乗り込んだ。彼女は疲れを感じて馬から降りた。彼女は、その牝馬を牧場の柵のそばの樺の木にしつかり結びつけた。それから彼女は、溝のそばをぶら／＼歩いて野生の蘭を探り始めた。空氣は柔かく香氣

を放ち、水蒸氣が地面から立昇つてゐた。彼女は、半ば水の湛へられてゐる溝の中へ蛙が飛び込むのを聞いた。

忽ちに牝馬が嘶いて、その細い頸を垣の上に伸して、廣くあいた鼻孔で空氣を吸ひ込んだ。

「アリース！」と彼女は叫んだ。「靜かにおし、お婆さん！」

さうして彼女は、慎しやかな花を集めつゞけてゐた。それは、正に模様を置いた更紗のやうに見える最も綺麗なそして最も清楚なカーテンのうしろに、その祕密を非常に巧みに隠してゐるのであつた。

けれども牝馬が再び嘶いた。柵の他の側にある榛の繁みのうしろから、より深いより力のこもつた第二の嘶きが答へた。と、その圍ひの中のじく／＼した地面が揺れて、力強い蹄は左右に小石を蹴散らしながら、一頭の黒い牝馬が全速力で走つてやつて來た。引き緊つた頸の上には素晴らしい頭がつてゐた、筋肉は、光澤ある皮膚の下に繩か何ぞのやうに見えてゐた。そこにゐる牝馬を見ると彼の眼は輝き出した。彼は立ち止つて、丁度欠伸でもしようとしてゐるやうにその頸を伸して、上唇をあげて齒を現はした。それから彼は、草を越えて飛んで來て、木柵のところに近づいた。

ヘレナは、スカートをたくし上げて、牝馬のところへ走つて行つた。彼女は手をあげて馬

勒を捉へようとした。しかし牝馬は、逃げ出して柵を飛び越して行つた。それから戀愛が始まつた。

彼女は、柵のところに立つて呼んだ。しかし昂奮してゐる牝馬は耳にもかけなかつた。柵の内側で、二頭の馬は追ひつ追はれつしてゐた。それは危急な場合であつた。牡馬の息はその鼻孔から煙のやうに吹き出て、白い泡が肩の上を斑にした。

ヘレナは、その光景を見て全く恐ろしくなつたので逃げて行きたかつた。彼女はこれまでに生ある肉體の内にある本能の憤激を、目撃したことがなかつた。この無拘束の本能の發露は、彼女を戦慄させてしまつた。

彼女は、その牝馬を追ひかけて行つて、暴力で彼女を引張つて來たかつた。けれども彼女は、野育ちの牡馬を恐れた。彼女は、助けを呼びたく思つたが、他の目撃者を引寄せることが厭はしかつた。彼女は、その光景に背を向けて、待つてゐようと決心した。

馬の蹄の音が道の方から聞えて來た。一臺の馬車が視界に現はれた。

到底逃場はなかつた。彼女はその場に留つてゐることを恥ぢたけれども、駈け出してももう遅かつた。馬は歩をゆるめて、馬車は彼女の前、數碼のところにとつた。

「まあ綺麗なこと！」と馬車に乗つてゐた一人の婦人が叫んだ。そして、その光景をもつと

よく見ようとして、金色の双眼鏡をあげた。

「でも、何故留つてるの？」と他の一人が苛立たしく言ひかへした。「駈けておくれ！」

「綺麗だとは思はないこと？」と年取つた方の婦人は訊いた。

馭者の微笑は、そのふさ／＼した鬚の中に消えた。彼は馬を急がせた。

「貴方はいかにも淑女ぶつてる方ね、ミリイさん。」と最初の聲が言つた。「私にとつては、ああいふ事件は大雷雨のやうな氣がするわ、でなければ重々しい海のやうな……」

ヘレナは、もうそれ以上聞き得なかつた。彼女は困惑で、恥かしさと恐ろしさで、滅茶滅茶にされたやうな氣がした。

一人の農夫が道を、足をひきすり／＼歩いて來た。ヘレナは、彼にこの光景を見せまいとし、そして同時に助けを求めようとして、彼の方へ走つて行つた。しかし彼はもうすぐそばまで來てゐた。

「わしは、こりや粉屋の黒馬に違えねえと思ひやすだよ。」と彼は質朴に言つた。「だとしても、濟むまで待つた方がよう御座んせうよ、奴なら邪魔をしたつてきくどころぢやねえですからな。お嬢さんがわしに任しておくんなさるなら、後程この牝馬はお宅へお届けしますべえ。」

事件がこゝに結着したおかげで、ヘレナは急いでそこを立ち去つた。家へ着いた時、彼女は気分が悪かつた。

彼女は、もう一度とその牝馬に乗ることを拒んだ。何故なら彼女の眼にはその獣は不潔になつたやうに見えたから。

このちよつとした出来事は、ヘレナの精神上の發達に豫期以上の大きな影響を齎した。人間社會でならば禁錮といふもので罰せられるべきこの本能性の野蠻な爆發、露骨な光景は、恰も死刑執行の場に居合せでもしたかのやうに彼女を狩り立てた。それは、晝の内は彼女を苦しませ、夜はその夢をかき亂した。それは、自然に對する彼女の恐怖を増させ、以前の勇婦のやうな生活を棄てさせた。彼女は、家の中に引籠つて、勉強に身を任せた。

その家は、書庫を誇つてゐた。しかし不幸にも彼女の祖父の死後に増加された本は一つもなかつた。それ故一時代も古い本ばかりであつた。そこでヘレナは、時代おくれの理想を見出した。彼女の手にはひつた最初の本はマダム・ド・スタエルの「コリンナ」であつた。その本が棚の上に載せてあつた様子から見ると、それは或る特殊な目的に奉仕したことを示してゐた。綠色と金色とで装幀され、縁のあたりはぼろ／＼しか／＼つてゐた。一杯に傍註が施され

たり章句に線が引いてあつたりしたが、それは彼女の亡き母のしたこと、それは云はゞ母と娘との間の橋となり、今では成熟してゐる娘をして亡き母の知己たらしめ得るものであつた。これらの鉛筆書きのノートは一つの魂の物語であつた。殺風景な人生、及び自然の野蠻性に對する不愉快が、それを書いた人の空想を刺戟し、そして魂どもの住んでゐる、具體的でない夢の世界を形作るに到つたのであつた。この夢の世界は、本質的に貴族的な世界であつた。何故ならば、それは魂が思想に依つて養はれ得るやうにと、その住民等から經濟的な獨立を要求してゐたからである。物語と呼べるゝこの腦膜炎は、富者の福音書であつて、下層社會へはひり込んでしまふ否やそれは馬鹿げつた憐れむべきものとなるのであつた。

コリンナは、ヘレナの理想となつた。純潔な生涯を送らうとして貞節の誓ひを立てた中世紀の尼のやうな、神の如く感悟したこの女詩人は、勿論立派な群衆によつて賞讃されたこの女詩人は、取るにも足らぬそこらの有りふれた人々の頭上、計り知られぬ程の高所に昇つてゐた。それは、すつかりそのまゝ置きかへられた古い理想であつた——最敬禮、不動の姿勢、太鼓の音、何處に行つても最上席、といふものに過ぎなかつた。ヘレナは、マダム・ド・スタエルがコリンナの理想を通り越して生きてゐたのだといふ事實を、全く知らなかつた。そして夢の世界から現實の世界へやつて來るまで、その本當の影響を受けるには到らなかつた。

彼女は、日常事件に興味を持つことをやめて了つた。彼女は、我れ自らと語り、自分の自我に就いて深く考察した。母が遺稿としてのその手記に於いて彼女に遺して行つた遺産が、發芽し始めた。彼女は、自分がコリンナと母との兩者に同一なものだと思つた。そして人生に於ける彼女の天職といふことに就いて多大の時を費して熟考した。自然は、彼女が母となりそして人類の繁榮に於いてその役目を果すことを欲したのであるが、彼女はそれに同意することを拒んだ。彼女の使命は、マダム・ド・スタエルのコリンナが五十年前に考へたところのものを、人類に向つて説明することなのであつた。けれども彼女は、その思想は彼女自身のものだと思つて、表現を見出さうとして努力した。

彼女は書き始めた。或日彼女は、詩を試みた。成功した。その行は、皆同じ長さで、その最後の言葉は韻を踏んでゐた。非常な光明が、彼女の上に現れた。彼女は詩人であつた。たゞ一つの事が残つてゐた、彼女は理想を欲した、だが彼女はそれをコリンナからとつて來ることが出来た。

こんな風にして可なり多くの詩が作りあげられた。

而もそれらの詩は、世の中へ出されなければならなかつた。で、印刷されなければさうするわけにはゆかないのであつた。或日彼女は、一つの詩を、サッフオといふ題をつけコリン

ナといふ署名をして畫入新聞へ送つた。彼女は、胸を躍らしながら自分でその手紙をポストへ入れに行つた。そしてそれがポストの中へ落ちた時、彼女は穩かに「神」に祈つた。

試煉の二週間がつゞいた。彼女は何も食べなかつた、殆んど眼を閉ぢることもなかつた、そして晝の間はひとりぼつちで暮した。

土曜日が來て、新聞が配達された時、彼女は熱病でも病んでゐるやうに慄へた。そして彼女の詩が印刷されてもゐず、「通信欄」に書かれてもゐないのを知つた時には、彼女は殆んどひつくり返りさうであつた。

次の土曜日には、或る確實さを以て彼女は返事を當てにすることが出来たので、新聞が來ると封もきらずにそれをポケットに押し込んで、森の中へ行つた。隔絶された場所に到着して、誰も見る者のないことを確かめると彼女は、新聞の封をきつて、急いで内容に眼を通した。たつた一つ「鐘突男の日」といふ題の詩が印刷されてゐた。彼女は、通信欄を引くり返した。其處の小さな活字を一目見ると、彼女はひどくびつくりした。彼女の指は、その新聞紙を掴み、球のやうに丸めて、藪の中へ抛り込んだ。それから彼女は、緑の下萌の中で光つてゐるその白い球を、魅せられたやうに凝視してゐた。生涯に於いて始めて彼女は侮辱を受けたのであつた。彼女は全く落膽しきつた。その未知の新聞記者は、今まで何人も敢へてしなかつ

たことをした。彼は、彼女に對して無作法なことをしたのであつた。彼女は、彼女の塹壕の
 かけから闘場へ出たのだ。そこでは、門閥などは何の足しにもならないのであつて、勝利は
 たゞ、我々が才能と呼んでゐるところの驚くべき自然の附與物に屬するものなのである。そ
 して、それが最早否定されない場合には、その前にはあらゆる權力も跪くのである。しか
 し、その未知の記者も亦、彼女のうちの女なるものに腹を立てたであつた。何故ならば彼は
 かう言つてゐた。

「千八百七七年のコリンナは、もしも彼女が千八百七十年後まで生きてゐたならば、食事の料
 理もすれば搖籃を揺ることもしたであらう。しかし貴方はコリンナではない。」

始めて彼女は、敵の、仇敵の、男といふものの、聲を聞いたのであつた。食事の料理と搖
 籃を揺ること！ 見てゐるがよい！

彼女は家へ歸つた。彼女は、自分の筋肉が殆んどそのゆる／＼になつた神経の命令に従ふ
 ことが出来なかつた程、打碎かれたことを感じてゐた。

暫く行つてから彼女は、突然振り返つて、もと來た道をたどつた。若しも誰かがあの新聞
 を見たら！ それは彼女を粉碎するであらう。

彼女は、その場へ戻つて、榛の藪を分けて、新聞をそのあつたところから引き出して、それ

を丁寧に熨した。それから彼女は、一塊の芝士を持上げてその下に新聞紙を隠し、そしてそ
 の上に石をころがした、そこに埋つてゐるといふことは一つの希望であり、又證據でもあつ
 た——何の？ 彼女が罪を犯したことの？ 彼女は、罪を犯したことを感じた。彼女は悪い
 ことをした。異性の前に自らを裸にして見せたのであつた。

この日以来彼女の心の中では、或る争闘が進行して行つた。公開といふことの野心と恐怖
 とが彼女の心の内に相争つた。そして彼女は決論を下すことが出来なかつた。

その秋になつて彼女の父が死んだ。彼は賭博に耽つて、そして勝つことよりは失ふことの
 方が餘程多かつたので、彼はそのあとへ負債を残して行つた。けれども機敏なる社會に於い
 ては、こんなことは何でもないのである。ヘレナにとつては、店かなにかでその生計
 を儲けるなどといふことは、全く必要もなかつた。此時までは少しも知らなかつた叔母が現
 れて、彼女に一つの家庭を提供してくれた。

しかし、彼女の父の死は、彼女の立場に全然の變化を齎した。最早敬禮もされなかつた。
 聯隊の士官達は、彼女に友達らしい風をして頷いた。中尉達も彼女にダンスを求めた。彼女
 に示されてゐた尊敬は、彼女といふ人間に示されてゐたのではなく、單に彼女の階級に對し
 てであつた、といふことを彼女は明瞭に見た。彼女は、低落を感じた。そしてすべての下級

の者に對する明かなる同情が彼女のうちに生れた。彼女は、自分の以前の特權を楽しんでゐる多くの人々に對しては或種の嫌惡を感じさへした。かういふ感情を懷くと同時に、個人的評價に對する憧憬が生じ、あらゆる他の人々に抽んずる地位を得ようとする欲望が生じた。尤もそれは軍隊名簿には誌さるべき種類のものではなかつた。

彼女は、自己を著名にし、名聲を贏ち得、そして支配しよう(何故さうしてはならないのであらう?)と熱望した。彼女は、或る程度まで修養した一つの技能を持つてゐた、尤も彼女は、それに於て普通以上には出てはゐなかつたけれども。彼女はピアノを彈奏することが出來た。彼女は調音を學び始めた。そしてまるで自分が書きでもしたかのやうに、G短調のソナタやF長音のシンフォニーに就いて語つた。で直ちに音楽家達を最良し始めた。

彼女の父が死んでから六箇月の後、女官の地位が彼女に提出された。彼女はそれを受容れた。太鼓の響や軍隊の敬禮が再び始まつた。そしてヘレナは、下級者に對する同情を次第に失つて行つた。けれども心といふものは、富と同じく變り易きものである、で、新しい經驗は、再び彼女の見解を變化せしめた。

或る日、さう久しく経たないうちに、彼女は自分が一個の召使に過ぎないといふことを見出した。彼女は、公爵夫人と共に公園の中に坐つてゐた。公爵夫人は編物をしてゐた。

「新しい女なんてものは全くの馬鹿だと私は思ふね。」と公爵夫人が言つた。

ヘレナは眞蒼になつた。彼女は、夫人の顔を凝視した。

「私はさうは思ひません。」と彼女は答へた。

「私はお前の意見を訊きやしなかつたのだよ。」と公爵夫人は答へて、毛絲の球を泥の上に落した。

ヘレナの膝は震へた。彼女の未來、彼女の地位は、彼女の眼の前を電光の閃きのやうに過ぎ去つた。彼女は毛絲の玉を拾ひ上げに行つた。彼女が腰を屈めた時その背は破れたかと思はれた。公爵夫人が一言の感謝もなくその玉を受取つた時には、彼女の頬は燃えた。

「お前怒つてやしない?」と公爵夫人は、その犠牲者を無遠慮に見つめながら訊いた。

「どう致しまして、奥さま。」といふのがヘレナの信すべからざる答へであつた。

「お前も新しい女だつて皆言つてよ。」と公爵夫人は續けた。「本當?」

ヘレナは、その苦痛を加へる者の前に裸體で立つてゐるやうな心持がした。そして何とも答へなかつた。

再び玉が地面にころがつた。ヘレナは、それに氣がつかないやうな風をしてゐた。そして彼女の眼に湧き出て來る忿怒の涙を、押しとどめようとして唇を嚙んだ。

「毛糸を拾つて頂戴な。」と公爵夫人が言つた。

ヘレナは、自分の身を引緊めて、その専制君主をちつと眞正面に見据ゑて、そして言つた。

「いやでございます。」

そして、この言葉と共に彼女は、振り向いて逃げ出した。彼女の足の下では砂がギシ／＼と鳴り、彼女の走るにつゞいて少しばかり塵煙があがつた。彼女は、石段を殆んど駆け降りるやうにして、姿を隠してしまつた。

宮廷に於ける彼女の経歴は終りをつげた。しかしこの刺戟は残つた。ヘレナは、不名譽な地位にあるといふことが何を意味するか、又就中地位を投げ棄てるといふことが何を意味するかといふことを感ぜしめられた。社會は、變化を是認しないものである。そして誰も、彼女が宮廷の目の光を氣まぐれに放ち棄てたのだといふことは敢て、信じなかつた。確かに彼女は追ひ出されたのでなければならなかつた。さうだ、さうに違ひない、彼女は追ひ出されたのであつた。これまでに彼女は、これ程卑屈を感じたことはなかつた、これ程侮辱を受けたことはなかつた。彼女は、社會上の地位を失つて了つたやうな氣がした。彼女の身内の者達は彼女を冷淡に取扱つた、恰も彼女の不名譽が傳染性のものであることを恐れてでもゐるかのやうに。彼女の以前の友達は、彼女を疎んじて、なるべく話もしないやうにした。

一方に於いては、彼女が以前の高さよりも低くなつたので、中流社會は彼女を、腕を開いて歓迎した。最初彼等の友情が、彼女自身の階級の者の冷淡さ以上に彼女を立腹させたことは事實であつたが、終ひには、彼女は、遂に高きに登らんがために、先づ屈む者たる道を選ぶに到つた。彼女は、政府の役員や、教授達の一團と結んだ、それらの人々は歡呼の聲をあげて彼女を迎へた。すべて宮廷と結びつけられてゐる人々を、中流階級者が見るところの迷信的な畏敬によつて昂奮して、彼等は早速彼女に尊敬を拂ひ始めた。彼女は、選ばれたる指揮者となり、そして聯隊を形作るべく急いだ。多くの若い教授達が早速加入した。そして彼女は、婦人達の爲めに講義を開始した。陳腐なアカデミックな下らぬ思想が、塵にまみれてゐる物置の中から持ち出されて、新しい品物として賣られた。道具を除けて了つた食堂の中で、プラトリーやアリストオトルに關する講義が、不幸にも智慧の祭壇に到る鍵を持つてゐない聽衆に對して與へられたのであつた。

ヘレナは、これらの似而非神祕をわがものとすることに依つて、無知な貴族にありがちな知力的優越を感じた。この感じは、人々に感銘を與へたといふ自信を彼女に與へた。男達は彼女が美しいこととつんとしてゐることを崇拜した。しかし彼女は彼等と交つても、少しも動されたといふ氣はしなかつた。彼女は、彼等の尊敬を女に對する當然の貢物として受取

つてゐた。そして、彼女が通る時にはいつも飛び上つて不動の姿勢をとるこれらの従僕共を尊敬することは、彼女にとつては不可能のことに思はれた。

けれども遂には、未婚婦人としての彼女の位置は、彼女を満足させなくなつた。そして彼女は、結婚してゐる姉妹達の楽しんでゐる自由を羨望の眼を以つて見た。彼等は、行きたい處へ何處へでも行き、話したい人と誰とでも話す自由を持つてゐた。そして彼等は、彼等と逢ひ彼等を家まで送つてくれもする従僕を夫に見出してゐるのだつた。且つ又既婚婦人は、一層善き社會上の地位と、その上非常に多くの勢力とを持つてゐた。例へば彼等は、如何なる謙讓さを以つて未婚女を取扱つてゐたであらう！ けれども、彼女が結婚に就いて考へた時にはいつでも、あの牝馬の出來事が、彼女の心の中に閃いて、恐怖が彼女を氣持悪くさせるのであつた。

第二年目に、ウブサラから一教授の細君がやつて来て、彼等のところへ現れた。彼女は職務上の地位に加ふるに、非常な美貌を持つてゐた。ヘレナの星は色褪せて了つた。あらゆる彼女の崇拜者等は、彼女を棄て、新しい太陽を崇拜し出した。彼女が最早以前のやうな社會上の地位も有せず、宮廷の風味も、ハンケチの上の香水の如く消え失せて了つたので、彼女は闘ひに負けたのであつた。彼女に對して忠實な家來が、たつた一人残つてゐた。倫理學の講

師であつたが、彼はこれまで自家廣告をしたことは一度もなかつた。彼の注意は好意をもつて受けられてゐた。といふわけは、彼の倫理學の嚴格さが彼女をして彼に無限の信用を持たせたからであつた。彼は、人々がその話を寄るとさはると始めた程、精を出して彼女を口説いた。ヘレナは、しかし何らの注意をも拂はなかつた、彼女はそれ以上であつた。

或晩、「夫婦間の愛に於ける倫理的要素」又は、「絶對合一の表示としての結婚」の講義のあとで、(その講義のために講師は、彼の實費と感謝に充ちた握手との他には何も受けてゐなかつた。) 彼等は、ガランとした食堂の中の不愉快な竹の椅子に腰かけて、その問題を論じ合つてゐた。

「ぢやあなたはかう仰しやるんでしょ。」とヘレナは言つた。「結婚とは、二つの同一なる我の間の共存關係だと？」

「つまり、僕の言ふのは、講義で言つたことなので、もしも二人の間に適當なる合一といふさういふ關係が存在しなさへするならば、『存在』は、より高い可能性を持つ『轉化』の中に、共に流れ込むことが出来るといふのです。」

『轉化』とはどういふ意味なんです？」とヘレナは、赤くなりながら訊ねた。

「二つの我が、新しい我となつた、後の存在といふことです。」

「何ですつて？ あなたの仰しやるのは、なんですか……二つの相似の存在から、必然的にそれ自ら轉化に結合してゆく私の連續……」

「いや、お嬢さん、僕はかう言ふだけなのですよ、世俗的な言ひ方をすると、結婚とは單に新しい精神的我を生ずるのみで、その我は魂の兩立する時には性に關して區別を立てることは出来ないといふのです。さういふ状態の下に生れた新しい人間は、男性と女性とを一緒に集めたものとするでせう、さう僕は言ひたいのです。兩方共がその個性に譲つたところの新しい生物、集合の結合、よく言はれる言葉を使へば、『おとこをんな』です。男は男たることを罷め、女は女たることを罷めたものです。」

「それは魂の結合です！」とヘレナは、危険な懸崖をうまく舵を取つて行つたことを喜んで叫んだ。

「それはプラトーのいふ魂の調和です。それは、僕が折々夢想する眞實の結婚なのです。しかし不幸にも僕は、殆んどそれを實行に於いて實現することが出来ないんです。」

ヘレナは、天井を見詰めて、私語いた。

「選ばれた者の一人であるあなたが、どうしてその夢想を、實現させることが出来ないんでせうね？」

「それは、僕の魂が抗し難い熱望を以つて惹きつけられてゐる彼女は——ふむ——愛を信じてゐないので。」

「そんなことは確かには分りませんわ。」

「たとひ彼女が愛を信じたとしても、彼女はその感情が眞面目なものではないであらうといふ疑ひによつて常に苦しめられてゐるでせう。その上、この世には僕に戀するやうな女は無いのです。さうです、一人も無いのです。」

「ありますよ、ありますよ。」とヘレナは、彼の義眼を見詰めながら言つた。(彼は義眼を入れてゐた。がそれは非常によく出来てゐて、それを見露はすことは殆んど困難であつた。)

「確かにですか？」

「本當に確かに。」とヘレナは答へた。「あなたは他の男たちとは違つてゐますもの。あなたは、精神的の愛、魂の愛が、何を意味するかといふことを知つてらつしやるんですもの！」

「もし、さういふ女がゐるとしても、僕はどうしても結婚することが出来ないんです。」

「何故出来ないんです？」

「一つの部屋をその女と分けるなんて！」

「さうする必要はないぢやありませんか。マダム・ド・スタエルは、その夫と同じ家に住んで

「おたに過ぎないんですわ。」

「さうだつたんですか？」

「まああなた方お二人はどんな面白いことを論じてらつしやるの？」と、應接間から出て来た教授の細君が訊いた。

「私たちはラオコーンに就いて話してゐるんですよ。」とヘレナは、椅子から立上りながら答へた。彼女は、その婦人の聲のうちに謙讓な調子があることに腹を立てゝゐた。そして彼女は決心した。

一週間後には、その講師に對する彼女の婚約が公然と發表された。彼等は、秋になつたらば結婚してウブサラに居を卜することに決めた。

倫理學講師の獨身生活の終結を祝福するために、華やかな宴會が、催された。非常に多くの酒が飲まれ、そして、その町の誇りである唯一の畫家なる、僧侶の學校の圖畫の教師が、この犠牲者の經歷を近代的に大膽な輪郭畫で描いた。それは、この宴會全體の特色となつた。倫理學は、教授の題目であり、又多くの他のものと同じく乳牛のやうなものであつた、そしてそれは、社會の生活にも、個人の生活にもどちらにも、重大な影響を與へることを必要とし

なかつた。講師は聖者ではなかつたが、すべての他の者と同様に彼の事件を持つてゐた。それらは公のものであつた。何故なら、彼はそれらを隠しておく理由を全く持つてゐなかつたから。心おきない微笑を以つて彼は、自分の眼前に展げられてゐる、鉛筆や繪具で畫かれ、諷刺詩まで書き添へてある自分の生涯を見成つてゐた。けれども、遂に彼の近づきつゝある幸福が單純な而も力強いスケッチによつて描かれてゐた時、彼はひどく狼狽した。そして、「若しヘレナがそれを見たら！」といふ考へが、電光の如くに彼の頭に閃いた。

古來の久しい慣例によつて彼はブランドイを八杯も飲んだので、その宴會の後では、彼は、最早自分の恐怖や不安を制へる力もなくなつた程、酔拂つて了つた。客のうちに一人の結婚してゐる男がゐたので、この犠牲者はその男の方へ向いて、相談と忠告とを求めた。二人共素面ではなかつたので、部屋中での最もかけ離れた場所として、中央の、蠟燭のすぐ下の二つの椅子を選んだ。そこで彼等は、忽ちに熱心な聽衆によつて取巻かれてしまつた。

「ねえ君！ 君は既婚者だ。」講師は、會集に聞えてはいけないと思つて、愚かにも聲を限りに言つた。「君は僕に一言忠告を與へてくれなければならん。たつた一言、たつた一言の忠告だ。僕はね、今夜は馬鹿に感じ易いんだからね。この特殊なる問題に就いては特に。」

「よし來た、兄弟。」と彼の友が叫んだ。「君の言ふ通りたつた一言。」さうして彼は、相手に

囁くことも出来るくらゐに、彼の肩に手を廻した。それから聲高く叫びつゞけた。「すべての行爲は三部から成つてゐるんだ、兄弟。前進と絶頂と逆行だ。第一のものに就いて話さう、第二のものは決して言へないんだ。さうだ、所謂先を打つんだ。言はゞこれが男の特權だ——君の役だ！ 君は機先を制しなくてはいけない、君は攻撃しなくてはいけない。解るかね？」

「だが、もしか相手が先をうつことを認めないとしたら？」

友は、びつくりしてその初心者を見つめた。それから彼は立ち上つて、輕蔑するやうに彼に背を向けてしまつた。

「馬鹿！」と彼は呟いた。

「有りがたう！」と感謝に充ちた生徒はこれだけやつと答へることが出来た。

やつと彼は理解した。

翌日は彼は、強い酒を澤山飲んだ爲めに昂奮してゐた。彼は、湯浴みをした。何故なら三日目には結婚式があるのだつたから。

結婚に招かれた客達は去つた。召使が卓を片づけて行つた。彼等は差向ひになつた。

ヘレナは割合に靜かであつたが、彼は著しく昂奮してゐた。彼等が婚約した當時は、眞面目な主題の會話によつて高められてゐたのであつた。彼等は、通常のさらにある婚約者同志のやうには、決して振舞つてゐなかつた。抱擁も接吻もしなかつた。彼がほんの一寸した親しみを企てた時でも、彼女の冷たい眼眸が彼の熱情を凍らしてしまつた。けれども彼は、彼女を男が女を愛するが如くに、全身全靈を以つて愛してゐたのであつた。

彼等は應接室でもじ／＼して、話をしようとしてゐた。しかし幾度も幾度も頑固な沈黙といふ奴がのさばり出て來た。枝燭臺の蠟燭は燃えて短くなり、蠟は敷物の上に脂の滴りとなつて落ちてゐた。食物の香や酒の香は、傍卓に載せてある花嫁ヘレナの花束のカーネーションやヘリオトロップから發散する淫逸な香にまじつて、その場の空氣は重苦しかつた。

遂に彼は、彼女のところへ歩み寄つて腕を差出した。そして、自然に纏かせようと彼ののぞんでゐる聲で言つた。

「さあ、もう君は僕の妻だ！」

「それはどういふ事なんです？」とヘレナは唐突に答へた。

全く不意を打たれて、彼はその手を傍へ落した。しかし彼は、殆んどすぐに、再び氣を取り直して、意識的な微笑を浮べながら言つた。

「我々は夫婦だといふことなんだよ。」

ヘレナは、彼が氣でも狂つたのではないかと思つてでもあるやうに、彼を眺めた。

「その言葉を説明なさい！」と彼女は言つた。

それは、正に彼がなし能はざるところのものであつた。哲學と倫理とは彼を見すてしまつた。彼は、冷たい、そして著しく不快な現實に面と向つてゐた。

「これは謙遜だ。」と彼は考へた。「この女は全く正しい。が俺は攻撃しなくてはならない。そして俺の義務を盡さなくては。」

「あなたは私を誤解してらつしやるのね？」とヘレナは訊いたが、その聲は顫へてゐた。

「いゝや、勿論誤解してやしない。だが、ねえ赤ちやん、ふむ——我々は——ふむ……」

「何てことを仰しやるんです？ 赤ちやんですつて？ あなたは私をどう見ていらつしやるんです？ どういふつもりなんです？ アルバート、アルバート！」——彼女は返事も待たずに突進した、がそれを彼女は欲してゐはしないのであつた——「偉大になつて下さい、高尚にしてゐて下さい。そして、女のうちに、性以上のものを見ることを知つて下さい。さうして下さい、さうすればあなたは、幸福で、偉大になれるんです！」

アルバートは打ちひしがれた。自分に間違つた勸告をした悪しき友に對する、恥と怒りに打ち碎かれて、彼は彼女の前に膝を折つて手を投げ出し、そして口吃りながら言つた。

「許してくれ、ヘレナ。君は僕よりもよつほど高尚で、純潔で、善良だ。君は、一層美しい素質を持つてゐる。そして、僕が下等なことで滅びさうになるとき、君は僕を高めて呉れるだらう。」

「お立ちなさい、そして強くなつて下さい、アルバート。」とヘレナは、豫言者のやうな態度で言つた。「おだやかに行つて下さい、そして愛と下品な色慾とは、二つの全く異つたものだといふことを世界に示して下さい。お休みなさい！」

アルバートは立ち上つた。そして彼女の部屋にはひつて、戸を閉めきつたその妻のうしろ姿を、決心がつかぬもののやうに見成つてゐた。

最も高貴なそして最も純潔な感情でいつぱいになつて、彼も亦自分の部屋にはひつた。彼は上衣を脱いで葉巻煙草に火をつけた。彼の部屋は、獨身者の部屋のやうに飾りつけられてゐた。ベッド用の長椅子、書物卓、書棚、洗面器などで。

着物を脱いでから彼は、水瓶の中へタオルを浸して、自分の體をギュウ／＼擦つた。それから彼は、ソファの上に横になつて、夕刊新聞を開いた。彼は、煙草をふかしてゐる間に讀むことを欲したのであつた。彼は、保安論に關する一つの論文を讀んだ。彼の思想は、一層正當な道を流れ始めた。そして彼は自分の位置を考へた。

彼は結婚したのであつたらうか？ それともまだ獨身なのだつたらうか？ 彼は、以前の通り獨身者であつた。が其處には或る差異があつた——彼は今女の寄宿人を持ち、そしてその女は何も拂つてゐないのであつた。それは別に愉快なことではなかつたが、それは事實であつた。料理人が家を保つてゐる。下女が部屋の用事をする。ヘレナは、何處へはひつて來たのであらう？ 彼女は、個性を發揮しに來たのだ！ おゝ、くだらぬ考へだ！ 俺は馬鹿だ！ と彼は思つた。若しも、彼の友が言つたことが本當だつたとしたら？ 若しも女といふ者は、常にかういふ状態の下に、こんな馬鹿な行爲をしてゐるものだとしたら？ 彼女の方で彼のところへやつて來ることは出來ないのだ——彼が彼女のところへ行かねばならぬのだ。若しも彼が行かなかつたら、彼女は多分明日彼を嘲笑するだらう。或は、もつと悪いかも知れない、腹を立てるかも知れない。女といふものは誠に理解し難いものだ。彼は、やつて見なければならぬ。

彼は飛び上つて、寢巻を着て、應接間へ行つた。膝をガタ／＼慄はしながら彼は、ヘレナの戸口で耳をすました。

音もしなかつた。彼はやさしい氣持になつて一二歩近づいた。彼がノックした時には青い電光が彼の眼の前を走つた。

何の答へもない。彼ははげしく慄へ、そして汗の玉が額にたまつた。

彼は再びノックした。そして渴いた咽喉から出て來る金切聲で言つた。

「僕なのだよ。」

返事はなかつた。恥かしさに壓倒されて、彼は困惑し凍えきつて自分の部屋に歸つた。

それでは彼女は本氣だつたのだ。

彼は、シイツの中にもぐり込んで、再び新聞をとり上げた。

彼がまだ左程長い間讀まないうちに、彼は往來に人の足音を聞いた。それは次第に近づいて來て、やがて立ちどまつた。柔かな音楽が彼の耳にはひつた、深い強い聲が起つた。

‘Integer viae sclerisque purus’……（無邪氣なる惡と純潔の生活よ）……

彼は感動させられた。それは如何に美しかつたであらう！

純潔！ 彼は、物質以上に高められた氣がした。では、それは、この高き結婚觀は、時代精神と一致してゐたのだ。その時代に浸透してゐたところの倫理學の潮が、その國の青年の胸の中に流れてゐたのだ……。

‘Nec venenatis……’（而して害毒なきものよ……）

若しもヘレナが彼女の戸を開けたら！

彼は、靜かに拍子を取つた、そしてヘレナが自分に望んだと同様の偉大さと高貴さを感じた。

‘Fusce pharetra!’ (色褪せたる戰慄よ!)

彼はその窓を開いて、そこへ來た大學生等に彼の妻の名に於いて感謝しなくてはならないのではなかつたか?

彼は、寢床から出た。

彼が帷とほりを引かうとして手を上げた丁度その瞬間に、四倍された調子をそろへた笑聲が、窓硝子にぶつかつて碎けたのであつた。

最早疑ふ餘地はなかつた。彼等は、彼にからかつてゐたのであつた!

怒りの爲めにわれ知らず、彼は窓際からよろ／＼と退いて、書物机へ突きあたつた。彼は、物笑ひの對象であつたのだ。この、屈辱的な光景のために彼が感謝せねばならなかつたところの、女に對する、微かな憎惡が彼の心の中に動き始めた。しかし彼の愛は、彼女を免した。彼は、下にゐる、からかひ手に對して激昂してゐた。そして彼等を、當局へ引張つて行つてやらうと誓つた。

けれども、彼は、自分が言ひなり次第になつてゐたといふ奮激のために、幾度も幾度も自

分の不愉快な立場へと歸つてしまふのであつた。彼は東が白々と明けてくるまで、部屋の中を歩いてゐた。それから彼は、生涯の最も幸福なる日であるべき結婚の當日の淋しい終り方を深く悲しみながら、寢床の上に身を投げ出して、熟睡した。

翌朝彼は、朝飯の食卓でヘレナに逢つた。彼女は、いつもの通り冷やかで落着いてゐた。アルバートは、勿論セレナードのことは言ひ出さなかつた。ヘレナは、未來に對して大きな企畫を立て、そして賣淫廢止論についてすばらしく物語つた。アルバートは、途中で彼女に出逢つたのであつた。で、彼女を助けて、出来るだけのことをしようとして約束した。人類は純潔でなければならぬ。何故なら獸のみが不純なのであるから。

朝飯が済むと、彼は講義をしに出かけて行つた。セレナードが、彼の疑念を惹起した。そして、彼が聴衆を見成つた時、彼等は互ひに合圖をし合つてゐたと思つた。彼の同僚も亦、彼を立腹させるやうなやり方で彼を祝福してゐるやうに思はれた。

勇氣と生活の喜びとを發射してゐるやうな大きい頭丈な一人の同僚が、書庫の方へ行く廊下で彼を留めて、彼の襟を掴んで、その廣い顔に巨大な澁面をつくつて言つた。

「どうだね?」

「君は、君自身を恥ぢるがいゝ。」この憤慨した答へと共に彼は、引きちぎるやうにそこを去

つて、階段を駆け降りて行つた。

帰宅した時、彼の家は細君の友達でいつばいだつた。女達のスカートは彼の足を磨るのだつた。そして彼が安樂椅子に腰をおろした時、彼は女達の着物のうづ高い積み重ねの中に沈み込んで見えなくなつてしまふかと思はれた。

「昨晚のセレナードのお噂を承りましたよ。」と教授の細君が言つた。

アルバートは眞蒼になつた。しかしヘレナはその挑戦に應じた。

「あれは悪氣のないものでしたわ。でもあの連中は、ほんたうは素面しらふだつたのかも知れませんね。生徒達のひどい飲酒は恐ろしいものですね。」

「どんなことを、歌つてゐたんです？」と教授の細君は訊いた。

「おゝ！ いつもの歌よ。『わが生活は海』とか何とかいふ。」とヘレナは答へた。

アルバートは、びつくりして、彼女を見詰めた。しかし彼は、彼女を賞讃せざるを得なかつた。

その日は、雑談や議論で暮れた。アルバートは疲労を感じた。彼は、日常の仕事のあとで女達と愉快に話して數時間を送ることを楽しみとしてはゐたが、それにしてもこれは實際多過ぎた。その上彼は、彼等の言ふことに一々同意しなければならなかつた。何故ならば、彼

が反對の意見を發表しようとする時にはいつでも、彼等は、忽ちに彼に喰つてかゝるのであつたから。

夜になつた。寝る時刻となつた。夫婦は、互ひにお休みを言つて、別々の部屋へ引込んだ。

再び彼は、疑念と不安によつて攻撃された。彼は、ヘレナの顔に優しい色が見えたやうにも思つた。そして彼女が彼の手をぎゅつと握りしめはしなかつたかどうか、どうも確かではなかつた。彼は、煙草に火をつけて、新聞を擴げた。彼は、三面記事を読み始めると、すぐに、はつきりと分つたやうな氣がした。

「まるで狂氣の沙汰だ。」彼は、新聞を投げやりながら大聲で言つた。

彼は、寢巻を引つけて應接間へ行つた。

ヘレナの部屋の中では誰か動いてゐた。

彼はノックした。

「お前かい、ルイズ？」と中から訊いた。

「いや、僕なんだよ。」と彼は、やつと口をきくことが出来たといふ工合に私語いた。

「どうしたんです？ 何御用なんです？」

「ちよつと君に話したいことがあるんだよ、ヘレナ。」と彼は、自分が何を言つてゐるのだから

もほとんど知らずに、さう答へた。

鍵が錠の中で廻つた。アルバートは、自分の耳を殆んど信用することが出来なかつた。戸が開け放された。ヘレナは、まだちやんと着物を着たまゝで、闔の上に立つた。

「御用といふのは何ですか？」と彼女は訊ねた。と、彼女は、彼が寝巻を着てゐて、それに彼の眼が異様に輝いてゐたことに氣づいた。

彼女は、その手を伸して彼を押し遣つて、戸をびしやりと閉めてしまつた。

彼は、床の上にバタツと倒れる音を聞き、ほとんどそれと同時に、聲高い吸り泣きの聲を聞いた。

氣違ひのやうになつて、しかし羞しさを感じながら彼は、自分の部屋に歸つた。それでは彼女は本氣だつたのか！ しかしこれは、確かに常軌を逸したことに相違なかつた。

彼は、思ひに耽りながら、終夜目覺めてゐた。そして翌朝彼は、獨りで朝飯を食べた。

彼が晝食に歸つて來た時、ヘレナは痛々しげな諦めを見せて彼を迎へた。

「どうしてあなたは、私にあんなことをなさるの？」と彼女は訊ねた。

彼は、出来るだけ簡単に謝罪した。それから彼は自分の無愛想を後悔して、取消した。

事は、かくして六箇月も續いた。彼は、疑念と怒りと愛との間でのたうち廻つた。しかし

彼の鎖は切れなかつた。

彼の顔は、次第に蒼白くなり、そして眼は光を失つた。彼の機嫌は不確かなものとなり、陰氣な怒氣が、その靜かな外見の下に潜んでゐた。

ヘレナは、彼が變つて暴虐になつたことを知つた。何故なら彼は、彼女に反對し始めてゐたし、又何處か他で快樂を求めするために會合から屢々出て行つてしまつた。

或日彼は、教授の候補者になるやうに乞はれた。彼は、とても駄目だと信じてゐたので拒んだ。しかしヘレナは、彼がその條件は従ふまでは全く彼に平安を與へなかつた。彼は選ばれた。彼は、何故選ばれたのかその理由を全く知らなかつた。が、ヘレナは知つてゐた。暫くして、補缺選舉があつた。

公けの事に大して興味を持つてゐようとは自分でも夢にも思つてゐなかつた新教授は、自分が指名されたことを知つた時、途方に暮れた。彼は、自分が選ばれた時には更にひどくびつくりした。彼は辭退しようと思つてゐたのであるが、ヘレナの懇願と、それに、大都市に於ける生活の方が小さな田舎町に於ける存在よりも遙かにいゝといふ彼女の議論とが、彼をしてその任命を承諾せしめたのであつた。

彼等は、ストックホルムに移つた。

この六箇月の間に、新品教授にして國會議員なる彼は、英國から輸入された新思想に觸れ、そして社會及び舊道德の軌範を改造しようとしたのであつた。それと同時に彼は、自分の「寄宿人」との關係を絶たなければならぬやうになるのも、遠いことではないと感じた。彼はストックホルムに来てから、力と勇氣とを取戻した。其處では、大膽不敵な思想家達が、長い間彼が秘密に持つてゐた意見を公然と發表するやうに、彼を勇氣づけてくれた。

一方ヘレナは、反對の潮流のうちにいゝ機會を見出した。そして、教會員の仲間へ投じて行つた。これは、アルバートにとつては堪らないことであつた。そこで彼は叛逆した。彼の愛は冷たくなつた。彼は、何處か他所でその報償を見出した。彼は、自分の妻に對して不信だと思ひはしなかつた。何故なら彼女は、存在したこともない關係の、確立を主張したことは決してなかつたのだから。

この異性に對する彼の友人關係は、彼に男らしさを生ぜしめ、そして彼の墮落を曉らしめたのであつた。

彼が疎遠になつて來たことは、ヘレナの目を逃れはしなかつた。彼等の家庭生活は不快なものとなり、如何なる瞬間にも破裂の襲來に脅かされてゐた。

國會の開期が差迫つた。ヘレナは落着きを失つてしまひ、そして彼女の戰術を變へたやう

に思はれた。彼女の聲は、次第に優しくなつた。そして彼女は、彼を喜ばせようと心を碎いてゐるやうに思はれた。彼女は、召使達を監視したり、食事が時間通りにきちんとして用意されてゐるかどうかを見たりした。

彼は、疑ひ深くなり、又怪しんだ。彼女の動作を見成り、そして來るべき事件のために準備した。

或朝、朝飯の時ヘレナは混亂してゐるやうに見えた、そして自分でもそれを知つてゐるやうだつた。彼女はナプキンをいぢつたり、度々咳拂ひをしたりしてゐた。やがて彼女はその兩手に勇氣を籠めて、突進した。

「アルバート。」と彼女は始めた。「私、あなたに頼れるんでせう、それとも出來ないの？私

が自分の生命を捧げてゐる問題にあなたは助言して下さいませんか？」

「一體それは、どんな問題なのだね？」と彼は、今では自分の方が上手に在るので、簡単に訊いた。

「あなたは虐げられた女達に對して何かして下さいませんか、それともして下さらない？」

「虐げられた女なんて何處にゐるんだい？」

「まあ！ あなたは私たちの大問題を棄てたんですか？

あなたは、私たちが當惑してゐる

ときに置き去りにしようとするんですか？」

「どんな問題のことを言ってるの？」

「婦人問題ですわ！」

「そんなことは僕はちつとも知らない。」

「ちつとも知らないんですつて？ おや、まあ！ あなたは、下層階級の女達の位置は悲惨なものだといふことを承認しなくてはいけませんよ。」

「いや、彼等の位置が男達の位置より悪いなんて僕には思へないね。男達をその利用者共から解放させるがいゝ。さうすれば女達も矢張り自由になれるんだ。」

「しかし、身を賣らなければならぬ不幸な者や、それに無頼漢共、あの——」

「無頼漢共は拂つてるさ！ 兩者の楽しいむ快樂に對して、一體男が金をとつたことがあつたかね？」

「それは問題ではありませんわ！ 國法が、一方を罰し一方を罰から逃がすといふことが正當なことかどうかといふのが問題なんです。」

「それに就いては、別に何も不正なことはないさ。女共は、自分を墮落させて、終ひには傳染病の源となつて了ふんだ。そこで國家は彼女を、狂犬でも取扱ふやうに取扱ふのだ。もし

君が、さういふ程度にまで墮落してゐる男を見出したら、彼をも警察へ連れてゆくがいゝんだ。おゝ、お前は、男を輕蔑して不潔な動物と見てゐる純潔な天使だ！……」

「まあ、それがどうなの？ あなたは私にどうしろと仰しやるんですの？」

彼は、彼女が傍棚の上から一つの稿本をとつて来て、それを手に持つてゐることに氣がついてゐた。返事を待たずに彼は、それを彼女から受けとつて、調べ始めた。

「國會に提出される議案！ これを提出するやくざな人間に僕はなるんだな！ これは道徳的なことだらうか？ 嚴格にいへば、これは正直なことだらうか？」

ヘレナは、椅子から立上つて、ソファの上に身を投げ出して、泣き出した。

彼も立上つて、彼女のそばへ寄つて行つた。彼は、彼女の手を自分の手のうちに掴んだ。

彼女の發作が本當のものでありはしないかと恐れて、彼女の脈を診た。彼女は、痙攣的に彼の手を掴んで、自分の胸に押し當てた。

「私を棄てないで下さい。」と彼女はむせびながら言つた。「行つちやいや。居て頂戴。そして私にあなたを信じさせて下さい。」

生れて始めて彼は、彼女が熱情に身を任せるのを見た。彼が愛しそしてあれ程讚美したこのデリケートな肉體は、暖められて遂に生を得た！ 赤い熱い血潮が、その青い血管の中に

流れたのだつた。血潮は、涙を滴らすことが出来たのだ。彼は、優しく彼女の額を撫でた。

「おう。」と彼女は溜息をついた。「どうしてあなたはいつもこんな風に私を可愛がつて下さらないの？ どうしていつでもこんな風ではなかつたんでせう？」

「さあ。」と彼は答へた。「どうして、可愛がらなかつたんだらうね？ 何故さうでなかつたのか僕に教へてくれ。」

ヘレナは、臉をとぢた。「何故でせう？」と彼女は、柔かに呼吸した。

彼女は、その手を引かなかつた。そして彼は、彼女の天鵝絨のやうな皮膚の下から優しい暖みが發出するのを感じた。彼女に對する彼の愛は、新しい焔となつて燃えた。しかしながら今度は、彼は望みのあることを感じてゐた。

たうとう彼女は立上つた。

「私を輕蔑しないでね。」と彼女は言つた。「私を輕蔑しないで下さいね、あなた。」

そして彼女は、自分の部屋にはひつて行つた。

一體彼女はどうしたのであらうか？ アルバートは、町へ行きながらそれを怪しんだ。彼女は、或る種の危機を越えようとしてゐたのだらうか？ 彼女は、やつと今、自分が彼の妻だといふことを知り始めたのであつたのだらうか？

彼は、終日町で暮した。夜、彼は劇場へ行つた。そこでは、「疲れたる世界」を演つてゐた。彼が坐つて、假面を剝がれ滑稽化されてゐるプラトニック・クラブを、靈の結合を見成つてゐた時、彼は、恰も網目の細かい虚偽のヴェールが彼の理性から引き離されて行くかのやうに感じた。舞臺に現れた天使の厚紙細工の翼の下から、愛らしい獸の頭が覗き出てゐるのを見た時、彼は微笑した。彼は、彼の長い長い間の自己欺瞞に對して、殆んど歡樂の涙を流さんばかりであつた。彼は、自分の愚さを笑つた。この偽善的道德、健全な自然の本能からの解放に對するこの狂氣の沙汰である慾望の背後には、何といふ不淨と腐敗とがあることか。それは、理想主義と基督教との禁慾主義的教義であつた。それらは、この芽を十九世紀にまで植ゑ付けたのだ。

彼は恥ぢた！ 彼は、どうして今まで瞞されてすましてゐられたのであらう！

彼女を起さないやうに爪立ちでその戸口を通り過ぎた時、ヘレナの部屋にはまだ燈火がついてゐた。彼は彼女が咳をするのを聞いた。

彼は、眞直にベッドへ行つて、煙草をふかし、新聞を読んだ。彼は、徴兵に關する一論文を読み耽つてゐたが、その時突然ヘレナの部屋の戸が開け放されて、そして足音と叫び聲とが、應接間から彼の耳にはひつて來た。きつと出火だと思つて、彼は飛び起きて部屋から駈

け出した。

ヘレナは、應接間の中に寝巻を着たまゝ立つてゐた。

彼女は、夫を見ると叫び聲をあげて自分の部屋へ駈けて行つたが、門のところで躊躇してふりかへつた。

「御免なさい、アルバート。」と彼女は口ごもりながら言つた。「あなたでしたの。あなたがまだ起きてらつしやることを知らなかつたもんですから。私、うちへ泥棒がはひつたと思つたんです。本當に御免なさいね。」

そして彼女は、戸を閉ぢた。

これは一體どういふ意味だつたのだらう？ 彼女は彼に戀してゐたのだらうか？

彼は、自分の部屋にはひつて、鏡の前に立つた。如何なる女が彼に戀することが出来たであらう？ 彼は十人並の顔の男であつた。しかし人は、魂に戀するものである。そして現に多くの平凡な顔の男が美しい女と結婚してゐた。尤も、さういふ場合、男はたいいいつも富と勢力とを持つてゐるといふのは事實であつたが。——ヘレナは、間違つた地位に自分が置かれてゐたことを知つたのであらうか？ 或ひは又、彼女を棄てようとする彼の意志に氣づいて、彼を取戻さうと氣を揉んでゐるのだらうか？

翌朝、食卓で出會つた時、ヘレナは常になく優しかつた。そして教授は、彼女がレースで縁取られた新しい朝衣を着てゐることに氣づいた。それはもうこのうへもなく彼女に似合つてゐた。

彼が砂糖をとらうとした時、彼の手が偶然彼女の手に觸つた。

「御免なさい、あなた。」と彼女は、今までに彼が一度も見たとののない表情をして言つた。

彼女は、若い娘のやうに見えた。

彼等は、當らずさはらずな事柄に就いて話をした。

その日に國會が開かれた。

ヘレナの服從的な氣分はつゞいた。そして彼女は次第々々にやさしくなつて行つた。

新しい議案の提出に對して許された期間が、終りに近づいた。

或晩教授は、いつになくはしやいだ氣持になつて俱樂部から歸つて來た。彼は、新聞と煙草とを持つてベッドへ行つた。暫くすると彼は、ヘレナの戸がきしるのを聞いた。數分間にも亘つて沈黙が続いた。それから彼の部屋の扉が、ノックされた。

「誰だい？」と彼は怒鳴つた。

「私ですよ、アルバート。着物を着て應接間へ來て下さいな。あなたにお話したいことがあ

るんです。」

彼は、着物を着て應接間へはひつて行つた。

ヘレナは、蠟燭をつけて、彼女のレースの朝衣を着てソファに坐つてゐた。

「許して下さいね。」と彼女は言つた。「私眠れないのですわ。頭が何だか變なものですもの。此處へ来て、私に話をして下さいな。」

「お前は太變弱つてゐるんだよ、ねえ、嬢ちゃん。」とアルバートは、自分の手の中へ彼女の手をとつて言つた。「お前は葡萄酒を少し飲まなきゃいけないよ。」

彼は、食堂へ行つて、瓶と杯を二つ持つて來た。

「お前の健康のために、愛する者よ。」と彼は言つた。

ヘレナは飲んだ。そして彼女の頬は火のやうになつた。

「どう具合が悪いんだね？」と彼は、彼女の腰へ腕をまはしながら訊ねた。

「私、幸福でないんですわ。」と彼女は答へた。

彼は、その言葉が濕ひのない技巧的なものに響いたことを知つたが、しかし彼の熱情は燃え上つたので、そんなことに頓着しなかつた。

「お前が不幸なのは何故だか知つてゐるかい？」と彼は訊ねた。

「いゝえ。私の知つてゐることはたつた一つです。それは、私がお前をお慕ひ申してゐるといふことです。」

アルバートは、彼女を抱きしめて、彼女の顔に接吻した。

「お前は僕の妻かね、それともさうぢやない？」彼は、嗚れ聲で私語いた。

「私はあなたの妻です。」へ、は、その體の全神経がぶつりと切れでもしたやうに、ぐなぐなになつて喘いだ。

「すつかり？」と彼は、彼女を接吻で麻痺させながら私語いた。

「すつかり。」と彼女は、恰も眠れる人が夢魔の怖れと闘つてゐるやうに、痙攣的に身を動かしながら呟いた。

アルバートが眼を覺した時、彼は爽快な心持がした。彼の頭ははつきりしてゐた。そして彼は、昨夜起つた事柄を十分に意識してゐた。彼は、深く熟睡したあとの人の如くに、生々としてゐて、論理的に物を考へることが出來た。彼の心の前には、凡ての光景があり／＼と見えた。彼は、朝のおだやかな光のなかで、その全體の意義をば、ありのままに、あからさまに見たのであつた。

彼女は身を賣つたのだ！

朝の三時に、愛に酔ひ、すべてに盲目になり、半ば狂亂して、彼は、彼女の議案を提出することを約したのであつた。

そしてその代價！ 彼女は、靜かに、冷たく、身動きもせず、彼女自身を彼に與へたのであつた。

女がその愛を賣ることが出来るのを見出した最初の女は、誰だつたであらう？ そして、男は買手であるといふことを發見した女は、誰であつたらう？ その女がよし誰であつたとしても、その女は結婚と賣淫との創設者なのだつた。而も、結婚は天に依つて制定せられたのだと人々は言ふ！

彼は、彼の墮落と彼女の墮落とを知つた。彼女は、自分が立法に參與した最初の婦人となつて友達の上に勝利を得ようと欲した。そして彼女は、この勝利の爲めに身を賣つたのであつた。

さうだ。彼は彼女の顔から假面を引剥がさねばならなかつた。彼は彼女に、彼女の實際の姿を見せてやらねばならなかつた。彼は、女が身を賣つて利益を見出す間は賣淫は決して廢止され得ないといふことを彼女に語らねばならなかつた。

彼は確く決心して、寢床から出て、着物を着た。

彼は、食堂で暫く彼女を待たなければならなかつた。彼は、やがて起るべき光景の下稽古をして、彼女に逢ふために身を引緊めた。

彼女は、靜かに、微笑しながら、勝ち誇つたやうにはひつて來た。しかし彼が今まで見てゐたより一層美しかつた。彼女の眼の中には陰氣な火が燃えてゐた。そして、彼女が眞赤になつて目を落して彼に逢ふであらうと豫期してゐた彼は、打碎かれてしまつた。彼女は、誇りかな誘惑者で、彼は恥づべき犠牲者なのであつた。

彼が最初に言はうとしてゐた言葉は、どうしても出て來なかつた。武器を捨て、謙虚になつて、彼は彼女を迎へに出て、彼女の手に接吻した。

彼女は、自分の生活の中へ新しい要素がはひつて來たことなどは毛程も見せず、いつもの通り話をした。

彼は、ポケットの中へ彼女の議案を入れて、むか／＼しながら議事堂へ出かけて行つた。そして、彼のために貯へられてゐる幸福の夢だけがたゞ彼の昂奮した神経を靜めた。

けれども、夕方になつて彼が彼女の戸を全く大膽にノックした時、それはどうしても開かなかつた。

それは、三週間も閉ぢられたまゝだつた。彼は、犬のやうに彼女の前に這ひ、あらゆる暗示に服従し、あらゆる彼女の望みを満たした——がそれは全く無益であつた。

やがて彼の憤怒が、彼に打克つた。そして彼は、怒りの言葉の氾濫を以つて彼女を壓迫した。彼女は、鋭く彼に應じた。けれども彼女は、自分が度をすぎたことを知り、彼の鎖が弱くなつたことを知つた時、彼に自分を與へた。

で彼は、鎖を身につけてゐた。彼はそれを噛んだ、それを破らうとして全神経を張りつめはした、しかしそれは保たれてゐた。

彼女は、たちまちのうちに、どの程度まで勝手に振舞へるかを習つてしまつた、そして彼が強情を張りはじめるといつも、彼女は彼に身を任せてしまふのであつた。

彼は、彼女を母にしようと、狂熱的に、氣狂ひのやうに熱望した。それは彼女を一人の女とし、彼女のうちの善きそして完全なすべてを齎すであらうと彼は考へた。けれども未來は、その點に於いては何等の約束をもしないやうに思はれた。

野心が、個人の利己の情が、生活の本源を、破壊したのではなかつたか？ 彼はあやしんだ……。

或朝、彼女はその友達と一緒に數日間滞在の豫定で外出すると彼に告げた。

彼女の出發の日の夕方歸宅して家の中が空つぽであるのを見出した時には、彼の魂は喪失と憧憬との残忍な感情によつて、苦しめられた、彼の全存在のあらゆる纖維までも彼女を愛してゐたのだといふことが、突然彼にとつて明かになつた。家は荒れ果てゝゐるやうに思はれた。恰も葬式でもあつた家のやうであつた。晝食の用意が出来た時、彼は空虚な彼女の椅子を、ぼんやりと見つめてゐた。そして殆んど食物に手をつけなかつた。

夕食後には、彼は應接間に灯りをつけた。彼は、彼女のいつもかけるソファの隅に腰かけた。彼は、彼女が残して行つた針仕事の道具をいぢつた——それは、新たに出來た託兒院の、他人の赤ん坊の着る小さな襯衣であつた。そこには、彼女が置いて行つたそつくりそのままにキアラコの上に針がまださゝつてゐた。彼は、苦痛の恍惚のうちに慰めを見さうともするやうに、それで自分の指を突きさした。

やがて彼は、蠟燭をつけて、彼女の寢室へはひつて行つた。闕の上に立つた時、彼は手で光を隠して、罪を犯さうとしてゐる人の如くにあたりを見まはした。部屋は、女らしさの痕跡をも示してゐなかつた。帷無し、狭いベッド、書物机、書棚、ベッドのそばの小卓、ソファ。彼自身の部屋と全く同じことであつた。そこには、小さな鏡が壁にかゝつてゐるばかりで、衣裳臺一つすらなかつた。

彼女の着物は釘にかゝつてゐた。彼女の肉體の線が、その厚い重い感じのセルの上にはつきりと出てゐた。彼は、その着物を抱いて、襟を縁取つてゐるレースの中へ顔を隠した。彼は、腕をその腰に廻したが、着物は幽霊のやうにくたくたなつて了つた。「魂は精神だと人々は言ふ。」と彼は黙想した。「だが、そんなら、それは少くも實體的な精神であるべき筈だ。」彼は、浮幻を見ることを豫期したかのやうにベッドに近づいた。彼は、すべての物にさはり、すべての物を手に取つた。

遂に、何物かを、この問題を解決する助けとなる何物かを、さがすやうに、彼は彼女の書物机の抽斗についてゐるひき手を引張り始めたが、どの抽斗も皆錠がおりてゐた。まるで偶然のやうに彼は、彼女のベッドのそばの卓の抽斗を開けた。が、いそいで又しめてしまつた。しかしそのまへにすでに彼は、或る小さな本の表紙の上に書かれた標題を読み、その用途を彼が推察し得る數個の或る奇妙な形の物體を見てしまつた。

するとこれだつたのだ！ 避妊自在！ 生存の資料を奪はれてゐる下層階級者に對する救済を目的としたところのものが、利己道具となり、理想主義の最後の結果となつたのであつた。上流社會は、彼等の種族の生産を拒む程墮落してしまつたのであらうか？ 或は彼等は道徳的に腐敗してしまつたのであらうか？ 彼等はその兩者であつたに違ひない。何故なら

彼等は、私生兒を世の中へ出すことを不徳なことと思ひ、婚姻に於いて子供を持つことを墮落と考へてゐたのだから。

けれども彼は、子供を欲した！ 彼は、子供を持つ餘裕があつた。そして彼は、彼の個性を新しい存在に注ぎ込むことは、光榮ある特權であると同時に義務でもあると思つた。それは、眞の健全な利己主義から愛他主義へ行く自然の道であつた。しかし彼女は、他の道を歩み、他人の赤子の爲めに襯衣を拵へてゐた。さうすることは、一層よき一層高貴なことであつたらうか？ それは非常に多くの事柄を示してゐたが、しかも母たることの重荷の恐怖の外には何物もなかつた。そして安樂なソファの隅に坐つて、小さな襯衣を拵へてゐることは、勞力に堪へ、育兒室の騷擾に堪へることよりは一層安易であり、且つ一層氣樂なことなのであつた。

女となり、性を持ち、母と成ることは、不名譽なこととして見られてゐた。

それであつた。人々はそれを、天國の爲め、より高き利益の爲め、人類の爲めの働きと呼んでゐる。併しながらそれは、單に、虚榮に對し、我意に對し、名聲又は著名を欲する慾望に對する一種の幫助に過ぎないのである。

そして彼は、彼女を憐んだ。彼は、彼女の不妊に腹を立てたので、後悔に責められた。彼

女はかつて、彼が生ますめのことを、不幸に對する當然の敬意を以つて口にしなかつたから、彼が「あらゆる善良にして正直な人々の輕蔑」を受くるに足る者だと、彼に向つて言つたことがあつた。彼等の悲しみは、女が忍び得る最も苦き悲しみであるが故に、彼等は神聖なのだと、彼女は彼に言つた。

要するに、この女は、何のために働いてゐたのであらう？ 進歩の爲めか？ 人類救済の爲めか？ 否、彼女は進歩に反し、自由及び啓蒙に反して働いてゐたのだ。彼女は最近に宗教的自由を限定する運動を助勢しはしなかつたか？ 彼女は召使の制御し難さに關するパンフレットの著者ではなかつたか？ 彼女は軍律施行上に於ける一層の嚴肅を主張しはしなかつたか？ 彼女は、我々の男の子等が受けてゐるのと同様な惨めな教育を女の子等にも授けることによつて彼等を墮落させようと努力してゐる一派の、支持者ではなかつたか？

彼は、彼女の理想を嫌ふが故に、彼女の魂を嫌つた。それでも彼は、彼女を愛してゐたのか？ 然らば彼が愛してゐたところのものは何であつたか？

多分、と彼は哲學に依ることを餘儀なくされて反省した、彼女がその子宮の中に持つてゐて、而も彼女が殺したがつてゐる新しい生物の芽に相違ない、と彼は反省した。どうして他の事であり得ようぞ？

併しながら、彼女は彼の何を愛してゐたのだらうか？ 彼の稱號か、彼の地位か、彼の勢力か？

これらの老いたる又疲れ果てたる男や女達が、如何にして社會を改造することが出来たであらう？

彼は、彼女が歸宅した時には、このことをすつかり言はうと思つてゐた。けれども彼の心の内奥に於いて彼は、その言葉が決して話されないであらうといふことを、絶えず知つてゐた。彼は、彼女の前に這ひつくばつて、彼女の愛を哀願するであらうといふことを、又彼女の奴隸と成り終つて、丁度彼女が自分のを彼に賣つたやうに、幾度も幾度も自分の魂を彼女に賣るであらうといふことを知つてゐた。彼はそれが、自分のするに相違ないことなのを知つてゐた。何故なら彼は、彼女に首つたけ惚れてゐたからである。

未婚と既婚

若い辯護士が、氣持のいい春の夕方、ストックホルムの古いホップ園の中をぶらついてゐた。歌と音楽の一節が、旗亭の中から聞えて來た。光が大きな窓から流れ出て、丁度葉をつけたしたばかりの大きなシナの樹が投げた蔭を照り出してゐた。

彼は、はひつて、廊下に近い空いたテーブルについて、一杯のポンスを求めた。

若い喜劇役者が、「死んだ鼠」といふ哀れつぽい俗謡をうたつてゐた。それから、ピンク色の着物を着た少女が現れて、デンマアクの歌を、「月夜の騎馬の散歩程、楽しいものは又とない」をうたつた。彼女は、比較的無邪氣な面さしで、そして彼女は、その歌を我々の無邪氣な辯護士に歌ひかけたのであつた。彼は、この榮譽の印しるしに上機嫌になつて、そして早速掛合ひを始めたが、それは一瓶の酒にはじまつて、一つの部屋と臺所とそれからあらゆる日用品のある、或る家具附の家で終りを告げたのである。

この青年の感情を解剖したり、その家具及びその他の日用品について記述をすることは、この小さな物語の範圍外である。若し私が、彼等が甚だよき友達だつたといふことを言ひさ

へすれば、もうそれで十分だと思ふ。

けれどもこの青年は、現代の社會主義的風潮に染みてゐたので、且つは彼の愛人を絶えず自分の監視の下に置きたいと望んだので、その家に自ら住み、そしてその小さい友を家政婦にしようと決心した。それをほのめかされた時、彼女は喜んだ。

併しながら、青年は家庭を持つてゐた。つまり彼の家庭は彼をその一員と見てゐた。そして、彼等の意見では、彼は道徳に反する罪を犯し、且つ彼等の名聲の上に恥辱を投げたのであるが故に、彼は咎められる爲めに兩親や兄弟姉妹の集つてゐる前へ呼び出されたのであつた。彼は、自分がさういふ取扱ひを受けるにはあまりに年をとりすぎてゐると思つた。で家庭の連結は破れてしまつた。

この事は、彼をして一層彼自身の小さな家庭を好ましめた。そして彼は、甚だ家庭に馴れた夫と、いや戀人となつて行つた。彼等は、互ひに相愛し合ひ、且つ彼等を束縛する何等の妨げもなかつたので、彼等は幸福であつた。彼等は、お互ひを失ふといふ幸福な恐怖のうちうちに生活してゐた。それ故彼等は、相互の愛を保つたために出来るだけのことをした。彼等は、本當に一つであつた。

けれども彼等が持たなかつた唯だ一つのものがあつた。彼等は友を一人も持たなかつた。

社會は彼等と相識らうとする望みを全く示さなかつた。そこで青年は「上流社會」の家々へも頼まれなかつた。

それは、すべてのかつて家庭を持つたことのある人々にとつては悲しみの日たる、クリスマス前夜のことであつた。彼が朝飯に坐つてゐた時、一本の手紙を受取つた。それは彼の妹からで、彼女は、彼に両親と共に家でクリスマスを過すようにと懇願して來た。その手紙は、古い感情の糸に觸れた。そして彼をいやな心持にしまつた。彼は、このクリスマス前夜に彼の小さな友を一人捨て、置かうと思つたであらうか？ 確かにさうは思はなかつた！彼の両親の家に於ける彼の場所は、クリスマス前夜に於いて始めて空席として残らねばならないのであらうか？ ふむ！これが、彼が裁判所に出席した時の、事件の状態であつた。

晝食の合間に一人の同僚が彼のところへやつて來て、出來るだけ用心深く彼に訊ねた。

「君は、家の人と一緒にクリスマス前夜を送りに行かうとしてゐるのかね？」

彼は、忽ち赫となつた、彼の友は、彼の立場を知つてゐたのだらうか？ でなければ彼はどういふつもりだつたのであらうか？

例の男は、彼の感情を害したのを見ると、急いで、返事も待たずに附加へた。

「といふのはね、若しさうでないなら、僕らと一緒に、過すことにしてもらひたいのだ。ね

え、多分、君は知つてゐるだらうが、僕は小さい友を、可愛い奴を持つてゐるんだ。」

それには別に悪いところもなかつた。そして彼は、自分達を二人共招んでくれるならばといふ條件でその招待を受けた。それはさうだ、だが勿論、何か他にどんなことが考へられただらうか？ で、これで友達のこととクリスマス前夜のこととの問題は片がついた。

彼等は、その友の家で六時に逢つた。そして、二人の「親友」が酒を飲んでゐる間に、女達は臺所へ行つてゐた。

四人總がかりでテーブルを据ゑつけた。二人の「親友」は床に膝をついて、テーブルを楔や板の助けをかりて長くしようと試みた。女達は、忽ちに非常に仲よくなつて了つた。何故ならば彼等は、「輿論」といふ偉大な名を持つところの甚だ明白なる連結によつて全く結びついて了つたことを感じたから。彼等は、互ひに尊敬し合ひ、又互ひの感情をいたはり合つた。彼等は、夫婦が、恰も「私たちは結婚してゐるのだから、かういふことを話す権利があるのだ。」とでも言ひたいかのやうに、子供等の聞いてゐないところでは、好んで陥りがちな、さういふ種類の諷刺を避けた。

彼等がブッディングを食べてゐた時、辯護士は、自らの爐邊、世間及びあらゆる人々からの隱遁所、人が自分の眞の友達と一緒に幸福な時を過すところの避難所、の喜びを讚美する一

場の演説をした。

マリイ・ルイザは泣き出した。そして、彼が彼女の悲しみの原因と不幸の理由とを是非とも言つてくれと言つた時、彼女は啜り泣きに破れた聲で、自分は彼がその母や妹達を忘れてゐるのを知つたのだと言つた。

彼は、少しも彼等を忘れてゐはしないと答へ、そして若しも彼等が偶然にも今こゝへ現れたとしたら、遠く離れてゐてくれと言ひたいのだと言つた。

——だが、何故彼は彼女と結婚することが出来なかつたのか？

——結婚したと同様に善くはないか？

——否、彼等は正式に結婚してはゐなかつた。

——僧侶によつてか？ 彼の意見では、僧侶は試験に及第した學生に他ならないのであつた。そして彼の呪文は、單なる神話に過ぎないのであつた。

——それは彼女の知力が以上であつた。しかし彼女は、何事かが悪いのだといふことを知つてゐた。そしてその家の他の人々は彼女に指を差してゐた。

——指を差すなら差さしめよ！

ソフィーが會話の仲間にはひつた。彼等は彼の身内の者にとつて十分ではないといふこと

を彼女は知つてゐるが、そんなことは構はないと言つた。すべての者をして、己の場所にあらしめ、そして満足せしめよ。

兎に角、彼等は今は友達であつた、そして調和して共に暮してゐた。それ以上のことは、多くの正當に作られた家庭に就いても、望めないことであつた。彼等を共に保つてゐた羈絆は、いつまでも害はれなかつた。しかも彼等は自由であつた。彼等は、何等結婚上の悪い習慣をも、(例へば、互ひに無遠慮にするといふやうな習慣をも)契約しずに、戀人同志としてつゞいて行つた。

一二年の後、彼等の結合は息子を以つて祝福された。従つて情婦は、それによつて母といふ階級まで上せられた。そして他のすべての事は、忘れられて了つた。彼女が赤子の出産に際して忍んだ苦痛と、新しく生れた嬰兒に對する彼女の心遣ひとは、夫の愛の獨占といふことを含む地上の一切の善き物に對して、以前の我慾的要求を洗ひ清めたのであつた。

母としての新しい役を演じて、彼女はその友を誇つて幾分か得々としてゐた。そして、彼女の戀人との交渉に於いても前よりも自信を示すやうになつた。

或日彼は重大な報知を持つて歸つて來た。彼は、町で彼の一番上の姉に逢つたが、彼女はあらゆる彼等の私事をよく知つてゐたのだ。彼女は、その小さい甥をひどく見たがつて、彼

等を訪問することを約束したのであつた。

マリイ・ルイザは、びつくりした。そして早速家の中を掃き清め始めた。その上彼女はその場合の爲めとに新しい着物をせがんだ。それから彼女は、丸一週間待ちつゞけた。カーテンは洗濯屋に遣られ、ストーヴの戸についてゐる眞鍮の把手は光らせられ、家具は磨かれた。姉には、弟が端正な人と一緒に住んでゐるといふことを見せなければならなかつた。

それから彼女は、姉が来ることになつてゐる朝、十一時に珈琲を拵へた。

彼女は、大槍でも呑んだ人のやうにわき目もふらずか／＼はひつて来て、マリイ・ルイザに綿胎のやうに堅い手を與へた。彼女は、寢室の家具をしらべたが、珈琲は拒んだ。そして一度も、義妹の顔をまともには見なかつた。けれども彼女は、赤子には微かながらも心からの興味を示した。やがて彼女は、再び行つてしまつた。

マリイ・ルイザは、その間に注意深く彼女のコートを調べ、彼女の着物の材料の値ぶみをし、そして髪結び方に就いて新案を考へついた。彼女は、非常に深切にしてくれるものは思つてゐなかつた。先づ先づ、訪問といふ事實はそれだけで全く十分であつた。そして彼女は早速義姉が来たといふことをその家中へ吹聴した。

男の子はだん／＼大きくなつて行つた。そしてそのうちに妹も出来た。

今やマリイ・ルイザは、子供等の未來に對して、最も優しい配慮を示し始めた。そして、彼女と法律上の結婚をするそのことだけが、彼等の利益を安全に守るものであるといふことを、子供等の父に納得せしめようとしなかつた。

加之、彼の姉は、若しも彼がその情事を合法のものとしさへすれば両親との和解は可能の範囲内にあるといふ事實に對して、或る甚だ明白な暗示を與へたのであつた。

二年の間日夜それと戦つたのち、彼は遂にそれに同意した。そして、子供等の爲めに神話的な儀式を擧げることしようとした。

けれども、結婚式を擧げるのに、彼等は誰に頼んだものだらう？ マリイ・ルイザは教會で結婚することを主張した。さうなるとソフィーを招待するわけにはゆかなかつた。それは不可能なことであつた。彼女のやうな娘は！ マリイ・ルイザは、既にきつぱりとした道徳的な抑揚で「娘」といふ言葉を發音することを習ひ覚えてゐた。彼は、ソフィーは彼女の善き友だといふことを、忘恩といふことは甚だしい性質のものではないといふことを注意した。しかしマリイ・ルイザは、両親はその子供等の繁榮の祭壇に於いては私情を犠牲にする決心をしなければならぬといふことを指摘した、そして彼女が勝を占めてしまつた。

結婚式は舉行された。

結婚式は終つた。彼の両親の家からは何等の招待も来なかつた。が、ソフィーからは猛烈な手紙が来て、その結果、完全な絶交となつてしまつた。

マリイ・ルイザは、今では結婚した妻であつた。しかし彼女は、以前よりも一層淋しかつた。失望に苦しめられもし、今では夫が彼女に合法的に結びついてたしかなものとなりもしたので、彼女は既婚者等がその権利と見做してゐるあらゆる自由を取り始めた。かつては任意の贈物として見てゐたところのものを、彼女は今では自分の當然受くべき貢物と思つた。彼女は、「彼の子供等の母」といふ名譽ある稱號の背後に立籠つた。そしてそこから彼女は、襲撃をした。

あらゆる愚かな夫と同様に、單純な心を持つた彼は、彼女が彼の子供等の母であるといふ事實に神聖さが成立つてゐるのだといふことを、決して掴むことが出来なかつた。何故彼の子供等が他の子供等と、そして彼自身と異つてゐるものでなければならぬのかといふことは、彼にとつては一種の謎であつた。

けれども、自由な氣持で、といふのは今では彼の子供等が法律上の母を持つたので、彼は、その戀の夢の最初の有頂天の中に或程度まで忘れてゐた世間、そしてその後は彼がその妻子を孤獨に打棄て、おくことを嫌つたが故に遠ざかつてゐた世間、といふものに對して、興味

をもちはじめた。

これらの自由は、彼の妻を喜ばせなかつた。そして、現在では、色々の事柄を細かに調べることが彼女にとつては全く不必要だつたし、又彼女は赤裸々な性質でもあつたので、彼女は自分の考へを少しも祕密にしなかつた。

併しながら、彼は法律家としてのあらゆる策略に通曉してゐたので、返事に窮するやうなことは決してなかつた。

「あなたはそれを、いゝ事だと思つてらつしやるの？」と彼女は訊ねた。「御自身の子供達を母親と一緒に家の中へ打ちやらかしておいて、御自分は料理屋で時を過すなんて？」

「僕は、お前が僕を誤解しようとは信じないね。」と彼は、豫備的にさう答へた。

「あなたを誤解したんですつて？ 夫が家政に必要なお金をお酒に費つてしまへば、妻は家の中の色々な事に不自由するでせうよ。」

「第一に僕は、酒を飲みやしないよ。一寸した物を食つて珈琲を一杯飲むだけだ。第二に僕は家政に必要な金を酒に費ひなんかしやしないよ。何故つて、それはお前がしまひ込んでぢやないか。僕は、『酒に』費ふには他の基本金を持つてるのさ。」

不幸にも女といふものは諷刺を忍ぶことが出来ないものである。そして、冗談になされた

係^{わな}跡は、忽ち彼の頸に投げられた。

「ぢや、あなたはお酒をのむといふことは承認するのね？」

「いゝや、しないよ。僕は冗談にお前の表現を借りたのさ。」

「冗談に？ あなたは妻にからかつてるんですか？ 今まで、あなたはそんなことはしたことがなかつたわ！」

「お前は結婚の儀式を欲したね。何故今では事がさう違つてるんだい？」

「勿論、我々は結婚してゐるからです。」

「半ばはその爲めだ。そして半ばは、酔といふものが醒める性質を持つてゐるからだ。」

「ぢや、それはあなたの場合だけの酔だつたのね？」

「僕の場合だけぢやない、お前の場合にも、又他のすべての人の場合に於いても同様だ。それは、可なり早く過ぎ去つてしまふものだ。」

「ぢや、男の關する限りでは愛は酔に過ぎないのね！」

「女の關する限りに於いてもさうだ！」

「酔に過ぎないのね！」

「全くさうだよ！ だが、友達となつててはならないといふ理由は何もありやしないさ。」

「人は、その爲めに結婚する必要なんかないのね！」

「さうだ。それこそ正しく僕が指摘しようと思つてたことだ。」

「あなたが？ 我々の結婚を主張なすつたのはあなたぢやなかつたんですか？」

「それはたゞ、お前が三年もの長い間、日となく夜となく僕を苦しめたからなのだ。」

「でも、それはあなたの希望でもあつたんですわ！」

「お前がそれを望んだからに過ぎないんだよ。お前は、それを得たのだから、現在僕に感謝するがいゝ！」

「あなたが、子供達を母親と一緒に打ちやらかして置いて、料理屋で暮してゐるからと言つて、それで私は感謝しなければならいんでせうか？」

「いや、その爲めではない。僕がお前と結婚した爲めにだ！」

「その爲めに私が感謝すべきだとあなたは本當に考へていらつしやるの？」

「さうだ。自分の道を進んで行くあらゆる禮儀正しい人々のやうに！」

「だつて私たちがみたやうな結婚では、ちつとも幸福なんか無いわ。あなたの家の人は私を認めしてくれないんですもの！」

「お前は僕の家の者をどうしようと思つたんだい？ 僕はお前の家庭と結婚しやしないんだ

らう？」

「それはあなたが、それを十分だと考へてゐないからだわ！」

「しかし僕のは、お前にとつて十分だよ。若し彼等が靴屋だつたとしたら、お前はそれ程思ひにかけやしまいよ。」

「あなたはまるで、靴屋といふものを、唾をひつけてやるだけの価値もないものやうに思つてるのね。靴屋だつて他の皆と同じ人間ぢやありませんか？」

「勿論さうさ。だが僕はお前が靴屋なんかを追ひまはさうとは思はないよ。」

「よう御座んすわ。あなたの爲たいやうになさい。」

だが、それでよくはなかつた。そしてそれは決して再びよくはならなかつた。それは、彼等が結婚してゐるといふ事實の爲めだつたらうか、それとも何か他のことの爲めだつたらうか？ マリイ・ルイザは、昔はもつとよかつたといふことを、心の中で承認せざるを得なかつた。彼等は「前にはもつと樂しかつた。」と、彼女は言つた。

彼は、それが彼等のなした法律上の結婚の爲めのみであるとは思つてゐなかつた。何故なら、彼は、他の人々の結婚も亦幸福ではないといふことを見てゐたから。そして、就中悪いことは、かういふことであつた——

或日彼がその昔友達とソフィーとを訪問した時、(折々彼は訪問したが、)彼は、彼の妻のゐないところで、彼の事件ももうお終ひになつたのだといふことを聞かされた。而も彼等は、結婚してはゐなかつたのであつた。それ故非難さるべきことは、結婚といふことでは有り得ないのであつた。

決闘

彼女は十人並の纏綴であつた。で、醜い體の中にある美しい魂を評價することを知らない粗暴な青年達は、彼女に何らの注意も拂はなかつた。しかし彼女は金持であつた。そして彼女は、男といふものが、女の富のために女をつけまはるといふことを知つてゐた。彼等は、あらゆる富が男によつて造られたものであり、そしてそれ故彼等は男性のための資金を請求する、といふ理由からさうするのであるか、或は他の立場からさうするのであるか、それは彼女には十分にはつきりしてゐなかつた。彼女は、金持だつたが爲めに色々の事を習得した。そして彼女は、男を信用してゐず且つ輕蔑してゐたので、若い有識婦人と見なされてゐた。

彼女は二十歳に達した。彼女の母はまだ生きてゐた。しかし彼女は、自分の家の主婦となるまでもう五年も待たうといふ意志は全くなかつた。そこで彼女は、全く突然に婚約の通知を出して友達を驚かした。

「あの女は夫が欲しくつて結婚するのだ。」と或者は言つた。

「あの女は従僕と自由とが欲しくつて結婚するのだ。」と他の者が言つた。

「結婚するなんて、あの女は何といふ馬鹿だらう。」と第三の者が言つた。「あの女は現在あるよりも一層彼女自身の主婦でなくなるのだといふことを知らないのだ。」

「心配するな。」と第四の者が言つた。「彼女は結婚しても矢張り自己を持つてゐるだらう。」

その男はどんな人間だらう？ その男は誰だらう？ 彼女は何處でその男を見つけたのだらう？

その男は、尻の大きい、おどくした舉措の、むしろ女のやうな見かけの、若い法律家であつた。彼は、母と叔母とに育てられた一人息子であつた。彼は、いつも娘達を非常に恐れてゐた。そして彼は、厚顔しいからといふ理由で、又あらゆる宴會でちやほやされる人間だといふ理由で、士官達を嫌つてゐた。彼は、そんな風な男であつた。

彼等は、湯治場に滞在してゐて、或る舞踏會で逢つたのであつた。彼は、遅く到着したのですべての娘の相手がもう満員になつてゐた。何處へ行つて申込んでも、嘲るやうな勝誇つた「否！」といふ言葉が彼の顔に投げつけられた。そしてプログラムの進行は、彼がぶん／＼いつてゐる蠅でももあるやうに、彼を掃き出した。

腹立しさとみじめさをもつて、彼は舞踏室を去り、ヴェランダへ出て煙草を吸つてゐた。月がその光を公園内のシナの樹の上に投げてゐた。そして花床からは、木犀草の香が立昇つ

てゐた。

彼は、蹇の身になはぬ憧憬を以つて、踊つてゐる組々を窓から見成つた。ワルツの官能的なリズムが、身に滲みわたつた。

「たつた一人で夢想到に耽つてらつしやるの？」突然聲がした。「どうしてあなたは舞踏をなさらないの？」

「何故又貴方は踊らないんです？」と彼は、見上げながら答へた。

「私が綺麗でないので誰も私に申込まないからですわ。」と彼女は答へた。

彼は、彼女を見た。彼等は、もう可なり前から互ひに知り合つてゐたのであつたが、彼は今まで、彼女の容貌を仔細に見たことは一度もなかつた。彼女は結構に着飾つてゐた。そして彼女の眼の中には無限の苦痛の表情が、自然の不公平に對する無益な反感と絶望の苦痛の表情が、現はれてゐた。彼は、彼女にあざやかな同情を感じた。

「僕も矢張り、皆から侮られたんです。」と彼は言つた。「あらゆる権利が士官達に屬してゐるんです。自然淘汰といふ問題になると、いつも権力は強い者美しい者の方にあるのです。

御覽なさい、彼等の肩や肩章を……」

「まあ、あなたはなんて事を仰しやるのでせう！」

「御免なさい！ 勝負事に負けるといふことは人を辛辣にするものです！ 貴方は僕と踊つて下さいませんか？」

「たつてと仰しやるの？」

「えゝ！ どうぞ御慈悲で！」

彼は、煙草を捨てた。

「貴方は、運命の手によつて示されて拒絶されるといふことがどういふ意味なのか知つてゐますか？ いつも最後の者となるといふことが？」と彼は、情熱的に再び始めた。

「よく存じてゐますわ！ しかし最後の者はいつまでも最後ではゐませんわね。」彼女は力を籠めて附加へた。「美しいといふことの他にも數へ上げられる性質はありますわ。」

「貴方は男のどういふ性質を一番いゝとしますか？」

「深切です。」と彼女は、少しもためらはずに叫んだ。「何故ならこの性質は、男の中には稀にしかありませんもの。」

「深切と弱さとは、常に手をたづさへて行くものです。女といふものは力を賞美してゐますが。」

「どんな女のことをあなたは言つていらつしやるんです？ 暴力はもう時勢遅れですわ。現

代の文明は、最早私たちをして、深切な心以上に筋力や暴力を高く價值づけるやうなことは全くさせない程の高い標準に達してゐるのです。」

「さうあるべきですね！　だが——あの踊つてゐる連中を御覽なさい！」

「私の心には、眞の男らしさといふことは、高い感情と智力的な心とに見えるのですわ。」

「従つて、全世界が弱くして臆病なりと呼んでゐる男は……」

「世間だの、輿論だのに何で私が構つてゐるのですか！」

「貴方は非凡な婦人だといふことを御自分で御存じですか？」と若い法律家は、次第に興味を覺えながら言つた。

「ちつとも非凡ぢやありませんわ！　ですがあなた方男のお方は、女を人形として見る習はしですえ……」

「どういふ男のことを言つてゐるんです？　ねえ、僕は子供の時分から、婦人を人間のうちより高い現れとして尊敬してゐるんですよ。僕が一人の婦人を戀して、その婦人が僕の返してくれれば、その時から僕はその婦人の奴隸になるでせう。」

アデラインは、長い間じろくくと彼を眺めてゐた。

「あなたは非凡なお方ですわね。」と彼女は、暫く黙つてゐたあとで言つた。

二人してお互ひを人間のうちの非凡な人間だと宣言し、そしてダンスの無益といふことに就いて色々話したあとで、彼等は月の憂鬱なる力に就いて語り始めた。それから彼等は舞踏室に歸つて、四班舞踏の仲間に加つた。

アデラインは、立派な踊り手であつた。そして法律家は、「無邪氣な少女のやうに踊つた」が故に、全く彼女の心を贏ち得てしまつた。

それが終ると彼等は、再びヴランダへ出て坐つた。

「愛とは何でせう？」とアデラインは、天上から答への來るのを豫期するかのやうに、月を仰ぎながら訊ねた。

「魂の同情です。」と彼は答へた。そして彼の聲は微風の私語の如くに響いた。

「けれども、同情は反感に變るかも知れませんわね。よくあることですわ。」とアデラインは反對した。

「では、それはほんとのものでなかつたんです。二つの性が無かつたとしたら愛なんといふものは無いであらうと言つてゐる物質主義者があります。而も彼等は、肉の愛が魂の愛よりも一層長つゞきのするものだなどといふ意見を、持つてさへゐるんです。愛する女の中に性だけしか見ないことは、低劣な淫逸なことだとは思ひませんか？」

「物質主義者のことなんか言はないで下さい！」

「いや、言はなければなりません。それは僕が女を愛したとして女に對する感情の高尙であることをお知らせする爲めです。その婦人は、美しい必要はありません。美はやがて消えて了ふものですから。僕は彼女を親しき友として見ます。その婦人と一緒にゐる時には、在り來りの娘と一緒に時のやうに決して羞かしさなど感じないでせう。僕は、丁度貴方に近づくやうに、恐れずにその婦人に近づくでせう。そして僕は、「貴方は僕の生涯の友となつてくれませんか？」と言ふでせう。愛人が、自分の優しい心の對象に向つて結婚を申込む時には、その心が純潔でない爲めに神経的な軽い顫律を感じるものですが、僕は少しもそんなことなしに彼女に話しかけることが出来ます。」

アデラインは青年を眺めた。彼は恍惚とした眼付で、手の中へ彼女の手を取つてゐた。

「あなたは理想主義者ね。」と彼女は言つた。「そして私は、心の奥底からあなたに賛成ですわ。本當のところ、あなたは私の友情を求めていらつしやるんですね。わたしはあなたのものとなりませう。しかし私は先づあなたを試して見なければなりませんわ。あなたは、友のためならばあなたの誇りを胸に隠しておけるといふことを證明して下さいますか？」

「言つて御覽なさい。僕は服従するでせう！」

アデラインは、自分の頸の周圍に着けてゐた小金箱の金鎖をはづした。

「私達の友情のシンボルとしてこれをお着きなさい。」

「着けませう。」と彼はしつかりとしない聲で言つた。「しかしさうしたら人は、僕たちが婚約したのだと言ふかも知れませんか。」

「では、さう言はれてはいけませんか？」

「いやどうして。貴方がお厭でなかつたら！　ぢや貴方は僕の妻になつて下さる？」

「さうよ、アクセル！　なりますわ！　世間は男と女との友情を横目で見ますからね。世間といふものは、さういふ事が出来るといふことを信じない程卑しいんです。」

そこで彼は、その鎖を着けた。

心からの物質主義的なる世間は、彼女の友達の斷定を繰返したのであつた——

「彼女は彼と結婚のための結婚をするのだ。彼は妻が欲しいので彼女と結婚するのだ。」

世間は、その上穢はしい批評さへした。彼は彼女の金の爲めに結婚したのだと言はれた。何故なら彼は、戀のやうな墮落的なものは何にも彼等の間には存在しないと自ら宣言しはしなかつたか？　友達となる爲めには、結婚者のやうに同棲する必要は全くないのだ。

結婚式が舉行された。世間は、彼等が兄妹の如くに同棲するのだといふ暗示を受けた。そ

して世間は、婚姻といふことを全く他の基礎の上に置くこの大なる改革の結果を、毒々しい苦笑を以つて待つてゐた。

新たに結婚した夫婦は、外國へ出かけた。

彼等が歸つて來た時、若い妻は蒼ざめてゐて、不機嫌であつた。彼女は早速乗馬の稽古を努めた。世間は、不幸を嗅ぎつけて待つてゐた。男は、卑しい行爲の犯人であるやうな自らに恥ぢてゐるやうな様子をしてゐた。それはたうとう事實となつた。

「彼等は、兄妹のやうに生活してはゐなかつたんだ。」と世間は言つた。

「何だと？ 互ひに愛し合つてゐないのに？ だが、つまりは——すると、どういふことなんだらう？」

「禁斷の果實さ！」と物質主義者が言つた。

「精神結婚だ！」

「でなければ骨肉相姦だらう。」と無政府主義者が諷示した。

事實は恒に事實であつた。しかし同情は減じた。あらゆる欺瞞を剝奪された實生活は、彼等に對抗して、復讐を始めた。

法律家は、自己の仕事に従事した。けれども妻の仕事は、下女と乳母とによつて爲された。

それ故彼女は、全く仕事がなかつた。仕事のないといふことは、思考に耽らせて行つた。で彼女は、自分の立場に就いて非常に沈思した。彼女は意に滿たないものであるのを知つた。彼女のやうな有識婦人が、怠けてその日を送るのは正しいことだつたらうか？

或時彼女の夫は、誰も彼女に怠けてゐよと強ひてはゐないと敢へて言つたことがあつた。彼は、決して二度とはそれを言はなかつた。

——彼女は仕事が無いのである。

——本當だ。怠けてゐることは仕事ではない。何故彼女は赤子の世話をしないのだ？

——赤子の世話？ 彼女は金を儲けるやうな職業を欲してゐるのだ。

——彼女は、それでは、そんなに吝嗇なのか？ 彼女は、如何に費すべきかを知らぬ程既に金持なのだ。何故彼女は金を儲けようと欲するのか？

——彼と同じ立場に立たんが爲めである。

——それは出来ないことだ。彼女は、彼が到達しようと思ふことも出来ぬ立場に常にあるのだから。女が母と成り男が母となれないことは自然の意志である。

——甚だ愚かな約束だ！

——恐らくは！ それが反對だとしても、矢張り愚かなことであらう。

——さうだ。しかし彼女の生活は堪へられないものだ。家庭の爲めにのみ生きることは、彼女を満足させない。彼女は、人々のために生きることを欲してゐるのだ。

——彼女は家庭からして始めた方がよくはなからうか？ 他人のことを考へるほど、時間は十分でないのだ。

この會話は、永遠に続くべきものであつたらう。が、事實では、一時間つゞいたばかりであつた。

勿論法律家は、殆んど終日外出してゐた。そして家にゐた時でも彼は、それは協議の時間であつた。それは、アデラインを氣違ひにならなければかりにさせた。彼は常に、彼が祕密にして置かなければならない手續を頼みに彼のところへ來た他所の婦人達と、協議室に閉ぢこもつてゐた。これらの祕密は彼等の間に防壁を作つた。そして彼女をして、彼が彼女の相手以上であることを感じさせた。

それは、彼女の心中に險惡な嫌惡の情を喚起した。彼女は、お互ひの關係が正しくないことを無念に思つた。彼女は、彼を引きずりおろす手段を探した。彼はおりて來なければならぬ。さうして彼等は同じ水平に立たねばならない。

或日彼女は、療養所設置を提出した。彼は出来るだけのことを言つてそれに反對した。何

故なら彼は自分の仕事に非常に忙しかつたから。しかし、さらに考へたのち彼は、或種の職業が彼女を救ふであらう、恐らくそれを設立することは、彼女を助けるであらうと思つた。

療養所は建てられた、彼は管理人の一人であつた。

彼女は、委員になつて差配を揮つた。彼女が支配して六箇月たつた時、彼女は自分が治療の技術に熟達して了つたやうに考へたので、病人を見廻つて忠告を與へたりした。

「譯ないことだ。」と彼女は言つた。

そのうちに、醫員である外科醫が過失をしたことがあつた。そこで彼女は忽ちに彼を信用しなくなつて了つた。又或日、彼女は自分の優良な知識を十分に意識してゐるので、醫者の留守に、彼女自ら或る患者の爲めに處方を書いたことがあつた。患者は、その處方通りに拵へられた藥を飲んで、そして死んでしまつた。

これが爲めに、彼女は、他の活動の中心へ移らなければならなかつた。しかしそれは、平均を亂した。それと殆んど同時に生れた第二の子供は、さらにそれを亂した。そして、事を益々悪くしたのは、例の致命的な出來事の噂が町中に擴がつたことであつた。

夫婦の間の關係は、愛想のない、悲しいものであつた。何故ならば彼等の間には曾て愛が無かつたのだから。考へる餘地のない健全な力強い自然の本能が、缺けてゐたのだ。残つて

ゐるものといつては、利己的な友情といふ不確かな推定の上に打建てられた不快なる情事にすぎなかつた。

高き天職を持つてゐたと信ずることが間違つてゐたのを發見した後には彼女は、自分の燃えてゐる額のうしろで抱かれる考へを、決して聲に出して言はなかつた。しかし彼女は、それが爲めに夫を苦しめた。

彼女は健康を失つた。彼女は食慾を失ひ、そして外出することを拒んだ。彼女は痩せこけて、慢性肺炎になつたかのやうだつた。夫は、彼女に幾度も醫者の診察を受けさせたが、醫者は彼女の病氣の原因を發見することが出来なかつた。終ひには彼は、彼女の絶えずこぼす不平にも馴れてしまつて、氣にしなくなつた。

「病氣の妻を持つことは、不愉快なことですわねえ。」と彼女は言つた。

彼は、勿論愉快ではないと心の中でそれに同意した。彼が彼女を愛してゐたならば、そんなことを感じもしなかつたらうし、同意もしなかつたのであるが。

彼女の憔悴は、彼が最早それに對して眼を閉ぢてはゐられなくなつた程、驚くべきものとなつた。そして、有名な教授に診て貰はなければならぬといふ彼女の暗示に、同意しなければならなかつた。

アデラインは、名醫の診察を受けた。「お悪くなつてからどの位になりますね？」と彼は訊いた。

「田舎を出ましてからは、本當に宜しかつたことは殆んどないのでございますよ。」と彼女は答へた。「私は田舎に生れましたので。」

「では貴方は町にゐては氣分が悪いのですか？」

「さあ？ 私の氣分がよからうが悪からうが構つてなんぞくれるものが御座いませうか？」そして彼女の顔は、彼女が殉難者だといふことを疑ふ餘地はないといふ表情をした。

「田舎の空氣が貴方にはいゝやうに思へますか？」と教授はつゞいて言つた。

「正直に申しますと、それが私の生命を救ふことの出来る唯一のものだと思つてをります。」

「では、何故田舎でお暮しにならないんです？」

「夫が私のために職業を捨ててくれないものでございますから。」

「あの方はたつた一人の金持の奥さんをお持ちなのだ。それに、我々は多勢の法律家を持つてゐるのですよ。」

「では、あなたは、私共が田舎に住まなければならぬとお思ひになりますので？」

「確かに。若しそれが爲めに貴方の體がよくなるものと、貴方が思つてゐられるなら。貴方

は病氣らしい病氣ではありませんよ。神経衰弱ですね。田舎の空氣は、きつと貴方にはいいでせう。」

アデラインは、すつかりしよげて夫の許へ歸つて來た。

——どうだつたか？

——教授は、彼女が町にゐれば死んでしまふだらうと斷言したのだ。

法律家は、ひどく混亂した。彼の苦惱は主としてその仕事を捨てるといふ考へによつて惹き起されてゐるのだといふ事實は明かだつたので、彼女の健康などといふことは、彼にとつては全く何でもないことなのだといふ絶對的の證據を、彼女は握つた。

——何？ 彼はこれが生死の問題だといふことを信じなかつたのであらうか？ 彼は自分よりも教授の方がよく知つてゐるとは思はなかつたのだらうか？ 彼は、彼女を死なせようとしてゐたのだらうか？

彼は、彼女を死なせようとしてはゐなかつた。彼は、田舎に地所を買ひ、そしてそれを見廻る監督を雇つた。

その場所には、州執行官や地方裁判官が住んでゐたので、法律家には全く職業がなかつた。毎日が彼には實に無限に長く思はれて、不愉快になる位だつた。彼の収入は、彼の仕事と同

時に罷んで了つたので、彼は妻の金で暮さなければならなかつた。最初の六箇月間は、澤山に本を讀んで、「仕合者」の役をしてゐた。次の六箇月では、何の役にも立たないので彼は讀書を止めてしまつた。その次の半歳には彼は針仕事をして自らを慰めた。

彼の妻は、これに反して、スカートを膝までたくし上げたり既へ行つたりして、畑に身を入れた。そして牛小屋の臭を立てながら、汚れかへつて家に入つて來もした。彼女は體がよくなつたやうな氣がした。そして自らの聲を聞くのが愉快だつたので、小作人達にあれこれと命令したりした。何故なら彼女は、田舎に育つたので、何を爲すべきかを知つてゐたから。

彼女の夫が、する事がないと言つて不平をこぼした時、彼女は彼を嘲笑つた。

「家の中で何か仕事をお探さない。家の中で、こんな風に誰だつて怠けてる必要はないんですよ。」

彼は、何か外でする仕事のことをほのめかしたかつたのだが、勇氣が無かつた。

彼は、食つて、眠つて、散歩に出歩いた。若しも彼が納屋か厩に偶然はひつて行くと、きつと邪魔になつて、妻に小言を言はれるのであつた。

或日、彼がいつもより餘計に不平を言つてゐた時、丁度子供達が乳母に閑却されて駈けまはつてゐたので、彼女は言つた。

「どうして子供達を見てやつて下さらないの？ さうすれば、幾らか仕事ともなるぢやありませんか。」

彼は彼女を凝視した。彼女は本當にさう言はうとしてゐたのだらうか？

——さうだ、何故彼が子供等の面倒を見てやつてはならないのであらう？ 彼女の諷示には何か珍らしいことがあつたらうか？

彼は、その事を考へ直した。そしてその中には何等の不思議もないことを知つた。それ以來彼は、毎日子供を散歩に連れて行つた。

或朝、彼が出かけようとしてゐた時、子供達は着物を着てゐなかつた。法律家は怒りを感じて、妻のところへ不平を言ひに行つた。召使達を彼は恐れてゐた。

「何だつて子供達は着物を着てゐないんだ？」と彼は訊いた。

「マリイは他のことで忙しいからですよ。どうしてあなたがあれ達に着せてやらないの？」

あなたは、他に何もすることはしないのぢやありませんか。あなたは御自分の子供に着物を着せるのを墮落だとも考へてらつしやるの？」

彼は、暫くの間その事を考へた。しかしその中に、何等の墮落をも見ることは出来なかつた。彼は、子供達に着物を着せた。

或日彼は、鐵砲を持つて獨りで出かけようといふ氣を起した。尤も彼は決して何も撃つてはなかつたが。

彼が歸つて來ると妻が出て來た。

「何故あなたは今朝は子供達を散歩に連れて行かなかつたんです？」と彼女は鋭く、そして非難するやうに訊ねた。

「いやだつたからさ。」

「いやだつたからですつて？ 私は厩や納屋で、終日働きたくつて働いてるんだと思つてらつしるの？ 誰でも、いやであらうがなからうが一日のうち有益なことを何かしなくてはいけないんですよ。」

「食料を支拂ふためにと言ふのかね？」

「そんな風にとりたければ！ 若し私がああなたのやうな大男だつたら、何もしないでソーフアの上に終日ごろ／＼してゐるなんて、恥かしくつて堪らないでせうよ。」

彼は、本當に恥かしく思つた。そこで其後は、彼はすっかり子供達の乳母になりきつて了つた。彼は、決して自分の義務を怠らなかつた。彼は、そのことの中に少しも不名譽なものを見はしなかつた。しかし彼は不幸であつた。何處かに、何かよくないことがあるのだと彼

は思つた。しかし妻は、常に何でも自分の意見通りにやつて行つた。

彼女は事務所に坐つてゐて、監督や支配人に會見した。又倉庫の中に立つて、小舎住の百姓達に貯蔵品を秤り出してやつた。その所有地へ来る者は、誰でも奥さんを尋ねた。主人に逢はうといふ者は一人もなかつた。

或日彼は、家畜が草を食つてゐる野を、子供達を連れて通つた。彼は、子供達に牛を見せようとして、用心深く草を食つてゐる群の方へ彼等を連れて行つた。すると忽ち一つの黒い頭が他の動物の背中越しに擡つて、柔かく吼えながら、はひつて來た人々を見詰めた。

法律家は、子供達を抱き上げて、やつこのことで垣のところまで走り戻つた。彼は、子供達を抛り出して、自分も垣を飛び越さうとしたが、垣の頂上にひつかゝつて了つた。向う側に數人の女がゐるのを見ると彼は嗷鳴つた。

「牡牛だ！ 牡牛だ！」

しかし女達はたゞ笑つてゐたばかりで、着物を泥だらけにした子供達を、溝の中から引張り出しに行つた。

「牡牛が見えないのか？」と彼は叫んだ。

「あれは牡牛ぢやございませんよ、旦那。」と最も年嵩の女が答へた。「牡牛は二週間前に殺

されて了つたんですよ。」

彼は、腹立たしさと恥かしさを抱きながら家へ歸つて來て、その女達のことを妻に愚圖愚圖言つた。しかし妻はたゞ笑つてゐた。

その午後、夫婦が應接間で一緒にゐた時、戸がノックされた。

「おはひり！」と彼女は言つた。

牡牛の一件を目撃してゐた女の一人が、手に法律家の金鎖を持つてはひつて來た。

「これは貴方様のと存じますが、奥さん。」と彼女はためらひながら言つた。

アデラインは、最初に女を、それから夫を眺めた。夫は眼を丸くして鎖を見つめてゐた。

「いゝえ、それは旦那様ですよ。」と彼女は、差出された金鎖を受取りながら言つた。「有難う！ 旦那様が、お禮に何か下さるでせう。」

彼は、眞蒼になつて、身動きもせず坐つてゐた。

「僕は金がない。奥さんから何か貰つてくれ給へ。」と彼は首飾をとりながら言つた。

アデラインは、大きな財布から一クラウンとり出して、その女に渡した。彼女は、明かにその場の光景を理解しずに行つてしまつた。

「僕にこんな侮辱を與へないでもよささうなもんだ！」と彼は言つた。そして彼の聲は、彼

が感じた苦痛を明かに示してゐた。

「あなたは、御自分の言葉や行爲に責任を持つに足る男ではないんですか？ あなたは、御自分の私を着けることを希望しながら、私の上げた贈物を着けてゐることを恥ぢてるんですか？ あなたは卑怯者です！ それでもあなたは自分を男だと思つてるんですね！」

それ以來憐れな法律家は、全く平和を失つて了つた。どこへ行つても彼は、皮肉な顔に出逢つた。そして、百姓や下女達やは、安全な隠家に引込んでゐて、彼が通る時にはいつも、

「牡牛だ！ 牡牛だ！」と叫んだ。

アデラインは、競賣へ出ることにきめて、一週間留守にすることにした。彼女は、自分の留守中召使達を見廻ることを夫に頼んだ。

第一日目に、料理番がやつて来て、砂糖と珈琲とを買ふ金を彼に求めた。彼は、それをその女に與へた。三日後に彼女はまたやつて来て、同じ物を請求した。彼は、自分が與へたものをもう費つてしまつたのだといふので、びつくりした。

「自分の爲めにお願ひするのではございません。」と彼女は答へた。「それに奥様は何ともお思ひにはなりませんよ。」

彼は、その金を彼女に與へた。しかし、間違ひではないかと怪んで、彼は妻の計算書を開

いてその欄を計算し始めた。

彼は、不思議な結果に到達した。彼が一月の金額を計上した時、それがリスポンドになつたのを發見した。

彼は、彼女の數字を對照しつゞけた。そしてその結果は、到る處で同一だつた。彼は主要原簿をとり出した。すると、高い數字は問題外として、寄せ方に馬鹿々々しい間違ひがしてあることを見出した。明かに彼の妻は、名數も小數も何も知らないのであつた。この前代未聞の召使等の瞞着は、確かに零落の源となるに違ひない。

彼の妻が歸つて來た。競賣に關する詳細の話聞いた後、彼は例の話をしようとして咳拂ひをした。しかし彼の妻はその報告を豫想してゐたのだつた。

「それで、召使達をどうしました？」

「おゝ！ 旨くやつたよ。だが、彼等がお前を欺いてることは確かだよ。」

「私を欺いてる！」

「さうさ。例へば、珈琲と砂糖との消費高だつて實に多過ぎる。」

「どうして御存じなの？」

「お前の計算書を見たからさ。」

「まあ！ あなたは、私の帳面へまで頸を突込んだのね？」

「お前の帳面へ頸を突込んだつて？ いや、しかし僕はわざ／＼対照までしてお前の……」

「あなたのなさることせうか、それは？」

「だが、僕はお前が名数も小數もまるつきり知らないで、帳簿をつけるといふことを知つたよ。」

「何ですつて？ 私が知らないと思つてらつしやるの？」

「さうだ、お前は知らない！ それで建物の土臺がぐらついでるんだ。お前の簿記は、まるで譯が分らないよ、お嬢さん！」

「私の簿記は他の人には關係ありません。」

「不正な簿記は法律によつて罰せられる。お前に責任が無ければ僕に在るんだ。」

「法律？ 私、法律なんか相手にしないわ！」

「本當だよ！ だが我々は法律に捉まるだらう。お前でなければきつと僕が捉まる！ だからこれからは僕が帳簿をつけようよ。」

「人を雇つてさせればいゝでせう。」

「いや、そんな必要はない！ 僕は他に用が無いんだからね。」

そして、事はさう定まつた。

併し、一度夫が机の前の椅子を占め、そして人々が彼のところへ會ひに来るやうになつてしまふと、妻は農事にも家畜飼養にもあらゆる興味を失つてしまつた。

はげしい反動期となつた。彼女は最早牝牛や犢の世話をもしないで、家の中にちつとしてゐた。彼女は、新しい計畫を考へながら坐つてゐた。

ところが夫は、生活上に新しいものを再び掴んだ。彼は、所有地に熱心な興味を持ち、そして人々を覺醒させた。今では彼が手綱を握つてゐた。すべての事を處理し、命令を下し、支拂をもなした。

或日彼の妻は、事務室にはひつて来て、ピアノを買ふから千クラウン出してくれと彼に請求した。

「何をお前は考へてるんだい？」と、夫は言つた。「既の修繕をやらうとしてゐるところぢやないか！ ピアノなんぞ買ふ金はない。」

「どういふ譯なの？」彼女は答へた。「どうしてお金がないんでせう？ 私のお金でだつて十分ぢやないの？」

「お前の金？」

「え、私のお金よ、私の持参金よ。」

「それは今は、家庭の財産となつてゐるんだ。」

「といふとあなたの物に？」

「いや、家庭のだ。家庭は小さい社會だ。一般に、夫によつて監理されてる、共通の財産を持つてゐる唯一の社會だ。」

「何故妻でなくつて、夫がそれを監理しなくてはならないんでせう？」

「それは夫がそれをするだけの餘裕があるからさ。夫は子供なんぞ産まないからさ。」

「何故彼女はそれを共同して監理することは出来ないんでせう？」

「株式會社が、たつた一人の支配人を置くのと、同一の理由だ。若しも妻が、同じく支配するとすれば、子供達までが、同様の権利を主張するだらう。何故なら、彼等の財産でもあるんだからね。」

「下らないことにせくと區別をつけるのね。自分のお金でピアノを買ふのに、あなたの許しを乞はなければならぬなんて、堪らないことだと私思ふわ。」

「お前の金といふものは、もう無いのだ。」

「それでは、あなたの？」

「いや、僕でもない。家庭のだ。で、お前が『僕の許しを乞はなければならぬ』といふのは間違つてるよ。お前が贅澤品にそんなに大金を費すのは、今の場合許せるかどうかを支配者に相談しなければならぬといふ方が本當だ。」

「あなたはピアノを贅澤品だと仰しやるの？」

「古いのがあるのに新しいピアノを買ふといふことは、贅澤と言へるね。現在の状況は満足とは言へないのだ。そこでそのことが、今新しいピアノを買ふことをお前に許さないんだ。だが僕は、個人的には、何もそれに反対は出来もしないし、又しようとも思はない。」

「千クラウンばかりの支出で破産しやしませんでせう。」

「旨くいつてゐないとき、千クラウンの負債をすることは、破産の第一歩になるかも知れないね。」

「兎に角あなたは、私が新しいピアノを買ふのはいやだと仰しやるのね？」

「いや、僕はさう言やしない。確實でない現在の状況では……」

「いつになつたら、お、いつになつたら、妻が自分のことを處置して夫に頼みに行く必要なんぞなくなる時が来るんでせう？」

「妻が自ら働く時さ。お前のお父さんが、つまり男が、お前の金を儲けたのだ。世界のあらゆる富は男が得たものだ。だから、姉妹は兄弟より少ない遺産を貰はねばならないといふところこそ正しいのだ。殊に、兄弟は女を養ふ義務を持つてゐるが、姉妹は男を養ふ必要はないに於てをやだ。解つたかい？」

「で、あなたはそれを正しいことと思つてゐるの？ 正直にさう思つてゐられるの？ 私達は皆平等に分配されてはいけないんでせうか？」

「いや、いつでもいけないわけではない。人は、境遇と功績とに従つて分前をとらなければならぬのだ。草の上に寝ころんで、家を建てゝゐる石屋を眺めてゐる怠け者は、石屋よりも少ない分前をとらなければならぬんだ。」

「あなたは、私が怠けてゐるつてことをあてこするつもりなの？」

「ふむ！ 僕はそのことはむしろ何も言ふまい。だが、僕がソファの上によく寝ころんで本を讀んでゐた時、お前は僕をのらくら者と思つてゐたね。そして僕は、お前がその事實に對つて甚だ簡単な言葉で或事を言つたのをよく覚えてゐる。」

「でも私は、何をしたらよろしいんでせう？」

「子供を散歩に連れておいで。」

「私は子供達の世話をするやうな體質ぢやないのよ。」

「だが、僕でさへさうしなければならぬ時があつたのだ。僕に言はせると、子供の世話をするやうな體質でないといふ女は、女ぢやない。しかし彼女はどうしたつて男になりやうはない。するとそれは何だらう？」

「あなたの子供達の母にそんなことを言つて恥しくないんですか！」

「女と何の関係も有たない男を、世の中では何と呼んでゐるか？ それは甚だ醜いことぢやないか？」

「もう何も聞きたくないわ。」

そして彼女は、彼のそばを離れて、自分の部屋にはひつて錠をおろしてしまつた。

彼女は気分が悪かつた。僧侶が魂の注意を意としない時、肉體の注意を引受ける全能なる醫者は、田舎の空氣と孤獨とは、有害であると宣告した。

彼等は、妻が正式な醫療をうける爲めに、町へ歸らなければならなかつた。

町は、彼女の健康に非常な効果を齎した。裏町の空氣は、彼女の頬に色を與へた。

法律家は、自分の職業に従事した。そこで夫婦は、相混することを得ない彼等の性質に對する安全瓣を見出したのであつた。

彼の召使

ブラックウッド氏は、ブルックリンの波止場主であつた。そしてダンクワード嬢と結婚した。彼女は彼のところへ、近代思想といふ持参物を持つて來た。その愛する妻が召使のやうな役をするのを見ることを避ける爲めに、ブラックウッド氏は下宿に部屋を借りた。

何も爲すことを持たない妻は、玉突をしたり、ピアノを弾いたりして日を送り、半夜をば、「婦人の権利」に就いての議論や、ウイスキーとソーダ水とを飲むことで送つた。

夫は、五千弗の俸給を得てゐた。彼は、その金を規則正しく妻に渡し、妻がそれを預つてゐた。その上彼女は、五百弗の被服費を貰つて、それを好き勝手に費つてゐた。

やがて赤子が生れた。乳母が雇はれたが、その乳母は、母の神聖なる義務を百弗で自分の肩に引受けた。

又二人の子供が出來た。

彼等は成長した。そして上の二人は學校へ行つた。けれども、ブラックウッド夫人は退屈であつた。そして身を入れてするやうなことは何も持たなかつた。

或朝彼女は、ほろ酔機嫌で朝飯の食卓へ現れた。

夫は、彼女の振舞は不都合だといふことを思ひきつて言つた。

彼女は、ヒステリックになつて床にはひつて了つた。そして家中の婦人達が残らず彼女のところへ花を持つて訪ねて來た。

「何だつてそんなにウイスキーを飲むのだね？」と夫は、出来るだけ深切に訊ねた。「何かお前心配事でもあるのかい？」

「私の生活がすつかり使ひ果されて了つたのに、どうして幸福にしてゐられるでせう！」

「使ひ果されたとはどういふ譯なんだ？ お前は三人の子の母ぢやないか。お前はあの子供達を教育することで日を送つたらいいぢやないか。」

「子供達に煩はされることは出來ません。」

「すると、お前は子供達に煩はされなくてはならないのだ！ お前はどの方面をも利するやうになるだらう。そして人生に素晴らしい目的を持つやうになるだらう。例へば、波止場主なるといふ者よりも數等尊敬すべき奴をね。」

「えゝ、若しも私が自由だつたら！」

「お前は俺より餘程自由だ。俺は、お前の言ふなりにしてゐる。お前は俺の儲けて來る金の

費ひ途を定める。お前は、勝手に費ふことの出来る小遣ひを五百弗持つてゐる。だが俺はまるで小遣ひもない。俺は、煙草を買ひたい時にもお前に、つまり錢箱に、頼まなけりやならぬいんだ。お前は俺より自由だとは思はないのかい？」

彼女は返事をしなかつた。彼女はその問題を熟考しようとした。

その結果は、彼等が自分達の家庭を持たうと決めることになつた。そして彼等は、家を持つた。

「親愛なる友よ。」ブラックウッド夫人は、その後一人の友に一寸した手紙を書いた。「私は病氣です。そして死にさうな程退屈してゐます。しかし、私は苦しみつゞけなければならぬのです。何故ならば、この人生に何の目的をも持たない不幸な女に對しては慰めといふものが全くないのですから。私は、自分が夫の恩恵で生活することに満足してゐるやうなさういふ種類の女ではないことを世界に見せてやります。ですから私は、自ら死ぬまでも働かうと思ひます……」

最初の日には彼女は、九時に起きて、夫の部屋の整理をした。やがて彼女は、料理人を解雇してしまつて、十一時になると彼女は、その日の食物の準備をしに外へ出掛けた。

夫が一時に歸つて來た時には、晝食の用意が出來てゐなかつた。それは下女の落度であつた。

ブラックウッド夫人は、恐ろしく疲れて、それに泣いてゐた。夫は、不平を言ふ氣になれなかつた。彼は、ポイント・カツレッツを食つて、仕事に戻つて行つた。

「そんなに働き過ぎてはいけないよ、お前。」彼は、出がけにさう言つた。

夜には彼の妻は非常に疲れてゐたので、仕事を半分にして十時に床にはひつて了つた。

翌朝、ブラックウッド氏がお早うを言ひに妻の部屋にはひつた時、彼女の健康さうな顔色を見て彼はびつくりした。

「よく眠れたね？」と彼は訊ねた。

「どうして？」

「でもお前が大變いゝ顔色をしてゐるから。」

「私が——いゝ——顔色を？」

「さうさ。一寸した仕事がお前にはいゝらしいね。」

「一寸した仕事ですつて？ あなたは一寸したなんて仰しやるの？ ぢやどの位のことをしたら大變な仕事と言つて下さるんでせう。」

「いや御免よ。俺はお前を苦しめようと思やしなかつたんだからね。」

「いゝえ、さう思つたんだわ。私が碌に働かなかつたことをあてこすつたのだわ。それに、昨日はまるで下女みたやうにあなたの部屋を整頓したり、料理人みたやうに臺所に立つたりしました。私があなたの召使でないとおなた言へて？」

出て行く時、夫は下女に言つた。

「お前はこれからは七時に起きて、俺の部屋のこともしといてくれ。奥さんにお前のすることをさせちやいけないよ。」

夕方ブラックウッド氏は、上機嫌で歸つて來た。しかし彼の妻は、彼に當つた。

「あなたの部屋のことを、何故私がしてはいけないの？」と彼女は訊ねた。

「俺はお前を召使にすることには反對するからさ。」

「何故反對なさるの？」

「そんなことを考へることは、俺を不幸にするんだ。」

「しかし、あなたの食物の料理をしたり、あなたの子供達の世話をしたりするのは、あなたを不幸にはしないんですね？」

この言葉は、彼をして考へさせた。

彼は、ブルックリンへ行く鐵道電車の中にゐた間ちうもその問題を考へ耽つた。

彼が夕方家に歸つて來た時には、すでに彼は考へに考へぬいた。

「さあ、お聞き、ねえお前。」と彼は始めた。「俺のこの家の中のお前の立場について随分考へた。そして勿論俺は、お前が召使でなければならぬといふやうなことはまるで欲してはゐないんだよ。爲すべき一番いゝことはこれだ、と俺は思ふんだ。お前は俺を寄宿人として見るんだね。そして俺は自分のために支拂ふのだ。するとお前は一家の主婦になるし、俺は食事の代をお前に拂ふのだ。」

「どういふことになるの？」彼の妻は、やゝ不安さうに訊ねた。

「俺のいふ通りさ。俺達はね、お前が下宿屋をしてゐて、俺がその寄宿人だといふ眞似をするんだ。勿論、俺達は眞似をしてるだけなんだよ。」

「それはいゝわね！ であなたは、「いくら私に支拂はうとしてらつしやるの？」

「俺がお前の恩を受けてゐないことになるだけ拂ふんだ。それは、俺の立場をも改良するだらう。何故ならその場合には俺は、深切から置かれてゐるんだといふことを感じないだらうからね。」

「深切から？」

「さうだ、お前は、やつと半分しか料理の出來てゐない食事を俺に與へる。それからお前は

自分が俺の召使だと、つまり、お前が俺のために死ぬほど働いてゐるなどと繰返しつゞけるのだ。」

「何をあなた考へてらつしやるの？」

「俺の寄宿には一日に三弗で十分かね？　どんな下宿屋だつて二弗なら置くだらう。」

「三弗は多過ぎるわ。」

「よし、よし！　一箇年千弗としよう。さあ前金だよ！」

彼は、テーブルの上に書附を置いた。

それは次のやうに作成されてゐた――

間代	五百弗
乳母の給金	百 弗
料理人の給金	百五拾弗
妻の食費	五百弗
妻の小遣	五百弗
乳の母食費	三百弗

育児費	七百弗
子供用被服費	五百弗
薪、燈火、補助費	五百弗
合計	四千〇五拾弗

「我々は平等に入費を分擔するんだからして、この金額を二つに分けて御覽。二千二十五弗になる。俺の寄宿料千弗を除いて、俺に千二十五弗呉れるんだ。若しもお前が自分で金を得たら、尙更結構だ。」

「入費を平等に分擔するんですつて？」これはあらゆる妻の言ひ得ることであつた。「では私にも拂へと仰しやるの？」

「勿論さうだ、若しも我々が平等の立場に立つてゐるなら。俺はお前のと子供の扶助とを半分拂ふ。それともお前は全部俺に拂つて貰ひたいのかね？　よろしい。それは俺が四千五十弗及び俺の寄宿料の千弗を、お前に拂はなければならぬといふことになるだらう。しかし俺は、間代、食費、燈火、薪、及び召使の給金を別々に拂ふのだ。俺は、自分の寄宿の一日三弗といふものを何の爲めに出すんだらう？　四千五十弗に當る物以外には、何にもないぢやな

いか？ さあ、今若しも俺がこの金額の半分即ち俺の負擔すべき入費の二千二十五弗を本當に差引くとすると、俺の食物の準備には二千二十五弗かゝるのだ。そんならどうして俺は二千二十五弗プラス食費千弗を拂ふべきだなんて思はれるだらう？」

「私には解らないわ。」

「俺にも解らない。だが俺の知つてゐることは、俺がお前の扶助と、子供連の扶助と、召使達の（お前の意見では俺の仕事と同様又は立優つてゐるとさへ言はれるお前の仕事をやつてくれる召使達だよ）扶助と、これだけ全部に對して支拂つた後には、俺はお前には何にも負うてはゐないといふことだ。しかし、お前の仕事が本當にもつと／＼價值あるものだとしても、俺が何も持たないのにお前は、家の費用以外に五百弗も持つてゐるんだといふことを忘れてはならないんだ。」

「私、繰返して言ひますが、私にはあなたの仰しやる數字が解らないわ。」

「俺にも解らない。恐らく我々は、下宿だなんぞといふ考へを捨てる方がいゝんだらう。收入の借方と貸方なんといふことは徹廢しようぢやないか。さあ此處に計算書がある、若しお前が見たかつたら。」

ブラックウッド夫人の家政に對して、及びブラックウッド夫人の料理人並びに乳母に對して。

間代及び食費	一千弗
被服費	五百弗
娯樂費	百弗
小遣(現金)	五百弗
彼女の小兒食費	一千二百弗
彼女の小兒教育費	六百弗
彼女の仕事を爲す雇女の爲に	八百五十弗
合計	四千五百七十弗
右、波止場主ブラックウッド氏支拂。	

「おゝ！ 書付を見せて妻を苦しめるなんて、随分ひどいわ！」

「勘定書だよ！ それも俺がすっかり拂ふんだからお前は支拂ふ必要のないものなんだ。」
妻は、その紙を皺くちやに丸めてしまつた。

「私はあなたの子供達の教育費まで拂はなくちやならないの？」
「いや、俺が拂ふ。又俺が拂ふべきなのだ。そして俺は、お前の子供達のためにも拂ふのだ。お前は、俺のものの爲めに一銭だつて拂はないでいゝんだ。それが平等の立場に在るといふことだらうか？ だが俺は、俺の子供と召使との食費額は差引かう。するとお前は、まだお前が召使達を助けてやる爲めに二千百弗持つてゐることになる。まだ書付が見たいかい？」
彼女は最早欲しなかつた。二度と再び要求しなかつた。

稼 人

その朝彼は、負債になつてゐる書附と、まだ書いてない原稿との悪夢から覺めた。彼の髪の毛は冷たい汗で濡り、彼の頬は、着物を着てゐながらも顫へた。彼は、次の間で子供達が騒いでゐるのを聞いた。それから、燃ゆるやうな顔を冷水に突込んだ。彼は、八時といふ早い時間に、乳母を妨げまいとして、自分で珈琲をいれて飲んだ。それから彼は、床をとり直して、着物にブラシをかけて、書きに坐つた。

昂奮が彼を捉へた。その昂奮は、彼が見たこともない部屋々々の錯覺や、決して存在したこともない風景や、名簿の中にもその名前を見出すことの出来ない人々やを創造するのであつた。彼は、命がけに苦しみつゝ書物机にかぢりついてゐた。彼の思想は、明瞭で、豊かで、綺麗でなくてはならない。彼の書くものは解り易く、物語はドラマチックでなくてはならない。興味は決して減退してはならない。隱喩法は緊切でなくてはならない。會話は輝きあるものでなくてはならないのであつた。彼がその頭のぜんまいを巻かうとしてゐる自働人形の顔が、公衆の顔が、彼に向つて皮肉な笑を浮べてゐる。彼がその好意にすがらなければなら

ない批評家達は、美望の眼鏡の底から彼を見つめてゐる。陽氣にしてやるのが彼の仕事である出版者の陰氣な顔が彼の前に屢々現れた。彼は、真中にバイブルの置いてある黒いテーブルを取巻いて坐つてゐる陪審官等を見た。彼は、怠け者達を利さうとする大膽な思想を懐いたがための罪に苦しんでゐる自由思想家等のはひつてゐる牢獄の戸の、聞く音を聞いた。

彼は、ホテルの門番が書附を持つてやつて来る、音もしないやうな足音を聞いた……。

そして、絶えず昂奮は荒れ狂つてゐた。そして彼のペンは、ゆるやかに黒くなつて行く凝血の如くに其場に赤い線を残しながら、出版者や陪審官等の幻像に對つて一瞬の猶豫もなく走りに走つた。

彼が二時間ばかりの後椅子から立ち上つた時には、彼はやつと室をよるめきながら過ぎるだけの力しか持つてゐなかつた。彼は、ベッドの中へ沈み込んで、死に取憑かれでもしたやうに横になつてゐた。彼が眼を閉ぢたのは、元氣をつける眠りではなくて、昏醉状態だつた、長い長い失神の發作だつた。その間彼は意識を持つてゐて、自分の力がなくなつて了つたとか、神経組織が滅茶滅茶になつて了つたとか、頭腦が空になつて了つたとかいふ恐ろしい考へによつて苦しめられてゐた。

下宿のベルが鳴つた！ 郵便屋が來た！ 郵便が來た。

彼は、身を起して、室をよるめき出た。一束の手紙が彼に渡された。早速見なくてはならない校正刷。忌憚ない批評をしてくれといふ、若い作家からの著書。すぐ返事をくれといふ抗議のはひつてゐる手紙。曆への寄稿の依頼。出版者からの勧告の手紙。病人の體で、どうしてそんな事すべてと競ふことが出来るであらう？

そのうちに、子供達の乳母が起きて、子供達に着せて、下宿の臺所で自分のために拵へられた珈琲を飲み、自分のために送られた蜜付きの卷パンを食べた。朝飯がすむと、彼女は公園へぶらつきに出た。

一時には晝食のベルが鳴つた。すべての客が食堂に集つた。彼もそこへ行つて、たつた一人でテーブルに坐つた。

「あなたの奥さんはどちら？」彼は四方八方から訊かれた。

「知りません。」と彼は答へた。

「何て譯のわからない人でせう！」と女達が批評した。彼等はまだ朝衣を着てゐた。

彼の妻がやつてきて、食事の進行が妨げられた。するとちやんと時間通りに來てゐる腹の減つた客達は、二皿目を待たされるのであつた。

女達は、彼の妻がよく眠れたか、そして氣分はいゝかと心配さうに訊ねた。彼がどんな氣

分だといつて訊ねる者は一人も無かつた。訊ねる必要はないのだ。

「あの人は死人みたやうね。」と女達の一人が言つた。そしてそれは本當であつた。

「放埒よ。」と他の女が言つた。

しかしそれは本當ではなかつた。

彼は、話の仲間入りをしなかつた。何故なら彼はさういふ女達に話すやうなことが何も無かつたから。しかし彼の妻は、二時間も喋つてゐた。彼が、食物を吞むやうに食つてゐた間に、彼の耳は、下賤なるあらゆるものに對する非常な賞讃と、高貴にして善良なるあらゆるものに對する穢しい悪評とを聞かせられた。

晝食がすんだ時、彼は妻を傍へ連れて行つた。

「俺の上衣を持たしてルイザを仕立屋へやつて貰ひ度いんだ。綻びが切れたんだが、俺は自分で縫つてる暇がないんだから。」

彼女は返事をしなかつた。しかし、ルイザをやる代りに自分で上衣を持つて、仕立屋の住んでゐる村へ歩いて行つた。

庭で彼女は、或る解放された友に出逢つた。彼女は何處へ行くのかと訊ねた。

彼女は、夫のために仕立屋へ行くのだと正直に答へた。

「まあ、仕立屋へ貴方をやるの！　それで貴方は、貴方を召使のやうに扱はれるのを我慢してらつしやるのね！」

「しかも夫は床にはひつて食後の晝寝をしてゐるんですよ！　立派な夫よ！」

それは全く事實であつた。彼は貧血病に罹つてゐたので、食後に晝寝をするのであつた。

三時には郵便脚夫が再び鈴を鳴らした。彼は、獨逸の伯林からの手紙と、佛蘭西の巴里からのそれと、英國の倫敦からのとに返事を書くことを待たれてゐた。

コニヤックを飲んでいゝ心持になつて仕立屋から歸つて來た妻が、子供を連れて散歩する氣はないかと彼に訊ねた。否、彼は手紙を書かなければならなかつた。

手紙を書き終つた時、彼は食前の散歩に出た。彼は、誰か話相手が欲しかつた。しかし彼は獨りぼつちであつた。彼は、庭へ出て子供達をさがした。

強壯な乳母は、庭に坐つて、彼の妻が貸した「眞の婦人」といふレフラー夫人の著はした本を讀んでゐた。子供達は退屈してゐた。彼等は駄けまはつたり、歩いたりすることを欲してゐた。

「何故子供達を歩かせないんだね、ルイザ？」と彼は訊いた。

「奥様が暑いからと仰しやつたので。」

彼の妻の命令であつた!

彼は、子供達に呼びかけて、一緒に大通りの方へ歩いて行つた。突然彼は、子供達の手や顔が穢く、靴には穴があいてゐることに気がついた。

「何故子供達はこんな靴をはかされてるんだ?」と彼は、ルイザに訊いた。

「奥様がさう仰しやつたので……」

彼の妻が言つたのであつた!

彼は、自分獨りで散歩に行つた。

七時になつた。食事時であつた。女達はまだ、ホテルへ歸つてゐなかつた。二皿目が運ばれた時、彼等は赤い顔をして、大聲に喋つたり笑つたりしながらやつて來た。

彼の妻とその友とは、上機嫌であつた。そしてコニヤックの臭ひをさせてゐた。

「あなたは今まで何してゐたの、え?」と彼女は、夫に訊ねた。

「子供を連れて散歩に行つたんだ。」

「ルイザはゐなくつて?」

「おゝ! ゐたよ。だがあれは他の仕事をしてゐたよ。」

「ねえ、御自身の子供に氣をつけるやうに男に頼むつてことはひど過ぎることだとは私思は

ないわ。」と友の女が言つた。

「さう、勿論さうぢやないね。」と夫は答へた。「だから私は、顔を汚したり、破れた靴をはいたりして子供達を駈けずり廻らせておくといつてルイザに小言を言つたんだ。」

「私は家へ歸つて來て小言を言はれないことはないわ。」と彼の妻が言つた。「あなたは、あらばかり探して私のこればかりの楽しみまで、だいなしにしてふんだわ。」

そして、小さな涙の玉が、彼女の赤くなつた眼瞼を濕らせた。

妻の友と他の女達とは、憤怒の一瞥を夫の上に投げた。

攻撃は近よつて來た。その友は、舌鋒を鋭くした。

「誰か此處に婦人の權利に就いてのルーテルの意見を讀んだ人がゐて?」

「それはどんな權利なの?」と彼の妻が訊ねた。

「若しも女が現在の配偶に不満であつたら他の配偶を探せといふんです。」

沈黙が起つた。

「女の利益に關する限りでは甚だ危険な主義だ。」と夫は言つた。「何故なら、その結果は、それと同様の場合に、男も同じことをするのが許されることになるんだから。その方が、前のことの方よりも屢々あり得ることなのだ。」

「あなたの言ふことは何だか解らないわ。」と妻は言つた。

「それはルーテルの過誤でもないし、俺の過誤でもない。」と夫は答へた。「若しも夫がその妻と一緒にうまくやつて行けないとしても、それはきつと夫の過誤だといふ譯ぢやない。多分夫は他の女と素晴しくうまくやつて行くだらうからね。」

死の如き沈黙がつゞいた。食事してゐた人々はその席を立つた。

夫は、彼自身の部屋に引込んだ。彼の妻とその友とは、一緒に食堂を出て、そして亭の中に坐つた。

「何て無情なんでせう！」と友は叫んだ。「貴方のやうな利巧な有識婦人が、あんな我儘なわけの分らない人の召使になつてゐることがどうして出来るんでせう？」

「夫は私をまるで理解してゐないのよ。」と妻は、溜息をついて言つた。さういふ呪ひの言葉を口にし得た満足さは、彼女の夫が繰返し繰返し自分に與へた次のやうな返答の記憶を消してしまつた程大きかつた。

「お前の思想は、透徹な頭を持つてゐるこの俺の量り得ない程深淵なものなんぞと、お前は考へてゐるのかい？ お前に俺が理解出来ないといふのは、お前が淺薄なからだといふことに思ひ當らないのかい？」

彼は、たつた一人で自分の部屋に坐つてゐた。彼は、母親を殴りでもしたかのやうに、後悔に苦しめられた。しかし最初に打撃を加へたのは彼女であつた。彼女は、何年もの間彼を打ちに打つたのだ。そして、これまで一度として彼は返報をしたことはなかつたのであつた。

その支配の下に彼があらゆる自分の思想と感情と共に彼の全靈を委してゐたこの粗暴な、無情な、冷笑的な女は、彼よりも優れてゐることを意識し、そして彼を侮辱し、彼を引きずり下ろし、彼の髪の毛を持つて引張り廻し、彼に罵詈雑言を浴せかけてゐたのだ。彼女が公衆の面前で彼を遣込めた時、彼が打撃の返報をする位のことだが罪惡だつたであらうか？ さうだ——彼は、自分の親友を殺したかのやうな罪惡を感じた。

暑い夏の夜の薄闇は濃くなり、そして月が登つた。

音楽の響が、應接間から彼の窓を通して漂つて來た。彼は、庭に出て、胡桃の木の下に坐つた。孤獨！ ピアノの諧音が、歌の文句と相混じた。

夜のとばりが引かれて

地上に群る時、神祕の海は

我等にとつて

一つの甘い魅力ある世界となる、

星無き黎明が

衰へ行く月を溶かしてしまふまで——その時我等は

はてることなき歡喜の中に囚へられる

今、我は沈黙と苦痛の中に唯一人

忘れぬ幸福の痛みに泣く、

再び歸り來ることなき汝の爲めに、

汝の爲めに、我が青春よ、汝の愛の爲めに、汝の接吻の爲めに。

彼は、庭を歩き廻つた。そして窓の中を眺めた。そこには彼女が、彼自らの歡びのために作つたかれの生ける詩が、坐つてゐた。彼女は、涙聲でうたつてゐた。ソファの上にかけてゐる女達は、意味ありげに互ひに眼くばせし合つてゐた。

けれども、月桂樹の林のうしろの腰掛には、二人の男が腰をおろして煙草をふかしてお喋りをしてゐた。彼は、その二人の喋つてゐることを聞くことが出來た。

「コニヤックのせゐだといふまでさ。」

「さうだ、彼女は飲むといふ話だね。」

「而も、その爲めに亭主の悪口を言ふんだ。」

「恥かしいこつた！ あの女はジュリアンの畫室でいつも飲むんだよ。あの女は畫家にならうとしてゐたんだが、君も知つてゐるだらう、ところが奴旨くいかなかつたんだ。展覽會で奴の繪がはねられた時、この憐れな奴の頭へ身を投げかけて、失敗を隠すために結婚してしまつたんだ。」

「さうだ、僕も知つてゐる。そしてあの男の重荷になつて、たうとうあの男は以前の自己の影に過ぎないやうなものになつちまつたんだ。あの二人は巴里で初めて家庭を持つたんだ、そして男はあの女の爲めに二人も下女を置いてたが、それでもあの女は自分を亭主の召使だと言つてゐたよ。あの女はすべてのことに主婦であつたにも拘らず、亭主の奴隷に過ぎないんだと言ひ張つてゐたつけ。あの女は家を放つたらかして置くし、召使達は矢鱈に物を盗んだのだ。そこであるの男は、自分の家が零落に瀕してゐるのを見ても、それをどうしたらいいか解らなかつたんだ。あの女は、亭主のする暗示に端から反對したんだ。あの男が黒を欲するとあの女は白を欲したんだ。そんな風で、あの女はあの男の意志を破つて了ひ、あの男の神經を滅茶苦茶にして了つたんだね。あの男は、自分の家庭を解散して、下宿屋へあの女を連

れて来たのだ。つまりそれは、あの女に家政をとらせず、そして全くあの女を藝術に委ねさせる爲めだつたんだ。ところがあの女は、繪筆なんかには觸りもしないで、終日友達と歩いてゐるんだ。あの女は、亭主と亭主の仕事との間へまではひらうとしたんだよ。そしてあの男に酒を飲ませようとしたんだ。しかしそれは出来なかつた。そこであの女はあの男を嫌つてゐるんだ。つまり、二人の内ではあの男の方が上等だといふわけだからな。」

「だが、亭主といふのは馬鹿に違ひないね。」ともう一人の方が言つた。

「あの男は、女房のゐるところなら何處へ行つても馬鹿なんだ。尤もあの男が法則上の除外例といふわけでは全くないがね。あの連中は十二年も前から結婚してゐるんだが、あの男は今もつて女に戀してゐるんだ。一番悪いことは、國會や出版のことで支配してゐた強いあの男が滅茶々々になつて了つてゐることだ。僕は今朝あの男と話をしたがね、まあ軽く見てもあれは病人だよ。」

「さうだ。あの女は亭主を癡狂院へ閉込めようとしたんださうだ。そして、あの女の友達も出来るだけのことをしてあの女を助けたさうだよ。」

「ところが亭主は、あの女を喜ばせようとして死ぬ程働いてゐるんだ。」

「どうしてあの女は亭主をさう輕蔑的に取扱ふんだか君は知つてゐるかい？ あの男はね、女

に女が欲するだけの贅澤をさせることが出来ないからなんだ。いつか食事の時にあの女はさう言つたが、『妻が欲するだけのものを與へることの出来ない男は、要するに大人物ぢやない』のださうだ。きつとあの女は、亭主が自分を藝術家として煽てゝゐたことを當にしてゐるんだね。あの男の政治上の見解も、不幸にして主要新聞と仲よしになることが出来なかつたんだね。それにあの男は、藝術家の仲間には一人の友達も持つてゐないんだからな。あの男の興味は、どこか他にあるんだ。」

「わかつたよ君、あの女は自分の目的のためにあの男を利用しようとしてゐたんだ。ところが反抗されたので、あの女は男を棄てゝ了つたんだ。ところがあの男は、稼ぎ人としての自分の目的に奉仕してゐるんだ。」

今、我は沈黙と苦痛の中に唯一人、

忘れぬ幸福の痛みに泣く……

さう彼女のうたつてゐる聲が、應接間から聞えて来た。

「ボタン！」と胡桃の木のうちろから響いて来た。それにつゞいて、枝のポキリと折れる音

と小石のジャリ／＼いふ音が聞えた。

話してゐた人々は飛び上つた。

相當の身姿みなりをした男の體が、椅子の脚にその頭を打つけて、道に横つてゐた。

歌は忽ちにやんだ。女達は庭へ駆け出して來た。女の友は、彼女自身の手に持つてゐたコ

ロン水を、倒れてゐる男の顔に數滴そゝいだ。

彼女は、それが全然失神の發作ではないといふことに氣がつくと、飛び退いた。「恐い！」

と彼女は、顔を手で押へながら叫んだ。

死人の體の上へ屈み込んでゐた二人の男の年嵩の方が、見上げた。

「靜かになさい、御婦人！」と彼は叫んだ。

「何て黙だらう！」と女の友は言つた。

死者の妻は失神した。しかし女友達の腕に抱かれて、他の女達に優しく介抱されてゐた。

「醫者を呼びにやれ！」と二人の男の年嵩の方が叫びつた。「駈けて！」

誰も意とする者はなかつた。すべての者が人事不省になつた妻のことで忙しかつた。

「妻をこんな悲しませるなんて！ おゝ！ 何て人だらう！ 何て人だらう！」と女の友

は啜り泣いてゐた。

「死にかゝつてる人のことを、誰も考へないのか？ 女が氣が遠くなつたからつてこんな騒

ぎをして？ ブランデーでも飲まして御覽、すぐ生きかへるから！」

「このやくざな男は、自分の運命を當然に受けたんですよ！」と女友達は力を籠めて言つた。

「この男は、生きてゐて君の手の中に在るより餘程いゝ運命を受けたんだ。君の方が恥ぢる

がいゝんだ。そしてこの稼ぎ人を讚美するがいゝ！」

彼は、死人の手をはなにして、立ち上つた。

「もうお終ひだ！」と彼は言つた。

そして、それはもう終ひであつた。

大正十年九月八日印刷
大正十年九月十三日發行

(定價金壹圓五拾錢)

◀ 活 生 婚 結 ▶

翻譯者

永 島 直 昭

發行者

東京市牛込區矢來町三番地
佐 藤 義 亮

發行所

東京市牛込區矢來町三番地
新 潮 社

電話番町
八八〇
三九〇
六九九
番番番

番二四七一(京東)替振

印刷所

東京市小石川區西江戸川町
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木俊一

楠山正雄氏譯 全部三冊、完了せり

近代劇選集

全三冊
▼總洋布最上製
▼一冊約八百頁
▼各貳圓五拾錢
▼送料拾貳錢

全三冊

- ▼第一卷 青い鳥 外八篇(七百七十頁)
- ▼第二卷 シーザーとクレオパトラ 外五篇(八百十頁)
- ▼第三卷 幽霊 外五篇(七百六十頁)

■第三卷附録 近代劇概説 百六十頁

劇壇の權威者によつて譯出せられたる新界空前の大出版は茲に全部の完了を告げたり。收むる所何れも不朽の古典的名篇にして、其の大部分は其れづの原文より譯出せるものにかゝる。

ロマン・ロオラン著 豊島與志雄氏譯 全四冊

ロジャーン・クリストフ

第二卷 新刊 一冊約八百頁 各貳圓五拾錢 送料拾貳錢宛

ユーゴー著 豊島與志雄氏譯 全四冊

レ・ミゼラブル (全部完了)

増版 一冊八百頁 各一冊貳圓 送料拾貳錢宛

世界文藝全集

約一百卷の豫定、空前の大叢書也。四六版總洋布大金最上製一冊六百頁 定價一冊貳圓五拾錢送料一冊拾貳錢

第一編 ボヴリイ夫人

フロオベル著 中村 星湖氏譯
ボヴリイ夫人が、やる方なき愛慾の惱みより、遂に墮落の深淵に陥るの徑路を描ける、世界稀有の一大傑作にして、近代小説の經典と稱せらるゝもの也。

第二編 ギルヘルム・マイステル

ゲエテ著 中島 清氏譯
美貌世に稀れなるマイステルが幾多の女性に慕はれて、多情多恨の戀に身をつくすの情景を描き、紅紫騒亂たる稀有の大戀愛小説。(全二冊上巻發賣中)

第三編 神々の死

メレジュコフスキ著 米川 正夫氏譯
基督教に對して手套を投じたる偉大なる最初の挑戦者シュリアン皇帝の苦悶の生涯を叙せる、高華雄麗の小説也。三部作「基督と反基督」の第一編とす。

第四編 赤い部屋

ストリンドベルヒ著 阿部次郎江馬修氏譯
作者が青年時代の實際經驗を活寫す。「赤い部屋」に集れる若き藝術家の群を描き、哀れにして清純なる戀を點す。人間生活の實相は赤裸々に現れ来る。

■聖フランシスの小さき花

■久保正夫氏譯

價壹圓五拾錢
郵送料拾錢

■聖フランシスの完全の鏡

■久保正夫氏譯

價壹圓貳拾錢
郵送料拾貳錢

■ツアラトウストラ

■森鷗外氏序
生田長江氏譯

價貳圓五拾錢
郵送料拾貳錢

■ツアラツストラ解釋並に批評

■阿部次郎氏著

價壹圓貳拾錢
郵送料拾錢

■孤獨な散歩者の夢想

■ルツソオ著
新城和一氏譯

價九拾五錢
郵送料六錢

■クレオパトラの一夜

■ゴオチエ著
久米正雄氏譯

價九拾錢
郵送料六錢

■ツルゲエネフ散文詩

■生田春月氏譯

價六拾五錢
郵送料六錢

■チリコフ選集

■關口彌作氏譯

價壹圓八拾錢
郵送料拾錢

■モオパッサン選集

■平野威馬雄氏譯

價壹圓六拾錢
郵送料拾錢

露西亞
新文豪

終

